

令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」

(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)

通信制高校連携型キャリア形成支援による 地域密着人材育成モデルの構築事業 成果報告書

学校法人 YIC 学院

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、《学校法人 YIC 学院(YIC 情報ビジネス専門学校)》が実施した令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)の成果をとりまとめたものです。

目 次

第1章 事業の構成機関・構成員	1
1-1. 構成員	1
1-2 事業の実施体制	2
1-3 各委員の役割	3
第2章 事業の内容	5
2-1 事業の趣旨・目的	5
2-2 当該モデルが必要な背景について	5
2-3 調査研究の概要	9
2-4 開発する教育カリキュラム・プログラム	11
2-5 計画の全体像	14
第3章 今年度の具体的活動内容	19
3-1 今年度実施の概要	19
3-2 設置・実施した委員会	19
3-3 実施した調査	20
3-4 開発に際して検討した実証講座の内容	27
3-5 開発した教育カリキュラム・プログラム／調査研究結果の検証	30
3-6 ホームページの作成他	31
第4章 事業終了後に実施予定の取組及び成果の活用方針・手法	33
4-1 事業終了後の取組と成果の活用方法	33
第5章 令和7年度事業実施に伴う成果物	35
5-1 通信制高校生徒調査・通信制高校教職員調査 資料1	35
5-2 通信制出身専修学校生ヒアリング調査 資料2	56
5-3 地元中小企業調査 資料3	81
5-4 オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査(通信制高校) 資料4	101

5-5	LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査 資料5	109
5-6	ゲーミフィケーションの有効活用 資料6	124
5-7	デジタル基礎:通信制高校生のスマホ活用のセキュリティ対応教材 資料7.....	127
5-8	キャリア形成・伴走支援マニュアル 資料8.....	136
5-9	周知チラシ 資料9.....	153
第6章	次年度以降に向けて	155
6-1	次年度以降の取組	155
6-2	次年度に向けて	157

第1章 事業の構成機関・構成員

1-1. 構成員

(1) 教育機関

	名称	役割等	都道府県名
1	専門学校 YIC グループ 学校法人 YIC 学院 経営戦略課 YIC 情報ビジネス専門学校 情報ビジネス科(認定課程)	◎実施推進委員 ◎プログラム開発委員 調査・連携委員 事務局	山口県
2	学校法人 YIC 学院 法人事務課 文科省事務局	実施推進委員 調査・連携委員 プログラム開発委員 ◎事務局	山口県
3	学校法人 YIC 学院 社会事業部門 キャリアサポート室	実施推進委員 ◎調査・連携委員 プログラム開発委員	山口県
4	学校法人 YIC 学院 IT 統括室 内部監査・IR 戦略室	プログラム開発委員	山口県
5	学校法人 YIC 学院(京都) 理事	実施推進委員	京都府
6	山口大学大学院技術経営研究科	プログラム開発委員	山口県
7	福岡大学人文学部	実施推進委員	福岡県
8	大分大学 IR センター	調査・連携委員	大分県
9	広島女学院大学	プログラム開発委員	広島県
10	山口県立山口松風館高等学校(通信制)	プログラム開発委員	山口県

(2) 企業・団体

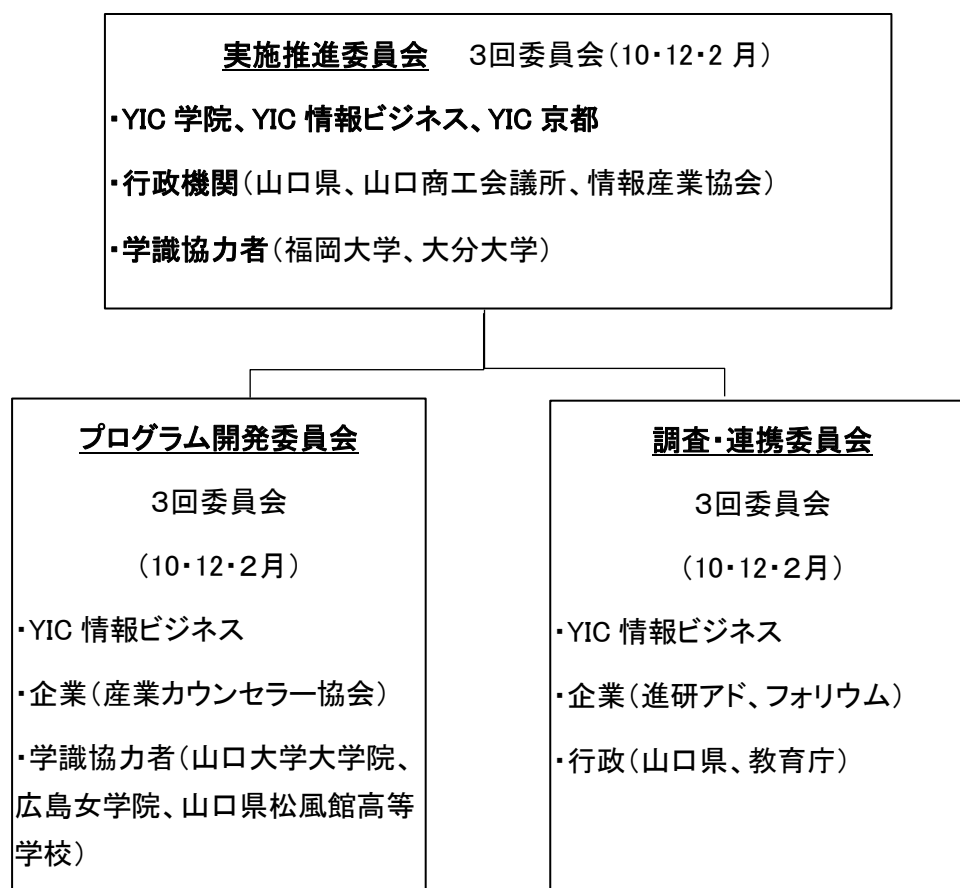
	名称	役割等	都道府県名
1	山口県情報産業協会	実施推進委員	山口県
2	山口商工会議所	実施推進委員	山口県

3	株式会社進研アド	調査・連携委員会	大阪府
4	株式会社フォーリウム	調査・連携委員会	山口県 (東京都)
5	一般社団法人日本産業カウンセラー 協会中国支部	プログラム開発委員	岡山県

(3)行政機関・その他

	名称	役割等	都道府県名
1	山口県教育委員会 高校教育課	実施推進委員 調査・連携委員	山口県
2	山口県産業労働部企業立地推進課	調査・連携委員	山口県

1-2 事業の実施体制



1-3 各委員の役割

○教育機関

機関名	具体的な役割
専門学校 YIC グループ 経営戦略課 YIC 情報ビジネス専門学校 情報ビジネス科(認定課程) 社会事業部門 法人事務課 事務局	・全体統括管理運営(予算・進捗、 目標と成果の調整、各委員会連携、 運営等)、事務局 ・調査、実証講座実施、プログラム開発
学校法人 YIC 学院(京都)	・情報共有、調査・実証への連携
以下、教育機関所属学識者	
山口大学大学院技術経営研究科	・プログラム開発についての助言
福岡大学人文学部	・調査、開発、実証への助言
大分大学 IR センター	・調査、エビデンスの分析活用についての助言
広島女学院大学	・プログラム開発についての助言

○企業・団体

機関名	具体的な役割
山口県情報産業協会	・各企業への情報提供、調査協力
山口商工会議所	・各企業への情報提供、調査協力
株式会社進研アド	・情報共有、普及への連携
株式会社フォーリウム	・調査・実証の連携
一般社団法人日本産業カウンセラー 協会中国支部	・プログラム開発についての助言

○行政機関・その他

機関名	具体的な役割
山口県教育委員会 高校教育課	・調査連携の協力・情報共有
山口県産業労働部企業立地推進課	・調査・連携についての助言

第2章 事業の内容

2-1 事業の趣旨・目的

現在、地域産業における人材の空洞化や生活サービスの維持困難といった課題が顕在化しており、地域に根差した教育機関がその受け皿として果たすべき役割は大きくなっている。特に、通信制高校など多様な背景を持つ若者に対して、接続性の高い進学ルートと職業的自立につながる実践的な学びの場を提供することが急務である。

本事業は、通信制高校との連携を基盤に、入学前からのキャリア教育、在学中の柔軟なプログラム設計（オンライン学習・コース選択制・企業連携型の導入）、AI や ICT を活用したデジタルリテラシー育成、地域企業（拠点施設含）との協働を通じた連携授業などを展開し、「県内初の AI×データサイエンスを導入したクロスオーバー型新コース」を目指すとともに、「地域に選ばれる専修学校」づくりを推進するものである。また、卒業後のキャリア定着や地域貢献までを見据えた“育成・伴走・定着”の一体型支援体制を構築し、若年層の社会的移動の促進と地域産業の人材確保・活性化に資する教育モデルの構築を目指す。

『地域密着型人材育成モデルの方針』

- ・地域からの若者流出を防ぎ、地域に“選ばれる専修学校”を創出する
- ・学びの多様化とキャリア支援の一体化
- ・地域社会に貢献する職業人材の育成
- ・2 年間の枠にとらわれない、継続的な育成モデルの構築。

2-2 当該モデルが必要な背景について

1. 社会的背景（今後の変化）

（1）少子化による若年人口の急減

- ・国立社会保障・人口問題研究所によれば、20 歳人口は現在の約 110 万人から 2040 年には約 75 万人へと減少している
- ・地方圏では都市部以上のペースで減少し、高卒後の進学対象者自体が大幅に減少する

（2）地域産業の“担い手”不足と生活インフラの空洞化

- ・医療・福祉・観光・小売・IT 支援など、地域生活に直結する産業で人材の確保が困難になる

- ・公共サービス・民間サービスともに「地域で暮らせない」問題が進行中である

(3) 通信制高校生・非典型進学層の増加

- ・通信制高校生は年間約 21 万人(2023 年)に増加(10 年前から 1.5 倍)し、多様な学び・働き方を求める層が拡大している
 - ・経済的事情・心身の事情から「遠方進学は難しいが、専門的な学びをしたい」層が増えている
- (「非典型進学層」とは、全日制高校から大学へ進学するという“典型的な進学ルート”ではなく、例えば通信制高校から、専門学校・短大・大学に進学する人や、いったん就職・離職を経験した後に学び直しをする人など、多様な経歴・背景を持つ進学者層の事)

(4) 山口県の通信制高校の状況

- ・公立通信制高校 1 校(山口県立山口松風館高校)、私立通信制高校 6 校(精華学園高校、松陰高校、以上広域制、誠英高校、聖光高校、成進高校、長門高校 以上狭域制)が開設。公立通信制高校に約 1080 人、私立通信制高校に約 5440 人の生徒が在籍(2024 年度) 23 年度に比べると公立校は約 8%、私立校は約 20%生徒数が増加。25 年 4 月萩市に萩明倫館高校(広域制)が開校。

(5) 山口県内地域企業のニーズ分析

- ・山口県が実施した「第 3 期県立高校将来構想」や YIC 学院が文科省事業で実施した「観光・サービス業の DX 人材ニーズアンケート」から地域企業の求める人材像は「基本的な対人力 × デジタルスキル × 地域課題への関心」という3つが主要な資質と考えることが出来る。デジタルスキル・地域課題への関心については、通信制高校出身者のスキルとも合致することが多い。例えば通信制高校出身者は、オンライン学習や自己管理型の学習スタイルに慣れており、動画編集や SNS 活用、e スポーツといったデジタル分野に高い関心を持つ傾向がある。これらは、地域企業が求めるニーズと親和性が高く、実践的なスキルとして即戦力になり得る点で合致している。

2. 変化を踏まえた人材育成

(1) 地域社会を「支える・創る」中核人材

- ・地元の福祉・保育・IT・観光などの生活サービス領域で即戦力・準即戦力となる人材
- ・高齢者支援、子育て、移動支援、地域づくり、デジタル化推進など、地域のリアルな課題に関わる若者

(2) デジタルを活用し、変化に対応できる職業人

- ・AI、ICT、SNS、動画、ドローンなどを活用して「仕事のやり方を変革できる」人材
- ・決められた業務をこなすだけでなく、課題を見つけ、提案し、形にする力を持った若者

(3) 地域と“関係性を築ける”人

- ・就労者ではなく、「地域の担い手」・「若き地域プレイヤー」として活動できること
- ・年齢・立場を越えて、協働・対話ができる力を備えた人材

3. YIC 学院の方策

以下の 3 点を具体的に実行できるように開発を目指す。

(1) 専門教育と地域実践を結びつける地域定着型連携プログラム

例) ドローン×農業、e スポーツ×商店街 PR、AI×地域医療支援など

- ・学生が「地域の課題」と「専門スキル」を結びつけ、自ら課題解決に取り組む実践学習を推進

(2) デジタル・AI 教育の基盤整備と資格体系

- ・IT パスポート、D S(データサイエンス)リテラシーレベル、G 検定、生成 AI パスポート等、デジタルリテラシー育成
- ・デジタルバッジ制度を活用した、可視化・段階化されたスキル育成と習得証明(単位認定)

(3) 入学前～卒業後までの一貫した“キャリア育成支援モデル”

～AI カウンセラーを活用した相談の導入、キャリア形成アドバイザー設置～

- ・入学前: 通信制高校等との LMS 連携・キャリア教育・体験授業
 - ・在学中: 柔軟なプログラム選択(マイプロジェクト形式)・個別伴走支援
 - ・卒業後: 就職支援・U ターン相談・起業支援・編入支援・卒業生ネットワークとの連携
- ※今年度より「地域若者サポートステーションしものせき」の運営を受託しており、特性に応じたキャリア支援・相談対応が可能

4. 選ばれるための取組

(1) オンライン活用＋地元接続型のハイブリッド教育

- ・授業の 4 分の 3 をオンラインで受講可能にし、住んでいる場所に左右されない進学モデルを実現
- ・離島・県北・都市部など、地理的制約のある層を積極的に取り込む

(2) 先進性×地元密着のコース設定

- ・e スポーツ、AI・ドローン活用、動画編集、SNS マーケティングなど、若者の関心を入り口に地域課題と接続
- ・入学後のコース選択制・モジュール形式により、関心変化や発達段階に応じて学び直しが可能

(3) グループ他校・他地域・卒業生との“横の連携”

- ・YIC 京都・広島女学院等との連携によるコンテンツ開発や合同授業
- ・卒業生を「キャリアメンター」や「地域リーダー」として活用し、信頼性・実効性を高める

5. 地域への定着の促進

(1) 実習を「地域内フィールド」で実施

- ・企業・福祉施設・観光地など地域現場と直結した教育プログラム ※卒業後の「就職先」としてのマッチングも兼ねる

(2) 卒業後もつながる“ライフキャリア支援”

- ・卒業生に対する再就職相談、スキルアップ支援（講座提供）、起業相談窓口を設置
- ・地域プレイヤー（起業家・商工会議所、自治体）と連携し、就労後の社会人育成の受け皿として機能させる

(3) 定住支援の情報提供とネットワーク形成

- ・地域内での住宅情報、子育て支援、生活相談など、「暮らし」に関する情報提供
- ・卒業生・地域社会・現役学生が交差する“コミュニティ形成型学校”の実現

2-3 調査研究の概要

(1) i) 名称

地域・通信制高校・専門学校・企業が連携して支援体制を構築するための調査事業
(3年間通じて実施)

ii) 内容

○実施する調査研究の全体像

1. 令和7年度「ニーズの把握と基盤調査」

対象	主な調査項目	方法
通信制高校生	進路意識／興味分野／オンライン学習環境／進学障壁	アンケート＋グループインタビュー
通信制高校教員	進路支援体制／ICT連携の可能性／外部連携ニーズ	ヒアリング／意見交換会
地域中小企業	求める人材像／実習受入条件／DX活用状況	アンケート／商工会経由の座談会・勉強会など
専門学校の卒業生	通信制出身者の進学・就職経験／課題と支援ニーズ	インタビュー／フォーカスグループ
制度調査	LMS・単位制・通信制との連携の制度的枠組み	文献・先進事例・関係者ヒアリング

2. 令和8年度「評価とモデル検証調査」

対象	主な調査項目	方法
プログラム受講生	満足度／理解度／達成感／デジタルバッジ取得状況	アンケート＋到達度テスト
指導教員・連携講師	指導のしやすさ／教材の改善点／連携の課題	定期レビュー／記録分析
地域企業先	実習の成果／学生の印象／受け入れの継続意向	ヒアリング／評価シート
通信制高校関係者	接続支援の成果／今後の連携の可能性	定期振り返りミーティング
保護者・地域住民	地域活動への認知／プログラムへの理解度	アンケート（公開報告会等で回収）

3. 令和9年度「評価とモデル検証調査」

対象	主な調査項目	方法
卒業生	地域内就職／転出理由／学びの役立ち実感	アンケート＋追跡インタビュー
受入企業	就職後の定着／人材としての評価／学校への要望	フィードバックシート＋ヒアリング
他地域／他専修学校	展開可能性／教育条件／導入障壁	比較事例調査・ベンチマーク分析
行政・自治体	制度接続（助成・人材育成施策等）に関する可能性	担当部署ヒアリング／協議会参加

○実施する調査研究の新規性

本調査は、すでに国や自治体、関係機関等によって実施されている関連調査（例：高校生の進路希望調査、ICT 環境実態調査など）を踏まえた上で、これらの既存調査では十分に明らかにされていない課題を抽出し、それに対して**実践的かつ制度設計に資する具体的な知見を得ることを目的として実施する。**

具体的には、通信制高校に在籍する生徒の進学意向や ICT リテラシーに関する情報は、全国規模での定量調査では一部存在するものの、**地域（山口県内）における生徒個々の学習実態・生活環境・キャリアに即した定性的な把握や支援ニーズの分析は十分ではない。**

また、既存調査では、進学後の生活やキャリア形成上の課題に対して、どのような支援策が効果的に機能したのかという「支援の効果性」に踏み込んだ検証が乏しいのが現状である。

さらに、学校や支援団体・企業等との連携に関する実態や課題は、**制度的な連携の可能性（例：LMS 連携、企業実習との接続）を前提としたヒアリング調査がなされていないことから、実装可能性の検証に資するデータが不足している。**

本調査では、単なる現状把握にとどまらず、**支援設計のためのエビデンス（証拠）を抽出し、地域・通信制高校・専門学校・企業が連携して支援体制を構築する際の根拠とすることを目指している。**

2-4 開発する教育カリキュラム・プログラム

i) 名称

「通信高校連携型みらい LINK プログラム」(仮称)

県内初の AI×データサイエンスを導入したクロスオーバー型新コース開設をめざして

ii) 内容

○開発準備した教育カリキュラム・プログラム

1. 基本構成

- ①「地域に根ざした職業人材」を育てるための**実践・柔軟・多様性**を兼ね備えたカリキュラム
- ②学びの入り口を広げ、継続性(定着)と出口(資格・就職)につなげる構成
- ③通信制高校出身者や社会的移動に課題を抱える若者が“挑戦しやすい仕組み”にする

項目	内容
形式	オンライン×対面のハイブリッド、モジュール(短期単位)型
柔軟性	コース選択制(マイプロジェクト方式)、ユニット受講制、入学後に学ぶ方向性を選べる
評価方法	デジタルバッジ・e ポートフォリオによる可視化＋資格試験
接続性	高校・地域・卒業生との接続(キャリア教育・企業連携・伴走支援)

2. 3つのポリシー案

アドミッション・ポリシー	・自分の将来や地域での仕事に関心を持ち、実践的な学びを通じて社会で活躍したいという意欲を持つ者 ・デジタル活用や新しい分野(AI・e スポーツ・動画制作など)への好奇心を持つ者 ・学び直しや段階的な成長に前向きに取り組もうとする姿勢のある者
カリキュラム・ポリシー	・通信制高校出身者の状況を踏まえ、段階的・選択的な学習が可能なカリキュラムとする ・地元企業・団体との連携による体験型授業・実習を重視する ・オンライン学習の活用により、地理的・時間的制約のある学習者にも対応 ・資格取得支援や作品制作を通じて、学びの成果が見える化される構成とする

ディプロマ・ポリシー	・デジタル基礎力を身につけ、ICT を活用できる職業人として地域で活躍できる ・職業実習・地域連携授業を通じて、地元課題に関わる力を持ち、就業意識を持てる ・社会人基礎力・コミュニケーション力を備え、対人関係や協働ができる ・自らのキャリアを描き、地域に根ざした進路選択ができる力を持つ
------------	--

3. 現在想定する科目の詳細(案)

科目名	区分	単位	時間数	目的・概要	学習成果
デジタル基礎Ⅰ（IT パスポート対策）【既存】	講義+実習	2	30	・IT の基本やセキュリティ、基礎知識を学ぶ	IT パスポートレベルの知識習得
デジタル基礎Ⅱ（データ活用入門）【既存】	講義+実習	2	30	・表計算・グラフ・データ処理などの実用スキル	データ操作と簡単な分析ができる
AI リテラシー（生成 AI・G 検定対策）【8 年度】	講義+実習	2	30	・生成 AI の活用と AI 基礎理論を学ぶ	G 検定基礎・AI の利活用力の習得
地元企業連携授業Ⅰ（IT・福祉・観光）【9 年度】	演習	3	45	・地元の現場課題をテーマに、課題や工夫を学ぶ	地域産業と仕事への理解を深める
地元企業連携授業Ⅱ（e スポーツ・動画制作）【9 年度】	演習	3	45	・e スポーツや動画を活用した地域 PR 活動	自分のスキルで地域に貢献する体験
オンライン学習スキル入門【8～9 年度】	講義+実習	1	15	・自律的な学び方や LMS 活用方法を学ぶ	自分で学ぶ習慣と技術を身につける
地域実習（インターンシップ）【9 年度】	実習	4	60	・実際の企業・施設での現場体験	地元就業への理解・意欲の向上
キャリア形成講座（多様型）【8 年度】	演習	2	30	・SST によって対人力の基礎を培い、SGE によってグループワーク「安心して話し合える場」で自己理解・他者理解を深める ・社会で求められるスキルの体験的理解	対人力＋集団協働力 ＋自己認識の深化 社会人基礎力の醸成

4. 事業内で開発・製作する学習手法(案)

- ①選択学習(コース選択)(例)Web 制作／動画編集コース、医療福祉・介護入門コース、起業・地域ビジネス基礎コース【8～9年度】
- ②ユニット受講制の仕組みづくり【8～9年度】
- ③キャリア育成・伴走支援手法マニュアル(チャットボットや AI カウンセラーを活用した相談の仕組み含む)【7～9年度】
- ④通信制高校と接続した学習管理システム(LMS)マニュアル
個人情報管理ガイドも作成【8～9年度】

2-5 計画の全体像

3か年間の事業計画は以下の通り

1. 令和7年度事業概要

◇事業実施体制の構築(10月～)

各3回委員会実施(ハイブリット形式)

◎実施推進委員会

◎プログラム開発委員会

◎調査・連携委員会

*事務局にて調整して運営

◇「調査研究・連携体制」

・通信制高校生・教員、中小企業、卒業生、地域団体へのニーズ調査

(アンケート・インタビュー)

・オンライン学習環境／ICTリテラシーの実態調査

・通信制・単位制など制度的な活用可能性に関する制度調査

・通信制高校との協定締結

・連携モデル構築- 地域企業

・団体との連携テーマ協議- LMS 整備

・教職員研修

◇「プログラム開発・作成」

・プログラム案の設計

(専門学校現行教育との接続)

・実証教材試作

(AI基礎・eスポーツ・実習テーマ等)

・試行的実証実施(プレ授業・体験版)＋通信制高校との接続実験

・キャリア形成・伴走支援マニュアル(AI相談含む)案

○調査報告書の作成・印刷

○成果・実績報告書の作成

○ホームページの作成

(ポータルサイト新規作成含む)

2. 令和8年度事業概要

◇事業実施体制の構築(6月～)

各5回委員会実施(ハイブリット形式)

◎実施推進委員会

◎プログラム開発委員会

◎調査・連携委員会

*事務局にて調整して運営

◇「調査研究・連携体制」

・令和7年度調査結果を踏まえた対象拡大調査

(他地域・他校・保護者など)

・初年度プログラムの評価

(満足度・効果測定)

・地域企業と実習先への調査

・企業連携課題テーマで正式連携(MOU等)

・卒業生メンター制度試行

・通信制高校との接続型プログラム共有

(LMS 接続実装)

・地域企業への関わり方研修

◇「プログラム開発・作成」

・「みらいLINKプログラム(仮)」実証

・企業連携導入授業の実施

(ドローン・動画編集・地域PRなど)

・デジタル資格(ITパス、G検定等)の取得支援制度の運用

・キャリア形成・伴走支援マニュアル(AI相談含む)施行

○トータルキャリア教育の仕組みづくり

○シラバス・教材の作成

○成果・実績報告書の作成

○ホームページの作成

(ポータルサイト新規作成含む)

3. 令和9年度事業概要

◇事業実施体制の構築(6月～)

各5回委員会実施(ハイブリット形式)

◎実施推進委員会

◎プログラム開発委員会

◎調査・連携委員会

*事務局にて調整して運営

◇「調査研究・連携体制」

・長期的成果の追跡調査

(卒業後の地域定着・就職率)

・全国への展開可能性に関するケース分析

・グループ校(YIC 京都など)へのプログラム展開

・自治体や商工団体と連携した「若者定着教育モデル」の制度化提案

・ガイドラインの整備(学生への関わり方含む)

◇「プログラム開発・作成」

・「みらい LINK プログラム(仮)」本格スタート1年目

・柔軟な選択制モデルの構築

・地域定着型連携プログラムの完成

・成果発表会開催

・外部公開講座(地域イベント／フォーラム等)

○キャリア支援・伴走支援マニュアル(AI相談含む)作成

○シラバス・教材の作成

○成果・実績報告書の作成

○ホームページの作成

(ポータルサイト新規作成含む)

4. 地域制を考慮した他機関・団体との連携(案)

①通信制高校

項目	具体的連携内容
出前授業・キャリア授業	専門学校教員が通信制高校に出向き、eスポーツ、動画編集・AI活用などの体験型授業を実施することで。進学意欲を喚起。また、通信

	制高校の生徒が専門学校に出向き、専門的な設備や環境を活用した実習や授業に参加することで、より具体的な進路意識の醸成を図る。
LMS の共有・進捗支援	専門学校の LMS を連携校に限定提供し、進捗・課題管理・フィードバックを高校教員と共同で行う。
オンライン個別相談	キャリア形成アドバイザー（仮）が高校生向けに月 1 回の進路相談・体験講座説明会などを実施。チャットボットや AI カウンセラーを活用した相談の施行。
学校接続型企業連携	通信制高校生 × 専門学校生での合同プロジェクト（例：地元イベントの企画・運営など）を実施し、進学前から学びに接続。

②地域企業

項目	具体的連携内容
実習テーマ提供	地元企業が「実際の課題」（例：人手不足、集客、IT 化）を提示。学生が企画・提案し、企業にプレゼンする「実践型授業」を実施。
実習・インターン受入	福祉施設・IT 事業者・観光業者等が実習先となり、単位化された就業体験を受け入れる。
地域企業や団体への研修やガイドラインの整備	YIC 学院より、この層の学生に対する関わり方や特徴に対する理解の研修を実施。またガイドラインを整備し提供する。
地元就職促進のマッチング	卒業後、連携企業が優先採用枠や奨学金返還支援制度を提供し、地域定着につなげる。

③行政・関連団体

項目	具体的連携内容
中小企業支援施策との接続	地方自治体や商工会議所と連携し、企業側にも“学生受け入れのメリット”があるよう補助制度を活用（例：インターン助成等）
DX 推進パスポート・生成 AI バッジの認定支援	資格団体と連携し、資格取得後に「地域 DX 人材」として可視化
モデル展開支援	初年度の調査研究や広域モデル展開を行政と連携して実施。将来的な制度化にも対応。

④YIC グループ内・卒業生

項目	具体的連携内容
----	---------

プログラムの共同開発	YIC 京都等と共同で e スポーツ・AI・観光などのコンテンツ教材や動画授業を共同制作。
合同イベント開催	山口・京都の両拠点で e スポーツ大会、成果発表会、オンライン座談会などを実施。学生交流の機会を創出。
講師人材・外部連携の相互活用	外部講師や企業協力などを両校でシェアして教育資源を効率化。
進学者情報・卒業生ネットワークの連動	京都・山口両校の卒業生をつなぎ、メンターネットワーク・進路フォロー体制を構築。
卒業生メンター制度	地域で働く卒業生(福祉・IT・起業等)を在校生の相談役・伴走者として位置付け、月 1 面談／イベント協力などを実施。
地域活動・イベントの共催	卒業生が関わる地域事業(祭り、商品開発、動画制作など)に学生が協力し、実践参加の機会を得る。

第3章 今年度の具体的活動内容

3-1 今年度実施の概要

事業計画書を基本に、実施推進委員会等における委員からの意見に基づき、今年度の計画を進めていった。なお、調査結果および委員会による委員からの助言により、プログラム開発内容の検討を平行して進めていき、委託事業後の知見となるように、運用記録も行った。令和7年度は、「各種調査事業とカリキュラム開発のタタキ案作成」を行うことが出来た。

3-2 設置・実施した委員会

1) 実施推進委員会 3回

第1回	令和6年10月31日(金) 10時30分～12時00分
第2回	令和6年12月22日(月) 14時00分～16時00分
第3回	令和7年2月20日(金) 14時00分～16時00分

2) プログラム開発委員会 3回

第1回	令和6年10月29日(水) 10時30分～12時00分
第2回	令和6年12月9日(火) 10時30分～12時00分
第3回	令和7年2月18日(水) 10時30分～12時00分

3) 調査・連携委員会 3回

第1回	令和6年10月16日(金) 10時30分～12時00分
第2回	令和6年12月15日(金) 10時30分～12時00分
第3回	令和7年2月16日(月) 14時00分～15時30分

3-3 実施した調査

(1)通信制高校生徒調査・通信制高校教職員調査 ※報告書後述 資料1

調 査 名 ①	通信制高校生徒調査・通信制高校教職員調査
調 査 目 的	社会的自立に向けて、通信制高校生がどのようなスキルや準備が不足していると感じているかを把握し、教育プログラムに必要なキャリア支援やソーシャルスキル育成要素を盛り込むための基礎情報とする。 また、教職員向けは、進路支援の実態や課題、ICT 連携の可能性を把握し、連携設計の前提条件を整理する。
調 査 対 象	通信制高校に在籍する生徒(333 名)・教職員(公立 1 校、私立2校、各校 2 名程度)
調 査 手 法	オンラインアンケート＋個別インタビュー
調 査 項 目	・生徒:進学意向／進学の障壁(経済・心理・情報)／関心領域(e スポーツ・動画編集等)／ICT 環境／学習習慣・時間／社会に出る上で必要だと思う力(複数選択)と自己評価／ ・教職員:進路支援の体制と課題／外部機関連携の実績とニーズ／LMS 等 ICT 連携の実施状況と課題
分 析 内 容 (集 計 項 目)	・生徒:属性別(学年、居住地等)クロス集計／因子分析による進路希望への影響要素抽出等 ・教職員:課題別／校種・設置主体別／連携可能性レベル別に分類・整理
調 査 結 果	【1】進学・就職における心理的・経済的障壁と情報アクセスの改善 通信制高校を選択した理由を尋ねると高校卒業資格の取得だけでなく「自分のペースで学びたい」「登校回数の少なさ」「自分のライフスタイルに合う」などが多くの理由としてあがっており通信制高校の特徴を好意的にとらえる回答があった、中には「全日制での学びが困難」「体調・健康上の理由」の回答も見受けられた。生徒はスマートフォンを授業等でも用いており、通信での日々の学習方法は自宅参考書での学習に週末に行われるスクーケーリングが多くもちいられていた。生徒側への端末貸与や通信費補助はなく、通信制高校として一律配布の対象外であった経緯もあり、ICT 活用の前提となる学習環境は必ずしも整っていないようである。 アンケート調査で進路について問うと、多くの生徒が専門学校等への進学に意欲を示す一方で、「授業についていけるか」という学習面(55 名が「とてもそう思う」)や「友人関係に馴染めるか」という心理面(41 名が「とてもそう思う」)で

	の不安を強く抱いている実態が浮き彫りとなった。また、入学金や授業料などの経済的な不安も顕著であり、奨学金情報の不足や手続きの複雑さを課題視する声も挙がっている。 教職員へのヒアリングでも、日常的に登校しない生徒への伴走支援には限界があり、特に「情報の受け取り」に個人差が生じていることが指摘されている。これらの障壁を解消するためには、単なる情報提供に留まらず、入学前から心理的なハードルを下げるカウンセリングや、個々の経済状況に配慮したきめ細やかな進路相談体制の構築が不可欠と考える。 【2】デジタルリテラシーの格差解消と ICT を活用した実践的学びの提供 高校生の関心事として、「動画編集(81 名)」や「生成 AI の活用(70 名)」、「イラスト・ゲーム制作(93 名)」など、デジタルコンテンツへの非常に高い興味が示されている。しかし、現状の ICT 環境は「スマートフォン(209 名)」の利用が主流であり、ノートパソコンを学校で利用している生徒はわずか 10 名に留まっている。 この結果、「IT 知識・PC スキル」を社会で必要な能力だと感じている生徒(161 名)に対し、自分にそのスキルがあると自信を持っている生徒(92 名)の間には「69 ポイント」もの大きな認識の差(ギャップ)が生じている。教職員側からも、生徒が PC 操作に習熟していない現状や、学校側の機材更新費用の負担、運用人員の不足といった構造的な課題が報告されている。本事業が目指す「AI×データサイエンス」の導入は、こうした生徒の潜在的な興味を、単なる消費活動(スマホ利用)から専門的な職業スキル(PC 活用)へと昇華させるための極めて重要な架け橋になると考える。 【3】地域産業の持続可能性を支える“育成・伴走・定着”の連携モデル 現在、通信制高校と外部機関の連携はハローワーク等の一部に限定されており、地域企業や専門学校との体系的な連携授業や職業体験は十分に提供できていないのが現状である。その背景には、土日を中心とする通信制高校のスクーリング日程と外部機関の稼働日との不一致や、校外学習における通信制高校生の移動費用の負担といった構造的な課題がある。 一方、生徒からは「地域の様々な人との交流」や「職場体験」を求める声が寄せられており、教職員も「興味・関心のある分野での体験機会の提供が、生徒の学習意欲や進路意識の向上につながる」と認識している。本事業を通じて、専修学校がハブとなり、通信制高校の柔軟なプログラム設計と地域産業のニーズを繋ぐ「一休型
--	---

	支援体制」を構築するとは、若年層の県内進学・就職を促進し、地域産業における人材確保と活性化を実現するための鍵になると考えられる。
開発する カリキュラム・ プログラム にどのように反 映するか (活用手法)	・教育プログラムにおける関心領域(生成 AI など)や ICT 環境を考慮したカリキュラム構成に活用する。 ・LMS 情報やキャリア支援等における協働領域の明確化、段階的な連携スキームの設計に反映する。

(2)通信制出身専修学校生調査 ※報告書後述 資料2

調 査 名 ②	通信制出身専修学校生調査
調 査 目 的	通信制高校出身の在校生・卒業生が専門学校へ進学した経路や課題、支援の有効性を把握し、学生支援体制の設計に活用する。
調 査 対 象	通信制高校出身の在校生(8 名)および卒業生(1 名)
調 査 手 法	オンライン(事前)アンケート+個別インタビュー
調 査 項 目	進学の動機・経路／困難だった点(学力・経済・心理)／支援で効果的だったこと
分 析 内 容 (集 計 項 目)	時系列・進学ルート別に分析／支援項目ごとの有効性整理
調 査 結 果	事前アンケートおよびインタビューの結果を基に、専門学校入学前から在学中に当事者が感じた困難とその要因を明らかにした。 入学前の段階は環境変化に対する不安からすべての面で困難が強く表れている。中でも学習面では、入学前には調査対象全員が何らかの学力不安を抱えており、特に「国語・数学などの基礎学力」に対する不安(67%)と最も高かった。心理面においては、入学時には、対象者の 80%近くが新しい環境への適応に不安を感じており、入学前から継続する心理的困難がみられる。 特に対人関係不安については、40%の対象者が「難しさを感じた経験がある」と回答しており、在学初期における大きな課題で困難度合が高い傾向がみられる。経済面については家庭の状況による影響で、困難の程度には個人差がある。

	入学後、授業が始まり専門的な学びにふれることで、学習面の困難が徐々に軽減されていく。また、経済面は多くの場合、入学前の段階である程度解消されていることが多い。在学中に最も困難が大きく、長く続くのは心理面である。特に入学後から学校生活に慣れるまでに強く表れ、その後も在学中の短時間では解消されるものではないことが明らかになった。
開発する カリキュラム・ プログラム にどのように反 映するか (活用手法)	入学前後の支援内容(心理的支援・生活支援・学習支援等)強化の設計に反映する。

(3) 地元中小企業調査 ※報告書後述 資料3

調 査 名 ③	地元中小企業調査
調 査 目 的	地域企業が求める人材像、教育連携の意向、就職支援のニーズを把握し、実践教育プログラム構成に活かす。
調 査 対 象	地元中小企業(61 社)
調 査 手 法	アンケート調査
調 査 項 目	求めるスキル・マインド／PBL や実習受け入れへの考え／就職後の育成・定着支援の期待
分 析 内 容 (集 計 項 目)	業種別傾向／人材ニーズとスキルギャップのマトリクス化
調 査 結 果	回答企業の多くが、新規事業の拡大よりも、既存事業基盤の強化と内部経営資源の最適化を重視している状況が読み取れる。特に「人材育成・専門スキル再構築・リスクリング」が上位に位置している点は、人材不足を背景に、人材の確保に加えて既存人材の育成・再教育を経営課題として捉えている企業が多いことを示している。 ◆人材確保・採用に関する実態 人材が不足している職種としては、専門性を要する技術職現場人材や、収益に直結する営業人材の不足が顕著であった。採用において企業が重視する要素

	は、専門知識や高度な技能よりも、「誠実さ・素直さ」「チームワーク」「コミュニケーション能力」といった基礎的なポータブルスキルであることが明らかとなった。専門学校出身者については、多くの企業が採用実績を有し、今後の受入にも前向きな姿勢を示している。一方、通信制高校出身者については、採用実績の少なさから評価や育成方法に戸惑いを感じている企業が一定数存在するものの、受入自体に否定的な企業は少ない。通信制高校出身者の基礎能力やポータブルスキルを整理・可視化し、企業と連携したキャリア形成支援の仕組みを構築することが求められる。 ◆キャリア形成支援への関心 専修学校との連携・協業についてインターンシップ・職場体験等の受入意向については、約7割の企業が、何らかの形で協力可能性を示している。一方で、「条件付き」が多数を占めていることから、指導体制の確保や業務負荷、受入期間などが、取組導入に際しての主な課題となっていることが読み取れる。今後は、専修学校側が企業の負担軽減を意識した「低負荷型の企業実習」としてスモールステップで連携できる受入設計や支援体制を提示することが重要と思われる。 ◆従業員の定着率と離職要因 新卒・中途採用者の定着率については約9割の企業が自社の定着率を「平均以上」と認識している。若手社員の離職要因として最も多かったのは「入社後の仕事とのギャップ」であり、次いで「給与が安い」、「人間関係構築」が続いた。採用段階での丁寧な説明と、入社後の継続的なフォローアップ体制の重要性を示唆している。 ◆DX 活用とデジタル人材確保の実態 約5割の企業がDXが進んでいると前向きな回答をしている。地域中小企業においても、DX への意識は高まりつつあることが示された。クラウドサービス、Web 会議システム、電子契約といった、業務効率化やペーパーレス化に直結するツールは約7割前後の企業で導入が進んでいる。一方で、RPA や AI 関連ツールについては、「全く使っていない」とする回答が多く、特に AI 関連ツールでは 8 割以上の企業が未導入であった。「予算の確保」や「人手不足」といったリソース面の制約が、推進上の大きな課題となっている。デジタルツールの導入は進みつつあるものの、AI や RPA などの高度な技術活用は限定的であり、「デジタル人材の不足」や「体系的な育成体制の未整備」が DX 推進の障壁となっている。また、外部教育機関との連携が十分に進んでいないことも、地域全体でのデジタル化を進める上での課題の一つである
--	---

開 発 す る カリキュラム・ プ ロ グ ラ ム にどのように反 映 す る か (活 用 手 法)	企業連携授業・インターン内容の設計／キャリア支援プログラムへ企業視点を導入する。
--	--

(4)オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査(通信制高校) ※報告書後述 資料4

調 査 名 ④	オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査(通信制高校)
調 査 目 的	通信制高校におけるオンライン学習環境の整備状況や ICT リテラシーの実態を把握する。
調 査 対 象	通信制高校 3 校 2025年11月19日(金): 聖和高等学校 2025年11月25日(火): 誠英高等学校、山口松風館高等学校
調 査 手 法	ヒアリングシートを用いた対面方式の個別ヒアリング
調 査 項 目	オンライン学習の導入状況、ICT 機器の整備状況、学習管理システム(LMS)の利用状況、教職員・生徒の ICT リテラシー、オンライン支援の課題と可能性等
調 査 結 果	3 校とも通信制生徒は「GIGA スクール構想」などの端末配布対象外であったため、学校から生徒への端末貸与が行われていない。これがオンライン学習やデジタルの活用を進める上での最大の物理的障壁となっている。 生徒はスマートフォンの操作には慣れているが、レポートのデジタル作成、ファイルの添付、タイピングといった PC 特有のスキルには大きな個人差があり、不慣れな生徒も多い。ICT 環境を維持・管理するための予算(初期費用・メンテナンス費)や、システムを使いこなすための教職員側の人的リソースの確保が、さらなる活用拡大を阻む要因となっているとおもわれる。 ヒアリング調査から明らかになった「1 人 1 台端末の不在」「IT スキルリテラシー格差」「人的・コスト的限界」といった課題は、専門学校へのスムーズな移行を阻む大きな障壁となっている。これらの課題を解決し、地域に選ばれる専修学校となるためには、以下の方針に基づくカリキュラム構築が必要である。

開 発 す る カリキュラム・ プ ロ グ ラ ム にどのように反 映 す る か (活 用 手 法)	出前授業、LMS 連携開発・設計の参考資料とする。
--	---------------------------

(5) LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査 ※報告書後述 資料5

調 査 名 ⑤	LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査
調 査 目 的	LMS(ラーニングマネジメントシステム)、単位制、通信制高校・専門学校の連携に関する制度的枠組みを調査し、今後の教育プログラム設計に資するための制度的条件・論点・活用可能な仕組みを明らかにする
調 査 対 象	LMS 活用に関する制度、単位制と単位互換に関する法的整理、通信制との制度的連携、及びこれらの教育現場での実践事例を含む
調 査 手 法	WEB 上での文献・事例収集を中心とし、関連する報告書・省庁発行資料・制度ガイドライン等を含む。
調 査 結 果	教育機関には、テクノロジーの進展や学習者の多様化に対応した柔軟かつ質の高い教育プログラムの提供が強く求められている。特に、デジタルトランスフォーメーション(DX)の波は教育分野にも及び、LMS(ラーニングマネジメントシステム)を活用した教育の効率化・高度化や、単位制・通信制の仕組みを最大限に利用した多様な学習機会の提供が求められている。 【実施した調査】 ①教育システム基盤(LMS)を活用したサポート体制の項目に関する調査 LMS が学習評価や進捗管理を担うシステムとして機能するために、現行法規(学校教育法、各種設置基準など)が定める要件や、文部科学省等から示されているガイドライン(遠隔授業に関する規定など)がどのように適用されるのかを詳細に調査。 ②単位制・カリキュラムに関する制度設計調査 専門学校および高等教育機関における単位認定の枠組み、特に単位互換制度や既修得単位の認定に関する法的根拠と運用事例の調査。③通信制教育との制度的連携の可能性と実践事例

	現状 通信制高校や大学との教育連携において、どのような制度的要件(教員、施設、授業時間など)が求められるのか、また、どのような教育実践事例が存在し、既存の教育プログラムにどのように応用可能か調査。
開発する カリキュラム・ プログラム にどのように反 映するか (活用手法)	LMS 連携開発・設計の参考資料とする。

※なお、事業計画書に記載の「地域支援機関調査」は地域団体との調整後、3月19日(木)の地域団体が集まる山口地域職業能力開発促進協議会にてヒアリングを実施する予定である。

3-4 開発に際して検討した実証講座の内容

1. カリキュラム案の設計

①実施内容

- ・既存の情報系・DX系カリキュラムの棚卸しと再構成を委員会・教務部門で検討
(項目:ITパスポート対応科目、ドローン、SNS活用等)
- ・通信制高校卒業生に多い課題(学力差・継続力)に対応したモジュール式／選択制の導入を委員会・教務部門で検討
- ・「入学後コース選択型」など可変性のある構造を組み込む
(例:探究 → 専門選択 → 実践)施策を委員会・教務部門で検討

②会議・調査結果を踏まえ次年度に向けて目指すもの

- ・カリキュラムマップ(2年制／1年コース対応)
- ・年間時間割設計案(75%オンライン構成)
- ・各科目シラバス(AI、企業連携、ゲーミフィケーションの有効活用など) ※後述検討資料 資料6

2. 実証教材試作(AI 基礎)

①実施内容

・調査結果を踏まえて、下記の教材設計・試作を行った。

① デジタル基礎:通信制高校生のスマホ活用のセキュリティ対応教材 ※後述添付 資料7

②調査結果を踏まえ次年度めざすもの

・教材試作(AI リテラシー、デジタル基礎、各分野 2～3 本ずつ)

・YouTube 限定公開の授業動画(15 分×3 本構成)

③概要(8 年度の実証へ展開)

実 証 講 座 の 対 象 者	通信制高校生、入学希望者
期 間 (日数・コマ数)	令和 8 年度(約 3～4 か月間)
実 施 手 法	教材共同制作(動画、スライド、演習課題等)
想 定 さ れ る 受 講 者 数	教材制作者、講師、支援者 約 5～10 名

3. 実証実施(プレ授業・体験版)＋通信制高校との接続実験

①実施内容

・模擬授業／出前授業については調査結果を踏まえた教材開発が 2 月となったため、
その準備と内容の精査、実施計画を実施した。

(令和 8 年度山口県松風館高等学校にて実施)

・令和 8 年度に通信制高校と YIC の間で仮想 LMS クラスを設置し、双方向課題配信・
提出・フィードバックを試行、高校生・教員双方に対しフィードバックアンケート・インタビ
ューを実施

②令和 8 年度までに目指すもの

- ・授業動画＋フィードバック結果検証・LMS 実証記録(操作性・課題回収率など)・接続
モデル案作成

③概要(令和 8 年度実施)

実 証 講 座 の 対 象 者	山口県立山口松風館高校の生徒(予定)
期 間 (日数・コマ数)	約 2 日間(4 コマ程度)
実 施 手 法	出前授業またはオンライン授業(LMS 併用)・デジタル分野体験授業・キャリア講座・個別相談
想 定 さ れ る 受 講 者 数	20 名程度

4. キャリア形成・伴走支援マニュアル(案)

①マニュアル内容の精査・計画作成を実施

- ・【入学前】:通信制高校等への出張キャリア相談(対面・オンライン)、LMS 連携による
キャリア基礎教育(e ラーニング)導入
- ・【在学中】:マイプロジェクト形式のキャリア設計支援、週次または月次面談による進捗
管理、AI カウンセラー試験運用
- ・【卒業後】:U ターン相談・編入・起業・就職支援を含む「卒業生ネットワーク」構築と連携
スキーム設計
- ・チャットボットや生成 AI を活用した「非対面型相談支援体制」の構成案づくり
(例:AI チャットキャリア Q&A)

②成果物

- ・キャリア支援マニュアル第 1 版(全 65 ページ)完成 ※後述添付 資料 8
- ：入学前／在学中／卒業後をカバーする一貫モデル
- ：AI カウンセラー導入の試行報告書・設計案含む

3-5 開発した教育カリキュラム・プログラム／調査研究結果の検証

1. 調査結果の検証(令和7年度は調査結果の検証のみ)

- ・調査結果の検証については、分科会である「調査・連携委員会」(委員12名、地元企業、行政(県・教育庁)所属にて、①調査(アンケート・インタビュー)の内容検討②各種実施調査速報の分析③各種調査結果最終版の検討・分析を行った。その後実施推進委員会にて承認を得た。全ての委員より高評価を得ることが出来た。
- ・この調査結果を令和8年度のプログラム開発(①入学前キャリア教育(通信制高校接続実証)②デジタルリテラシー基礎科目実証③キャリア形成講座(SST・SGE等)実証等)へ反映させる。また、8年度の検証体制は下記の通りとする。

2. 検証の体制と実施内容(2方向からの評価を実施する)

①受講者(学生)からの評価

- ・目的:学習者自身の実感・満足度・理解度・達成度などを可視化し、プログラムの質を改善する
- ・実施内容

項目	内容
受講後アンケート(講座ごと)	講座終了時にオンライン(Google フォーム等)で満足度・難易度・改善要望などを回収
LMS 上での定期フィードバック	単元ごとに1分で答えられる「ミニふり返し」を設定し、負担を軽く持続可能に
中間・年度末レビュー面談	指導教員・キャリア担当が学生1人ずつにヒアリング(フォーマット化)し、到達度と悩みを把握
サンプル追跡調査	卒業後1年後の「活用度／定着度／現場での役立ち実感」などを卒業生アンケートで確認(長期評価)

②企業・業界団体等からの評価

・目的:学習者自身の実感・満足度・理解度・達成度などを可視化し、プログラムの質を改善する

・実施内容

項目	内容
講座評価シート	実習受入先企業・講座監修者に「内容の業界適合度」「即戦力レベル」「改善点」などを定量評価してもらう
地元企業連携成果物レビュー会	地元企業・団体に向けて学生がプレゼン → その場で評価・助言 → フィードバックを教育側に反映
業界別ヒアリング	年1回程度、福祉・IT・観光等の分野ごとに企業訪問ヒアリングを実施し、学習成果と現場ニーズのズレを共有
外部講師によるカリキュラムレビュー	定期的に非常勤・産業界出身講師に内容チェックとコメントを依頼(外部性の確保)

※上記により、双方向からのフィードバックが可能な体制を構築する。

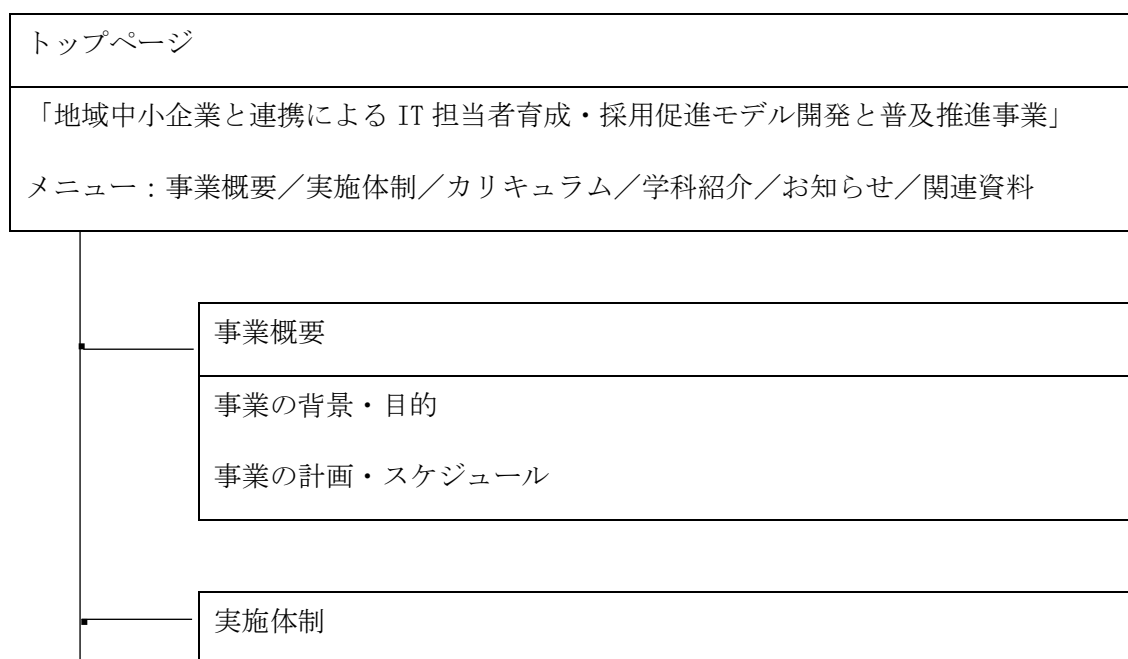
3-6 ホームページの作成他

(1)ホームページ URL

下記のとおりホームページを作成した。

URL: <http://yic-hsc.com/>

(2)ページ構成



	実施体制表
	カリキュラム
	開発するカリキュラムについて
	学科紹介
	新設する学科について
	お知らせ
	お知らせ、新着、過去の記事
	関連資料
	カリキュラム
	調査報告書
	実施報告書

(3)周知チラシの作成 資料9

添付のとおり周知用のパンフレットを作成した。

第4章 事業終了後に実施予定の取組及び成果の活用方針・手法

4-1 事業終了後の取組と成果の活用方法

1. 開発した教育プログラム・調査結果の活用方法

令和7年度に得られた実証結果および評価データを基に、次年度以降本格運用および横展開に向けた活用を進める。

YIC 情報ビジネス専門学校における既存(新規含む)コース(マイプロジェクト・ハイブリッドスタディコース等)に、本事業で開発した教育プログラム(改善版)を段階的に導入する。さらに、下記のと通りの活用を検討・実施する。

○活用先別の活用方針

活用先	活用方法
通信制高校	・接続型教育モデル(出前授業・LMS 連携)の実証結果を基にした導入提案・キャリア教育教材・進路支援動画の提供
YIC グループ校(京都校など)	・実証結果を反映した教育プログラムの他分野・他校への展開・教材共有および教職員研修での活用
他専修学校・教育機関(県内外)	・改善版カリキュラム、教材、制度設計マニュアルの共有・導入希望校との研究会・勉強会の実施
自治体・行政機関	・実証結果を踏まえた若者定着モデルとしての提案・教育施策・人材確保施策の検討材料として提供
地元企業・団体	・実証事例・学生成果・企業評価結果の共有・連携授業・実習導入のガイドライン提供
学会・外部機関	・実証結果の研究発表・報告・「通信制高校×専修学校×地域企業」モデルとして成果共有

2. 事業終了後のフォローアップ体制

今年度の結果を受け令和8年度に実証結果を踏まえた改善版モデルを整理し、令和9年度の本格実施および横展開に向けたフォローアップ体制を整備する。

担当	役割
YIC 学院事務局	全体統括、教育プログラム改善、外部連携窓口
キャリア形成アドバイザー	在校生の伴走支援、進路相談、企業連携調整

卒業生メンターネットワーク	在校生支援、地域活動協力、就職・定着支援
通信制高校等との継続協定	接続型キャリア教育の継続実施、教材共有
地域企業等の受入パートナー	実習・連携授業の継続提供、共同改善会議の実施
地域若者サポートステーション等支援機関	卒業後の就職支援、再キャリア相談、地域定着支援

第5章 令和7年度事業実施に伴う成果物

5-1 通信制高校生徒調査・通信制高校教職員調査 資料1

 文科科学省委託事業 令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」 (人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム) 『通信制高校連携型キャリア形成支援による地域産業人材育成モデルの開発事業』 通信制高校向け実態調査(進路・ICT環境・外部連携)(アンケート・ヒアリング調査) 報告書 学校法人 YIC 学院	1. 事業の趣旨 20 歳人口の減少や地域格差の進行により、地方の若年層が希望する進学先を地域内に見出せず、県外進学や就職によって地域を離れる傾向が強まっている。その結果、地域産業における人材の空洞化や生活サービスの維持困難といった課題が顕在化しており、地域に根差した教育機関がその受け皿として果たすべき役割はかつてなく大きくなっている。特に、通信制高校など多様な学習環境を有する若者に対して、継続性の高い進路ルートと産業的志向につながる実践的な学びの場を提供することが急務である。 本事業は、通信制高校との連携を基盤に、入学前からのキャリア教育、在学中の柔軟なプログラム設計(オンライン学習・コース選択制・企業連携型の導入)、AI や ICT を活用したデジタルリテラシー育成、地域企業(拠点施設)との協働を通じた進路探索などを展開し、「県内初の AI×データサイエンスを導入したクロスオーバー型コース」を目指すとともに、「地域に根差した専修学校」づくりを推進するものである。また、卒業後のキャリア定着や地域貢献までを見据えた「育成・伴走・定着」の一体型支援体制を構築し、若年層の社会的移動の促進と地域産業の人材確保・活性化に資する教育モデルの構築を目指す。 2. アンケート調査の目的 本業務は、通信制高校に在籍する生徒および教職員を対象として、進路意識や進学に対する認識、興味関心、学習環境・習慣、社会自立に向けてどのようなスキルや準備が不足していると感じているか、ならびに学校側の進路支援の体制と課題や外部機関連携へのニーズ、学習管理システム(LMS)等 ICT 進学の実施状況や課題等を把握し、今後の教育プログラム設計に活かすことを目的とする。 (1) 通信制高校生 社会的自立に向けて、通信制高校生がどのようなスキルや準備が不足していると感じているかを把握し、教育プログラムに必要なキャリア支援やソーシャルスキル育成要素を盛り込むための基礎情報とする。 (2) 通信制教職員 進路支援の実態や課題、ICT 連携の可能性を把握し、連携設計の前設条件を整理する。
--	--

3. 通信制高校生ニーズ等のアンケート調査

3-1. 調査方法

【1】調査手法

- ① 通信制高校生：学生アンケート協力依頼のプリント配布後、Google フォームにてアンケート調査を実施した。
- ② 通信制教職員：対面にてヒアリング調査を実施した。

【2】調査対象

山口県内の通信制高校(3校)を対象とした。

【3】アンケート・ヒアリング実施(内訳)

対象 ……学校法人植藤学園 聖光高等学校(69 名)
 学校法人三田尻学園 誠英高等学校(76 名)
 山口県立 山口松風館高等学校(188 名)
 合計 ……3校
 回答数 ……333 件(アンケート)

【4】調査日程

令和 7 年 11 月 11 日～令和 7 年 11 月 26 日

3-2. 調査項目

【1】通信制高校生 アンケート調査

1 学生情報
・学年、学科コース、性別、居住地、通学時の方法 ・学習習慣、時間の把握 ・学校のICT設備、オンライン学習環境の把握
2 学生が現在考えている進路の意向の把握
・希望する進路 ・将来目指す進路(職業)の分野 ・学校の進路指導に対する満足度
3 進学の障壁となる要因の把握

2

・専門学校進学に障壁となる要因(情報・学習面・経済面・心理面等)
4 通信制高校の学生たちが興味を持っているものや、どのような将来を抱いているかを把握
・興味を持っている関心事(AI、e-Sports、動画編集等) ・余暇や自由時間の過ごし方 ・将来就きたい業界、やってみたい職業
5 社会へ出る上で必要と思う力「社会人基礎力(12の能力要素)」と自己評価
・地域社会や職場で仕事をしていくために必要だと思う能力(スキル) ・現在の自分自身の能力評価(スキル) ・自分の能力(スキル)を伸ばすために取り組んでいること

【2】通信制教職員 ヒアリング調査

1 学校・教職員情報
・学校、所属・役職、所在地、教職員数 等
2 生徒への進路指導体制・取り組みの現状、課題、必要な支援
・進学就職等の卒業後の進路 ・目指す進路(職業)の分野 ・生徒の進路決定で特に難しい点 ・今後必要と思う支援
3 企業・地域団体・行政・大学などの連携実態とニーズ
・連携経験がある外部機関及び連携する上での課題 ・地元の専門学校と新たに連携したい分野や内容
4 授業や進路支援での ICT 活用状況、設備・スキル・運用課題
・授業や進路指導におけるICT活用度 ・利用しているツール(LMS、Google、Teams、Zoom、その他) ・必要と思う授業改善やICT環境の改善内容

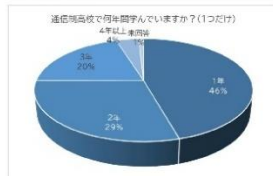
3

3-3. 通信制高校生アンケート調査結果

【1】学生情報

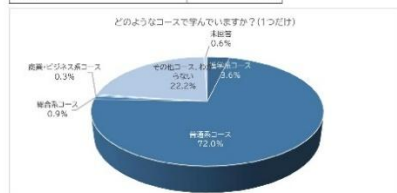
【Q1】通信制高校で何年間通っていますか？(1つだけ)

1 年	150 名
2 年	97 名
3 年	66 名
4 年以上	13 名
未回答	3 名



【Q2】どのようなコースで学んでいますか？(1つだけ)

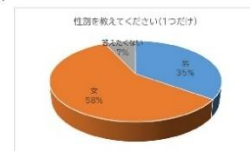
進学系コース	12 名
普通系コース	237 名
総合系コース	3 名
商業・ビジネス系コース	1 名
医療・福祉系コース	0 名
情報系コース	0 名
調理系コース	1 名
その他コース、わからない	73 名
未回答	2 名



4

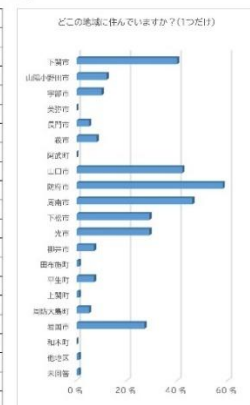
【Q3】性別を教えてください。(1つだけ)

男	115 名
女	191 名
答えたくない	23 名
未回答	0 名



【Q4】どこの地域に住んでいますか？(1つだけ)

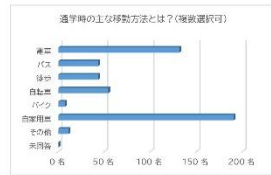
下関市	40 名
山陽小野田市	12 名
宇部市	10 名
美弥市	0 名
長門市	5 名
萩市	8 名
阿武町	0 名
山口市	42 名
防府市	58 名
周南市	46 名
下松市	29 名
光市	29 名
柳井市	7 名
田布施町	1 名
平生町	7 名
上関町	1 名
周防大島町	5 名
若田市	27 名
和木町	0 名
他地区	1 名
未回答	1 名



5

【Q5】 通学時の主な移動方法とは？(複数回答可)

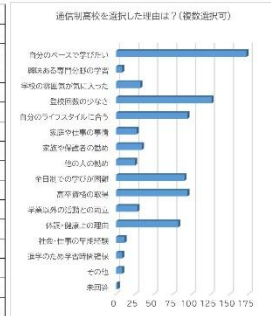
電車	131 名
バス	43 名
徒歩	43 名
自転車	54 名
バイク	7 名
自家用車	190 名
その他	11 名
未回答	0 名



【2】 学習習慣、時間の把握

【Q6】 通信制高校を選択した理由は？(複数回答可)

自分のペースで学びたい	172 名
興味ある専門分野の学習	8 名
学校の雰囲気気に入った	32 名
登校回数の少なさ	126 名
自分のライフスタイルに合う	94 名
家庭や仕事の事情	27 名
家族や保護者の勧め	34 名
他の人の勧め	25 名
全日制での学びが困難	90 名
高卒資格の取得	94 名
学業以外の活動との両立	28 名
体調・健康上の理由	82 名
社会・仕事の早期経験	11 名
進学のため学習時間確保	8 名
その他	8 名
未回答	2 名



《その他内容》

- ・他の高校[全日制、定時制]に落ちたため、就職前に高校に行くことは決めていたから通信制を選んだ
- ・前の学校で色々あったため
- ・全日に行っていたが自分が合わなかったから
- ・学校嫌いだから先生も子供も人間も嫌い
- ・転校

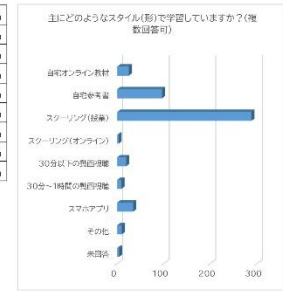
6

【Q7】 主にどのようなスタイル(形)で学習していますか？(複数回答可)

自宅オンライン教材	25 名
自宅参考書	96 名
スクーリング(授業)	288 名
スクーリング(オンライン)	3 名
30分以下の動画視聴	19 名
30分～1時間の動画視聴	9 名
スマホアプリ	34 名
その他	10 名
未回答	4 名

《その他内容》

- ・いろいろ
- ・レポート
- ・教科書、授業プリント、レポート
- ・塾

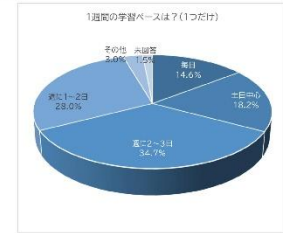


【Q8】 1週間の学習ペースは？(1つだけ)

毎日	48 名
土日中心	60 名
週に2～3日	114 名
週に1～2日	92 名
その他	10 名
未回答	5 名

《その他内容》

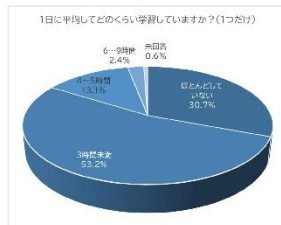
- ・1週間一気に
- ・4～5
- ・4～5日
- ・していない
- ・やろうと思った時
- ・週に3～4日
- ・週に4～6日ほど、アルバイトのあいまに
- ・週に4日から5日
- ・平日のみ
- ・平日中心



7

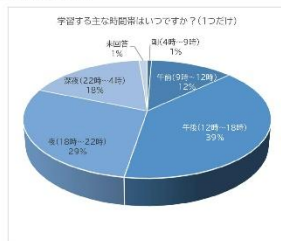
【Q9】 1日に平均してどのくらい学習していますか？(1つだけ)

ほとんどしていない	101 名
3時間未満	175 名
4～5時間	43 名
6～9時間	8 名
10時間以上	0 名
未回答	2 名



【Q10】 学習する主な時間帯はいつですか？(1つだけ)

朝(4時～9時)	2 名
午前(9時～12時)	41 名
午後(12時～18時)	130 名
夜(18時～22時)	94 名
深夜(22時～4時)	58 名
未回答	4 名



8

【Q11】 アルバイトの経験はありますか？(1つだけ)

無し	123 名
あり	206 名
未回答	0 名

- アルバイトの経験はありますか？(1つだけ)
- | | | |
|---|--|--|
| アパレル
アミューズメントスタッフ
レストランスタッフ
イベントスタッフ
ガストのフロアで接客業務
ガソリンスタンド
カフェ
カフェ、書店、ジム受付
ケーキ屋、コンビニ
コメダ珈琲店
コンビニ
コンビニ、キッチンカー
サービス業
スーパー
スシロー
スターリーカフェ
セブンイレブン
チェーン飲食店
ドラッグストア
パー
はま寿司
はま寿司とセブン
家電量販店で主に品出し、接客
就労継続支援B型(現在は金魚ちょうちんの作成等)
アルバイトの求人やっているとこの半分は最悪なと特にココス | バンを製作
ファストフード店
ファミリーマート
フード系
プールの監視員、飲食店
プールの受付
ポスティング
ホテル清掃 居酒屋ホール
マックスバリュのデリカ
マルキと花子
レジ・品出し
介護
海人
喫茶店
居酒屋
業務用スーパー
警備員
現場
工場
広告の挟み込み
皿洗い
寿司屋 | 書店員
焼肉屋
食品工場
水道工事
清掃、調理
接客業
設計関係
全部
惣菜
中古ホビーショップ
通夜、葬儀の受付
塗装
馬の世話
販売仕事。
服飾関係
弁当を作る
老人ホーム 厨房
飲食業
飲食業、電化製品店
飲食店、給食室
ラーメン |
|---|--|--|



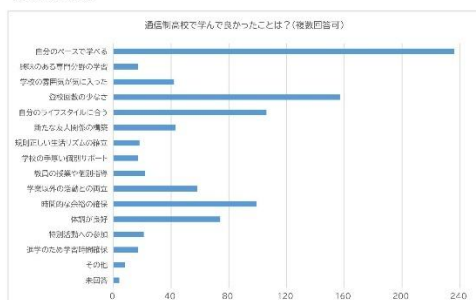
9

【Q13】通信制高校で学んでよかったことは？(複数回答可)

自分のペースで学べる	236 名
興味のある専門分野の学習	17 名
学校の雰囲気が入った	42 名
登校回数の少なさ	157 名
自分のライフスタイルに合う	106 名
新たな友人関係の構築	43 名
規則正しい生活リズムの確立	18 名
学校の手厚い個別サポート	17 名
教員の授業や個別指導	22 名
学業以外の活動との両立	58 名
時間的な余裕の確保	99 名
体調が良好	74 名
特別活動への参加	21 名
進学のため学習時間確保	17 名
その他	8 名
未回答	4 名

《その他内容》

- ・外に出るようになった
- ・ない
- ・良い先生が多い



10

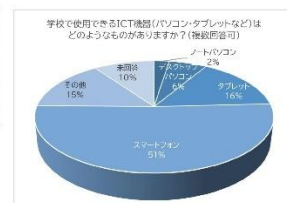
【3】学校の ICT 設備、オンライン学習環境の把握

【Q14】学校で使用できる ICT 機器(パソコン・タブレットなど)はどのようなものがありますか？(複数回答可)

ノートパソコン	10 名
デスクトップパソコン	25 名
タブレット	64 名
スマートフォン	209 名
その他	61 名
未回答	40 名

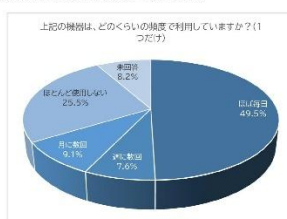
《その他内容》

- ・なし
- ・無い
- ・分からない



【Q15】Q14 の機器は、どのくらいの頻度で利用していますか？(1 つだけ)

ほぼ毎日	163 名
週に数回	25 名
月に数回	30 名
ほとんど使用しない	84 名
未回答	27 名



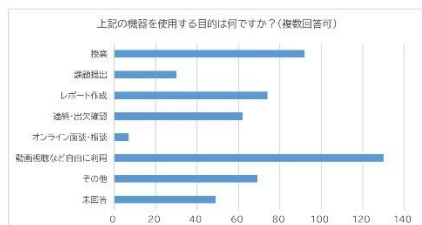
11

【Q16】Q14 の機器を使用する目的は何ですか？(複数回答可)

授業	92 名
課題提出	30 名
レポート作成	74 名
連絡・出欠確認	62 名
オンライン面談・相談	7 名
動画視聴など自由に利用	130 名
その他	69 名
未回答	49 名

《その他内容》

- ・アンケート
- ・調べ物
- ・分からない
- ・なし
- ・現実逃避
- ・部活動

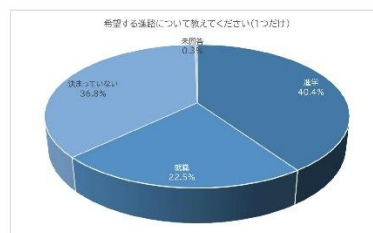


12

【4】学生が現在考えている進路の意向の把握

【Q17】希望する進路について教えてください(1 つだけ)

進学	133 名
就職	74 名
決まっていない	121 名
未回答	1 名



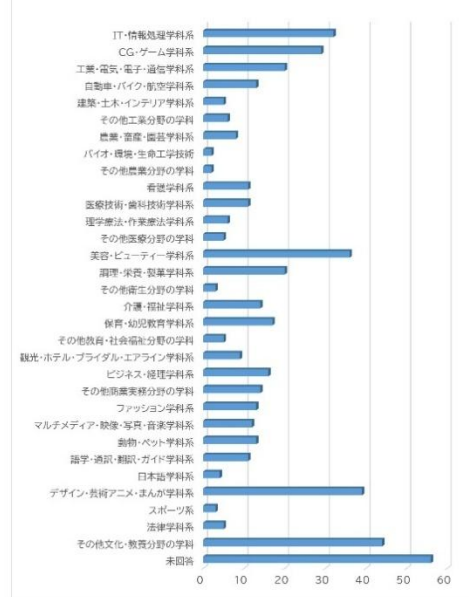
13

【Q18】 将来目指す進路(職業)の分野を教えてください(複数回答可)

IT・情報処理科系	32 名
CG・ゲーム学科系	29 名
工業・電気・電子・通信学科系	20 名
自動車・バイク・航空学科系	13 名
建築・土木・インテリア学科系	5 名
その他工業分野の学科	6 名
農業・畜産・園芸学科系	8 名
バイオ・環境・生命工学技術	2 名
その他農業分野の学科	2 名
看護学科系	11 名
医療技術・歯科技術学科系	11 名
理学療法・作業療法学科系	6 名
その他医療分野の学科	5 名
美容・ビューティー学科系	36 名
調理・栄養・製菓学科系	20 名
その他衛生分野の学科	3 名
介護・福祉学科系	14 名
保育・幼児教育学科系	17 名
その他教育・社会福祉分野の学科	5 名
観光・ホテル・ブライダル・エアライン学科系	9 名
ビジネス・経理学科系	16 名
その他商業実務分野の学科	14 名
ファッション学科系	13 名
マルチメディア・映像・写真・音楽学科系	12 名
動物・ペット学科系	13 名
語学・通訳・翻訳・ガイド学科系	11 名
日本語学科系	4 名
デザイン・芸術アニメ・まんが学科系	39 名
スポーツ系	3 名
法律学科系	5 名
その他文化・教養分野の学科	44 名
未回答	56 名

14

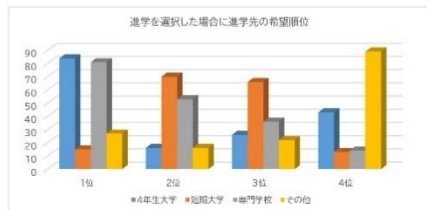
将来目指す進路(職業)の分野等を教えてください(複数回答可)



15

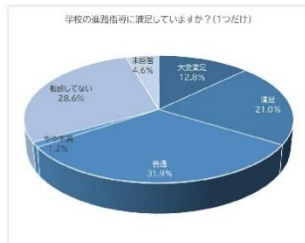
【Q19】 進学を選択した場合に進学先の希望順位

	1位	2位	3位	4位	未回答
4年生大学	84	16	26	43	160
短期大学	15	70	66	13	165
専門学校	81	53	36	14	145
その他	27	16	22	89	175



【Q20】 学校の進路指導に満足していますか？(1つだけ)

大変満足	42 名
満足	69 名
普通	105 名
やや不満	4 名
不満	0 名
相談していない	94 名
未回答	15 名



16

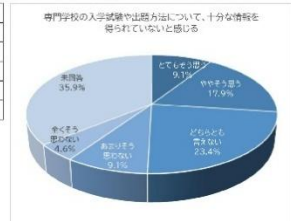
【5】 進学の障壁となる要因の把握

【Q21】 専門学校進学に障壁となる要因を教えてください(専門学校進学希望者)

①-1 専門学校進学に関する情報や必要な支援

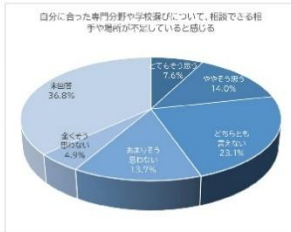
専門学校の入学試験や出題方法について、十分な情報を得られていないと感じる

とてもそう思う	30 名
ややそう思う	59 名
どちらとも言えない	77 名
あまりそう思わない	30 名
全くそう思わない	15 名
未回答	118 名



①-2 自分に合った専門分野や学校選びについて、相談できる相手や場所が不足していると感じる

とてもそう思う	25 名
ややそう思う	46 名
どちらとも言えない	76 名
あまりそう思わない	45 名
全くそう思わない	16 名
未回答	121 名



17

①-3 進学後に役立つ「学校見学・体験授業」の情報収集や参加に困難を感じている

とてもそう思う	24 名
ややそう思う	43 名
どちらとも言えない	90 名
あまりそう思わない	37 名
全くそう思わない	14 名
未回答	121 名

進学後に役立つ「学校見学・体験授業」の情報収集や参加に困難を感じている



進学に向けて、学校(通信高校)に支援を強化してほしいことはありますか？(自由記載)

- ・ カウンセリング
- ・ レポート返ってくるのが遅くて間に合わないオンラインで提出できるレポートがあれば嬉しい
- ・ 進路進学に関して。進方のため知識がない部分を補える資料を豊富にして欲しい。
- ・ 過去問の充実
- ・ 個人的な意見としては、面接指導、進学相談辺りの支援を強化して欲しいと感じています。
- ・ 就職などの相談
- ・ 就職先
- ・ 奨学金制度
- ・ 小論文対策、面接対策
- ・ 上記だけではまだ分からない事が多いため現場の見学等を取り入れた方が良く感じます
- ・ 進学相談、面接指導
- ・ 進学相談を対面以外でしたい(メールなど)
- ・ 進路相談ができるイベントの開催、またその告知
- ・ 生徒の自己啓発向上になる発言や灯火の案内
- ・ 相談をどのタイミングでどの人にすればいいのかわからない
- ・ 卒業生の就職先
- ・ 他の人の相談や解決方法を開示してほしい。
- ・ 大学に向けての入試対策や対策の教科書の配布などでもっと入試に心の余裕ができるようにしてほしいです
- ・ 分校でもイベントしてほしい
- ・ 面接指導
- ・ 面接指導、進路指導
- ・ 特になし

18

②-1 学習、学力面での課題、問題、不安

専門学校での授業についていけるか、学習内容の難易度に不安がある

とてもそう思う	55 名
ややそう思う	52 名
どちらとも言えない	65 名
あまりそう思わない	34 名
全くそう思わない	18 名
未回答	105 名

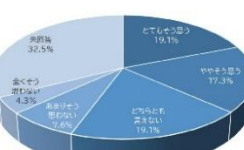
専門学校での授業についていけるか、学習内容の難易度に不安がある



②-2 専門学校の受験に必要な基礎学力(国語・数学・英語)に自信がない。

とてもそう思う	63 名
ややそう思う	57 名
どちらとも言えない	63 名
あまりそう思わない	25 名
全くそう思わない	14 名
未回答	107 名

専門学校の受験に必要な基礎学力(国語・数学・英語)に自信がない。



19

②-3 レポート作成やプレゼンテーションや実習など、専門学校で求められる学習スキルに不安がある

とてもそう思う	56 名
ややそう思う	52 名
どちらとも言えない	71 名
あまりそう思わない	32 名
全くそう思わない	13 名
未回答	105 名

レポート作成やプレゼンテーションや実習など、専門学校で求められる学習スキルに不安がある



③-2 奨学金や教育ローンなど、経済的な支援制度について、情報不足や申請手続きの複雑さに困っている

とてもそう思う	29 名
ややそう思う	57 名
どちらとも言えない	89 名
あまりそう思わない	26 名
全くそう思わない	21 名
未回答	107 名

奨学金や教育ローンなど、経済的な支援制度について、情報不足や申請手続きの複雑さに困っている

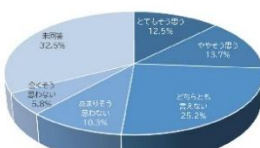


③-1 経済的(学費、生活費、交通費等)な課題、問題

専門学校の入学や授業料の給出に、大きな不安を感じている

とてもそう思う	41 名
ややそう思う	45 名
どちらとも言えない	83 名
あまりそう思わない	34 名
全くそう思わない	19 名
未回答	107 名

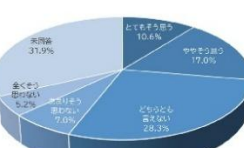
専門学校の入学や授業料の給出に、大きな不安を感じている



③-3 進学後の生活費や交通費(特に遠方への通学の場合)の負担に不安がある。

とてもそう思う	35 名
ややそう思う	56 名
どちらとも言えない	93 名
あまりそう思わない	23 名
全くそう思わない	17 名
未回答	105 名

進学後の生活費や交通費(特に遠方への通学の場合)の負担に不安がある。



20

21

- 進学を実現するために、経済的に特に不足している費用はありますか？(自由記載)
- ・ おそらく学費
 - ・ 学費、生活費等
 - ・ 生活費
 - ・ 進学費用
 - ・ 日常の生活費不足
 - ・ 入学金
 - ・ 分からない
 - ・ 特になし
 - ・ 進学後の生活費、学費、現在の生活費、現在必要な資料や塾等費用、現在から進学後の交通費

④-1 心理的(家族の理解、孤立メンタル等)な課題問題

専門学校への進学について、家族や保護者の理解や賛成が得られているか不安がある

とても思う	18 名
やや思う	27 名
どちらとも言えない	69 名
あまりそう思わない	57 名
全くそう思わない	50 名
未回答	108 名



④-2 進学後の友人関係や集団生活に、うまく馴染めるか不安がある

とても思う	41 名
やや思う	66 名
どちらとも言えない	64 名
あまりそう思わない	30 名
全くそう思わない	20 名
未回答	108 名



④-3 専門学校の勉強や生活に対し、進学へのモチベーションを維持できるか不安がある

とても思う	37 名
やや思う	56 名
どちらとも言えない	72 名
あまりそう思わない	38 名
全くそう思わない	17 名
未回答	109 名



22

23

④-4 専門学校進学準備や相談に関して「孤独感」や「精神的な負担」を強く感じている

とても思う	23 名
やや思う	34 名
どちらとも言えない	91 名
あまりそう思わない	42 名
全くそう思わない	30 名
未回答	109 名



【Q22】上記(Q21)以外で、あなたが専門学校への進学に向けて、最も大きな「障壁」になっていると感じることを具体的にお書きください(自由記述)

- ・ 学力、目指す目標がイメージ定まってない、モチベーション
- ・ クラスの雰囲気や先生方の雰囲気や自分に合うかどうか
- ・ 課題の提出期限を守れるか心配
- ・ 学習面
- ・ 学費
- ・ 学力不足
- ・ 現在の体調、進学後に体調が変化し生活が困難になる可能性があること。遠方へ進学すると、支援先が見つからない可能性があること。
- ・ 支援無しに生活費を賄うため、学業とアルバイトの両立を続けなければならないこと
- ・ 自身のやる気がわかず先行き不透明で意欲がないこと
- ・ 上記と同じような事だか金銭面や学習能力の面が障壁になるとおもいます、他の事に限っては特におもいません
- ・ 情報収集
- ・ 人とのコミュニケーション
- ・ 人見知り
- ・ 単位
- ・ 進学に使用するお金
- ・ 特になし
- ・ 勉強
- ・ 勉強について行けるか

24

【6】通信制高校の学生たちが興味を持っているものや、どのような将来を抱いているかを把握

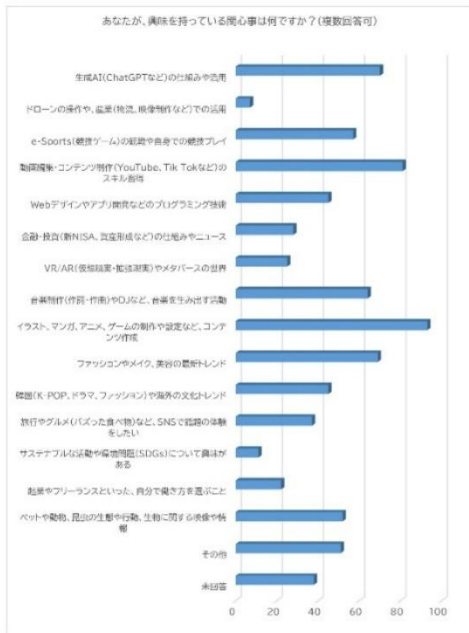
【Q23】あなたが、興味を持っている関心事は何ですか？(複数回答可)

生成 AI(ChatGPT など)の仕組みや活用	70 名
ドローンの操作や、産業(物流、映像制作など)での活用	7 名
e-Sports(競技ゲーム)の観戦や自身の競技プレイ	57 名
動画編集・コンテンツ制作(YouTube、Tik Tok など)のスキル習得	81 名
Web デザインやアプリ開発などのプログラミング技術	45 名
金融・投資(新 NISA、資産形成など)の仕組みやニュース	28 名
VR/AR(仮想現実・拡張現実)やメタバースの世界	25 名
音楽制作(作詞・作曲)や DJ など、音楽を生み出す活動	64 名
イラスト、マンガ、アニメ、ゲームの制作や設定など、コンテンツ作成	93 名
ファッションやメイク、美容の最新トレンド	69 名
韓国(K-POP、ドラマ、ファッション)や海外の文化トレンド	45 名
旅行やグルメ(バズった食べ物)など、SNS で話題の体験をしたい	37 名
サステナブルな活動や環境問題(SDGs)について興味がある	11 名
起業やフリーランスといった、自分で働き方を選ぶこと	22 名
ペットや動物、昆虫の生態や行動、生物に関する映像や情報	52 名
その他	51 名
未回答	38 名

※その他内容

- ・ 文学、哲学
- ・ スクールカウンセラー
- ・ 心理学
- ・ ルアー作り
- ・ 自動車
- ・ 植物、フラワーデザイナー
- ・ 精神的な健康について
- ・ 公務員
- ・ 無し
- ・ 心理学
- ・ 美容師
- ・ 心理学

25



26

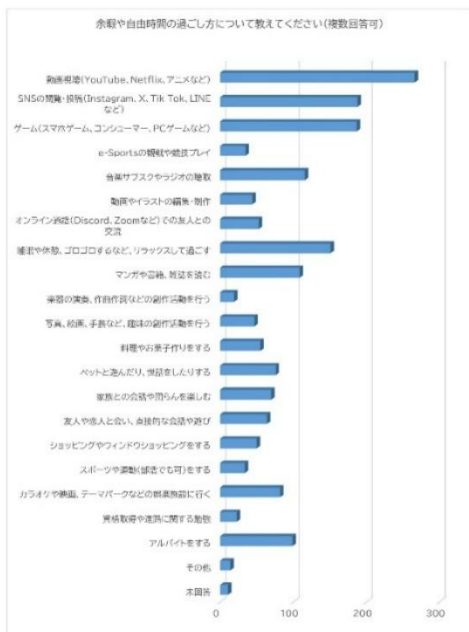
【Q24】 余暇や自由時間の過ごし方について教えてください(複数回答可)

動画視聴(YouTube、Netflix、アニメなど)	266 名
SNS の閲覧・投稿(Instagram、X、Tik Tok、LINE など)	188 名
ゲーム(スマホゲーム、コンシューマー、PC ゲームなど)	187 名
e-Sports の観戦や競技プレイ	35 名
音楽リスニングやラジオの聴取	116 名
動画やイラストの編集・制作	44 名
オンライン通話(Discord、Zoom など)での友人との交流	53 名
睡眠や休憩、ゴロゴロするなど、リラックスして過ごす	151 名
マンガや書籍、雑誌を読む	109 名
楽器の演奏、作曲活動などの創作活動を行う	19 名
写真、絵画、手芸など、趣味の創作活動を行う	47 名
料理やお菓子作りをする	55 名
ペットと遊んだり、世話をしたりする	76 名
家族との会話や団らんを楽しむ	70 名
友人や恋人と会い、直接的な会話や遊び	64 名
ショッピングやウィンドウショッピングをする	50 名
スポーツや運動(部活でも可)をする	34 名
カラオケや映画、テーマパークなどの娯楽施設に行く	82 名
資格取得や進路に関する勉強	23 名
アルバイトをする	99 名
その他	14 名
未回答	11 名

※その他内容

・ 配信のアーカイブやそれらの編集、投稿

27



28

【Q25】 あなたが将来就きたい業界、やってみたい職業はなんですか？(複数回答可)

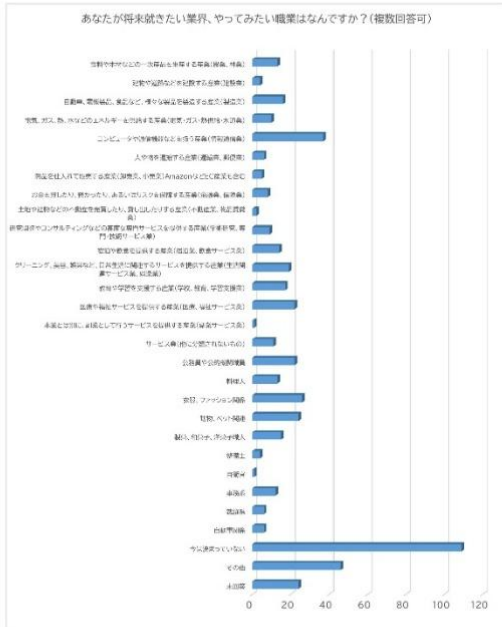
食料や木材などの一次産品を生産する産業(農業、林業)	13 名
建物や道路などを建設する産業(建設業)	4 名
自動車、電機製品、食品など、様々な製品を製造する産業(製造業)	16 名
電気、ガス、熱、水などのエネルギーを供給する産業(電気・ガス・熱供給・水道業)	10 名
コンピュータや通信機器などを扱う産業(情報通信業)	37 名
人や物を運搬する産業(運輸業、郵便業)	6 名
商品を仕入れて販売する産業(卸売業、小売業)Amazon など EC 産業も含む	5 名
お金を貸したり、預かったり、あるいはリスクを保障する産業(金融業、保険業)	8 名
土地や建物などの不動産を売買したり、貸し出したりする産業(不動産業、物品賃貸業)	2 名
研究開発やコンサルティングなどの高度な専門サービスを提供する産業(学術研究、専門・技術サービス業)	9 名
宿泊や飲食を提供する産業(宿泊業、飲食サービス業)	14 名
クリーニング、美容、医療など、日常生活に関連するサービスを提供する産業(生活関連サービス業、娯楽業)	19 名
教育や学習を支援する産業(学校、教育、学習支援業)	17 名
医療や福祉サービスを提供する産業(医療、福祉サービス業)	22 名
本業とは別に、副業として行うサービスを提供する産業(副業サービス業)	1 名
サービス業(他に分類されないもの)	11 名
公務員や公的機関職員	22 名
料理人	13 名
衣類、ファッション関係	26 名
動物、ペット関連	24 名
飯屋、和菓子、洋菓子職人	15 名
整備士	4 名
自衛官	1 名
事務系	12 名
競馬系	6 名
自動車関係	6 名
今は決まっていない	109 名
その他	46 名
未回答	24 名

※その他内容

・ イベントの企画・運営
・ 美容師
・ モデラー
・ 精神科みたいなの
・ 水商売
・ 音楽関係

29

- ・ 魔王を倒す勇者の手伝い
- ・ 母の起業した旅館師業
- ・ 心理カウンセラー
- ・ フラワーデザイナー
- ・ イラストレーター
- ・ 鉄道系
- ・ 音楽関係
- ・ 声優・俳優
- ・ スポーツ系
- ・ メイク関連
- ・ 釣り関係
- ・ デザイン系
- ・ アニメーター
- ・ 動画編集者
- ・ アニメーター



30

【Q26】上記(Q25)の希望の職業に就くために必要な能力(スキル)や必要となる資格は何かと思いますか？(自由記述)

- ・ 日商簿記
- ・ 簿記
- ・ メイクの技術さ
- ・ 調理師資格
- ・ 公務員試験を受ける
- ・ 高卒
- ・ トーク力
- ・ ボランティア精神
- ・ モデリング技術
- ・ 勉強を続けること
- ・ 分からない
- ・ パソコン
- ・ 栄養士
- ・ 調理士 栄養士
- ・ 分からない
- ・ ひ人と関わる能力
- ・ 保育士資格
- ・ 国家資格
- ・ 特にないです。
- ・ 知識をつけて、責任感を持つ
- ・ こみゆに
- ・ 期限を守る
- ・ 免許
- ・ 色彩検定
- ・ 問題点を見つけ、解決する力
- ・ 気遣いと思いやり、先を読む力
- ・ 基礎デッサン、デッサン力、人体解剖学
- ・ 特になし
- ・ 協働性
- ・ 特になし
- ・ 臨床心理士、公認心理師
- ・ ない
- ・ 相手とのコミュニケーション能力や発想力
- ・ 国家資格
- ・ 運転免許を取るために勉強をする
- ・ 調理師免許
- ・ わからない
- ・ 第二種電気工事士
- ・ コミュニケーション能力
- ・ 初任者研修など
- ・ 勉強すること
- ・ グローバル化による多言語の取得
- ・ 人とのコミュニケーション
- ・ コミュニケーション
- ・ 発想力・判断力
- ・ 専門学校卒業、圧倒的に滑舌
- ・ 英語
- ・ 建築士の資格、整備士の資格
- ・ 人の意見や要望を聞きすぐに対応できる力、食品衛生についての資格
- ・ バイト経験、コミュニケーション能力、その作業を行う上で必要な資格
- ・ 必要な資格は職種によって変わるが、一般教養やマナー等は身につけておくべきだと思う。
- ・ コミュニケーション能力、発想力、情報収集、色彩検定、Illustratorクリエイター能力検定、Photoshopクリエイター能力検定、グラフィックデザイン検定

31

【7】社会へ出る上で必要と思う力「社会人基礎力(12の能力要素)」と自己評価

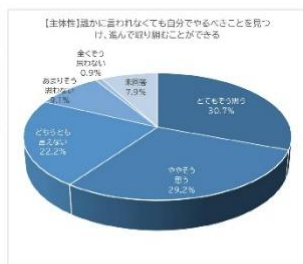
【Q27】あなたが地域社会や職場で仕事をしていくために必要だと思う能力(スキル)は何ですか？

A・・・前に読み出す力(アクション)

物事に進んで取り組み、失敗を恐れずに挑戦するために必要だと感じる力についての説明

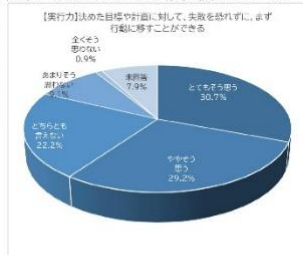
A-1 【主体性】誰かに言われなくても自分でやるべきことを見つけ、進んで取り組むことができる

とても思う	101 名
やや思う	96 名
どちらとも言えない	73 名
あまりそう思わない	30 名
全くそう思わない	3 名
未回答	26 名



A-2 【実行力】決めた目標や計画に対して、失敗を恐れずに、まず行動に移すことができる

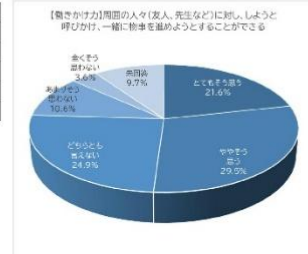
とても思う	100 名
やや思う	83 名
どちらとも言えない	71 名
あまりそう思わない	39 名
全くそう思わない	5 名
未回答	31 名



32

A-3 【働きかけ力】周囲の人々(友人、先生など)に対し、しよと呼びかけ、一緒に物事を進めようとする事ができる

とても思う	71 名
やや思う	97 名
どちらとも言えない	82 名
あまりそう思わない	35 名
全くそう思わない	12 名
未回答	32 名

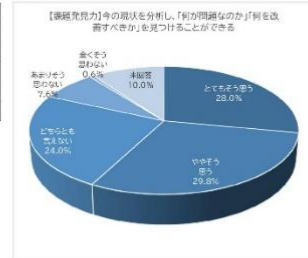


B・・・考え抜く力(シンキング)

現状を分析し、疑問を持って深く考え、問題解決のために必要な力についての説明

B-1 【課題発見力】今の現状を分析し、「何が問題なのか」「何を改善すべきか」を見つけることができる

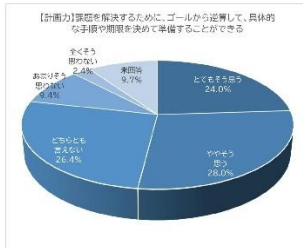
とても思う	92 名
やや思う	98 名
どちらとも言えない	79 名
あまりそう思わない	25 名
全くそう思わない	2 名
未回答	33 名



33

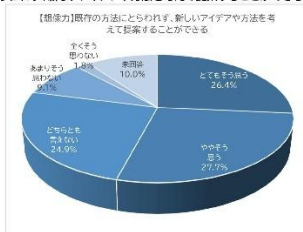
B-2 【計画力】課題を解決するために、ゴールから逆算して、具体的な手順や期限を決めて準備することができる

とても思う	79 名
やや思う	92 名
どちらとも言えない	87 名
あまりそう思わない	31 名
全くそう思わない	8 名
未回答	32 名



B-3 【創造力】既存の方法にとらわれず、新しいアイデアや方法を考えて提案することができる

とても思う	87 名
やや思う	91 名
どちらとも言えない	82 名
あまりそう思わない	30 名
全くそう思わない	6 名
未回答	33 名

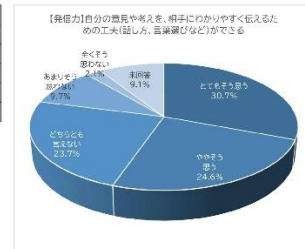


34

C・・・チームで働く力(チームワーク)

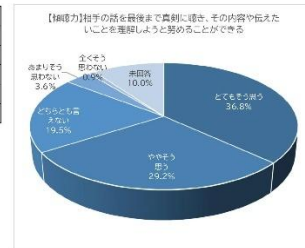
多様な人々と協調し、目標達成に向けて協力するために必要だと感じる力についての設問
C-1【発信力】自分の意見や考えを、相手にわかりやすく伝えるための工夫(話し方、言葉遣いなど)ができる

とても思う	101 名
やや思う	81 名
どちらとも言えない	78 名
あまりそう思わない	32 名
全くそう思わない	7 名
未回答	30 名



C-2 【傾聴力】相手の話を最後まで真実に聞き、その内容を伝えたいことを理解しようと努めることができる

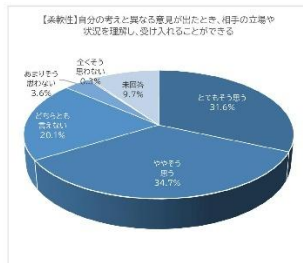
とても思う	121 名
やや思う	96 名
どちらとも言えない	64 名
あまりそう思わない	12 名
全くそう思わない	3 名
未回答	33 名



35

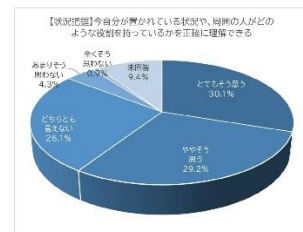
C-3 【柔軟性】自分の考えと異なる意見が出たとき、相手の立場や状況を理解し、受け入れることができる

とても思う	104 名
やや思う	114 名
どちらとも言えない	66 名
あまりそう思わない	12 名
全くそう思わない	1 名
未回答	32 名



C-4 【状況把握】今自分が置かれている状況や、周囲の人がどのような役割を持っているかを正確に理解できる

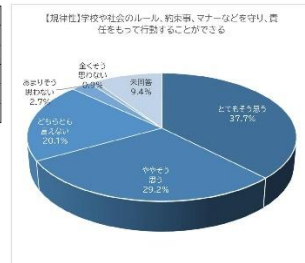
とても思う	99 名
やや思う	96 名
どちらとも言えない	86 名
あまりそう思わない	14 名
全くそう思わない	3 名
未回答	31 名



36

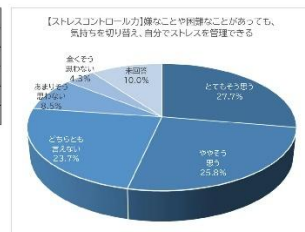
C-5 【規律性】学校や社会のルール、約束事、マナーなどを守り、責任をもって行動することができる

とても思う	124 名
やや思う	96 名
どちらとも言えない	66 名
あまりそう思わない	9 名
全くそう思わない	3 名
未回答	31 名



C-6 【ストレスコントロール力】嫌なことや困難なことがあっても、気持ちを切り替え、自分でストレスを管理できる

とても思う	91 名
やや思う	85 名
どちらとも言えない	78 名
あまりそう思わない	28 名
全くそう思わない	14 名
未回答	33 名

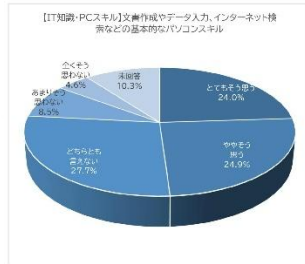


37

D・・・汎用的な力

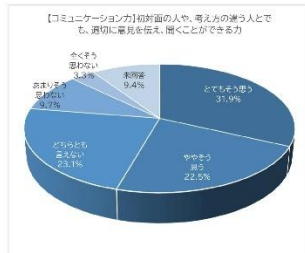
D-1 【IT知識・PCスキル】文書作成やデータ入力、インターネット検索などの基本的なパソコンスキル

とても思う	79 名
やや思う	82 名
どちらとも言えない	91 名
あまりそう思わない	28 名
全くそう思わない	15 名
未回答	34 名



D-2 【コミュニケーション力】初対面の人や、考え方の違う人とても、適切に意見を伝え、聞くことができる

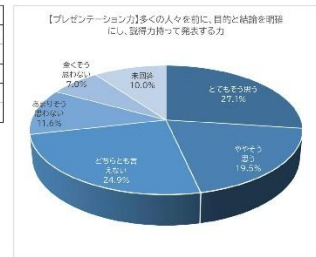
とても思う	105 名
やや思う	74 名
どちらとも言えない	76 名
あまりそう思わない	32 名
全くそう思わない	11 名
未回答	31 名



38

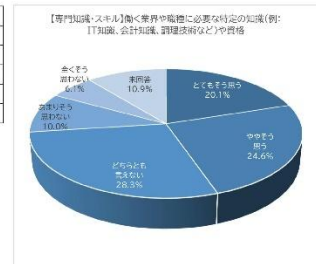
D-3 【プレゼンテーション力】多くの人々を前に、目的と結論を明確にし、説得力を持って発表する力

とても思う	89 名
やや思う	64 名
どちらとも言えない	82 名
あまりそう思わない	38 名
全くそう思わない	23 名
未回答	33 名



D-4 【専門知識・スキル】働く業界や職種に必要な特定の知識(例:IT知識、会計知識、調理技術など)や資格

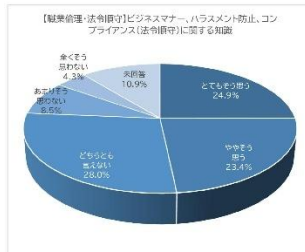
とても思う	66 名
やや思う	81 名
どちらとも言えない	93 名
あまりそう思わない	33 名
全くそう思わない	20 名
未回答	36 名



39

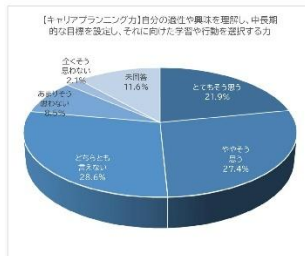
D-5 【職業倫理・法令順守】ビジネスマナー、ハラスメント防止、コンプライアンス(法令順守)に関する知識

とても思う	82 名
やや思う	77 名
どちらとも言えない	92 名
あまりそう思わない	28 名
全くそう思わない	14 名
未回答	36 名



D-6 【キャリアプランニング力】自分の適性や興味を理解し、中長期的な目標を設定し、それに向けた学習や行動を選択する力

とても思う	72 名
やや思う	90 名
どちらとも言えない	94 名
あまりそう思わない	28 名
全くそう思わない	7 名
未回答	38 名



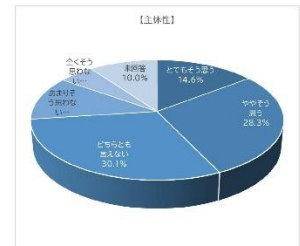
40

【Q28】あなたは、上記(Q27)の能力(スキル)の中で現在自分自身がどの程度できているか評価してみてください

A・・・前に読み出す力(アクション)

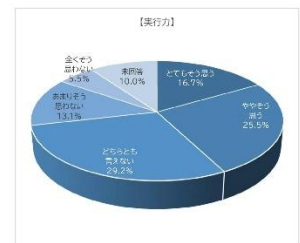
A-1 【主体性】

とても思う	48 名
やや思う	93 名
どちらとも言えない	99 名
あまりそう思わない	39 名
全くそう思わない	17 名
未回答	33 名



A-2 【実行力】

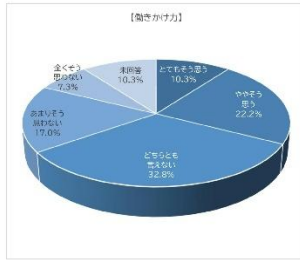
とても思う	55 名
やや思う	84 名
どちらとも言えない	96 名
あまりそう思わない	43 名
全くそう思わない	18 名
未回答	33 名



41

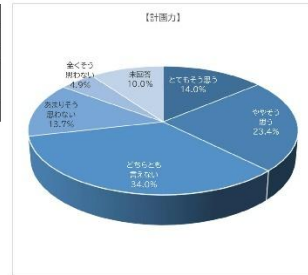
A-3 【働きかけ力】

とても思う	34 名
やや思う	73 名
どちらとも言えない	108 名
あまりそう思わない	56 名
全くそう思わない	24 名
未回答	34 名



B-2 【計画力】

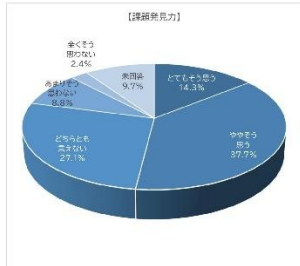
とても思う	46 名
やや思う	77 名
どちらとも言えない	112 名
あまりそう思わない	45 名
全くそう思わない	16 名
未回答	33 名



B・・・考え抜く力(シンキング)

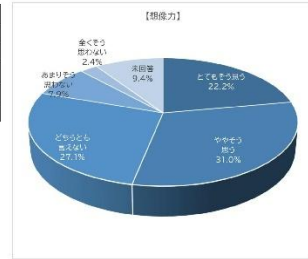
B-1 【課題発見力】

とても思う	47 名
やや思う	124 名
どちらとも言えない	89 名
あまりそう思わない	29 名
全くそう思わない	8 名
未回答	32 名



B-3 【創造力】

とても思う	73 名
やや思う	102 名
どちらとも言えない	89 名
あまりそう思わない	26 名
全くそう思わない	8 名
未回答	31 名

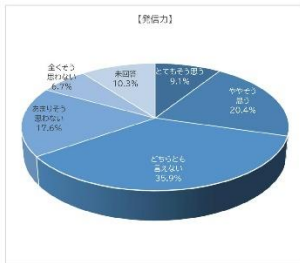


42

43

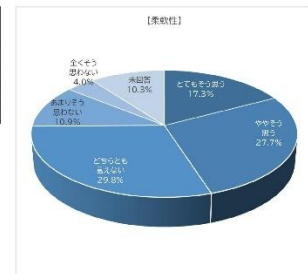
C-1 【発信力】

とても思う	30 名
やや思う	67 名
どちらとも言えない	118 名
あまりそう思わない	58 名
全くそう思わない	22 名
未回答	34 名



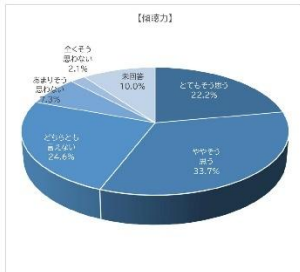
C-3 【柔軟性】

とても思う	57 名
やや思う	91 名
どちらとも言えない	98 名
あまりそう思わない	36 名
全くそう思わない	13 名
未回答	34 名



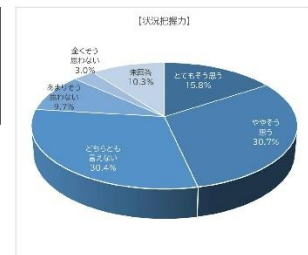
C-2 【傾聴力】

とても思う	73 名
やや思う	111 名
どちらとも言えない	81 名
あまりそう思わない	24 名
全くそう思わない	7 名
未回答	33 名



C-4 【状況把握力】

とても思う	52 名
やや思う	101 名
どちらとも言えない	100 名
あまりそう思わない	32 名
全くそう思わない	10 名
未回答	34 名



44

45

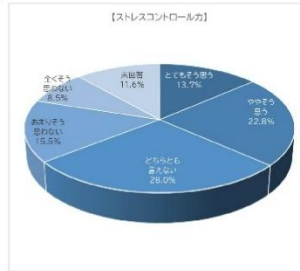
C-5 【規律性】

とても思う	52 名
やや思う	109 名
どちらとも言えない	98 名
あまりそう思わない	25 名
全くそう思わない	8 名
未回答	37 名



C-6 【ストレスコントロール力】

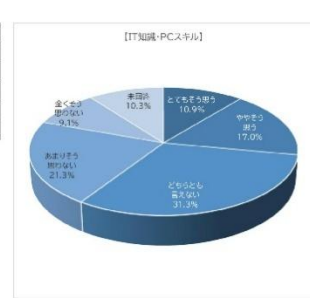
とても思う	45 名
やや思う	75 名
どちらとも言えない	92 名
あまりそう思わない	51 名
全くそう思わない	28 名
未回答	38 名



46

D-1 【IT知識・PCスキル】

とても思う	36 名
やや思う	56 名
どちらとも言えない	103 名
あまりそう思わない	70 名
全くそう思わない	30 名
未回答	34 名



D-2 【コミュニケーション力】

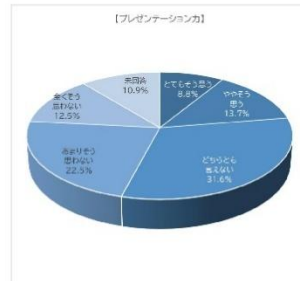
とても思う	46 名
やや思う	65 名
どちらとも言えない	91 名
あまりそう思わない	64 名
全くそう思わない	31 名
未回答	32 名



47

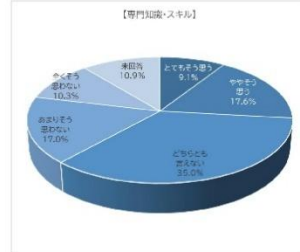
D-3 【プレゼンテーション力】

とても思う	29 名
やや思う	45 名
どちらとも言えない	104 名
あまりそう思わない	74 名
全くそう思わない	41 名
未回答	36 名



D-4 【専門知識・スキル】

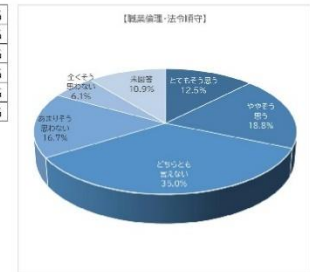
とても思う	30 名
やや思う	58 名
どちらとも言えない	115 名
あまりそう思わない	56 名
全くそう思わない	34 名
未回答	36 名



48

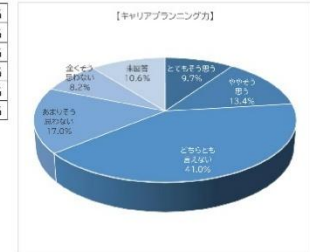
D-5 【職業倫理・法令遵守】

とても思う	41 名
やや思う	62 名
どちらとも言えない	115 名
あまりそう思わない	55 名
全くそう思わない	20 名
未回答	36 名



D-6 【キャリアプランニング力】

とても思う	32 名
やや思う	44 名
どちらとも言えない	135 名
あまりそう思わない	56 名
全くそう思わない	27 名
未回答	35 名



49

【Q29】あなたが自分の能力(スキル)を伸ばすために取り組んでいることを教えて下さい
(自由記述)

- ・ 経験を積む
- ・ 考える時間を作る
- ・ あいさつをしっかりする
- ・ ない
- ・ 人と関わること
- ・ バイト
- ・ 特にない
- ・ タイピング
- ・ 無し
- ・ 特になし
- ・ 間違いを復習すること
- ・ ぼき
- ・ 筋トレをしたり、日光を浴びる。
- ・ 画塾に通い、自習もしている
- ・ To do リストを作る
- ・ 特になし
- ・ ない
- ・ アルバイトなどで人と関わる機会を多く持つ。
- ・ とにかく得られる情報は可能な限り取り込む
- ・ まずは自分の社交不安障害を落ち着かせる
- ・ 悩んだ時に自分のことを客観的に見て考える
- ・ 周りの声を聴き、状況を見極められるよう全体を見ている
- ・ いろいろな人と関わる。新しいことに挑戦する。努力を積み重ねる。
- ・ たまにポスターや名刺等のデザインをしている。
- ・ 日常生活に取り入れる。このスキルを使わざるを得ない立場に上げる
- ・ 気になったことは放置せず、調べる。興味のあることは放置せずしっかり向き合い更に興味を引き出す
- ・ 母の仕事を手伝う
- ・ 総に見せて感想をもらう
- ・ IT 系の資格取得
- ・ とくにない
- ・ 継続する
- ・ アルバイトをする
- ・ 計画を立てる
- ・ コミュニケーションに気を使っている
- ・ 自分が将来必要だと思う資格の勉強
- ・ 人とのコミュニケーションを取る
- ・ アルバイト、資格勉強
- ・ 考えてから行動する
- ・ 様々な事に挑戦する事
- ・ 特になし
- ・ 特にない
- ・ いろいろな人との交流をする
- ・ 絵や 3DCG の勉強をしています

【Q30】学校や地域にどんな学びや支援サポートの仕組みがあれば、あなたの能力(スキル)を伸ばすことができますか(自由記述)

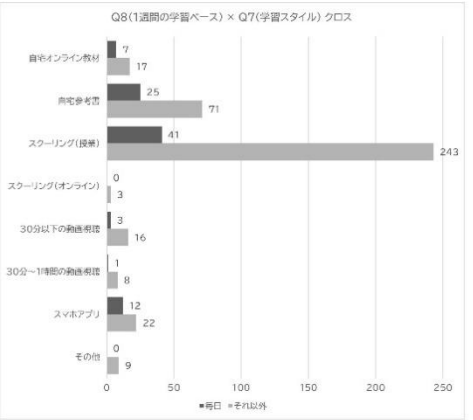
- ・ いろんな経験を積める催しが頻繁に開催されること
- ・ はじめの一步を踏み出す手助け
- ・ 勉強で分からないことを自由に問けるサポート
- ・ 分からない
- ・ ボランティア参加
- ・ いろいろな外国語の勉強
- ・ 分からない
- ・ 今で満足
- ・ 分からない
- ・ 音楽の授業
- ・ 学習会みたいな活動
- ・ 体験授業や行事を増やす。
- ・ 個人個人を評価し、その人に合ったカリキュラムを提供してくれること
- ・ 特になし
- ・ 職場体験
- ・ ない
- ・ わかりません
- ・ 地域の様々な人との交流
- ・ 自己理解を深める活動や時間
- ・ わからない
- ・ コミュニケーション能力を育てるイベント、デザイン体験イベント
- ・ 家の近くに専門学校を建てて欲しい。
- ・ 簡単なそれぞれの分野の能力テストがあれば、伸ばしたり活かすことができるのがわかっていいと思います。
- ・ 主体的にプレゼンテーションを行える授業
- ・ 分かりません。
- ・ 学校区域の外の課外活動(体験活動など)
- ・ 通信制オリジナルのイベントがもういくつかあれば生徒会としてバリバリ動く機会が増えるので可能であれば少し増やしていただけますと幸いです
- ・ はい
- ・ 専門学校や専門的な知識を持った方が身近にいたら伸ばせると思います

3-4. 通信制高校生アンケート調査結果(クロス集計)

【Q8】 1週間の学習ペースは(1 っだけ)

【Q7】 主にどのようなスタイル(形)で学習していますか？(複数回答可)

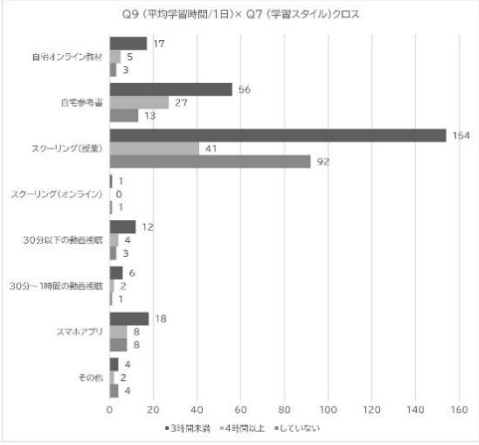
	自宅オンライン教材	自宅参考書	スクーリング(授業)	スクーリング(オンライン)	30分以下の動画視聴	30分～1時間の動画視聴	スマホアプリ	その他
毎日	7	25	41	0	3	1	12	0
それ以外	17	71	243	3	16	8	22	9
未回答	1	0	4	0	0	0	0	1



【Q9】 1日に平均してどのくらい学習していますか？(1 っだけ)

【Q7】 主にどのようなスタイル(形)で学習していますか？(複数回答可)

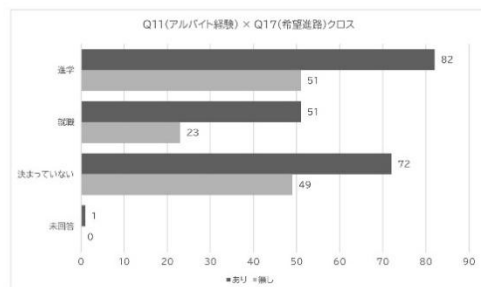
	自宅オンライン教材	自宅参考書	スクーリング(授業)	スクーリング(オンライン)	30分以下の動画視聴	30分～1時間の動画視聴	スマホアプリ	その他
3 時間未満	17	56	154	1	12	6	18	4
4 時間以上	5	27	41	0	4	2	8	2
していない	3	13	92	1	3	1	8	4
未回答	0	0	1	1	0	0	0	0



【Q11】アルバイトの経験はありますか？(1つだけ)

【Q17】希望する進路について教えてください(1つだけ)

	進学	就職	決まってい ない	未回答
あり	82	51	72	1
無し	51	23	49	0
未回答	0	0	0	

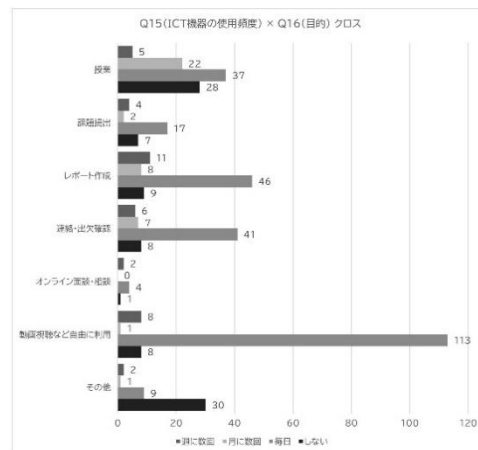


54

【Q15】学校で利用できる ICT 機器(パソコン・タブレットなど)は、どのくらいの頻度で利用していますか？(1つだけ)

【Q16】ICT 機器を使用する目的は何ですか？(複数回答可)

	授業	課題提出	レポート作成	連絡・出欠確認	オンライン面談・相談	動画視聴など自由に利用	その他
週に数回	5	4	11	6	2	8	2
月に数回	22	2	8	7	0	1	1
毎日	37	17	46	41	4	113	9
しない	28	7	9	8	1	8	30
未回答	0	0	0	0	0	0	27

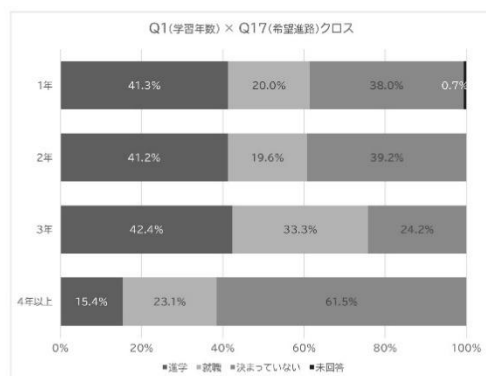


55

【Q1】通信制高校で何年間学んでいますか？(1つだけ)

【Q17】希望する進路について教えてください。(1つだけ)

	進学	就職	決まってい ない	未回答
1年	62	30	57	1
2年	40	19	38	0
3年	28	22	16	0
4年以上	2	3	8	0
未回答	1	0	2	0

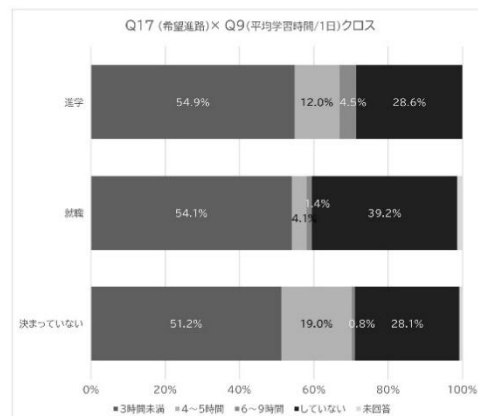


56

【Q17】希望する進路について教えてください。(1つだけ)

【Q9】1日に平均してどのくらい学習していますか？(1つだけ)

	3時間未満	4～5時間	6～9時間	していない	未回答
進学	73	16	6	38	0
就職	40	3	1	29	1
決まっていない	62	23	1	34	1
未回答	0	1	0	0	0



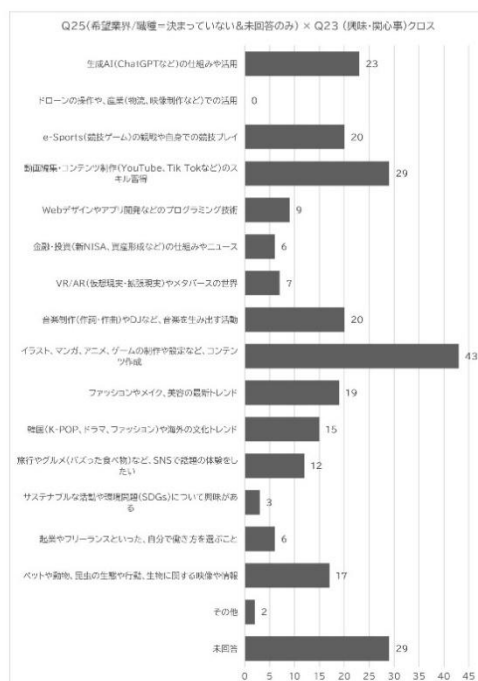
57

【Q25】あなたが将来就きたい業界、やってみたい職業はなんですか？(複数回答可)

【Q23】あなたが、興味を持っている関心事は何ですか？(AI, e-Sports、動画編集名など)
(複数回答可)

	決まっていない&未回答	それ以外
生成 AI(ChatGPT など)の仕組みや活用	23	47
ドローンの操作や、産業(物流、映像制作など)での活用	0	7
e-Sports(競技ゲーム)の観戦や自身での競技プレイ	20	37
動画編集・コンテンツ制作(YouTube、Tik Tok など)のスキル習得	29	52
Web デザインやアプリ開発などのプログラミング技術	9	36
金融・投資(新 NISA、資産形成など)の仕組みやニュース	6	22
VR/AR(仮想現実・拡張現実)やメタバースの世界	7	18
音楽制作(作詞・作曲)や DJ など、音楽を生み出す活動	20	44
イラスト、マンガ、アニメ、ゲームの制作や設定など、コンテンツ作成	43	50
ファッションやメイク、美容の最新トレンド	19	50
韓国(K-POP、ドラマ、ファッション)や海外の文化トレンド	15	30
旅行やグルメ(バズった食べ物)など、SNS で話題の体験をしたい	12	25
サステナブルな活動や環境問題(SDGs)について興味がある	3	8
起業やフリーランスといった、自分で働き方を選ぶこと	6	16
ペットや動物、昆虫の生態や行動、生物に関する映像や情報	17	35
その他	2	11
未回答	29	9

58



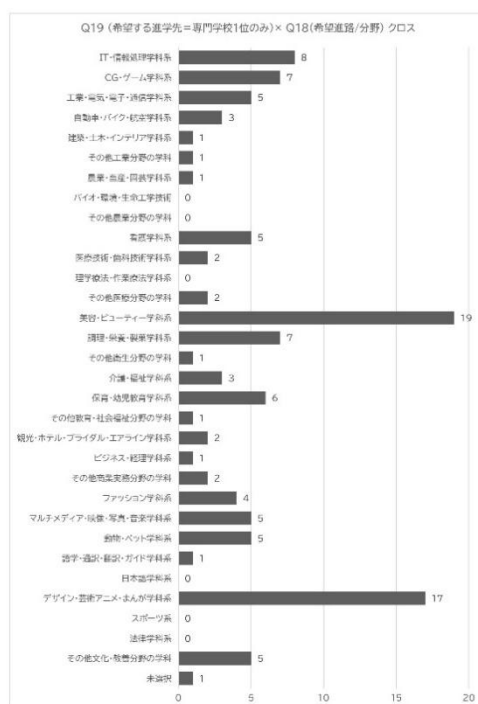
59

【Q19】進学を選択した場合に進学先の希望順位(進学先ごと1つだけ)

【Q18】将来目指す進路(職業)の分野等を教えてください。(複数回答可)

	専門学校1位	それ以外	未回答
IT・情報処理科系	8	16	8
CG・ゲーム学科系	7	14	8
工業・電気・電子・通信学科系	5	6	9
自動車・バイク・航空学科系	3	6	4
建築・土木・インテリア学科系	1	1	3
その他工業分野の学科	1	2	3
農業・畜産・園芸学科系	1	3	4
バイオ・環境・生命工学学科系	0	0	2
その他農業分野の学科	0	1	1
看護学科系	5	4	2
保健技術・歯科技術学科系	2	6	3
理学療法・作業療法学科系	0	4	2
その他医療分野の学科	2	2	1
美容・ビューティー学科系	19	7	10
漢語・中国・韓国学科系	7	8	5
その他語学分野の学科	1	1	1
介護・福祉学科系	3	5	6
保育・幼児教育学科系	6	7	4
その他教育・社会福祉分野の学科	1	3	1
観光・ホテル・ブライダル・エアライン学科系	2	2	5
ビジネス・経済学科系	1	11	4
その他商業実務分野の学科	2	6	6
ファッション学科系	4	1	8
マルチメディア・映像・写真・音楽学科系	5	5	2
動物・ペット学科系	5	5	3
語学・通訳・翻訳・ガイド学科系	1	6	4
日本語学科系	0	3	1
デザイン・芸術・アニメ・マンガ学科系	17	15	7
スポーツ系	0	1	2
法律学科系	0	3	2
その他文化・教養分野の学科	5	23	16
未選択	1	7	48

60

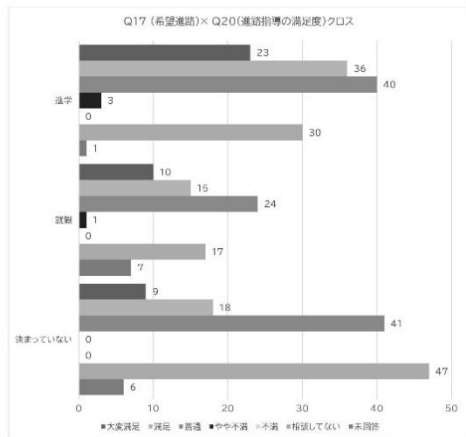


61

【Q17】希望する進路について教えてください。(1つだけ)

【Q20】学校の進路指導に満足していますか？(1つだけ)

	大変満足	満足	普通	やや不満	不満	相談してない	未回答
進学	23	36	40	3	0	30	1
就職	10	15	24	1	0	17	7
決まっていない	9	18	41	0	0	47	6
未回答	0	0	0	0	0	0	1



62

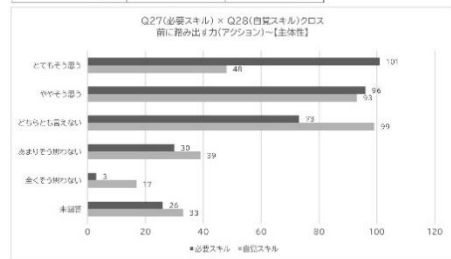
【Q27】あなたが地域社会や職場で仕事をしていくために必要だと思う能力(スキル)は何ですか？(各々1つだけ)

【Q28】あなたは、Q27 の能力(スキル)の中で現在自分自身がどの程度できているか評価してみてください。(各々1つだけ)

【前に読み出す力(アクション)】…物事に進んで取り組み、失敗を恐れずに挑戦するために必要だと感じる力

●主体性…誰かに言われなくても自分でやるべきことを見つけ、進んで取り組むことができる。

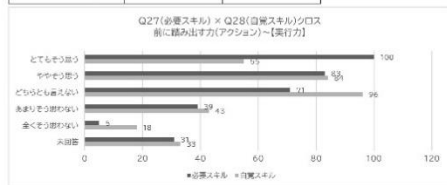
	必要スキル	自覚スキル
とても思う	101	48
やや思う	96	93
どちらとも言えない	73	99
あまりそう思わない	30	39
全くそう思わない	3	17
未回答	26	33



63

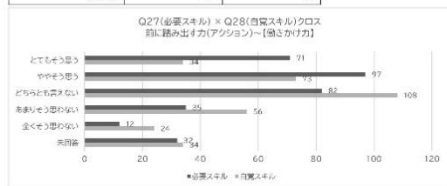
●実行力…決めた目標や計画に対して、失敗を恐れずに、まず行動に移すことができる。

	必要スキル	自覚スキル
とても思う	100	55
やや思う	83	84
どちらとも言えない	71	96
あまりそう思わない	39	43
全くそう思わない	5	18
未回答	31	33



●働きかけ力…周囲の人々(友人、先生など)に対し、しよと呼びかけ、一緒に物事を進めようとする
ことができる。

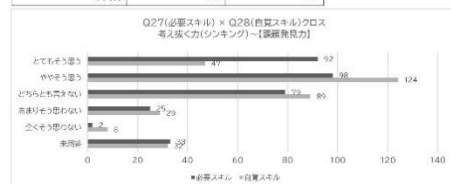
	必要スキル	自覚スキル
とても思う	71	34
やや思う	97	73
どちらとも言えない	82	108
あまりそう思わない	35	56
全くそう思わない	12	24
未回答	32	34



64

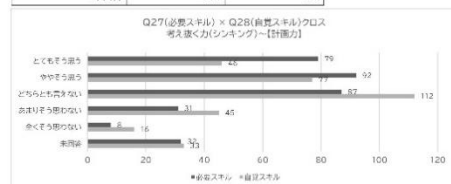
【考え抜く力(シンキング)】…現状を分析し、疑問を持って深く考え、問題解決のために必要な力
●課題発見力…今の現状を分析し、「何が問題なのか」「何を改善すべきか」を見つけることができる。

	必要スキル	自覚スキル
とても思う	92	47
やや思う	98	124
どちらとも言えない	79	89
あまりそう思わない	25	29
全くそう思わない	2	8
未回答	33	32



●計画力…課題を解決するために、ゴールから逆算して、具体的な手順や期限を決めて準備することが
できる。

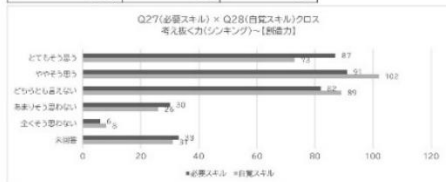
	必要スキル	自覚スキル
とても思う	79	46
やや思う	92	77
どちらとも言えない	87	112
あまりそう思わない	31	45
全くそう思わない	8	16
未回答	32	33



65

●創造力…既存の方法にとらわれず、新しいアイデアや方法を考えて提案することができる。

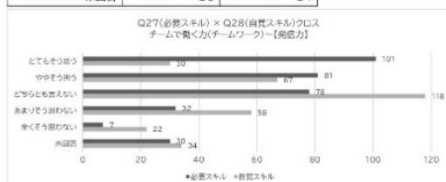
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	87	73
ややそう思う	91	102
どちらとも言えない	82	89
あまりそう思わない	30	26
全くそう思わない	6	8
未回答	33	31



【チームで働く力(チームワーク)】…多様な人々と協調し、目標達成に向けて協力するために必要だと感じる力

●発信力…自分の意見や考えを、相手にわかりやすく伝えるための工夫(話し方、言葉遣いなど)ができる。

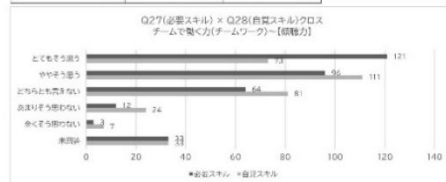
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	101	30
ややそう思う	81	67
どちらとも言えない	78	118
あまりそう思わない	32	58
全くそう思わない	7	22
未回答	30	34



66

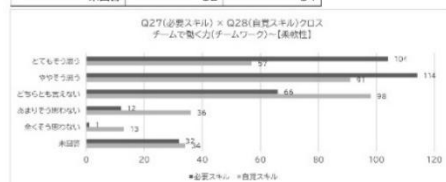
●傾聴力…相手の話を最後まで真剣に聞き、その内容や伝えたいことを理解しようと努めることができる。

	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	121	73
ややそう思う	96	111
どちらとも言えない	64	81
あまりそう思わない	12	24
全くそう思わない	3	7
未回答	33	33



●柔軟性…自分の考えと異なる意見が出たとき、相手の立場や状況を理解し、受け入れることができる。

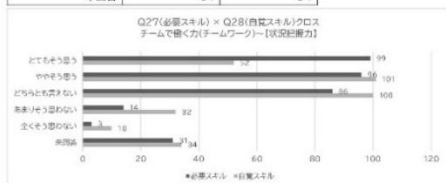
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	104	57
ややそう思う	114	91
どちらとも言えない	66	98
あまりそう思わない	12	36
全くそう思わない	1	13
未回答	32	34



67

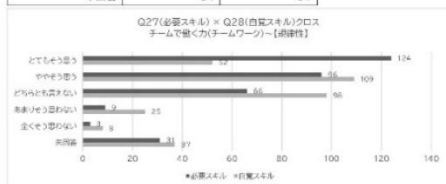
●状況把握力…今自分が置かれている状況や、周囲の人がどのような役割を持っているかを正確に理解できる。

	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	99	52
ややそう思う	96	101
どちらとも言えない	86	100
あまりそう思わない	14	32
全くそう思わない	3	10
未回答	31	34



●規律性…学校や社会のルール、約束事、マナーなどを守り、責任をもって行動することができる。

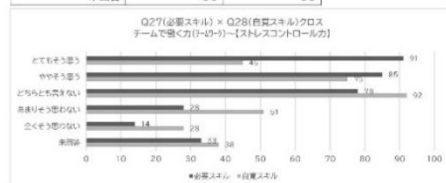
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	124	52
ややそう思う	96	109
どちらとも言えない	66	98
あまりそう思わない	9	25
全くそう思わない	3	8
未回答	31	37



68

●ストレスコントロール力…嫌なことや困難なことがあっても、気持ちを切り替え、自分でストレスを管理できる。

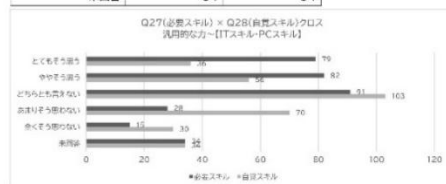
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	91	45
ややそう思う	85	75
どちらとも言えない	78	92
あまりそう思わない	28	51
全くそう思わない	14	28
未回答	33	38



【汎用的な力】

●IT知識・PCスキル…文書作成やデータ入力、インターネット検索などの基本的なパソコンスキル。

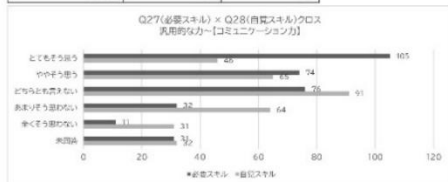
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	79	36
ややそう思う	82	56
どちらとも言えない	91	103
あまりそう思わない	28	70
全くそう思わない	15	30
未回答	34	34



69

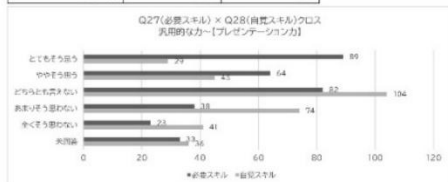
●コミュニケーション力…初対面の人や、考え方の違う人とも、適切に意見を伝え、聞くことができる力。

	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	105	46
ややそう思う	74	65
どちらとも言えない	76	91
あまりそう思わない	32	64
全くそう思わない	11	31
未回答	31	32



●プレゼンテーション力…多くの人々を前に、目的と結論を明確にし、説得力を持って発表する力。

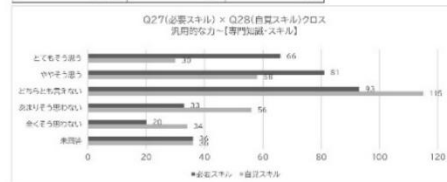
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	89	29
ややそう思う	64	45
どちらとも言えない	82	104
あまりそう思わない	38	74
全くそう思わない	23	41
未回答	33	36



70

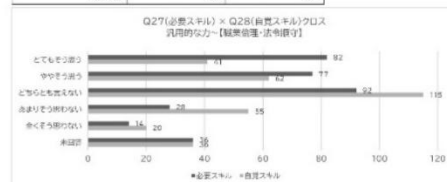
●専門知識・スキル…働く業界や職種に必要な特定の知識(例:IT知識、会計知識、調理技術など)や資格。

	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	66	30
ややそう思う	81	58
どちらとも言えない	93	115
あまりそう思わない	33	56
全くそう思わない	20	34
未回答	36	36



●職業倫理・法令順守…ビジネスマナー、ハラスメント防止、コンプライアンス(法令順守)に関する知識。

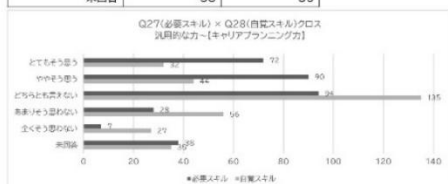
	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	82	41
ややそう思う	77	62
どちらとも言えない	92	115
あまりそう思わない	28	55
全くそう思わない	14	20
未回答	36	36



71

●キャリアプランニング力…自分の適性や興味を理解し、中長期的な目標を設定し、それに向けた学習や行動を選択する力。

	必要スキル	自覚スキル
とてもそう思う	72	32
ややそう思う	90	44
どちらとも言えない	94	135
あまりそう思わない	28	56
全くそう思わない	7	27
未回答	38	35

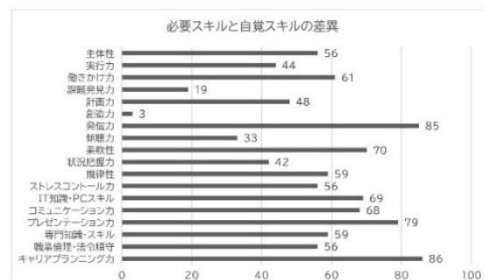


72

●Q27(必要スキル)とQ28(自覚スキル)の差異

必要スキル-自覚スキルと「とてもそう思う」+「ややそう思う」と回答した合計値、差異は必要スキルと自覚スキルの差異。

種別	必要スキル	自覚スキル	差異
主体性	197	141	56
実行力	183	139	44
働きかけ力	168	107	61
課題発見力	190	171	19
計画力	171	123	48
創造力	178	175	3
発想力	182	97	85
聴聴力	217	184	33
柔軟性	218	148	70
状況把握力	195	153	42
規律性	220	161	59
ストレスコントロール力	176	120	56
IT知識・PCスキル	161	92	69
コミュニケーション力	179	111	68
プレゼンテーション力	153	74	79
専門知識・スキル	147	88	59
職業倫理・法令順守	159	103	56
キャリアプランニング力	162	76	86



73

3-5. 通信制高校教職員ヒアリング調査結果

【1】学校法人植蔭学園

<ヒアリング詳細>

学校名	聖光高等学校 通信制課程
所在地	山口県光市光井 9-22-1
URL	https://www.seiko-h.ed.jp/tusin2/index.html
日程	令和 7 年 11 月 21 日(金) 13:30～15:00
実施方法	対面
担当者	教頭 坂本 憲次 様
学生数/教員数	200 名 / 7 名(全日制との兼務有)

1. 生徒への進路指導体制・取り組みの現状、課題、必要な支援

聖光高校通信制課程では、生徒の多様な背景に寄り添いながら、少人数体制の中で進路指導を全教職員が協力して担っている。担任と進路部長を中心に、3 年生では年 2 回の三者面談を 4～5 日かけて実施しており、保護者の参加率も高い。1、2 年生の段階から進路希望調査やホームルームを通して進路への意識を高める取り組みも行われている。また、進学希望者は自らオープンキャンパスへ参加し情報を持ち帰るなど主体的に動く傾向が見られる。一方で就職希望者についてはアルバイト経験の有無が大きく影響し、未経験の生徒は環境変化への適応が難しく、早期離職に至るケースもある。

また、通信制独自の課題も顕在化している。例えば、在宅学習中心の生活から集合活動へ移行する際の精神的負担の拡大、レポート提出や調査書作成などの進路準備における事前の取組りが難しい点などが挙げられる。学校側はメールを活用し個別連絡を可能とするなど一定の対応は行っているが、進路決定までの伴走支援には限界があり、特に「日常的に学校に来ない生徒」への支援方法は大きな課題となっている。

加えて、同校には心理面や身体面での課題を抱える生徒も一定数おり、カウンセラーは全日制と共用で月数回の配置に留まるため、十分に対応できる体制にはなっていない。教員数も 7 名と少なく、生活指導・授業・進路指導を兼務する状況で、体系的なキャリア教育を十分に展開できていない点も課題である。

2. 企業・地域団体・行政・大学などの連携実態とニーズ

聖光高校通信制課程における外部連携は、現状では限定的である。就職に関してはハローワークと通常の連携を持つものの、企業・大学・専門学校など定期的な連携授業や進路支援を行う体系的枠組みはほぼ存在していない。大学や企業からの協賛依頼が入ることあるが、通信制課程でのスクーリングが主に土曜日であることから、外部機関側が休日となるケースが多く、学校側が依頼を遠慮し

てしまうという実務的制約も連携拡大を阻んでいる。

また、全日制課程が大学と連携して実施している取組に合わせて参加する機会はあるものの、通信制独自の連携プログラムは確立されていない。しかし近年、専門学校側から通信制の生徒受入れに関心が高まっている。企業からも人材確保の観点で問い合わせが増加しているとの報告がある。これは、地域における若手人材の不足と、通信制生徒の多様な特性がマッチする可能性があることを示唆している。現状の課題としては次のとおりである。

- ①外部連携を企画・調整する人的余裕が教員側に乏しい
- ②通信制のスクーリング日程(主に土曜)が外部機関の稼働日と合わない
- ③生徒の進学習慣の差により連携活動への参加ハードルが高い
- ④連携内容を体系化・継続化する仕組みが無い

他方、本事業の趣旨である「AI×データサイエンス導入による新コース構築」地域に選ばれる専修学校”づくり」を踏まえると、通信制高校との連携は極めて重要な基盤となる。同校には、在宅学習を中心とする生徒のため、職業理解・企業見学・短期実習などへのニーズが確実に存在する。また大学・専門学校に対しては、オープンキャンパス以外に”少人数・個別相談型”の進学サポートを求める声もある。

3. 授業や進路支援での ICT 活用状況、設備・スキル・運用課題

ICT 活用について、聖光高校通信制課程では一定の取り組みは進んでいるものの、体系化された活用には至っていない。授業では教員が各自でスライドや教材を作成し、教科書とレポートを中心に生徒が学習を進める形となっている。全日制で用いる教材を通信制向けに調整したスライドを使用する教員もあり、ICT を積極的に使う教員が中心となって教え合いながら工夫している状況である。しかしオンライン授業は実施されておらず、山口県全体としても通信制のオンライン学習導入は今後もしばらく難しいとの認識が共有されている。

生徒側の ICT スキルについては、情報科の授業や課題研究で Word・Excel 等を扱う機会はあるが、ICT リテラシー全体を体系的に育成するプログラムは存在しない。またスマートフォン操作は得意でも、PC 操作に習熟していない生徒も多い。保護者への ICT サポートも実施されていない。

一方で教員側の ICT スキルは比較的向上しており、AI 研修などを受けた教員が知識を共有する取り組みも見られる。しかし、校内ネットワークや PC 設定の複雑化により、ICT 環境の維持・運用に大きな負担が生じている。ICT 教育の部門はあるものの人員は限られ、校内ネットワークの不具合や端末の更新の遅れなど、機器面の課題も多く、買替費用が大きな負担となっている。

生徒側への端末貸与や通信費補助はなく、通信制高校として一律配布の対象外であった経緯もあり、ICT 活用の前提となる学習環境は必ずしも整っていない。また、成績管理や出席管理が統合されておらず、今後は保護者も含め閲覧可能なプラットフォームの導入を検討している段階である。

【2】学校法人三田尻学園

<ヒアリング詳細>

学校名	誠英高等学校 通信制課程
所在地	山口県防府市東三田尻一丁目 2 番 14 号
URL	https://seiei.ac.jp/home/schooling
日程	令和 7 年 11 月 25 日(火) 10:30～11:15
実施方法	対面
担当者	教頭 開地 弥生 様、西尾先生
学生数/教員数	147 名 / 16 名(全日制との兼務有)

1. 生徒への進路指導体制・取り組みの現状、課題、必要な支援

誠英高校通信制課程では、進路指導は基本的に対面を中心に行われており、必要に応じてオンライン面談や電話相談を実施している。三者面談は年 2 回を基本としながらも、特に 3 年生では個別相談を必要に応じて随時実施し、進路未決定者への対応を柔軟に行っている。卒業後の進路は就職が 6～7 割と最も多く、進学は 3 割程度で、大学進学はごく少数である。進学希望者においては入学金等の経済的負担が障壁となり、場合によっては進学先の変更に至るケースも確認されている。

生徒のなかには不登校経験者も多く、精神的なケアを必要とする生徒もいる。通信制と全日制の共有でスクールカウンセラーが配置されているため、生徒保護者の区別なく、要請に応じ利用することができ、通信制においては体系的なキャリア教育プログラムや職業理解については、外部からの情報提供を利用しながら継続的に取り組みを行っている。

2. 企業・地域団体・行政・大学などの連携実態とニーズ

誠英高校通信制課程における外部連携は、現状では一部の外部連携を進めている。学校が定期的に連携している外部機関は主にハローワークであり、新卒窓口との情報共有を通じて求人情報を得ている。大学・専門学校・企業・自治体・NPO 等と継続的な連携は、年 1 回程度で進学・就職向けガイダンスという形態で複数校が来校しブースを設置し実施している。

生徒に職業理解や進路選択の幅を提供するためには、専門学校や企業からの継続的な情報提供が必要であるため、今後も積極的に外部機関との連携の仕組みを構築する必要がある。また、通信制の登校日が主に土曜日及び日曜日であることから、外部機関に依頼する際には限られた登校日と連携先の外部機関と調整を進めながらの実施という状況にある。

また、企業見学や校外学習を行う際には交通手段が課題となり、バス利用時の費用負担を生徒に求めることが困難であるため、市町村や県による移動支援を求めている。

3. 授業や進路支援での ICT 活用状況、設備・スキル・運用課題

誠英高校通信制課程においては、専用タブレット端末による「一人一台端末」の環境を整備しており、探求の授業では、校内に構築された Wi-Fi 環境を利用し、ICT 機器を効果的に活用した教育活動を展開している。端末は導入から複数年が経過しており、今後は更新費用が大きな負担となっている。校内でのネットワークの整備、システム導入、ICT 機器の導入、トラブル対応は情報担当教員や一部の教員と限られた体制で担っており、十分な人員や専門性が確保されているとは言い難い。

授業においては、教員がスライド作成や動画活用などを個別工夫で行っているが、デジタル教材は必要に応じて各教員が独自に教材を制作している状況である。ICT が得意な教員が校内システムの構築や補助金申請などを主導し、一定の成果を上げている現状がある。今後は学校全体を挙げた、組織的な教育 DX の推進を加速させていく方針である。

また、生徒向けの ICT 指導や情報モラル教育は SNS トラブル対策にはじまり、体系的なデジタルリテラシー教育は今後整備を進めていく。進路支援においては通学時などに対面での指導を基本としており、オンライン相談・デジタルポートフォリオ・AI による適性分析などの仕組みは必要に応じて検討していく意向である。

5-2 通信制出身専修学校生ヒアリング調査 資料2

文部科学省委託事業
令和7年度「専修学校による地域産業人材育成事業」
(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)
〔通信制高校連携型キャリア形成支援による地域職業人材育成モデルの構築事業〕

専門学校通信制出身者ヒアリング調査報告書

令和8年2月
学校法人Y I C学院

はじめに

本調査は学校法人Y I C学院（以下、当法人と記す）が「専修学校による地域産業人材育成事業（人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム）」として文部科学省から委託を受けた「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域職業人材育成モデルの構築事業」を進めるにあたり実施した調査研究の一つである。

地域においては産業を担う人材の活性化や生涯サービスの維持発展といった課題が顕在化する中で、その受け皿として地域に根差した教育機関に大きな役割が寄せられている。一方でこれまでにない新しい価値観や働き方が求められる等、通信制高校など多様な背景を持つ若者のさらなる協働的自立とそのための支援も急務となっている。

このような状況から、35年におたり専門学校での選定に携わる当法人はこの事業でその知見と資源を生かし、多様な若者に接点性の高い進学ルートより充実した学びの機会を提供すること、地域社会に貢献する職業人材として育成することを旨とするに、「地域に根差した専修学校づくりを進捗することとした。

34年にわたる事業の初年度にあたる令和7年度は「ニーズの把握と基盤調査」を活動の中心に据え、今後実施するカリキュラムの開発基盤作成につなげるべく、関係者（高校や専門学校生、学校教員、地域企業等）の属性ごとに調査を行った。

本報告書はそのうち通信制高校出身の専門学校生を対象とした調査について、対象者を取り巻く社会的背景から調査の具体的な手法、結果とその分析、次年度に向けての経営までを記している。本報告書は、その調査からの実践的な知見が今後実施される教育カリキュラムプログラムの設計に活用され、地域社会職業人材育成モデル構築に寄与することを目的とし作成されるものである。

目次

はじめに	1
1. 調査設計および実施方法	2
（1）調査の背景	2
（2）調査計画について	3
（3）調査設計	7
（4）対象者について	12
2. 調査結果の整理と考察	14
（1）調査事例と時代の課題	14
（2）専門学校進学の実態	21
（3）専門学校での経験	26
（4）専門学校に対する評価	42
（5）今後の意向	48
3. 国策策定の分析	51
（1）学習面	51
（2）経済面	52
（3）心理面	53
（4）進学ルートによる課題の差	54
4. 支援の有効性と課題	54
（1）国策策定と制度支援の整理	54
（2）支援の有効性と課題	55
5. 今後に向けての実践的課題	57
（1）未成金学費の設計とスキルアップの支援	57
（2）心理的ハードルを下げる「体験型」コミュニケーション支援	58
（3）コミュニティの形成とキャリア支援	59
（4）「通信制高校 × 専門学校」による連携構築	60
おわりに	62

1. 調査設計および実施方法

（1）調査の背景

国勢調査報告・人口動態研究所の調査には、日本の18歳人口は現在の約110万人から2040年には約70万人にまで減少するとの予測がある。特にその減少ペースが激しい地方間において、地域産業の担い手不足、生活インフラの空洞化が深刻になると考えられ、早急な対策が求められる課題となっている。

このように若年人口が急減することで学齢層の男女・年次の数も大幅に減少するとみられるが、近年、通信制の学校に在籍する高校生や就学年々増加している。当法人のある山口県においても7校の通信制高校が開設され、約4,320人の生徒が在籍している。この数は山口県内の全高校生の約18%に上る。「進学に難しいが専門的な学びをしたい」など多様な学びへのニーズが窺われており、それに対応した特色ある通信制高校が高度開設されるという動きも出てきている。

当法人の専門学校においても通信制高校からの入学希望は少なくなく、年々増加する傾向にある。これまで個々の状況や学生の希望に応じて柔軟に受け入れを行い、学びを支援してきたが、このような大きなニーズの存在と地域に根差した教育機関としての役割を踏まえ、より専門的で多様な学びの機会と地域の発展に即した支援を強化する必要があらたな課題を強くしている。

そのような背景から、この事業で入学前から卒業後のキャリアまで、地域企業までを足踏えた「育成・伴走・定着」の一体的支援体制の構築を推進することとした。具体的には通信制高校との協働を基盤とした入学前からのキャリア教育、在学中の本格的なプログラム設計、A1やICTを活用したデジタルリテラシー育成、地域企業との協働を通じた実践的学習を想定しており、専門学校での2年間の枠にとらわれない継続的な取り組みを計画している。

そこでまずは専門学校の学びの中心である学生について理解を深め、今後の支援やカリキュラム開発の方向性を模るため、当該学生等へのインタビュー調査を実施した。

（2）通信制高校について

本調査の対象者の出身校である通信制高校について、その概要を分類、特徴を整理とする事項を整理すべく、事前の背景調査を行った。

ア、通信制高校の概要

通信制高校（正式名称：高等学校通信課程）は昭和23年に制度化され、「教育委員会」の均等、を目的に整備されてきた。教職委員会を中心とする全日課程・定時制課程と異なり、通信手段を主体として生徒が自宅等で個別に自学自習する形態をとる。個別指導や面接指導（スクーリング）、試験等によって単位認定が行われ、学校が定めた要件を満たせば卒業となり、高校卒業資格が取得できる。

近年、学習時間や時期、方法等を自ら選択して自分のペースで学ぶことができる通信教育ならではの利便性を生かし、オンライン授業や動画教材、タブレット端末等のデジタルメディアを活用した多様な学びを提供する学校が増加している。

また、通信制高校は近年、年度途中入学者の増加や生徒の若年化が進んでいる。文部科学省「学校基本調査」によれば、15歳・16歳の通信制高校在籍者数が平成26年度から令和6年度にかけて約2.3倍に増加している。年度途中入学者数も令和3年度は26,320人となり、年度途中入学者のうち途中入学者が占める割合も30%前後で高まる傾向にある。このような状況において、自学自習の学習習慣を身に付けることが困難な傾向がある生徒も少なからず見られるという。従来想定していた、学ぶ意欲を強く持ちながらも就業のためにその機会が得られない、いわゆる働きながら学ぶ勤労青年を想定した生徒像からは大きく異なってきている。文部科学省も、通信制高校を単なる「卒業資格を得るための場所」ではなく、「一人ひとりの可能性を最大化する柔軟な学びのプラットフォーム」にしようとしており、その果たすべき役割は変化しつつある。

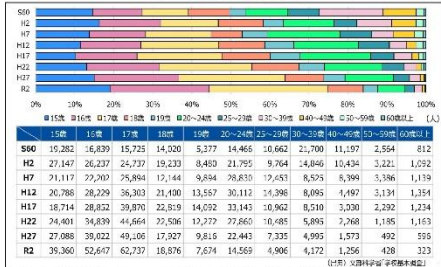
【通信制課程の年度途中入学者数】



出典：文部科学省「令和6年度（令和5年度）第10回高等学校教育の状況」資料データベース グループ4

3

【通信制課程の年齢別生徒数】



出典：高等学校通信教育の現状について 文部科学省教育政策評価部 事務局（高等学校）付 令和3年12月28日

イ、通信制高校の分類

(ア) 学習形態による分類

通信制高校における学習形態は複数あり、学校によって異なっている。

①通信型

自宅でのレポート学習を中心とする。教科書や学習資料を用いて課題を作成し、郵送またはオンラインで提出する方式が一般的。レポート提出や単位認定試験により単位を修得する。スクーリング（対面での面接指導）は年間数日に限定されている。学習者の生活リズムに合わせて学習を進めることができるが、時間的自由度が高いため、勤労や療養などとの両立が図りやすい。

②通学型

決められた頻度で学校に専校し、対面授業を通じて必要単位を修得する方式。週1日の軽い通学から、週5日通う全日型に近いコースまで幅が広い。専門コースを設ける私立通信制高校に多く見られる。対面型のため教員による直接指導が受けやすく、友人との関わりも形成されやすい。生活リズムを整えやすいという特徴もある。

4

③オンライン型

ICTを活用し、オンライン授業・WEB教材・動画視聴などを主体とする学習形態。新型コロナウイルス感染症の影響以降、広域制私立高校を中心に急速に拡大している。オンライン授業や輸出システムにより学習が完結する形式になっており、登校はスクーリング日など最低限に抑えられる。

④ハイブリッド型

上記①～③の学習形態を柔軟に組み合わせる方法。学習者のニーズや生活スタイルに合わせて幅広い学びを提供できる。特にオンライン授業の拡充により、全国どこからでも学習できる体制を整える広域制の通信制高校が増えている。

【学習形態による特徴の整理】

学習形態	学習方法	登校頻度/回数	主な特徴
通信型	自宅学習 教科書・教材・動画 オンラインで提出	2～3回/週～1回/月	・学習ペースは自己ペース ・個人学習が中心で授業 ・自己学習が中心
通学型	学校に通って授業 対面型授業 対面型授業	1～2回/週～1回/月	・対面型授業の授業内容が ・対面型授業が中心
オンライン型	オンライン授業・WEB教材 動画視聴 対面型授業	スクーリング日 対面型授業	・授業内容が充実 ・対面型授業の授業内容が ・対面型授業が中心
ハイブリッド型	対面・通学 オンライン 対面型授業	対面型授業 対面型授業	・対面型授業の授業内容が ・対面型授業が中心

(イ) 運営主体による分類

大きく分けて公立と私立に分類できる。全国の在学生徒数は平成22年度に私立が公立を上回り、令和2年に私立の生徒は公立の3倍弱となった。

5

①公立

一般的に公立は授業料が安く費用負担が少ない。カリキュラムは基礎重視かつシンプルなものが中心で、スクーリング（通学）は月数回～週1回程度である学校が多い。在籍者の年齢層が幅広い（10代～大人まで）ことも特徴である。

②私立

入学や編入・転校の受け入れ時期、スクーリング、試験日などが複数日程から選択できるなど、スケジュールに柔軟性のある学校が多い。青通科だけでなく福祉や美容、デザイン等の専門コースを設ける学校もある。教員数やカウンセラーによるサポートが手厚く、公立に比べ卒業率が高くなっている。なお私立の通信制高校には、何らかの入学可能な広域制と、入学地域が限定された狭域制がある。狭域制では地域の全全日制私立高校が通信部を併設、広域制では各都道府県サポート校を開設、といった形式が多く、スクーリングの負担軽減が図られている。

【運営主体ごとの特徴】

区分	学習形態	特徴
公立	通学型 通信型	授業料が安く費用負担が少ない 基礎重視でシンプルなカリキュラム スクーリング頻度は月数回～週1回程度 在籍者の年齢層が広い（10代～大人まで）
狭域制	通学型 通信型	近隣地域で対面指導が受けられる 比較的小人数で柔軟なスケジュール 地域密着型の運営・地域支援 入学可能な地域が限られる
私立	通学型 通信型 オンライン型 (複合型あり)	全日から入学可能 多様な学習スタイルの選択・組み合わせ可能 専門コースが豊富 学習センターや提携サポート校等を活用 教職員やカウンセラーのサポートが手厚い

6

(3) 調査設計

ア. 調査名

専門学校通信制出身者ヒアリング調査

イ. 実施時期

令和7年11月

ウ. 目的

本調査は、専門学校に進学した通信制高校出身者を対象に、進学経路、動機、進学時に困難だった要素（経済的・学力的・心理的的背景など）および有効だった支援についてヒアリングを行い、教育・支援施策の改善に資することを目的とする。

エ. 対象者

通信制高校から当法人の専門学校に進学した学生：9名
（在校生8名、卒業生1名）

オ. 手法

（ア）事前アンケート（WEB）

インタビュー当日の質問項目をもとに作成したアンケート（記名式）を事前に対象者に案内。在校生8名、卒業生1名が実施。

アンケートはGoogleフォームを用いて作成。

（イ）半構造化インタビュー（個別面談形式）

実施時間は1名30分程度とし、インタビューは2名で担当。

在校生4名、卒業生1名を対面あるいはリモートで実施。

【アンケートフォームの一部】

★通信制高校での経験とその後の進路に関するアンケート □ ☆

利用 回答 設定

6セクションから1個目のセクション

通信制高校での経験とその後の進路に関するアンケート

B I U 〇 文

本アンケートでご回答いただいた情報は、調査開始から1年以内での使用は一切行いません。また、個人を特定できる形での利用・公開は行わず、適切に管理いたします。第三者への提供もございませんので、ご安心ください。

お名前（漢字）*
各節のスペースは不要です（例）山田花子
姓と名前

おなまえ（ふりがな）*
各節のスペースは不要です（例）やまぐち はなこ
姓と名前

カ. 実施スケジュール

インタビューは下記のスケジュールで実施した。

- ・11月17日（月） 3名（在校生）
- ・11月19日（水） 1名（在校生）
- ・11月27日（火） 1名（卒業生）

在校生は授業終了後の時間に学校内で対面、卒業生はリモートで実施。

【対面インタビューの会場】



【リモートインタビューの様子】



キ. 実施にあたっての留意点

（ア）対象者の選定にあたっては多様な意見や情報が収集できるよう、複数の学科・学年の学生を選定するようにした。併せて卒業生も1名加えることにより、卒業後の課題や支援ニーズも把握できるようにする。

（イ）インタビューは対象者の事前アンケートの回答をもとに行う。常に対象者主体の姿勢で共感的傾聴に努め、回答の背後にある文脈や理由を掘り下げる質問により、自由度の高い語りを引き出せるようにする。

（ウ）個別インタビューは緊張しやすく、対象者の心理的負担が大きい。対象者がインタビューを認識しやすく話せない、あるいは好感を得ようと良いことを

言う、といった事象の発生も想定されるため、冒頭でインタビューの流れや回答の任意性などについて説明し、安心できる雰囲気を作る。適度に軽い雑談などを入れるのも良い。またインタビュー中に対象者が心理的負担を感じる可能性のある質問については、無理に回答を求めないよう配慮する。

（エ）インタビュー実施の際は対象者の許可を得たうえで録音（もしくは録画）を行い、後日の分析に役立てる。録音（録画）機器は不具合等の可能性を考慮し、複数準備する。

（オ）このインタビューをより安全で有意義なものとするため、インタビューはキャリアコンサルタント有資格者が担当した。1名は当法人の職員、もう1名は外部専門家とし、学生の不安感を払拭し安心して話せる雰囲気をつくることに努めた。また、インタビューの安全性と調査の信頼性を確保できるようにした。

ク. 調査項目

通信制高校出身の学生が専門学校へ進学した経路、専門学校での生活や学習、受けた支援の効果等について調査。「学習面」「経済面」「心理面」の三つの観点から各時点での経験を質問し、満足度や困難さについて測定できる設計とした。以下に項目の概要を記す。これらの項目で事前アンケートを行い、その回答をもとにインタビューで深掘りを行った。

【Part 1】通信制高校について

- ・通信制高校選択理由
- ・高校での学習スタイル
- ・在学時の学校以外での活動
- ・通信制高校に入ってからよかったこと／困難だと感じたこと
- ・全日制高校からの転校経験

【Part 2】専門学校への進学について

- ・専門学校進学を考え始めた時期
- ・専門学校進学へのきっかけ
- ・専門学校を選んだ理由
- ・進学先選択の決め手になったこと

- ・進学について相談した相手
- ・進学をあきらめそうになった経験

【Part 3】専門学校進学時の困難要因（①学習面）

- ・入学前の学力に対する不安定
- ・特に不安だった分野
- ・入学後の授業の難易度
- ・教材や課題の難易度
- ・全日制高校出身者との学力差

【Part 4】専門学校進学時の困難要因（②経済面）

- ・学費調達方法
- ・奨学金利用の満足度
- ・アルバイトと学業の両立
- ・在学中の学費、生活費に対する困難度
- ・入学後の予想外費用

【Part 5】専門学校進学時の困難要因（③心理面）

- ・新しい環境への適応不安
- ・同級生との間で難しさを感じた経験
- ・通信制高校出身であることを話したか
- ・自信のなさや劣等感を感じた経験
- ・相談できる仲間の有無
- ・規則正しい生活ができていたか

【Part 6】専門学校の総合的な印象・有効だった支援

- ・入学前の期待と現実のギャップ
- ・在学中の総合的な満足度
- ・通信制高校での経験の活用
- ・入学前に有効だった支援
- ・入学後に効果的だった支援
- ・総合支援率（学習相談窓口）の個別相談利用経験

- ・入学前から卒業までにあればよかったと思う支援
- ・最も効果的だったと思う支援

【Part 7】今後の意向等

- ・将来の進路意向／今後の就労希望
- ・地域への愛着意識の程度

ケ. 分析の方針と内容

事前WLBアンケートによる定量的データおよびインタビューによる定性データから、時系列・進学ルート別に分析を行う。併せて、過去から現在までに当法人で実施している支援について項目ごとにその有効性を整理する。これにより現状把握と課題抽出を行い、今後に向けての方向性の検討、特に専門学校入学前後の支援プログラムの強化設計への反映につなげたい。

（4）対象者について

調査対象者の属性は下表のとおりである。

インタビュー対象者は当法人の運営する専門学校のうち、Y1C情報ビジネス専門学校（以下、本校）の学生4名、および卒業生1名である。学科や年次、高校時代の経験や今後の意向等において様々な属性の人物で構成し、多様な意見や情報を得られるようにした。なお学生の所属学科は情報ビジネス科とホテルブライダル科の二つで、学年は1年次生3名と2年次生1名である。今後の進路意向も、県内就職や地域間わらない就職、未定、と様々である。

卒業生は2年前に本校を卒業し、現在は県外の人材派遣・人材代行業に勤務しており、帰郷を継続する意向である。

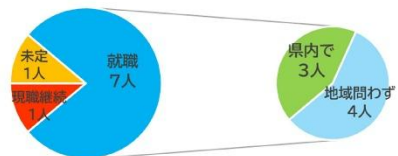
またインタビュー対象者以外で事前アンケートのみ回答の学生（4名）についても、属性の幅りに配慮しバランスよく構成した。学生の所属学科はホテルブライダル科1名とメディアデザイン科3名、学年は1年次生3名と2年次生1名である。今後の進路については4名全員が卒業後の就職を希望している。

対象者の出身高校については、インタビュー有り、アンケートのみのどちらの形式においても「私立広域制」「私立狭域制」「公立」のすべての区分の出身者がいる構成となっている。

【対象者の属性一覧】

No	名前	性別	出身高校の類型	全日制からの転校経験	今後の進路意向	調査内容
1	Aさん	男性	私立広域制	なし	就職(県内/県外)	事前アンケート＋インタビュー アンケートのみ
2	Bさん	男性	公立(県立)	あり	未定	
3	Cさん	男性	公立(県立)	なし	就職(県内/県外)	
4	Dさん	男性	私立広域制	あり	就職(県内) 卒業生(未定)	
5	Eさん	女性	私立狭域制	あり	現職を継続	
6	Fさん	男性	私立狭域制	なし	就職(県内/県外)	
7	Gさん	女性	私立狭域制	あり	就職(県内)	
8	Hさん	男性	私立広域制	なし	就職(県内/県外)	
9	Iさん	男性	公立(県立)	あり	就職(県内)	

【今後の進路意向】



2. 調査結果の整理と考察

事前アンケートおよびインタビュー、2種類の調査の実施により、定量的・定性的の両面で結果を得ることができた。ここではそれらの結果について、対象者のステータジや要素ごとに整理し、考察する。

（1）通信制高校時代の経験

ア. 通信制高校選択の理由

通信制高校の選択理由としては「人に勧められた」「全日制に通うのが難しかった」がそれぞれ件と最も多かった。体調不良や人間関係を要因とする不登校状態を経験したことにより毎日通学して学習する全日制のスタイルに不安を感じ、通信制を選択した人が多いことがうかがえる。こうした状況は中学生時代だけでなく高校進学後にも生じており、一度全日制高校に入学したものの在学中に同様の状態となり、通信制高校に転校、または同一高校内の通信課程へ転籍した学生は5人上っていた。

アンケートで「人に勧められた」を選択した4人に、勧めた人について具体的に尋ねたところ、4人全員が「親」と回答した。心身の不調や環境の変化により学習継続に困難を感じていた生徒にとって、最も身近で信頼できる家族の情報提供や助言は進路選択の重要な要因になったとみられる。

また、高校に通いつづけるか不安を抱えながらも、いわゆる「中卒」で卒業が終わってしまうことへのためらいを感じた学生も見られた。例えば中学時代に不登校を経験したが「中卒では将来的に不利になるのではない」という思いから通信制で

【学年】



【学科】



【出身高校の類型】

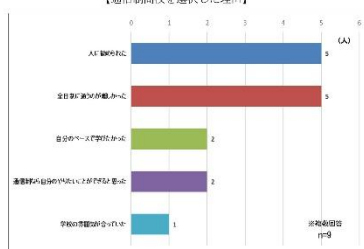


高校卒業を目指すことを決断したと語った学生は、不安を抱えつつも何とかが学びを続けられる方法を模索した結果、通信制高校への進学を選択したといえる。これらのことから、通信制高校は全日制高校のような「毎日・決まった時間」の校校が困難な生徒にとって、高校卒業資格を取得するための唯一無二の選択肢（セーフティネット）として機能している可能性が示唆される。

一方で、「自分のペースで学びたかった（2件）」「通信制なら自分のやりたいことができると思った（2件）」「学校の雰囲気が合っていた（1件）」など、自分の学習環境や進路を検討する中で通信制高校の特徴を好意的にとらえ、進んで選択している学生もみられた。例えばある学生は「中学時代からサッカーの社会人チームに所属しており、サッカーを中心とした生活を送るために授業時間の制約が少ない通信制を選択した」と語っている。学業以外の活動に集中したいという明確な目標を持つ学生にとっても、通信制高校は有力な選択肢の一つとなっていた。

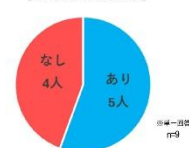
以上のことから、通信制高校はその柔軟性を背景に、従来の全日制のような一斉形式の授業や集団的な学校生活への適応が困難だった生徒たちが過去の経験にとらわれることなく、自分の意思で目標を追求したり、生活を再構築したりすることを可能にする学習環境を提供していると考えられる。また、個々の特性や志向に応じた多様なニーズに対応する「個別最適な学び」の場としても選択されていることが明らかとなった。

【通信制高校を選択した理由】



15

【全日制からの転校経験】



※同一回答 9件

イ. 通信制高校での学習スタイル

通信制高校における主な学習方法としては、「スクーリング（対面授業）中心で学習（6件）」が最も多く、「教材や動画を使って自宅で学習（4件）」、「個別指導・マンツーマン授業などのサポートを利用（1件）」が挙げられた。

インタビューでは「週1回の日曜日のスクーリングを中心とし、それ以外の時間は自宅でレポート作成や動画視聴を行っていた」や、「授業時間が決まっておらず受講した分だけ単位が認められる仕組みであったため、自分で受講する教科を自由に選択できた」という声が聞かれた。このようにスクーリングと自宅学習を併用している学生が多く、学習方法の割合や組み合わせは、個々の状況や希望に応じて多様であった。

スクーリングの形式については「対面中心で授業を受けていたが、グループワークなどがほとんど無かったため、他の生徒と深く関わることなく通学学習ができた」という回答もみられた。このことから、スクーリングの形式により、対人関係での不安を抱える学生であっても、心理的負担を抑えながら参加できる学習環境が提供されていた可能性が示唆される。

また、全日制課程と通信制課程を併設している高校の中には、全日制の生徒と合同で学校行事に参加することができるような仕組みを設けているところもあり、「修学旅行に参加した」という学生の声も聞かれた。このように、希望に応じて高校生活ならではの多様な行事や校内活動へ参加可能である点も、通信制高校の一つの特徴であることが分かった。

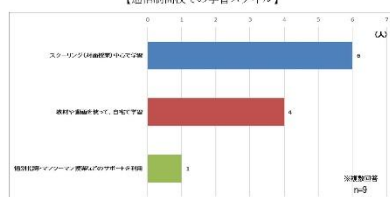
このように、多くの人が通信制高校の学習時間と学習内容の柔軟性を活かし、時間や場所にとらわれることなく、自身の目標や生活状況に合わせて学習を進めてきたこ

16

とがうかがえる。一方で、こうした通信制高校のメリットは、卒業に向けて自分自身で学習の計画の立案と実行を行い、管理する必要があることから、高い自己管理能力が求められるという側面を併せ持っている。この点については、困難を感じたという声も多くあった。例えば、「全日制高校は学校に行けば授業が用意されているが、通信制は自分で取り組まなければ学習が進まない」「科目によってレポートの回数が異なり、回数の多いものは締切直前になることもある」といった意見も挙げられ、通信制高校での学びには高い自律性が求められることが浮き彫りになった。

さらに、「単位制のため受ける教科を自由に選択できたことにより、興味のある分野に学習内容が偏ってしまった」という声もあり、通信制の自由度の高さは、場合によっては学習の幅を狭めてしまう可能性があるという側面も示唆される。

【通信制高校での学習スタイル】



ウ. 学校以外で取り組んでいた活動

アンケート結果によると「アルバイトをしていた」との回答が最も多く、7件あった。これに「部活動やサークル活動」「ボランティアや地域活動」「習い事・スポーツ・創作活動」（各2件）が挙げられた。他に「資格取得・専門スキルの勉強（1件）」や「家事・介護などを担っていた（1件）」という回答も見られた。今回の調査では、「学校以外での活動はしていない」という回答はなかった。

特に取り組み経験の多いアルバイトについては、インタビューで詳細を聴取した。例えばある学生は人間関係の構築がうまくいかなかった経験から対人不安を抱えていたが、コンビニエンスストアのアルバイトが周囲との関わりを持つきっかけとなり、

17

「その後もアルバイトを続けたことにより人との関わりへの不安が軽減になった」と語っている。また「通信制高校では人と関わる生活になってしまい、そこから脱却するために飲食店のアルバイトを続けた」、「アルバイトによって決まった時間に出勤するようになり、生活のリズムが安定した」という声も聞かれた。これらのことから、アルバイトは単なる収入源としてだけでなく、学校や家庭とも異なる「第3の居場所」として機能していたと考えられる。人間関係の経験を積む場として、社会性やコミュニケーション能力の向上に寄与していた点は、通信制高校に在籍する学生にとって重要な意味を持っていたといえる。

スポーツ活動では、学外チームでの活動だけでなく、学内の部活動に積極的に関与した学生もいた。ある学生は「通信制高校に転校した際、全日制高校で行っていたスポーツの部活動がなかったため、学校に働きかけて部を設立し全国大会に出場した」という経験を語っている。

そのほかにも、パソコン関連の資格取得や地域のボランティア活動、家庭内で家事を担うなど、多様な活動を行った人もいた。複数の活動を同時にこなしていた学生も4人に上り、多くの学生が学業と並行して学校外・学校内の活動に積極的に関わっていたことが分かった。

通信制高校における自由な時間の使い方は学生によって様々であるが、多くの学生が個々の目標や生活状況に応じて能動的な活動をすることで学校生活だけでは得ることができない経験や学びを獲得している実態が明らかになった。

【学校以外で取り組んでいた活動】



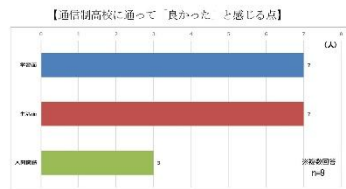
18

通信制高校に通って良かったと感じる点について、「学習面」「生活面」「人間関係」の三つの側面からどのように評価しているかを把握するため、アンケートで調査を行った。

その結果、「学習面」と「生活面」を受けた回答が多く、それぞれ7件あった。学習面では「自分のペースで学べた」「理解しやすかった」「課題提出に柔軟性があった」などが評価され、生活面では「通学日数や時間の自由があった」「自分の時間を有効に使えた」という点が評価された。いずれも通信制高校の特徴を好意的に、メリットとしてとらえた評価である。複数の項目を選択した学生が6人になり、またすべての項目を選択した人も2人おり、多くの学生が通信制高校に通って多方面で好意的に捉えている様子がうかがえる。

良かった点についてインタビューで具体的に尋ねたところ、「学業の傍らアルバイトをする中で対人への不慣れを乗り越えることができた」「サッカーをやり始めるために、自分を伴って学業と両立させた」「自分で部活動を立ち上げ大会に出場したことなどで、自分が変わらなければいけないという強い気持ちを育つことができた」といった話が聞かれ、アルバイトやボランティア、スポーツ等学業以外の活動で自分の目標を達成した経験が精神的な回復や自己成長につながっていることが読み取れる。また「修学旅行で宿先のホテルマンの仕事姿に感銘を受け、将来の夢としてホテルマンを考えるようになった」という学生のように、学校行事での経験を通して自分の新たな目標やキャリア観の発見につながったケースも確認された。

これらのことから、通信制高校での学びや柔軟な学習環境を活かすことが個人の目標達成を可能にしたり、生活面においては心身の安定や回復、さらには今後の進路や人生の指針を見いだす契機にもなっていることが明らかになった。

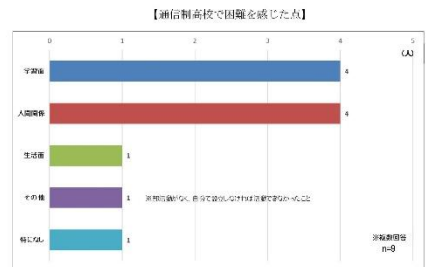


※ 通信制高校で困難を感じた点

アンケートでは「学習面」と「人間関係」が最も多く挙がり、それぞれ4件あった。次いで「生活面」「その他」「特になかった」がそれぞれ1件であった。

学習面について、インタビューでは「全日制と異なり、授業で先生から教えてもらえる機会が少なく個人で勉強に取り組む必要があったため、学習している内容が正しいのか、学力的な面で不安があった」「勉強が苦手な中学時代から習字との差を感じていたので、自発的に勉強することが不安」といった声も聞かれ、特に勉強内容に難しさを感じていた様子がうかがえる。そして複数の学生が先の「通信制高校で良かった点」においても「学習面」を挙げており、柔軟な対応が可能な通信制高校の学習スタイルは大きなメリットである一方で、自分で学習を管理する困難さがデメリットにもなりうることを表している。

通信制高校の柔軟性は、人間関係の構築面でも影響を及ぼしているようである。「クラスが決まっているわけではないため、人と喋らない生活が続いて本当にきつかった」「スクーリング等は自由な学校なので、いつも学校や教壇にいる人が違う。仲良くなっても次にいつ会えるかわからない」という状況があり、対人面での不安がそれほどない人にとっては、友達づくりなど継続的な人間関係を築く機会が制限され、孤独に感じることもあったようだ。

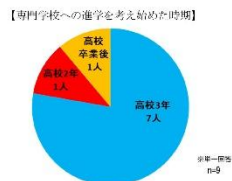


(2) 専門学校進学の詳細

ア. 専門学校への進学を考え始めた時期

アンケートでは7人が「高校3年生」と回答し、最も多くなった。以下、「高校2年」が1人、「高校卒業後」が1人となっており、高校卒業を目前に控えた最終学年で具体的に検討し始めるケースが多いことが分かった。

「高3になって進路をどうしようかとなった時に、通信で1回しが学校に行っていないのに、そのまま会社に就職しても大丈夫だろうと思った」「大学進学もいいなと思っていた」のように、自身の体調や学習ペース、卒業後の社会生活への不安などを考慮し、自分に合った環境を選択するため、進路決定のぎりぎりのタイミングまで検討している背景が見える。



イ. 進学をあきらめそうになった経験

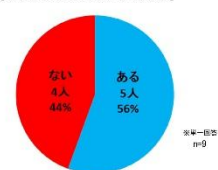
アンケートでは9人のうち5人が「進学をあきらめそうになった経験がある」と回答しており、通信制高校からの進学に際しては多くの生徒が困難を感じていることがうかがえる。

あきらめそうになった理由としては「学方面」「体調不良」「人と関わることが心配」などが挙げられた。通信制高校での柔軟な学習・生活スタイルから新しい環境に踏み出すことへの不安によるものを中心となっていたと思われる。

インタビューではこうした不安に対して、さらに詳しい話を聞くことができた。例えば「とにかく勉強が苦手な心配だった」「精神疾患を患い、最初は高校にも行くつもりはなく中卒で働きかかっていたので、将来も考えられなかった」「アルバイト以外で外に出て人と関わっていただけなかったため、このまま就職しようと思っていた」な

どの声も聞かれた。通信制高校入学時に抱えていた不安要素が再び表面化し、次のステージに向かうに際にも困難として立ちちはだかっている様子が読み取れた。そして、これらの困難を乗り越えて専門学校への進学を決断していたことも明らかになった。

【進学をあきらめそうになった経験】

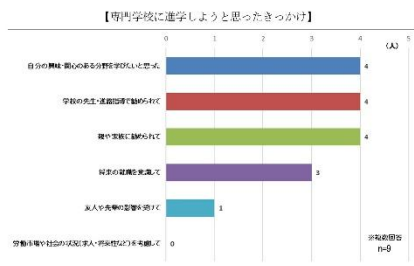


【理由】アンケートの自由記述（「ある」と回答した5人）

- ・高校生の時は昼夜逆転しており、人とあまり関わらない生活を選びがらだったため
- ・外に出て人と関わっていただけなかったため、新しい環境に行きたくなかったため
- ・高校3年の植休課を断って退学できなかったため
- ・学力
- ・考えすぎて、面倒くさくなった

ウ. 専門学校進学のことについて

専門学校への進学を考えるきっかけとなったこととして最も多かったものは「自分の興味・関心のある分野を学びたい」という自分の意思によるものが4件であった。次いで「学校の先生・進路指導の勧め」「親や家族の勧め」といった、身近な人からの勧めによるものがそれぞれ4件であった。ほかにも「将来の就職を意識して（3件）」「友人や先輩の影響（1件）」があった。複数の項目を選択している回答者は4人で、本人の意欲に周囲の意向や助言が加わって、専門学校への興味を深めていることがうかがえる。



エ. 専門学校を選んだ理由

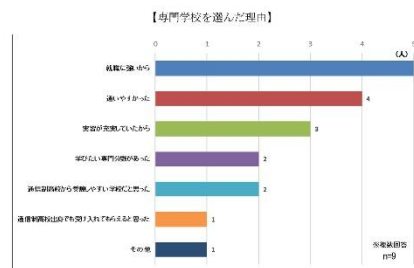
様々な進学先がある中で専門学校を選んだ理由として最も多かったものは「就職に強いから」で5件の回答があった。次いで「通いやすかった（4件）」「実習が充実していたから（3件）」「学びたい専門分野があった（3件）」が続いた。ほかにも「通信制高校から受験しやすい学校だと思った」「通信制高校出身でも受け入れてもらえると思った」という回答がそれぞれ1件ずつあった。

インタビューで学生たちからは「接客業希望で、ビジネスマナー全般を体系的に学べる点に魅力を感じて情報ビジネス科を選んだ」、「ブライダルだけでなく、企業の事務職などいろいろなところで生かせることを学べると考えてホテルブライダル科を選んだ」といったように、「就職に強い」だけでなく、自身のキャリアを見据え、希望する分野での具体的なスキルを身につけることを目指し、それが可能な専門学校への進学を希望した人が少なくないことがわかる。

また、「通いやすい」「通信制高校から受験しやすい」「通信制高校出身でも受け入れてもらえる」といった回答からは、自身の背景を受け入れてもらえるかどうかや、毎日自分で通学することに対する体力的・精神的負担なども考慮している様子がうかがえる。インタビューでは「通信制高校は週1回の登校だったので、一度専門学校に行ったら規則正しい生活習慣を作っておくべきだと思った」「家から近くて通いやす

23

い」といった話も聞かれ、専門学校は多様な不安を越える学生にとって、安心して次のステージに進むことができる進学先として選択されていることがわかる。

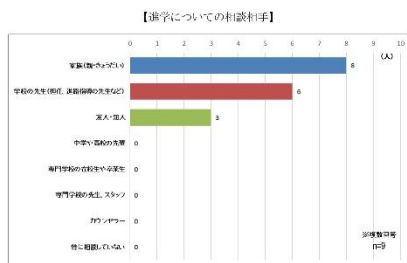


オ. 専門学校進学を相談した相手

9人全員が、進学について誰かと相談しており、相談相手として最も多かったものは「家族（親・きょうだい）」で8人であった。次いで、「学校の先生（担任、進路指導の先生など）」が6人、「友人・知人」が3人と続いている。複数の相手に相談した人も1人おり、多くの学生が身近で信頼できる相手を持ち、助言を得ていることが分かった。

家族と学校の先生からの助言は特に大きな影響を与えたようだ。例えば「当初は就職を考えていたが、親から『専門学校に行っても資格を持っておい方がいい』と勧められて進学に傾いた」また「自分の性格（恋愛相談に乗るのが好きなど）を考慮して父親からホテルブライダル科を提案された」という学生のように、家族からは会話の中で進路の提案があったというケースが多い。学校の先生からは、「個人面談を行い、就職のことなどを詳しく教えてもらった」「F x c e l の1級が取れるから行ってみていい」と背中を押された」といった、進路や学習についての具体的な助言があったことで前進できた人も多い様子で、理解者である家族と専門的な助言者である先生の両方のサポートを得たことが成功した可能性がある。

24



カ. 専門学校進学の手続き

高校生が当法人の専門学校へ進学することを決めるとき、その決め手となったものは何か、アンケートで質問した。「すべてを重視（複数回答）」「一番の決め手を一つ選択（単一回答）」の2種類の形式で質問を提示し、それぞれ回答してもらった。

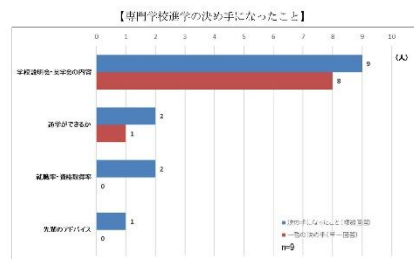
「学校説明会・見学会の内容」は9人全員が挙げており、うち8人の「一番の決め手」にもなっていた。次に多い「就職率・資格取得率」は複数回答で2人が選択しているものの、一番の決め手にはなっていない。

学校説明会・見学会について、インタビューでさらに質問を深めたところ、「オープンキャンパスで先輩から『この学校の雰囲気は悪くはないよ』という話を聞いて安心した」「オープンキャンパスのウェディングドレス試着体験で先生が何度も『似合っている』と褒めてくれて、感を感じないこの先生なら良いと思った」といった具体的なエピソードを聞くことができた。当法人のオープンキャンパスでは体験授業や、在校生・教職員と話せる場を設けており、学校の雰囲気や在籍者の様子を自分でも確かめることができる。一番の決め手を「通学ができるか」とした一人についても、複数回答式の質問では「説明会・見学会の内容」を選択しており、オープンキャンパスに参加して実際に通学できるかを確認したことで専門学校への進学を決めたとみられる。また、オープンキャンパスではなく個別説明会に参加した学生は、「説明会で現

25

在の担任の先生と面談をして、クラスが担任制で、困ったことがあってもすぐに対処してくれると聞いた。就職のことなどを詳しく教えてもらい、具体的な進路の道筋が見えた」と話していた。

このように、対象者は就職率・資格取得率等のデータや交通アクセスも含めた複数の情報から自身の進路を検討している。一方で実際にオープンキャンパス等に参加して自分の目で見て体験する機会を持つことで納得感を感じ、確信を得て進路決定に至っていることがわかる。特に在校生や教職員といった、学校生活の実情をよく知る教育活動の当事者と接することで不安が軽減され、「ここで学びたい」「受け入れてもらえている」という実感が進路決定の後押しとなっていると考えられる。



(3) 専門学校での経験

ア. 学習面

(ア) 入学前の学力不安

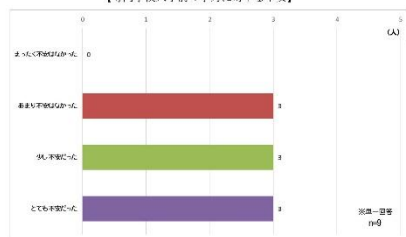
アンケートによると、専門学校入学前に持っていた学力に対する不安について「とても不安だった」「少し不安だった」「あまり不安はなかった」がそれぞれ3人と分かれた。不安が「まったくなかった」と回答した人はおらず、程度の違いはあるものの、全員が学力面で何らかの不安を抱えていた。

26

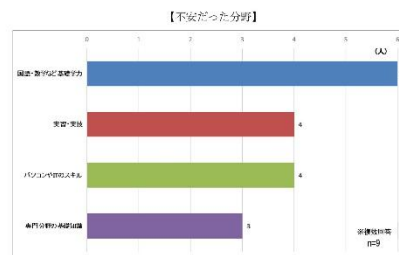
具体的に不安を感じた分野は「国語・数学などの基礎学力（以下、基礎学力と記す）」が6件と最も多く、次いで「実習・実技」「パソコンや1丁のスキル」が4件、「専門分野の基礎知識（3件）」となった。「基礎学力」とそれ以外の項目（以下、「専門的知識技能」としてまとめる）に分けると、基礎学力のみを挙げた人が2人、基礎学力と専門的知識技能の両方で複数の項目を挙げた人が4人いた。このことから、専門学校で学ぶ専門的知識技能よりも高校までの基礎学力への不安が強い人や、専門的知識技能に加えて基礎学力にも不安を感じる人がいるとわかる。

また、「基礎学力」を挙げた6人のうち3人は、先の「通信制高校で困難を感じた点」の質問でも「学習面」を挙げていた。インタビューでは「小学生の時から算数も国語も大嫌いだったので、不安だった」「通信制高校では自分の好きな教科を自由に決めて学んでいたのが好きな方向に転ってしまっており、自分の学力が全日制出身の人と比べて通用するか不安だった」との声が多かった。幼いころからの根深い苦手意識や、自由度の高い通信制高校と全日制高校との学習環境の差の懸念が、入学前の基礎学力に対する不安につながっていることがうかがえる。

【専門学校入学前の学力に対する不安】



27



(イ) 専門学校の授業や教材について

専門学校での授業についてもアンケートで質問をした。

「授業内容の難易度」は、「少し難しかった」が5人、「ちょうどよかった」「予想よりやさしかった」がそれぞれ2人であった。また、「授業で使用する教材や課題の難易度」については「ちょうどよかった」「少し難しかった」がそれぞれ4人で、「予想よりやさしかった」が1人であった。授業内容、教材や課題のいずれにおいても「とても難しかった」とする回答は今回ゼロであった。

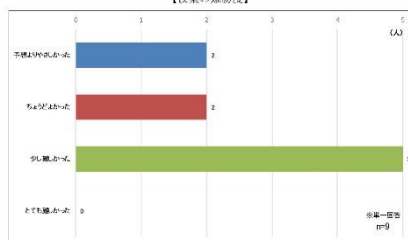
入学前、基礎学力に不安を感じていた学生は「授業で国語や数学、英語はあまり使うことがないので、ついていけている」、また、専門分野の基礎知識に不安を感じていた学生も「難関が好きです。解けるのが面白いです」と語っている。ビジネス系やホテル・ブライダル系といった専門的な学科の授業は専門的な内容に特化しており、基礎科目で習得した知識を活用する場面があまりないためか、学生は一定の難しさを減しつつも、当初思っていたほどではないと受け止めている様子が見える。

教材についてもそれほど難解であるとはとらえられていない。具体的には「授業の本題に入る前にクイズ形式の問題が提示される」「授業の中で、班ごとにカードゲームを作成する」など、既存の参考書や教科書といった教材だけでなく、多様なツールや方法を用いて授業が展開されることにより、学生はそれほど大きな不安を

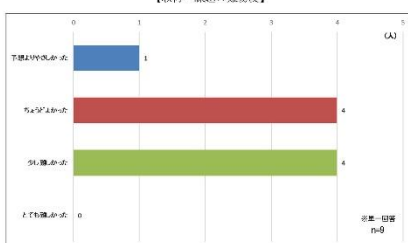
28

感じることなく授業に参加できていると考えられる。

【授業の難易度】



【教材・課題の難易度】



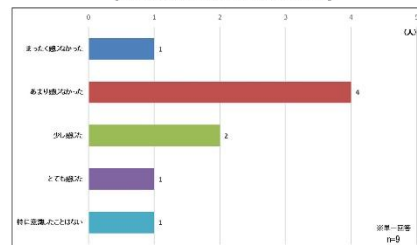
29

(ウ) 全日制高校出身者との学力差

前述のとおり、入学前には「全日制高校の生徒と比べて自分は劣っているのではない」という不安を抱いていたものの、実際に入学した後はそうした差をそれほど感じなかった様子がうかがえる。アンケート結果では半数以上の学生が「あまり感じなかった（4人）」または「まったく感じなかった（1人）」と回答しており、「特に意識しなかった」という人も1人いた。

「少し感じた」と回答した学生にインタビューで詳しく尋ねたところ、「通信制高校では自分のペースで学習していたので、専門学校における90分授業に当初はなかなか慣れることができなかった」との回答であった。また「とても感じた」と回答した学生はやはり、これまで抱えてきた「勉強への苦手意識」が影響し、現在もなかなか自信が持てず挑戦を控えてしまうことが多いという状況が見られた。これらのことから、入学による学習環境の大きな変化や、個人が抱えている意識の違いにより、学力差の受け止め方に差が生じていると考えられる。

【全日制高校出身の人との学力差を感じたか】



30

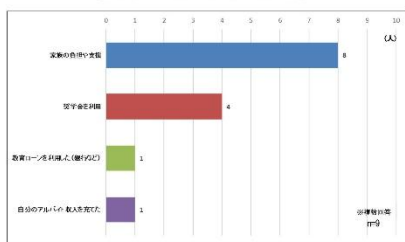
イ. 経済面

(ア) 学費負担

専門学校の学費の調達方法について見ると、アンケート回答では9人中8人が「家族の負担や支援」と回答していた。家族の支援を受けず自身で負担している学生は1人であった。

あわせて、奨学金を利用している学生は4人（44%）、教育ローンを利用している学生は1人（11%）であった。これらは家族負担と併せて利用しているケースが多く、家族以外からの支援を受けて進学している学生が半数以上になっている。

【専門学校の学費はどのように準備したか】



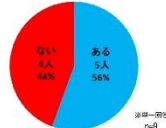
(イ) 奨学金について

前述のとおり、奨学金は9人中4人が利用しており、自己負担（家族負担）による学費支出を補完する重要な手段となっている。奨学金利用者の満足度については「とても満足」と「少し満足」を合わせて75%と、比較的高い水準であった。

近年は減価償却のない給付型奨学金や学費減免制度などが拡充され、学生が過度に経済的な負担を負うことなく学業に専念できる環境が整いつつある。これらの制度は、学生にとっては安心して通学できる要素の一つとなっている。一方で、在学中の出欠状況や成績が支給要件とされる側面もある。こうした条件は学生にとっては一定の負担感を感じるものの、「奨学金に感謝も関わってくるし、もう欠席できない

い。それに学費を無駄にできないから、意地でも最後まで通ってやる」と語る学生のように、自分を律して学習習慣を維持するための動機づけとして機能している側面もあると考えられる。

【奨学金の利用経験】



【奨学金の満足度】

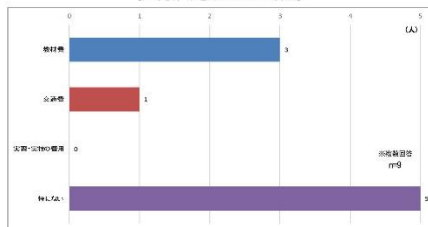


(ウ) 経済的な困難の経験

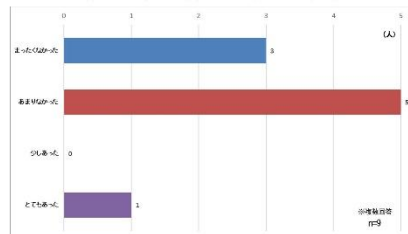
アンケート回答で「入学後の予想外の費用負担があった」と質問したところ、「予想外に高かった」出費として挙げられた出費は「教材費（3件）」、「交通費（1件）」であった。専門的な知識を習得するためのテキストや資料代に加え、高校時に比べ通学日数が増加したことによる公共交通の利用料金が、当初の想定を上回っていたものと考えられる。一方で「特になし」という回答した学生も5人おり、過半数の人が事前の計画どおりに学費や生活費をやりくりできている様子が見える。

また、専門学校在学中の学費や生活費に関する負担感について「まったくなかった（3件）」「あまりなかった（5件）」との回答が多くみられた。家族の支援や各種サポートの利用により、大多数の人が比較的安定した状況で専門学校での生活を送ることができていると考えられる。なお、在学中の学費や生活費について困難に感じた経験については「とてもあった」の回答をした学生が1人いたが、回答者が今回インタビュー対象者ではなかったため、具体的な状況については把握できていない。

【入学後、予想外にかかった費用】



【在学中の学費や生活費について困難に感じた経験】



(エ) アルバイト経験

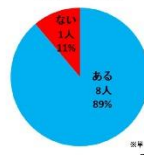
アンケート結果によると9人中8人にアルバイトの経験があり、経験者の75%が「問題なく学業と両立できている」と感じていた。

アルバイトを始めた時期は高校時代という学生が多く、そのまま同じ仕事を継続している者や、短期の仕事を経験している者など、働き方は様々である。

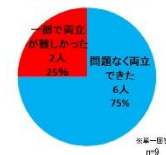
アルバイトを行う理由も様々であり、インタビューでは「高校時代、学校が週1回で時間に余裕があったため始めた。今はコミュニケーション能力を高めるために」「専門学校への入学が決まって、昼夜逆転の生活を収め生活のリズムを整えるために昼間に働くアルバイトを始めた。将来のために役立ちそうな仕事を選んだ」「接客力を磨きたくて飲食業に就き、その後、体力を付けたくて清掃業に移った」などの話を聞くことができた。これらのことから、アルバイトと学業を両立させることは、安定した生活リズムを確立し、人とのコミュニケーションの楽しさや、労働により給料を得ることの喜びを知ることにつながり、経済的な余裕と精神的な充実の両面で良い影響を与えていると考えられる。また、「アルバイトをして、マルチタスクができるようになった」という学生のように、アルバイトによる自分のスキルアップや適性の理解、将来のキャリアを考えるきっかけを得る、などの自己成長の機会にもなっている。

学費や生活費の経済的困難が比較的に少ない学生にとっても、アルバイトは単なる収入確保にとどまらず、学校とは異なる多様な経験を得ることができる貴重な場となっていることがうかがえる。

【アルバイト経験】



【学業とアルバイトの両立】



ウ. 心理面

(ア) 新しい環境への不安

アンケート結果によると、専門学校入学時に新しい環境に入っていくことについて「とても不安があった」と回答した学生は4人、「少し不安があった」と回答し

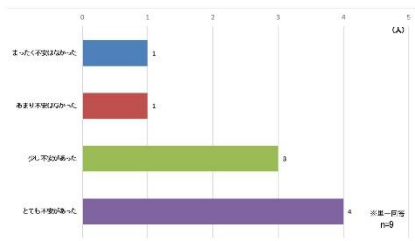
た学生は3人で、両者を合わせると77%に上った。このことから、多くの学生が入学時の環境変化への対応に不安を抱えていることが判明した。

不安の内容として、前述の学力面に関する以外では「対人関係」「生活リズム」を挙げる者が多く、概ねこの2点に集約されているといえる。

対人関係に関しては、インタビューからは「通信制高校に行ったきっかけが人間関係の問題であったので、専門学校でもうまくやっていけるか不安があった」、
「全日制高校出身の学生が多く、どう間あれば良いかわからなかった」のように、過去に対人関係上の困難を経験し、通信制高校への転校を経験した学生ほど、対人関係に強い不安を感じている様子がうかがえる。

生活リズムについては「高校の時は週1回の通学で、昼校時間も自由であったため、専門学校に毎日朝から通えるのが不安だった」という意見がみられた。決まった時間に行動する必要が発生するため、新たなリズムを構築することへの不安が生じていると考えられる。さらに「高校時代から始めていたアルバイトが続けられてきかも不安だった」と述べており、専門学校への入学による学習環境の変化が、学校外での生活環境や培ってきた対人関係にも影響を及ぼすのではないかととの懸念を生み、不安感を一層高める可能性があると思われる。

【専門学校入学で新しい環境に入ることへの不安】



35

(イ) 不安や困難に対する気持ちの変化

専門学校入学時に抱いていた不安は、入学後どう変化したのだろうか。

前項(ア)で浮かび上がった不安の一つ、「対人関係」については、アンケートでは「専門学校の同級生との関係で難しさを感じた経験」は「とてもあった(3件)」「少しあった(1件)」と回答した学生が全体の約44%強であった。一方で、「あまりなかった(4件)」「まったくなかった(1件)」と回答した学生も半数以上を占めており、入学後の対人関係における不安や困難の感じ方は個人によって大きく異なっていることが分かる。

ただ「専門学校で相談できる仲間(友人)がいるか」という質問には9人中7人が「いる」と回答しており、入学当初に困難を感じていた人も何らかのきっかけを通じて打ち解けるきっかけをつかみ、友人関係を築くことができていたことがうかがえる。

友人関係を深めたきっかけは「最寄り駅が同じだとわかった」「話が通かった」など、日常的些細な共通点や状況を知ったことから会話が生まれ、徐々に打ち解けていったケースが多くみられた。

対人関係において特に強く困難を感じた経験を持つ者もいて、「『精神疾患を抱えていても普通に接してほしいと考える自分』と、『どう対応して良いかわからないクラスメイト』との間でずれ違いが生じて、当初はあまりなじめなかった」と語っている。しかし、自身の状況や傾向などをオープンにし、希望する接し方を周囲に伝える努力をしたことで、喧嘩もしながら徐々に同級生との距離を縮めることができたという。

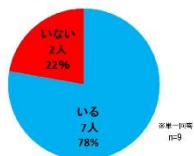
さらに「16名の少数クラスだったので対人関係に関する心理的不安は少なかった。実習やグループワークを通じて絆も深まった」という声もあり、対人関係の不安や難しさは学生個人の努力だけでなく、クラスの規模や授業形態、雰囲気や周囲のサポートといった要因も影響し軽減、解消されている可能性が示唆される。

36

【専門学校の同級生との関係で難しさを感じた経験】



【相談できる仲間(友人)】



もう一つの不安要素であった「生活リズム」についても、アンケートで現在の生活について尋ねたところ、9人中6人(67%)が「規則正しい生活を送れている」と回答した。個人の状況によって差はあるが、専門学校での生活を通じて以前よりも規則正しいリズムで生活できるようになった人が少なくないことがうかがえる。

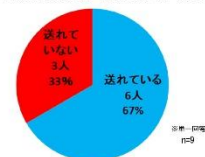
インタビューでは「休むと授業内容がわからなくなる。面会時授業があり、友達とも話したいので、毎日朝早く起きて学校に行っている」と学習への興味や友達の存在などが大きな原動力になっている様子が見られた。また、「昼間に活動し夜寝

37

る生活をするためにあえてアルバイトを入れた、というように、学校外での活動も意図的に組み入れて新たな生活リズムを整えていったケースも確認された。

一方で、自市産の高い通信制高校時代の生活リズムから、専門学校の規則的な時間割へ移行することは容易ではなく、インタビューでは「自分のペースで勉強していた高校生活から、急に毎日90分授業に切り替わり、慣れるのに時間がかった」「朝の支度をゆっくりしていると、電車に間に合わない、時間に追われると感じる」といった声も聞かれた。生活リズムの変化に対して、一定の適応が進んでいる一方で、十分に適応できていないと感じる場面も存在していることが明らかとなった。

【今の生活で規則正しい生活が送れているか】



(ク) 通信制高校出身であることへの対応

アンケートの「通信制高校出身であることを専門学校の同級生に伝えたか」という問いに対しては「聞かされた」が5件と最も多かった。積極的に話すというよりも、必要に応じて状況判断をしながら伝えるというスタンスを取る学生が主流であることがうかがえる。

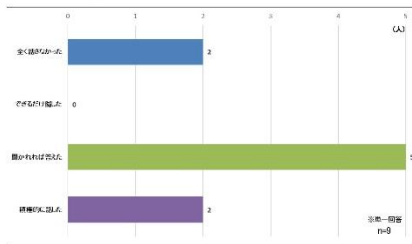
一方で「積極的に話した」との回答が2件あるように、通信制高校出身であることを隠さず開示しているケースもみられた。ある学生は「全日制出身の学生から『自由な時間があって、好きなことができて、いいよな。羨ましい』ということをよく言われた」というが、本人は気には留めておらず、「もう隠さない」と語っている。前述のとおり精神疾患を持つ自分の状況や傾向をオープンにした者は、周囲に自分のことを理解してもらうために通信制高校出身である背景も含めて話さず話す姿勢をとっており、その後のアルバイトや就職活動の面接においても特別な抵抗感なく話しているという。

38

その一方で「まったく話さなかった」という回答も2件あり、通信制高校出身であることを明示しない選択をしている学生が一定数存在することも明らかにになった。インタビューの中では通信制高校出身であることに対してコンプレックスを抱き、あえて話したくないと感じる人がいることを理解しており、その選択を尊重する姿勢を示していた。

以上のことから、通信制高校出身であるという背景の明示の仕方は一概ではなく、個人の価値観や経験、周囲との関係性に応じて多様であることが分かる。自身の背景をどの程度、どのような形で伝えるかについても、学生一人ひとりが状況に応じて判断していると考えられる。

【通信制高校出身であることを同級生に伝えたか】



(ウ) 教員との関係

アンケートでは、専門学校教員との関係構築についても調査を行った。

「専門学校の先生に気軽に相談できるか」との問いに対し、「とても気軽に相談できる」が5人、「少し気軽に相談できる」が2人となり、回答者の80%弱の学生が教員との関係を肯定的にとらえていることが分かった。

相談する相手としては主に担任教員であるが、キャリアアドバイザー担当職員なども含めて相談しやすいと感じている学生の声もあり、「先生方がみんないい人で頼りになる」という声も聞かれた。

39

相談のタイミングは「人間関係で困っていたとき、先生が話を聞いてくれた」

「就職前の履歴書作成でも力になってもらった」など、「困ったとき」が多い。相談内容は人間関係や学習面、就職活動に関するものなど、多岐にわたっている。「先生には何でも相談できる」、「日常のことも話したりする」という声も聞かれ、学生が教員に信頼を寄せ、日常的な会話が交わされる関係になっている様子もうかがえる。

このように、入学直後の不安定な時期に先生が寄り添い、耳を傾けてくれることが、学生の精神的な助けになり、心を開いて話せるほどの信頼関係の形成につながっていると考えられる。さらに、オープンキャンパスや説明会での説明や相談で信頼感を持ったという声も複数あり、教員との信頼関係は入学時に限らず、入学検定試験から徐々に構築が始まっていたとも考えられる。

【専門学校の先生に気軽に相談できるか】



(ウ) 自己肯定感

学生たちは専門学校の生活を通じて、自身をどのように捉えているのだろうか。アンケートで「自分に自信がない、または他の人と比べて劣っていると感じたことはあるか」と尋ねたところ、「いっつも感じていた」が3人、「時々感じていた」が

40

5人となり、90%近くの人々が、他人と比較し劣等感や自己否定感を抱いた経験を有していることが分かった。

このような劣等感や自己否定感の背景は、インタビューでも繰り返し語られた「学力面でのつまずき」「対人関係上のトラブル」が主な要因になったと考えられる。多くの学生が高校入学以前の小学校、中学校時代からこのような経験を重ねており、それが通信制高校を選択する「因」にもなっていた。

インタビューで高校時代の自身について「挑戦してみようという気持ちになれず、無様な選択をしてしまっていた」「何かに挑戦すること自体がすごく怖かった」と語られているように、自信の欠如が失敗への過度な不安を生み、その結果として挑戦を避ける行動が定着するという悪循環に陥っていた学生がいたことがうかがえる。

一方、現在の心境については「人と関われるようになったという点は、自分が成長したと感じている」「挑戦して、失敗して、後悔するのはいいと思えるようになった」といった前向きな変化を示す声を聞くことができた。「今でもちょっとまだ不安がある」という慎重な姿勢を示す人もおり、個人差はみられるものの、専門学校での学習や人との関わりを経験を通して自己成長を感じたり、価値観を転換できたことにより自己肯定感を徐々に回復することができているのではないかと考えられる。

【自分に自信がない、または他の人と比べて劣っている、と感じたことがあるか】



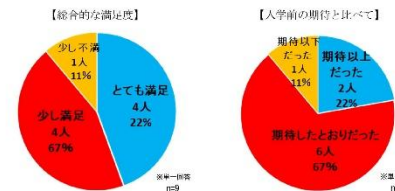
41

(4) 専門学校に対する評価

ア、総合的な満足度

専門学校での学びに対する総合的な満足度については、アンケートの結果で9名中8名が「とても満足」もしくは「少し満足」と回答した。また、入学前の期待と比べた実際の学校生活への気持は「期待したとおりだった」が6人、「期待以上だった」が2人となり、多くの学生が自身の専門学校への進学と実際の生活を肯定的にとらえている様子が見えてくる。

具体的に満足している内容についてインタビューで尋ねたところ、「一般的に学ぶ機会が少ない専門的な知識を学べて新鮮である」「毎日友達と会って何気ない会話が出来るのが良い」「相談できる先生も仲間もいて、楽しい学校生活が送れている」といった話を聞くことができた。高校時代と比べて生活環境が大きく変化したにもかかわらず、その変化を前向きな刺激として受け止め、専門学校での学びや人間関係を充実したものとして感じている学生が多いことが読み取れる。



イ、通信制高校での経験の活用

「専門学校で、通信制高校での経験が生かされた」という問いに対しては、7人の学生が「生かされた」と回答した。生かされたと感じる場面についても尋ねたところ、「自分で学ぶ力（自立学習力）」が4件、「人との関わり方・コミュニケーションの経験」が3件、「時間の使い方や自己管理の力」が2件となった。複数の項目を選択した人も2人いた。

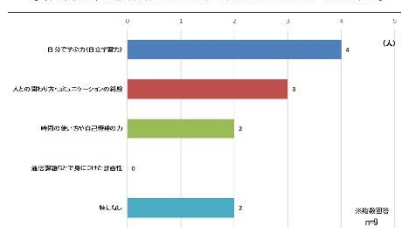
42

経験が生かされた具体的なエピソードとして、インタビューでは「通信制高校では4年かけて卒業する仲間もいる中で、自分は同級生と一緒に必ず3年で卒業すると決め、計画的に単位を取得してきた。専門学校も『意地でも休まない』との思いで通学している。通信制高校は何でも自分で行動しなければいけないことができなかった。専門学校では、必ず友達を作りたいと思い、入学してすぐ自分から話しかけたことでLINEグループができた」などが挙げられた。これらの語りから、自由度の高い通信制高校のカリキュラムの中で、学習や生活スケジュールを主体的に管理してきた経験から、専門学校での学習面および生活面での自己管理能力として生かされたことがうかがえる。

他にも「高校時代からコンビニエンスストアのアルバイトを始め、お客様への接客対応やマルチタスクを経験したことで自分の成長を感じる。その経験が現在の学科を選ばすきっかけになり、卒業後の目標である『ホテルマンになること』にもつながっている」という語りもあった。これは通信制高校に在学中に学業とアルバイトを両立しながら対人関係での不安を少しずつ克服した経験が、専門学校での学びへの関心興味を広げることや、将来の目標の発見に生かされた事例といえるだろう。

このように、学生たちは通信制高校で学業のみだけでなく多様な活動に取り組み、それらを両立させてきた。その中で培われた学習面や生活面における「自己管理能力」が専門学校での学習に生かされていると考えられる。こうした経験は将来のキャリア観の形成にもつながっている様子がうかがえる。

【専門学校で、通信制高校のどのような経験が生かされていると思うか】



43

「専門学校で最も効果的だったと思うサポートは」という質問に対する回答は「学習面のサポート」と「人間関係のサポート」が最も多く、それぞれ3件となった。「学習面」「人間関係」は前出の「高校時代に最も困難を感じたこと」の質問に対して最も挙げられた項目であり、専門学校入学期に学生が抱く最大の不安でもあった。それらに対する評価が高いということは、専門学校としては学生一人ひとりの状況やニーズを的確にとらえ、必要な支援を提供できていたと考えられる。また、学生にとっては自身の不安な気持ちを受け止めてもらい、支援がえられたという実感が、学校生活の満足感につながったと考えられる。

【専門学校のサポートで最も効果的だと思うもの】



n=9

(イ) 入学前のサポートに対する評価

当法人では入学検定試験から入学決定後まで、様々な入学前サポートを行っている。それぞれのサポートについて、アンケートで「受けて良かったと思うもの」を選んでもらったところ、全員が「オープンキャンパス・体験講座」を挙げた。併せて、「奨学金制度の個別説明」「個別相談」をそれぞれ1人ずつが挙げた。前出の「専門学校進学を決めた手になったもの」という質問でも同じく全員が「学校説明会・見学会の内容」を挙げており、インタビューでもオープンキャンパスでの体験が鮮明な記憶として語られている。また、個別相談はオープンキャンパスに参加できなかった人への対応に効果を発揮し、奨学金に内容を絞った個別説明も、利用を検討している人にとっては役に立つ支援となっている。

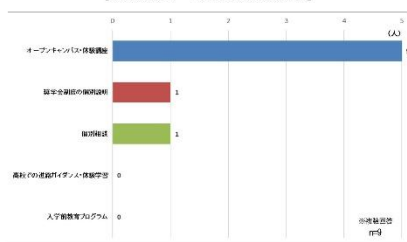
このように、進路検討段階で授業内容や雰囲気事前に知れることや、不安につ

44

いて直接相談し解決できることが、入学前の生徒や保護者にとって進路決定の大きなポイントになっていることがわかる。

なおアンケートでは他に「高校での進路ガイダンス・体験学習」「入学前教育プログラム」の項目を設けていたが、選択した人はいなかった。

【入学前のサポートで良かったと思うもの】



(ウ) 入学後のサポートに対する評価

入学後、現在まで受けたサポートについても同様に、「受けて良かったと思うもの」を挙げてもらった。

最も多く挙げたのは「奨学金・経済的な支援（3件）」であった。前出の質問で「奨学金を利用している」と回答した4人のうち3人がこの項目を選択しており、学校に通い続けるための経済的支援が必要であることがわかる。これは学生本人だけでなく家庭にとっても必要な支援といえるだろう。

次に「生活全般の相談（2件）」が挙げた。「先生がマンツーマンで話を聞いてくれた。ちょっと外に出て話したりしたことが助かった」というようにサポートは教員による個別対応が中心で、その内容は多岐にわたっている。「勉強のことも私生活のことも、その学校の人間関係のことも全部先生に話していた」という者もいるほどである。なお学校内には「総合支援室」という学生相談窓口があるが、今

45

回のアンケートではその項目を挙げた人はおらず、総合支援室の相談利用した学生の声は拾えなかった。現状では、日常的に関わる教員のサポートが学生にとって最も大きな支えとなっていることが明確される。

8番目に挙げたのが「就職サポート・キャリア相談（1件）」であった。今回のアンケート調査対象者は1年次生も多く、まだ就職に向けて具体的に活動を開始していない学生が多かったこともあって回答は少なかったと考えられる。しかし、「就職活動中のキャリアサポートの支援が役立った」との声も聞かれ、実際に就職活動を行っている学生にとっては有効な支援であることが示されている。

なお、学習面での支援として「補習・個別の学習指導、学習面のサポート」という項目を設けていたが、今回のアンケートで選択した人はいなかった。前出のアンケートで学習の難易度が入学前と比べて「予想どおり」あるいは「予想よりやさしい」と感じた人が多かったことから、専門学校の学科の授業は、専門的な内容に特化している一方で、基礎科目で習得した知識を直接的に活用する場面は必ずしも多くない。そのため、学生は一定の難しさを感じつつも、当初想定していたほどの負担ではないと受け止めており、現時点では学習面での追加的な支援を必要とする状況が少なかった可能性がある。

【入学後のサポートで良かったと思うもの】



46

⑦) サポートに対する今後の希望

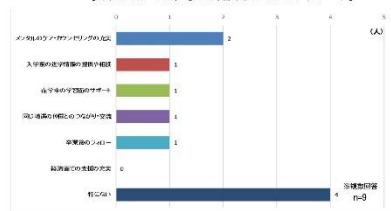
これまで受けてきた様々なサポートを踏まえて、「あればよかった」「もっと充実していたらよかった」と感じるサポートがある点について尋ねた。

結果は「メンタルケア・カウンセリングの充実」が2件と最も多く挙げられたほか、「入学前の進学情報の提供や相談」「在学中の学習面のサポート」「同じ境遇の仲間とのつながり・交流」「卒業後のフォロー」がそれぞれ1件ずつ挙げられた。回答は特定の項目に偏ることなく分散しており、入学前、在学中、卒業後のすべてのサポート項目が選択されていることから、学生のニーズが多様化していることや、現行の支援体制に一定の改善余地がある可能性が示唆される。

なお当法人では、在学中の学生一人ひとりが抱える悩みや困りごと課題に対応するために、カウンセラー、公認心理師、国家資格キャリアコンサルタント、看護師等の有資格者の相談員を設置した「総合支援室」を設けて個別相談を受け付けている。また、卒業後の就労や事業に関する相談は、キャリアサポート室で対応している。しかし、今回の調査では総合支援室の個別相談を利用した経験がある人がいなかったため利用実態が把握できなかった。キャリアサポート室で卒業後のフォローまで手掛けていることも、十分に認知されていない状況であった。

充実させてほしいと思うサポートが「特になし」の回答も4件に上っていることから、必要なサポートが存在しているにもかかわらず、その内容や利用方法が学生に十分伝わっていないために、活用に至っていない可能性も考えられる。改めて、各種サポートの存在や役割について、学生への認知度を高めていく必要があるだろう。

【あればよかった、もっと充実させてほしいサポート】



47

【インタビューより】

メンタルケア・カウンセリング

対面では話づらい人もいるので、テキストのやり取りなどから始めるほうがハードルが下がるのではないかと。(Eさん)

在学中の学習面のサポート

2分や3分の短い動画で、單元ごとに学べるセッションがあれば、家でも見ようと思う。(Aさん)

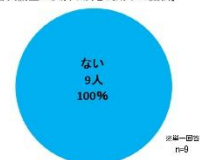
同じ境遇の仲間とのつながり

通信制高校を卒業したメンバーで集まって話す機会があっても面白いかもしれない。(Cさん)

卒業後のフォロー

転職サポートなど、卒業後も相談できるところがあると安心できる。(Dさん)

【総合支援室の個別相談を利用した経験】



48

(5) 今後の意向

ア. 就職・就労に対する考え

専門学校卒業後（卒業生は現在の状況）の進路については、在学中の学生8人のうち7人が就職を希望していた。「これまで学校やアルバイトで得た経験を生かして、ホテルマンになりたい」「就職を目指して、マーケティングや簿記、表計算を頑張ろうと思っている」など、卒業後を見据えた目標を定めて学びに励んでいる様子がうかがえる。在学中（2年次生）ですでに就職先が決定している学生は「会社でトップを取れるよう頑張りたい」と語っており、また現在就労中の卒業生も「今は積極的に働いて、会社での昇進も目指している」と高い就業意欲を見ている。

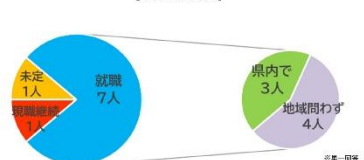
一方、進路が定立っていない学生からは、「当初は漁港と接客業を考えていたが、実習に参加したことでホテルの仕事に興味が出てきた」と語っており、専門学校での学びや実習経験を通して、徐々に自身の進路や将来像を具体化しつつある様子がうかがえた。

アンケートでは、働く場所（勤務地）に関する希望についても尋ねた。結果は「山口県内・県外どちらでも（地域は問わない）」との回答が4人と最も多く、いずれも1年次生であった。次いで「山口県内を希望」との回答が3人であり、その内訳は1年次生1人、2年次生2人であった。

このことから、1年次生ではまだ就職に対する具体的なイメージがまだ十分に形成されておらず、勤務地についても柔軟な姿勢を示す傾向がみられる。一方、2年次に進級し就職活動が本格化するにつれて、自身の生活や将来を見据えた現実的な選択として、勤務地の希望も明確化していく様子がうかがえる。実際、当初は地域を問わず就職を考えていても、最終的には山口県内での勤務を希望している学生が多く見受けられる。勤務地についてある学生は「県外に出てみたいとは思わない。ここ山口だからこそ安心できる」と語っており、見知らぬ土地での生活や就労することへの不安感が地元就職志向の一因となっている可能性がある。

一方で「最初は県外に出る予定はなかったが、『自分の人生は自分で決めたい』と興味のある関西に転職した」と語った卒業生のように、当初は安心感のある地元での就労を望んでいても、社会人として経験を積み成長する中で、自己理解が深まり、価値観や行動が変化していくケースも見られた。

【今後の進路希望】



49

イ. 地域への愛着意識と就労意向

アンケートの最後に、地域への愛着について尋ねた。

「地域に愛着を感じるか」という質問に対しては「やや感じる」「どちらともいえない」との回答がそれぞれ3人となり、中立からやや肯定的な層が全体の3分の2を占めた。一方で、「とても強い愛着を感じる」という人がいなかったものの、「まったく感じない」と回答した人も2人おり、愛着の度合いは一定のばらつきが見られた。

では、こうした地域への愛着の程度は、将来の卒業生の選択にどのように関係するのか。前問の質問「今後の進路意向」への回答と併せてみると、「地域（山口県）への愛着はそれほどないが、県内での就職を希望している」学生や、反対に「山口県に一定の愛着はあるが、県外での就職も検討している」という回答がそれぞれ複数存在していた。

これまでのアンケートやインタビューの回答から、学生にとって「地域への愛着」とは「郷土愛」という感情的な結びつきよりも「自分の知っている場所である」という認知的な安心感に基づく意味合いが大きいと推測される。「イベントに参加して、地域を歩くだけでも新しい発見があった」と語る学生のように、まだ学生自身が自分の住む地域について十分に理解・体験できていないことも、地域への愛着が強く形成されていない要因の一つであると考えられる。関西で就業中の卒業生は「ずっと山口は好きですし、帰りたいとも思っています」と語っており、地域を離れて初めて故郷への思いに気づくようなケースもあった。今回、調査回答者の半数以上は1年次生であり、今後本格的な就職活動を進める中で勤務地に対する希望や地域への意識が変化しやすくなるが、現状では専門学校生のような若年層にとって、生まれ育った地域や現在居住している地域に対する思い入れやこだわりは必ずしも強くなく、就職先の選択にも決定的な要因にはなっていない様子がうかがえる。

【地域への愛着をどの程度感じるか】



50

【地域への愛着度合と希望する進路地の関係】		
名前	地域への愛着度合	進路地の希望
Eさん	少し愛着を感じる	山口県外・全国県外に移住
Cさん	少し愛着を感じる	進路問わず
Fさん	少し愛着を感じる	進路問わず
Aさん	どちらともいえない	進路問わず
Hさん	どちらともいえない	進路問わず
Dさん	どちらともいえない	山口県内・全国県外共に否
Gさん	あまり愛着を感じない	山口県内
Iさん	まったく愛着を感じない	山口県内
Bさん	まったく愛着を感じない	南進するが未定

3. 困難要因の分析

本章では事前アンケートおよびインタビューの結果を基に、専門学校入学前から在学中に当事者が感じた困難とその要因を明らかにする。

(1) 学習面

ア、入学前

入学前には調査対象全員が何らかの学力不安を抱えており、特に「**国語・数学などの基礎学力**」に対する不安（67%）が最も高かった。これは勉強に対する小中学校時代からの苦手意識や、自由度の高い通信制高校での学習と全日制高校出身者との学習環境の差に対する懸念に起因していると考えられる。

イ、在学中

専門学校の学びは特定の分野に特化していることもあり、入学時に懸念していた「基礎科目の知識不足」は、在学中において大きな障礙にはならにくく、学習する上で不便を感じる人が少ない傾向にある。興味関心のある科目の選択できるや、多様な学習ツールの活用した授業に意欲的に取り組めることから、困難は軽減されると考えられる。一方で、通信制時代の自由な学習スタイルに慣れていた学生にとって、入学当初は「1コマ90分の授業」や毎日の登校といった時間的拘束への対応が課題となる場合がある。

51

また、多くの人が通信制高校で培った「**自立的な学習力**」や「**自己管理能力**」を専門学校での計画的な単位取得や授業出席に生かしており、学業とアルバイトを両立させるなどしている。アルバイトは学習している専門分野に関する知識・技能習得や、将来のキャリア選択を考える上での手がかりとなる場合もある。学校内外での学びとの相乗効果もあり、全日制高校出身者との学力差に対する不安は次第に薄れ、学習・学力面での困難感合はさらに低下していると考えられる。

(2) 経済面

ア、入学前

専門学校の学費はほとんどの学生が「家族の負担や支援（89%）」で賄われており、**表面的には経済的困難の程度は低いように見える**。しかし、奨学金を利用する学生も半数近くに上り、家族の自己負担と併せて他の資金調達方法を必要とする家庭が少なくないとみられる。このような家庭にとっては、困難があっても利用可能な奨学金制度があることが経済的負担の軽減につながっていると考えられる。その結果、就職ではなく進学という進路選択が可能となり、決して安値とは言えない専門学校も進路の選択肢に含めることができる可能性がある。

イ、在学中

学費以外で定期的に必要になる費用のうち、「教材費」や「交通費」が想定より高く感じている学生が一定数存在する（約30%）。しかしながら、これらの負担が原因となっており、在学継続が困難になるほどの深刻な経済的困難に至っているケースは少なく、**全体としては大きな問題にはなっていないといえる**。奨学金については、利用している学生自身にとって直接的な経済的困難が生じるわけではないものの、家族の経済状況への配慮や将来的な返済負担の不安といった点から、間接的な困難要因となっている可能性がある。一方で奨学金の継続条件である出席率や成績の維持が、「自分を事して登校し続ける原動力」として機能している側面も確認された。このことから、奨学金は経済的支援にとどまらず、学習意欲や心理的安定の維持にも一定の影響を及ぼしていると考えられる。

52

(3) 心理面

ア、入学前

通信制高校からの進学を具体的に検討し始める時期は「高校3年生」が最も多く（78%）、多くの生徒は卒業直前のタイミングで進路選択に動き出している。中には、より早い時期から大学進学や就職と併せて検討している生徒もいるが、全体としては検討開始時期が遅い傾向にある。その背景には社会面に対して大きな不安を抱え、新しい環境に踏み出すことへの心理的な躊躇があると考えられる。

進路検討段階で進学をあきらめそうになった経験を持つ人は55%に上っており、この躊躇がすでに強い心理的困難を抱えていることがうかがえる。特に不安として多く挙げられたものは「**対人関係**」と「**生活リズムの変化**」であった。過去の人間関係の問題や不登校の経験から自分のペースで学ぶことができる通信制高校を選択している学生も少なくなく、専門学校進学の際は学校の規則正しいスケジュールへの対応や全日制高校出身者との人間関係の構築が円滑に果たせるかなどの懸念が大きい。さらに、入学が決定した後であっても、実際に新しい環境に身を置いてからしばらくの間は、不安感が継続する傾向がみられた。このことから、心理的困難は進路検討段階から入学後初期にかけて連続的に存在していると考えられる。

イ、在学中

入学時には、対象者の80%近くが新しい環境への適応に不安を感じており、入学前から継続する心理的困難がみられる。特に対人関係不安については、40%の対象者が「**難しさを感じた経験がある**」と回答しており、在学初期における大きな課題であることがわかる。

通信制高校出身であることは「聞かれれば答えるが、自分から積極的に話すことはない」というスタンスの学生が多い。これは、通信制高校を選択するに至った背景として、人間関係不振や不登校などの過去の辛い経験を想起させることや、新しい環境への適応不安、学力に対する不安を自ら開示することへの抵抗感が影響していると考えられる。

一方で、入学後およそ半年経過すると78%が「相談できる友達ができた」と回答しており、対人関係に関する不安は徐々に軽減されている。

また、もう一つの不安要素であった生活リズムについても、67%が「規則正しい生活を送れるようになった」としており、在学期間の経過とともに心理的困難も入学後ゆっくりと軽減されていくといえる。

53

しかしながら、90%近くの学生が「軌入と比較して自分は劣っていると感じている」と回答しており、**自己肯定感の低さは在学中も継続している**。友人や教員との関わりや学校外での活動を通じて良好な信頼関係を築き、徐々に自信を取り戻していく学生もいるものの、自己肯定感の回復には時間を要し、その過程には個人差もある。そのため、在学中に心理的困難が完全に解消されるケースは少ないといえる。

(4) 進学ルートによる困難の差

対象者が通信制高校に入学した進学ルートは「中学校卒業後すぐ通信制高校に入学」と、「中学卒業後に全日制高校入学、その後通信制に転校」の二つのルートである。しかし、本調査においてはルートの違いによる困難の質や程度に顕著な差は認められなかった。転校経験者については、主に対人面や生活面で全日制高校での学生生活に困難を感じて通信制高校への転校を決めているケースが多かった。一方で、当初から通信制高校を選択した学生についても抱えている困難の内容は類似しており、困難の種類に大きな差はみられなかった。また困難の程度についても進学ルートによる明確な違いは見出せず、個々の経験や性格、置かれた環境などによる個人差の方が大きいと考えられる。

4. 支援の有効性と課題

これまで当法人では、入学前から在学中、卒業に至る機会まで生徒・学生やその家族に対する各種サポートを実施してきた。本章では、これらの支援が前章で整理した困難要因に対してどのように作用したのか検証する。あわせて、支援の有効性と今後への課題、新たな支援ニーズについて考察する。

(1) 困難要因と対応支援策の整理

まずは、前章の分析で明らかになった各ステージにおける困難要因と、当法人が実施している支援策を整理する。困難要因については、「入学前」「入学当初」「在学中から卒業まで」のステージごとに整理し定量化することで、ステージ間の比較ができるようにした。一方、支援策については「入学前支援」と「入学後支援」と時期で分類した。これにより、どの支援がどの段階の困難に対応しているのか、また支援と困難要因との関係性をより明確に捉えることを目的とする。

54

【ステージ別・分野別 困難度の推移】（調査をもとに作成）

時期	学習面	経済面	心理面	支援策
入学前	◎	○	◎	オープンキャンパス 個別説明会 財学部の個別説明 入学前プログラム 高校での進路ガイダンス・体験
入学当初	○	△	◎	補習・個別の学習指導 奨学金・経済的な支援 生活全般の相談 就職サポート・キャリア相談 総合支援センターでの対応 （専任相談員）
在学中から卒業まで	△	△	○	

△: 多少の困難を伴う △: 強い困難 ○: 大きな困難 △: 最も困難な状況

入学前の段階は環境変化に対する不安からすべての面で困難が強く表れている。中でも学習面・心理面における困難度合いが高い傾向がみられる。経済面については家庭の状況による影響で、困難の程度には個人差がある。

入学後、授業が始まり専門的な学びにふれることで、学習面の困難が徐々に軽減されていく。また、経済面は多くの場合、入学前の段階である程度解消されていることが多い。在学中に最も困難が大きく、長く続くのは心理面である。特に入学後から学校生活に慣れるまでに強く表れ、その後も在学中の短時間で解消されるものではないことが明らかになった。

これまで当法人では、個々の事情に対応した個別相談などを中心とした支援を多く実施してきた。また、多数の参加者を対象としたオープンキャンパスなどのイベントにおいても、参加者一人ひとりが抱える背景や不安を配慮し柔軟に対応に努めてきた。しかしながら、本調査ではこれらの支援に対する評価は一概ではなく、一定のばらつきが見られた。

（2）支援の有効性と課題

ア. 入学前

最も評価が高い支援はオープンキャンパスで、学習面・心理面・進路選択に関わるほぼすべての困難に対応している。実際に学校を訪問して授業を体験し、不安や疑問

の個別相談ができることが「ここならやれそう」という安心感につながって、進路検査段階での困難を乗り越える大きな転機となっている。

オープンキャンパスとは別に実施している個別説明会も同様で、教職員と直接話せる点などが評価されており、進学に対する不安の軽減につながっている。奨学金制度に関する個別説明は、家族の経済的負担への不安を和らげ、専門学校への進学を後押しする重要な支援となっている。

一方、「高校での進路ガイダンス・体験」や「入学前プログラム」は今回のアンケート・ヒアリング調査では評価されていなかった。アンケートでは「あればよかったと思う支援」として「入学前の進路情報の提供や相談」が挙がっており、これらの取り組みが実施されていることを高等学校の教職員や学生・保護者へ十分周知できていない可能性がある。通信制高校に対してもオープンキャンパスより早い段階で情報や体験機会の提供を積極的に行うことで、困難を抱える生徒の進路選択の支援につなげることが求められる。また、入学前プログラムについても通信制高校の生徒向けに内容や位置づけを再検討し、入学決定から実際の入学までの不安な期間に提供するプログラムとして充実させることで入学前の学習面および心理面の困難を軽減できる余地があると考えられる。

イ. 入学後

入学後から在学中にかけての支援の中で、最も評価が高かったのは経済的困難に対応する「奨学金・経済的な支援」であった（3件）。入学前に支給決定した奨学金の手続きだけでなく、入学後の利用相談や申し込みにも対応しており、在学中に経済状況が変化した場合の困難解消にも役立っている。

在学中の最大の困難要因である心理面での支援は、「生活全般の相談」や「就職サポート・キャリア相談」が評価されている。健康状態に関することからボランティア・アルバイト等の校外活動、就職まで、学生のあらゆる相談に親身に対応してもらえるとの声があり、心理的困難の解消に大きく貢献している。一方で、こうした支援は主に担任教員による個別対応に依存しており、学生・教員それぞれの状況や困難の内容によりばらつきが生じている。状況に応じて各分野の専門家に支援を求めることもできるが、実際の相談窓口は担当教員となることが多い。

当法人では学生が直接申し込むことでカウンセラーとの相談が可能な「総合支援室（学生相談窓口）」を設置しているが、今回の調査ではその利用実績を把握することはできなかった。身近な教員の対応で十分に問題が解決され、専門家に相談するに至

っていない可能性も考えられる。一方で、メンタルケアやカウンセリングの充実を求める声も挙がっており、困難が生じた際に学生が相談できる体制が整備されている点については、評価できる。

学習面の支援としては授業、「補習・個別指導サポート」を行っているが、アンケートで評価は得られていない。これは入学後に専門学校の学習の難易度が当初の予想ほど高くないと学生が認識し、支援を必要とせず自発的に学習へ取り組みたいためと考えられる。また、教員が授業に多様なツールを活用し取り組みやすい工夫をしていることも困難軽減につながっている。

一方、アンケートでは入学後に受けて良かったサポートを「特にない」とした人が最も多かった。例えば、今回の調査ではキャリアサポート室で卒業後のフォローまで手掛けていることも、すべての学生に十分に認知されていない状況がみられた。必要なサポートが存在しているも、その内容や利用方法が学生に十分伝わっていないために、活用に至っていない可能性も考えられる。あらためて、各種サポートの存在や役割について、学生への認知度を高めていく必要があるだろう。

5. 今後に向けての実践的提言

ここまでの調査と分析を通して、通信制高校出身の専門学校生が抱える困難の実態と、現行の支援策に対する評価を明らかにし、課題を導出した。今後、より多様で複合的な困難を抱える通信制高校出身者たちが、次の学びの場として地域の専門学校を選択し、キャリア観や職業意識を醸成しながら自立していくために、どのような支援施策が必要となるだろうか。

本章では、地域密着型人材育成モデルの構築に向けて、これまでの調査結果を踏まえた上で、入学前から卒業後までを通した支援の方向性および具体的な支援内容について、実践的な提言を行う。

（1）柔軟な学びの設計とスキルアップの支援

通信制高校の自由度の高い生活リズムから専門学校の規則的なスケジュールへの適応は、入学前後の学生にとって大きな心理的・生活上の負担となっている。苦勞しながら徐々に適応していく学生も多々いるが、この生活上の負担を少しでも軽減できるような学習方法を提供し、より多くの高校生が入学を前向きに検討し、さらに入学後も安心して学びを進められる学校になることが必要である。具体的な方策を以下に挙げる。

ア. 柔軟な履修・進学モデルの導入

単位制を用いた「履修や進学回数や学生自身で選択できるプログラム」を導入し、通信制高校の時に培われたような柔軟性のある学習スタイルをとれるようにする。急激な生活リズムの変化を避けることで、最速的な適応が可能になる。オンライン受講も併用して取り入れることで、通学に伴う心理的負担や対人関係に対する不安の軽減を図ることもできる。

イ. デジタル教材を活用した学習定着支援

学習に対する苦手意識や学習習慣の定着に不安を抱える学生への入学後の支援として、自身のペースで短時間で学習に取り組みめるYouTube等の動画コンテンツ・デジタル教材の提供も有効である。LMS（学習管理システム）と連携させることで、数分でも取り組んだ学習経験が可視化され、積み重ねによりスキルアップを実感することにより、自己肯定感や学習意欲の向上と困難解消につなげることが期待される。

（2）心理的ハードルを下げる「伴走型」コミュニケーション支援

通信制高校出身の学生の多くは、進学前後に強い対人不安や将来への不確実性を抱えている。調査からも、進学をあきらめかけた経験や、学方面・休養面・人間関係への不安が進学時の大きな心理的障壁となっていることが明らかになった。一方で、既存の相談窓口はすべての学生に十分認知されているとはいえず、教員個人の対応に依存した支援体制には、負担の集中や対応のばらつきが生じている可能性がある。

これらの課題を踏まえ、入学前から卒業後まで切れ目なく学生に寄り添い、心理的ハードルを下げてながら段階的な自立を支援する「伴走型」のコミュニケーション支援体制の構築が求められる。

ア. 入学前から利用可能な相談・連絡プラットフォームの整備

入学前の段階から、専門学校と学生が継続的につながることができるオンライン相談・連絡ツールを導入する。進学に対する不安や生活面の相談などを気軽に発信できる環境を整えることで、入学前の心理的負担の軽減と早期の不安解消を図る。

イ、チャットベース相談の活用

「対面では相談しづらいが、文章であれば相談しやすい」という学生の声を踏まえ、チャットやメッセージ機能を活用したA I等を用いた相談体制を構築する。これにより、時間や場所を問わず、学生が気軽に相談できる環境の整備が可能となる。また、相談内容を空欄な悩みや不安も早期に拾い上げることができ、深刻化の防止につながる。

ウ、担任から専門家への多層的対応体制

通信制高校出身の学生が抱える心理的困難は、進学前後の不安から在学中の人間関係・学業・進路に関する悩みまで多岐にわたり、その深刻度や支援ニーズも個々に異なる。こうした多様な状況に対応するためには、担任だけでなく単一の相談窓口による対応ではなく、サポート教員の配属や困難の程度や内容に応じて総合支援率による看護師、カウンセラー等の専門職による支援を段階的に提供できる多層的な支援体制の構築が必要となる。本体制は、在学中に限らず卒業後も一定期間利用可能とすることで、就職後や転職時に再び高まりやすい不安への対応を可能とする。

(3) コミュニティの形成とキャリア支援

インタビュー調査において、通信制高校出身者同士で交流できる機会を求める声が複数確認された。同じ育長や困難を経験してきた仲間との存在を知り、気持ちや情報を共有できる場を持つことは、孤立感の軽減や心理的安全性の確保に有効であると考えられる。

ア、交流によるつながりづくり

通信制高校出身の在校生を対象とした交流機会を意図的に設け、共通の経験や前歴とした安心感のあるコミュニティ形成を図ることが有効である。

また、対面での交流に不安を感じる学生への配慮として、オンライン交流会やメッセージアプリ等を併用し、参加形態を柔軟に選択できる仕組みとすることが望ましい。これにより、心理的ハードルを下げ、無理のない形で人とのつながりを持つことが可能となる。

さらに、こうした交流の場に参加した卒業生にも参加してもらうことで、在校生が身近なロールモデルと出会い、自身の将来像やキャリア形成について具体的なイメージを持つ機会となることが期待される。通信制高校出身という共通点を持つ先輩の経験談は、進路選

択や就職に対する不安の軽減に寄与するとともに、「自分にもできる」という自己効力感の醸成につながる。

イ、体験的な学びを通じた社会との関わり

従前から実施している地域イベントやボランティア活動に加え、若者の関心が高い分野の企業・団体と連携した体験型の取り組みを展開することも有効である。実際の現場での活動を通じて社会との接点を持つことで、自身の役割や成長を実感しやすくなり、その満足感や達成感が自己肯定感の向上につながると思われる。

ウ、校外活動を通じた居場所づくり

地元企業等でのアルバイトについても、学校・家庭以外の「第3の居場所」として機能する可能性が高い。単なる取入給付にとどまらず、社会性や敬労意識の形成、仕事理解を高めるキャリア探索の機会として位置づけ、学校としても情報提供やマッチング等の側面支援を行うことで、地域に根差した人材育成と定着支援の強化が期待できる。

(4) 「通信制高校 × 専門学校」による連携施策

通信制高校に在籍する生徒の中には、学方面・心適面・生活面に不安を抱え、卒業後の進路選択に際して大きなハードルを感じている者が少なくない。本調査においても、専門学校進学を検討する段階で「進学をあきらめかけた経験」を持つ生徒が多数確認されており、次の学びの場へ円滑に移行するための継続的な支援体制の必要性が示唆された。こうした課題に対応するためには、通信制高校と専門学校が個別に支援を行うのではなく、進学前から卒業後までを見据えた連携体制を構築し、切れ目のない支援を提供することが重要である。具体的には、通信制高校在学中から専門学校の教職員が関与する「進学準備型連携プログラム」を実施することが考えられる。

ア、日常の学びの場における連携

通信制高校のスクーリングの登校時を活用した専門学校による出前授業やオンライン体験授業、専門学校に進学した卒業生との少人数制の座談会や進路相談等を通じて、専門的な学びや学校生活の実態を事前を知る機会を提供することで、「いきなり進学する場所」ではなく、「少しずつ慣れられる」、「顔の見える学びの場」にすることで進学に対する心理的ハードルの低減を図る。

また、通信制高校の進路指導担当教員と専門学校の伴走支援担当者が定期的に情報共有を行い、生徒一人ひとりの状況や支援ニーズを踏まえた進路支援を行う体制を整える。これにより、生徒の不安やつまずきを早期に把握し、進学後を見据えた支援の引き継ぎが可能となる。

イ、より参加しやすいイベントの開催

さらに、専門学校のオープンキャンパスや体験学習について、通信制高校生向けに配慮した実施方法「通信制高校生だけのオープンキャンパス（少人数制、個別対応、オンライン併用等）」を取り入れることで、対人不安や生活リズムへの不安を抱える生徒でも参加しやすい環境を整える。

ウ、継続的な連携体制

専門学校在学中および卒業後においても、通信制高校との連携を活かし、卒業生の進路状況や支援ニーズに関する情報をフィードバックすることで、両校が連携して若年者支援の質を高めていく循環型の仕組みを構築することが望ましい。

これらの連携施策を通じて、通信制高校生が安心して次の学びのステージへ進み、地域に根差した専門学校でキャリア観・職業意識を育みながら自立していくことが期待される。通信制高校と専門学校の連携は、進路選択の多様化に対応するだけでなく、地域における若年者の学びと就労を支える持続可能な人材育成モデルの中核を担う取り組みとなる。

おわりに

本調査では、通信制高校出身の専門学校生を対象に、高校在学中から専門学校進学、在学中、さらには卒業後を見据えた経験や課題、支援ニーズについて、アンケートおよびインタビューを通じて把握した。

調査対象者は自学自習を基本とする通信制高校での学びを通じて「自立学習力」や「自己管理能力」といった専門学校や社会で生かせる貴重な強みを育んでいる一方、小学校・中学校時代での経験に起因する低い自己肯定感の中で環境変化への強い懸念を抱えながら専門学校に入学し、その適応過程で特有の心理的・学習的ハードルに直面していることが明らかになった。

インタビューでは家族や友人、学校の教職員といった身近な人物との経験が多く語られ、対人不安を抱える若者にとっても、進学の意思決定や学びの継続など困難な場面では人との関わりが重要な役割を果たしていることが浮き彫りになった。

近年、A IやICT技術の普及により学びの選択肢は広がり、多様な有見を持つ若者が学べる環境も整備されつつある。しかし困難な場面は依然として存在しており、「人による支援」は継続的に求められる。今後こうした最新技術を活用しながら、当法人が築いてきた人的支援のノウハウやネットワークも大切にしながら「地域の温度が感じられる新しい人材育成の形」を目指していくことが必要であることを、本調査で改めて認識した。

最後に、本調査の趣旨に賛同し自らの貴重な経験を語ってくださった学生および卒業生の皆様に深く感謝の意を申し上げます。調査で得られた知見は少数の調査対象者によるものであり、今後さらなる検証や実践を通じて検証させていく必要があるが、本調査が通信制高校出身の若者の理解を深め、次年度以降のカリキュラム開発や支援プログラムの具体化、さらには地域に根差した人材育成の推進に寄与する一助となれば幸いです。

資料編

文部科学省委託事業
令和7年度「専修学校による地域産業人材育成事業」
（人口減少地域の職域人材を確保するための専修学校振興プログラム）
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域産業人材育成モデルの構築事業

通信制出身専修学校生
ヒアリング調査報告書

学校法人V17学院
〒754-0921 山口県山口市小国真奈町2番24号

●本書の保存と無断で転記、複製することは禁じます。

事前アンケート

質問と回答 回答者9名

※複数回答可能な質問に割合の合計が100%を超えています

【Part1】通信制高校について

1-1. 通信制高校を選択した理由をおしえてください。（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
全日制での学習が難しかった	3	38%
人に勧められた	3	38%
自分のペースで学びたかった	2	22%
通信制なら自分のやりたいことができると思った	2	22%
学校の雰囲気があった	1	11%
家庭や仕事の事情があった	0	0%

1-2. 通信制高校での学習スタイルをおしえてください。（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
スクーリング（対面授業）中心で学習	6	67%
教材や動画を挟んで、自学で学習	4	44%
個別指導・マンツーマン授業などのサポートを利用	1	11%
サポート校・学習センターを利用	0	0%
オンライン授業・ライブ配信授業を受けた	0	0%
専門分野（IT・デザイン等）の学習・実技履修を受けた	0	0%

1-3. 通信制高校に通っていた当時、学校以外で取り組んでいた活動を教えてください。（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
アルバイトをしていた	7	78%
ボランティア・地域活動をしていた	2	22%
習い事・スポーツ・創作活動などに取り組んでいた	2	22%
諸活動やサークル活動に参加していた	2	22%
家事・介護などを担っていた	1	11%
資格取得・専門スキルの修得をしていた	1	11%
学校以外の活動は特にしていなかった	0	0%

1-4. 通信制高校に通って「良かった」と感じた点を教えてください。（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
学習面（例：自分のペースで学べた、専攻ができた、専修科目に柔軟性があった）	7	78%
生活面（例：通学に公共交通の自由があった、自分の時間と生活ができた）	7	78%
人間関係（例：先生が丁寧にサポートしてくれた、友人との関係がよかった）	2	22%

1-5. 通信制高校で「困難だった」と感じたのは、どのような面ですか？（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
人間関係（例：友人をつくる機会がなかった、学校や学校上の関係りがいなかった）	4	44%
学習面（例：数回の出席がなかった、進捗の把握がなかった）	4	44%
生活面（例：通学、生活の資金がなかった、生活リズムを整えられなかった）	1	11%
その他	1	11%
その他	1	11%

※「その他」の詳細（自由回答）
・経済活動がなかったため、生活費を稼ぐまでに少し時間がかかった

1-6. 全日制高校からの転校経験はありますか？

項目	回答数	割合（%）
ある	5	56%
ない（最初から通信制高校を選択）	4	44%

※転校の理由（0件回答：転校経験ありの5名）
・うつ病
・経済不安
・精神疾患を患い、全1年の学期に3回の休学があった
・1年生の頃から対人関係に不安定感があり休みの日も休むこともあり、高校でもクラスへ馴染めず不登校になってしまったので、入学して1ヶ月ほどで転校があった通信制へ転校した
・通っていた全日制の校風が合わず、通い続けるのが困難になった

【Part2】専門学校への進学について

2-1. 専門学校への進学を考え始めた時期はいつですか？

項目	回答数	割合（%）
高校3年生	7	78%
高校2年生	1	11%
高校卒業後	1	11%

2-2. 専門学校に進学しようと思ったきっかけを教えてください。（複数選択可）

項目	回答数	割合（%）
学校の先生・進路指導で勧められて	4	44%
自分の興味・関心のある分野を学びたいと思ったから	4	44%
親や家族に勧められて	4	44%
将来の就職を考慮して	3	33%
友人や先輩の影響を受けたから	1	11%
労働市場や社会の状況（求人・将来性など）を考慮しながら	0	0%

2-3. 専門学校を選んだ理由は何ですか？（複数回答可）

項目	回答数	割合（％）
就職に強いから	5	56%
通いやすかった	4	44%
実習が充実していたから	3	33%
学びたい専門分野があった	2	22%
通信制高校から受験しやすい学校だった	2	22%
通信制高校出身でも受け入れてもらえると思った	1	11%
大学より費用が安い	0	0%
午飯や昼飯を聞かない環境だと思った	0	0%
その他	1	11%

※「その他」の詳細（自由回答）
・大学に行ってから1年間は勉強できる気がなかったから

2-4-1. 専門学校進学の際、決め手になったことを教えてください。（複数回答可）

項目	回答数	割合（％）
学校説明会・見学会の内容	9	100%
通学ができるか	2	22%
就職率・資格取得率	2	22%
先輩のアドバイス	1	11%
口コミ・インターネットの評価	0	0%
学費・奨学金制度	0	0%
通信制高校出身者への理解・配慮がある	0	0%

2-4-2. 上記の質問でお答えいただいた回答の中で、専門学校進学の際「最も決め手」になったことを一つ教えてください。

項目	回答数	割合（％）
学校説明会・見学会の内容	7	78%
通学ができるか	1	11%
先輩のアドバイス	1	11%
就職率・資格取得率	0	0%

2-5. 専門学校への進学について、相談した人はいますか？（複数回答可）

項目	回答数	割合（％）
家族（親・きょうだい）	8	89%
学校の先生（担任、進路指導の先生など）	6	67%
友人・友人	5	56%
中学や高校の先輩	6	67%
専門学校の先生、スタッフ	6	67%
専門学校の先輩、同級生	6	67%
カウンセラー（スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど）	0	0%
特に相談していない（自分で決めた）	0	0%

3

2-6. 進路を考える中で、進学をあきらめそうになった経験はありますか？

項目	回答数	割合（％）
ある	5	56%
ない	4	44%

※あきらめそうになった理由（自由回答：あきらめそうになった経験がある方）
・学力
・高校3年の修業を留めて働き始めたため
・高校生の時は昼寝ばかりで、人とあまり関わらない生活を選ばなかったため
・アルバイト以外で世帯人と関わっていなかったため、新しい環境に行きたくなかった
・考えすぎて、視野が狭くなったから

【Part3】専門学校進学時の困難要因（①学習面）

3-1. 専門学校に入学前、学力に不安はありましたか？

項目	回答数	割合（％）
とても不安だった	3	33%
少し不安だった	3	33%
あまり不安はなかった	3	33%

3-2. 学習で不安だった分野は何ですか？（複数選択可）

項目	回答数	割合（％）
国語・数学など基礎学力	6	67%
パソコンやITのスキル	4	44%
実習・実技	4	44%
専門分野の基礎知識	3	33%
不安はなかった	0	0%

3-3. 専門学校に入学して、授業の難易度はいかがでしたか？

項目	回答数	割合（％）
少し難しかった	5	56%
ちょうどよかった	2	22%
予想よりやさしかった	2	22%
とても難しかった	0	0%

3-4. 専門学校で使用する教材や課題の難易度はいかがでしたか？

項目	回答数	割合（％）
少し難しかった	4	44%
ちょうどよかった	4	44%
予想よりやさしかった	1	11%
とても難しかった	0	0%

4

3-5. 専門学校に入ってから、全日制高校出身の人と学力の面で違いを感じることはありましたか？

項目	回答数	割合（％）
あまり感じなかった	4	44%
少し感じた	2	22%
まったく感じなかった	1	11%
とても感じた	1	11%
特に意識したことはない	1	11%

【Part4】専門学校進学時の困難要因（②経済面）

4-1. 専門学校の学費は、どのように準備しましたか？（複数選択可）

項目	回答数	割合（％）
家族の負担や支援	8	89%
奨学金を利用	4	44%
教育ローンを利用した（銀行など）	1	11%
自分のアルバイト収入を充てた	1	11%
その他の借り入れや支援を利用した	0	0%

4-2. 奨学金を利用された方は、その満足度についておしえてください。

項目	回答数	割合（％）
奨学金は利用していない	5	56%
少し満足	2	22%
ほとんど満足	1	11%
とても不満	0	0%

4-3. アルバイトをしている（していた）方にお伺いします。

学業との両立はいかがでしたか？

項目	回答数	割合（％）
問題なく両立できた	6	67%
一部で両立が難しかった	2	22%
アルバイトはしていない	1	11%
両立はとても難しかった	0	0%

5

4-4. 専門学校在学中の学費や生活費について、困難に感じることはありましたか？

項目	回答数	割合（％）
あまりなかった	5	56%
まったくなかった	3	33%
とてもあった	1	11%
少しあった	0	0%

4-5. 専門学校に入学後、予想外にかかった費用はありましたか？（複数回答可）

項目	回答数	割合（％）
特に予想外の費用はなかった	5	56%
教材費が思ったより高かった	3	33%
交通費が思ったより高かった	2	22%
実習・実技の費用が思ったより高かった	0	0%

【Part5】専門学校進学時の困難要因（③心理面）

5-1. 専門学校に入学前、新しい環境に入ることへの不安はありましたか？

項目	回答数	割合（％）
とてもあった	4	44%
少しあった	3	33%
あまりなかった	1	11%
まったくなかった	1	11%

5-2. 専門学校で相談できる仲間（友人）はいますか？

項目	回答数	割合（％）
いる	7	78%
いない	2	22%

5-3. 専門学校に入学して、同級生との関係で難しさを感じることはありましたか？

項目	回答数	割合（％）
あまりなかった	4	44%
とてもあった	3	33%
少しあった	1	11%
まったくなかった	1	11%

6

5-4. 通信制高校出身であることを同級生に伝えましたか？

項目	回答数	割合 (%)
聞かされれば答えた	5	56%
全く話さなかった	2	22%
積極的に話した	2	22%
できるだけ隠した	0	0%

5-5. 専門学校の先生には、気軽に相談することができましたか？

項目	回答数	割合 (%)
とても気軽に相談できる	5	56%
少し気軽に相談できる	2	22%
少し相談しにくいと感じる	2	22%
まったく相談できない	0	0%
相談の機会はない	0	0%

5-6. これまでに、自分に自信がない、または他の人と比べて劣っている、と感じたことはありますか？

項目	回答数	割合 (%)
時々感じていた	6	56%
いつも感じていた	3	33%
全く感じなかった	1	11%
あまり感じることはなかった	0	0%

5-7. 今の生活の中で、規則正しい生活は送れていますか？

項目	回答数	割合 (%)
はい	6	67%
いいえ	3	33%

【Part6】専門学校の総合的印象・有効だった支援

6-1. あなたが入学前に専門学校に対して持っていた期待は、実際に入学してどのように感じられましたか？

項目	回答数	割合 (%)
期待したとおりだった	6	67%
期待以上だった	2	22%
期待以下だった	1	11%

7

6-2. 専門学校での学びに対する総合的な満足度はいかがですか？

項目	回答数	割合 (%)
とても満足している	4	44%
少し満足している	4	44%
少し不満	1	11%
とても不満	0	0%

6-3. 専門学校での生活の中で、通信制高校での経験をどのように活かすことができたと思いますか？（複数回答可）

項目	回答数	割合 (%)
自分で学ぶ力（自立学習力）を活かした	4	44%
人との関わり方・コミュニケーションの経験を活かした	3	33%
自らの抱いた力や自己管理の力を活かした	2	22%
何に活かされたと感じることはなかった	2	22%
通信経験などで身につけた汎用性を活かした	0	0%

6-4. 専門学校が実施する入学前サポートについて、参加して良かった、受けて良かったと思うものをおしえてください。（複数回答可）

項目	回答数	割合 (%)
専門学校でのオープンキャンパス・体験講座	9	100%
給食会制度の個別説明	1	11%
個別相談	1	11%
高校での進路ガイダンス・体験学習	0	0%
入学前教育プログラム	0	0%

6-5. 入学後に「受けて良かった」と思うサポートについて教えてください。

（複数回答可）

項目	回答数	割合 (%)
宿にない	0	0%
奨学金・経済的な支援	3	33%
生活や他の相談（生活用具、ボランティア活動、アルバイト等）	3	33%
見聞やサポート・キャリア支援	0	0%
施設・建物の雰囲気、学習環境のサポート	0	0%
先生、先輩への相談	0	0%
給食支援等（学生相談室等）の個別相談	0	0%

6-6. 総合支援策（学生相談室等）の個別相談を利用したことはありますか？

項目	回答数	割合 (%)
ない	9	100%
ある	0	0%

8

6-7. 入学前から卒業までの期間で、「あればよかった」「もっと充実していたらよかった」と感じるサポートはありますか？（複数選択可）

項目	回答数	割合 (%)
給にない	4	44%
メンタルのケア・カウンセリングの充実	2	22%
在学中の学習面のサポート	1	11%
入学前の進路情報の提供や相談	1	11%
同じ境遇の仲間とのつながり・交流	1	11%
卒業後のフォロー	1	11%
進路面での支援の充実	0	0%
卒業後の進路・キャリアに関するサポート	0	0%

6-8. 専門学校在学時のあなたにとって、最も効果的だったと思うサポートを一つ、教えてください。

項目	回答数	割合 (%)
学習面のサポート	3	33%
人間関係のサポート	3	33%
生活面のサポート	1	11%
経済面のサポート	1	11%
特になし	1	11%

【Part7】今後の意向等

7-1. 卒業後（卒業生の方は今後）の希望についておしえてください。

項目	回答数	割合 (%)
就職を希望（県内でも県外でも）	4	44%
就職を希望（県内で）	3	33%
現在の職場に継続して勤務したい	1	11%
まだ決まっていない	1	11%

7-2. 地域への愛着はありますか？

項目	回答数	割合 (%)
どちらともいえない	3	33%
少し愛着を感じる	3	33%
まったく愛着を感じない	2	22%
あまり愛着を感じない	1	11%
とても強愛着を感じる	0	0%

9

インタビュー記録（要約） ① Aさん

1. 概要と専門学校への進学経緯

現在、ホテルブライダル科の1年生。

過去に不登校を経験したが、自らの意思で再び学校へ通い、通信制高校へ進学。高校時代の修学旅行でホテルに宿泊した際、部屋のトラブルをすぐに対応して解決してくれたホテルマンの姿に感動したことで、将来は自分もホテルマンになりたい、という思いが湧き、ホテルマンを目指す決定的なきっかけとなった。この目標を見据え、ホテル関連知識やビジネスマナーを学ぶことを目的として専門学校に進学。

2. 困難と悩みの発生および克服への道のり

Aさんにとって、中学時代の不登校経験と学習面への不安が大きな困難となっていた。

【直面した困難】

① 中学時代から不登校に

中学校の入学式を欠席。1週間後に通学するも、すでにできあがっている友人同士の輪に入れないと感じたことや、小学校時代から徐々に勉強についていけなくなり、周囲との学力差を感じていたこともあり、学校生活に魅力を感じず、程なくして不登校になった。不登校中は、家で毎日オンラインゲームを生活を送っていた。

② 学習への苦手意識と不安

学校での教科書に沿った勉強が苦手。勉強に関しては、現在も自主的に学習に取り組むことに若干の困難を覚えている。

【困難を乗り越えた方法と解決】

① 「反面教師」による自己克服

中学時代に夢中になっていたオンラインゲームの世界で、「画、タバコ、ギャンブル」に深く依存する大人に出会う。Aさんはその人物を自分に重ね合わせ「学校に行かず、ずっとネットゲームを続ける生活を送ると、将来この人と同じようになるのでは？」という焦りを感じたことをきっかけに、徐々に中学校に通い始め、勉強と向き合うようになった。

10

②通信制高校への進学と目標設定

通信制高校の存在を知り、自らの意思で選択する。高校生活は部活動（eスポーツ）、資格取得（Excel）、アルバイト、ボランティアなど特力的に活動する。修学旅行をきっかけに、ホテルマンという具体的な夢（ロールモデル）を見つけたことで、自分自身の中で目標が明確になり、実現させるため専門学校への進学を決める。

③学習サポートの活用

専門学校での様々な分野に関する授業や、教員による工夫されたクイズ形式での記憶力テストなどを通して、学習や知識習得への向き合い方を改めて知る。今までの「勉強」の概念を取り払ったことで、興味のある分野に関する「新しい知識を習得すること」が新鮮で、面白い、興味のあることに変化した。

④学習機会への意欲

自ら学習と向き合うことへの苦手意識を認識しているため、「専門学校で授業後にも勉強する時間をもっと増やす機会があれば、学力アップにつながる」と積極的に解決策を求めている。さらに、学習に基づいたショート動画など、興味のある形式であれば自発的に学習に取り組む意欲を見せている。

【困難を乗り越えたことによる成長】

Aさんは、現在の専門学校での何気ない日常「勉強して、友人と話し、一緒にごはんを食べる。ことを楽しいと感じている。特にコミュニケーション能力と自己認識の面で成長が見られる。

①高いコミュニケーション能力

中学時代の不登校を乗り越えたAさんは、専門学校では自ら積極的に周りの同級生に話しかけ、人間関係を構築している。クラスメイトとコミュニケーションや関係性についても「困ったことはない」と述べている。

②将来目標の明確化

過去、学校や勉強から逃げたという反省や、自分を客観視し、将来の道筋を見つめ直した結果、今の姿まではいけない。という意識が芽生え、通信制高校へ進学し、そこでホテルマンという明確な目標を設定するに至った。目標が明確になったことで、今現在も前向きに専門学校での勉強に取り組んでいる。

3. 自己客観視と評価認識

高校時代のアルバイト経験での自身の態度を振り返り、反省する言葉がみられ、しっかりと自分を俯瞰することができている様子が伺えた。また、高校時代にExcel1級の資格試験受験を勧められるも自信がなくチャレンジしなかったとのことだが、今なら前向きに取り組みたい、という前向きな言葉を発する姿勢から、過去の自分より自信がついたことが伺えた。

4. 目指す将来像

自身の人生を変えたホテルマンのように、「焦らず、問題にすぐ対処できる」「お客様の笑顔をキープできるようなホテルマン」を目指したいと明確な目標を語ってくれた。

11

12

インタビュー記録（要約） ②Bさん

1. 概要と専門学校への進学経緯

現在、ホテルブライダル科の1年生。
通信制高校卒業後は就職を検討していたが、親からの「専門学校で資格を取得した方がよい」という勧め、そして自身の「接客への関心の2点を主な理由として専門学校への進学を選択した。専門学校では、実践的な知識（例：レストランでのランチやディナー提供の実技試験など）を学び、特にホテル分野への興味を深めている。

2. 困難と悩みの発生および克服への道のり

Bさんの過去の大きな困難は、高校時代に直面した人間関係の問題である。それに伴い学校を辞めた経験や、家から出られなくなった経験がある。

【直面した困難】

Bさんは高校時代に部活動の関係で寮生活を送っており、24時間同級生や先輩と過ごす環境の中で人間関係の軋轢が生じた。これにより精神的な限界を迎え、学校に行けなくなり、また親に心配をかけたくないという思いが辛い状況を誰にも打ち明けられず、腹痛などの身体的な症状が起こった。

【困難を乗り越えた方法と解決】

①自己認識と意識的な「切り替え」

辛い状況が続いた結果、「今の状態を引きずったままでは誰とも関われない」と自ら気づき、「過去の経験や、辛かった気持ちを引きずってはいけない」と強く意識した。この自己認識に基づき、「なるべく気持ちを切り替える努力をして、前向きに挑戦しよう」という意志を持つことで状況を打破した。

②友人と環境の力

今通信制高校を辞めた後、同じタイミングで高校を辞めた友人がおり、その友人が積極的に遊びに誘ってくれたことが、再び人と関わるきっかけとなった。

③専門学校でのサポート

専門学校に入学し、担任の先生がマンツーマンで話を聞いてくれる機会を設けてくれたおかげで、先生を信頼することができ、徐々に人間関係への不安が解消された。

13

④アルバイトでの実践

高校時代から続けているコンビニエンスストアでのアルバイトを通じて、様々な顧客に対応する経験を積んだ。気持ちが回らないうちに辞職しても、すぐに気持ちを切り替えてリカバーできるようになり、嫌な気持ちを引きずらない前を身につけることができた。アルバイト先の店長からも勤務態度を評価された。

【困難を乗り越えることによる成長】

Bさんは、過去の辛い経験を乗り越えたことで、人間的、社会的に大きく成長したと自己評価し、周囲からも同じ評価を受けている。

①対人能力の向上と不安の軽減

最も大きな成長は、人と関わるようになったことである。以前は対面で人と接することが苦手で対人関係に不安があったが、現在はその不安が軽くなったと実感している。

②精神的な回復力（レジリエンス）

嫌なことを引きずらずに「切り替える」能力を身につけたことで、感情のコントロールができるようになった。

③経験の価値への肯定

過去の辛い経験を、「若いうちに経験できたことで、社会に出てから大きなダメージを受けずに済む可能性を高めた必要な経験であった」と前向きに捉えることができています。

④業務能力の獲得

コンビニエンスストアでのアルバイトを通じて、様々な仕事で必要なマルチタスク能力を身につけることができた。

14

インタビュー記録（要約） ③Cさん

1. 概要と専門学校への進学経緯

現在、情報ビジネス学科の1年生。

高校時代は週1回のみ登校する通信制高校に3年間通う。高校卒業時、今までの生活リズムでは社会での就職は難しいと判断し、「生活リズム習慣を作っておいた方がいい」と考え、専門学校への進学を選択した。情報ビジネス学科では、マーケティングや簿記、PBL（課題解決学習：カードゲーム制作など）といった実践的な内容を学んでおり、特に簿記やPBLといった「解ける」「面白い」と感じる授業や学校生活にとても満足している。

2. 困難と悩みの発生および克服への道のり

Cさんが薬品に直面した主な困難は、中学時代での不登校と、その後の高校時代におけるコミュニケーションの欠如であった。

【直面した困難】

①中学時代の不登校

中学時代は人間関係が原因ではなく、単に学校生活のルーティン（毎日通い、勉強し、部活をすること）自体を疑問に感じ、不登校になる。

②コミュニケーションの孤立

通信制高校では学校が週1回で、クラスもなく、人と接したり会話をしたりする機会が極端に少なく、「心が無になっていた」状態だった。Cさん自身は人と話すことが好きな人間であるため、この孤立期間を振り返ると自分にとって、本当に辛い時間だった。専門学校入学前は、毎日の通学や人間関係の構築ができるのかという不安を抱えていた。

【困難を乗り越えた方法と解決】

①アルバイトによる社会参加とリズムの確立

家族以外に誰とも接することや会話をすることがない孤立を打破し、生活のリズムを作るため、通信制高校在学中に友人（中学時代の友人）の紹介で飲食店のアルバイトを開始した。これにより人と接する機会が増え、決まった時間に行動することで生活がかなり安定したと感じている。

15

②意地と楽しさによる通学の継続

専門学校入学後は、新しく学ぶ簿記やPBLなど、心から「面白い」と感じる授業に出会い、聞き逃すことなく授業に参加したい、という気持ちが毎日休まず通学するための大きな心の支えとなっている。また、費が出てくれる学費を無駄にしたいくない、という意味も芽生え、決意を持って毎日の通学を継続している。

③自発的な関係構築と環境の活用

専門学校では、食堂場所を探している時に声をかけたり、少人数のクラス（16名）で隣の席の人と話したりするなど、自然な交流を通じて友人ができた。これにより高校時代に感じていた「無」の状態は解消され、同世代と交流する大切さや充実感を味わっている。

④計画的性と目標設定

周囲の友人が今日通高校を3年で卒業することから、「周りに置いていかれるのが嫌」という気持ちで自身も3年での卒業を目標に設定し、単位取得のためのスケジュール管理を行い、余裕を持って単位を取得した。

【困難を乗り越えることによる成長】

Cさんは、過去の困難な時期を乗り越えたことで、現在の学校生活を非常に高い満足度で送っており、精神的・社会的に大きな成長を遂げている。

①生活の安定と幸福感の獲得

不登校や週1回通学の生活から脱却し、現在は「今が一番楽しい」と断言できるほど充実している。気の許せる友人ができたこと、学校生活のリズムが整ってきたこと、そしてアルバイトで給料を得て、人の役に立てている実感がある事も今の生活の原動力となっている。

②対人コミュニケーション能力の回復

孤立していた高校時代から「転じ、現在は「人と接するのが好き」という自身の本来の特性を活かし、友達との何気ない日常的な会話を楽しめるようになり、コミュニケーションの大切さに改めて気づいた。

③積極性と主体性の向上

クラス内での話し合いや課題において、周囲が行動しない時は「自分が手を挙げて行動しなければ」と感じ、責任感と主体性が育まれ、現在の学習面や人間関係の充実にも繋がっている。

16

④環境への高い評価

Cさんは専門学校での経験を「期待以上」「とても満足している」と評価しており、学校生活の充実が何え、自己肯定感を高めることにも繋がっている。

17

インタビュー記録（要約） ④Dさん

1. 概要と専門学校への進学経緯

現在、情報ビジネス科の2年生。

すでに自転車関連の営業職として就職が内定しており、来月から働く予定。

Dさんはサッカーに打ち込むために金目曜から通信制高校へ転入。将来を見据え、バジコンスキルの習得が後の就職で有利になると考えたこと、また、先に入学が決まっていた友達から学校の雰囲気の良いことを知ることがきっかけとなり専門学校への進学を選択。当初は大学進学も検討していたが、学力面を考慮して断念。最終的に、誰とでも分け隔てなく話せる弛みと、車好きということから営業職を選んだ。将来的な目標として、山口県の店舗の中でトップを取りたいという明確なビジョンを持っている。

2. 困難と悩みの発生および克服への道のり

【直面した困難】

①通信制高校での人間関係構築の難しさ

全日制とは異なり自由登校のため、常に教室にいる人が違い、話す機会が少ないことから、人間関係を築くことに困難を感じていた。交流は修学旅行などの行事の時には制限されていた。

②学力面での不安

通信制高校では自分で自由に教科を選べたため、学習内容が偏り（例：数学Iまでしかやっていないなど）、全日制出身の学生が多い専門学校で学力的に付いていけないか不安を感じていた。

③授業形式への適応

高校時代は時間数が決まっておらず、受けた分だけ単位がつく形式だったため、入学当初、専門学校の90分授業に慣れるのに苦労した。

④通信制への偏見

全日制の友達から、通信制は「甘え」である、自由な時間があって「ずるい」といったネガティブな言葉を直接的あるいはL I N Eで言われた経験がある。

18

【困難を乗り越えた方法と解決】

①学力への不安解消

専門分野（パソコン系）では国語英の基礎科目をあまり使用しないため、入学後すぐに学力的な不安は解消された。

②環境への適応

専門学校に入学後は、毎日同じクラスメイトが教室にいる環境になったため、人間関係を構築しやすくなった。初日の登校日で積極的に自分からLINE交換をしてグループを作成するなど、戸惑うことなく新しい生活スタイルに適応し楽しい専門学校生活を送っている。

③挫折の乗り越え

中学時代に大きな大会前に怪我をして、最後の試合に出られなくなるなどの挫折を経験する。その後もケガや故障でサッカー選手になりたいという夢を断念することにも繋がったが、そのような経験から「完璧を目指さない」という考え方や、「うまくいかなかったことを、ずっと引きずっていても何も変わらない」と前向きに切り替える力を身につけた。

【困難を乗り越えたことによる成長】

①高いコミュニケーション能力

幼い頃からサッカーを通じてチームプレイが必要である環境に身を置いてきたことから、コミュニケーションを取ることや意思疎通を図ることが得意と自負している。人見知りすることなく、自分から積極的に話しかけるタイプで、クラスの中でリーダーシップを取ることを厭わない。持ち前のコミュニケーション能力の高さが、キャリアプランを考える上での軸となった。

②将来目標の明確化

目標達成のために行動を戦略的に選択する力があり、アルバイトを選択する際も、接客力を補うために飲食店で働き、現在は体力的なものを補うため清掃業を選んでいる。選択するすべての行動が、将来の目標を明確化するために繋がるという先を見通す視点を持っている。

③自己客観視と課題認識

目指していたプロサッカー選手への道を諦めた際も、冷静に自身の長所やパフォーマンスを俯瞰し、他の選手と比較することで、これ以上努力を重ねても到達できないことを認識し、別の道へ切り替えた。挫折と気づき、ひとつの経験として

糧にする強さを持ち合わせている。専門学校生活では、履歴書の作成など具体的なキャリアサポートが支えになったことや、先を見通し、卒業後の転職サポートなどの社会的な変化に対応したフォローがあれば、安心感につながると提案しており、自分を含め周りの人の状況も考慮に入れた意見があった。

インタビュー記録（要約）

⑤ E さん

1. 概要と専門学校への進学経緯

ホテルブライダル科を2年前に卒業。
高校時代、人間関係が上手くいかずうつ病を患。それにより通信制高校へ転入。其の途中でホテルブライダルを学ぶため専門学校へ進学。新卒で冠婚葬祭業に就職したが、仕事内容や企業文化が合わず、体調を崩し約半年で退職。現在は関西に住み、人材派遣・人材代行業の会社に就職し携帯会社に派遣され、登録業務などを担っている。

2. 困難と悩みの発生および克服への道のり

【直面した困難】

①高校時代

人間関係が上手くいかず、うつ病を患。全日制高校から同じ学校の通信制高校へ転校する。生活リズムが崩れ昼夜逆転の生活を送る。

②専門学校での生活と交友関係

生活リズムを立て直しつつあったが、気分も沈みながら登校できない日もあり、卒業までの期間に約3分の1程度学校を欠席。クラスメイトには病気のことを公表しており、そのことで友人との関係性に悩みを抱えながら学校生活を送る。

③就職と病状の悪化

新卒で入った冠婚葬祭業では、慣れない環境や仕事について相談できる相手がいなかったため、軽度の適応障害になり職場に行けなくなる。病気が悪化する前に自らの意思で退職を決断した。

【困難を乗り越えた方法と解決】

①現状打破に向けた行動の実行と達成

打ち込んできたバドミントンを通信制高校でも続けるため、高校教員の父親からの情報提供とサポートで、通信制高校でバドミントン部を立ち上げ活動できるよう粘り強く学校へ交渉。担任の協力を得て、県大会に出場し優勝。全国大会（通信制の部）でもベスト8という結果を残した。

②専門学校への進学と目標設定

親からの勧めがあり、ホテルブライダルを学ぶことに決める。昼夜逆転の生活リズムを立て直すためと、何か将来に繋がるアルバイトを、という親の助言で結婚式場でのアルバイトを開始。専門学校入学までに完全にリズムは戻らなかったものの、持ち前の気合いで何とか生活を立て直し、学校生活を送る。

③担任教諭との関係性の構築

出会った当初から信頼でき、勉強・人間関係・プライベートについて、どんなことでも相談できる担任の存在により精神的な手強いサポートを受けたことが、専門学校を卒業することができたことに繋がったと自身で認識している。

④自己管理能力や客観的視点の成長

自身の体調不良と、その症状を引き起こす原因について、冷静に自己分析しキャリアの方針転換を決断するに至った。その経験を踏まえ今後社会人としてどう自分が歩んでいきたいのかを熟考した結果、親の意向ではなく、自分で意思決定し人生を選択することを決断し、地元を離れ一人暮らしで新しい一歩を踏み出すに至った。

【困難を乗り越えたことによる成長】

今までは親の期待に応えることを重視し、言われたことに従っての行動し続けた結果、失敗することを恐れて「正しい」と思えることを基準に選択してきた人生だったと内省を深めた。うつ病の経験や就職でのつまずきを経て、自分の人生を自分自身で切り開きたいという強い意志が芽生えた。

⑤自己決定と行動力の強化

「正しいこと」ではなく、自分が「やりたいか、やりたくないか」を基準に選択し、失敗も経験になると前向きに捉えられるようになった。

⑥環境の変化への挑戦

自分の人生を変えたい、という強い意志の芽生えにより、前職を辞めた後、山口の家族から離れ、県外へ単身での引っ越しと転職を決行。この経験により行動力が身についたと感じている。

⑦明確な目標

現在の会社での昇進を目指し、仕事にやりがいを感じている。自身の辛い経験（人間関係が上手くいかないことによるうつ病発症）を、同じ状況にある誰かの助けになるような話したいという目標を持っている。

インタビュー記録（詳細：例） Dさん

イ：インタビュー（①②） D：Dさん

イ①： Dさんは今 専門学校で2年生なんですね。
D： はい。 今2年です。
イ①： もう就職決まったんですか？
D： 決まりました。
イ①： おめでとうございます。
D： ありがとうございます。
イ①： 就職先はどういうジャンルのお仕事なんですか？
D： 車販売です。 トヨタの営業です。
イ①： そうなんですね。車が好きなんですか？
D： 車好きですね。
イ①： では、あとは就職を待つばかりですね。今の就職に対する思いはどうですか？
D： 今のところ、早く働きたいという気持ちが強いですね。
イ①： では、社会人迎えるにあたって今から色々準備が必要ですね。
D： はい。
イ①： 先ずはDさんが通信高校を選んだ理由から教えてもらっていいですか？アンケートには「やりたいことができると思った」という項目を選んで回答してくださってるんですけども、やりたいことは何だったんですか？
D： その当時はサッカーに力を入れていて、クラブとか社会人チームに参加してたので、そちらに力を入れたいなと思って。
イ①： なるほど、サッカーはいいからやっていたんですか？
D： サッカーは、幼稚園ぐらいから、地元のスポーツ少年団から入って、で、中学とか。
イ①： 本気でサッカーに全身全霊で打ち込んでいたんですね。
D： そうですね。
イ①： 今はサッカーはやっているんですか？
D： 今はアルバイトとかもあるのであんまりできてないですけど、一定社会人チームには所属していますね。
イ①： 学生さんでもその社会人チームに所属できるんですね。

D： 一応、18歳以上だったら。
イ①： なるほど。部活までは楽しくはないけども、合間を縫ってサッカーを続けている感じなんですね。だから通信制を選んだんですね。じゃあその高校に通いながら、サッカーを一生懸命やっていた感じなんですか？
D： そうですね。
イ①： 生活リズムはどんな感じでしたか？
D： 生活リズムは、早く寝て、早く起きて、通信にも通いながら、ですね。専らからサッカーがある時もあったので。
イ①： では忙しかったですね。
D： そうですね、週4日で、練習は1日3時間とかでですね。
イ①： アンケートの「通信制の時に取り組んでいたもの」もサッカーに取り組んでいたってことなんですね。
D： はい。
イ①： 通信制高校で「困難に感じたこと、困ったこと」は「人間関係を作ること」の選択時にチェックしてくださってたんなんですけども、それはどんな感じでしたか？
D： 全日制と違って、いつも自由登校なので、毎回いる人が違うっていう…あと話す機会がないっていうのが…なので、修学旅行とかの行事で自分から話しかけて仲良くなるとか。
イ①： 修学旅行があるんですね。
D： そうですね、修学旅行が1年、2年、3年、でずつとあるんですよ。毎年あって…2泊3日で、大阪の方行ったり、長崎の方行ったりとか…
イ①： 毎年場所も違うんですね？
D： 毎年違いますね。
イ①： 例えば大阪に行ったら何をしました？
D： 大阪は…そうですね…大阪にいろんな観光とかが多かったです。
イ①： U.S.Jとかも行きました？
D： U.S.Jも行きましたね。あとボランティア活動みたいなのにちょっと参加したりとか。
イ①： では、そういう修学旅行とかのイベントがあると、いろんな人とお話ししてっていう感じだけど、普通の学校生活では何回メンバーが揃うから、せっかくその修学旅行で仲良くなっても、またいつ会えるかわからないみたいな状況なんですね。
D： そうですね。

23

24

D： 対面っていうか、コースがあって、一応進学コースみたいなのに入っていて、その時は対面なんですけど、普段は個人で勉強に取り組んでいる。スクーリングとして…
イ①： 授業の動画などを見たり？
D： そうですね、プリントがあって、自分でそのレポートをやって提出するっていうのが普通なんですよ。
イ①： 学校に行って、レポートを書いて提出して帰ってくる。そういう感じなんですね。
D： そうですね。
イ①： なるほど。確かにそれだと、なかなか話す時間もないですね。そこから専門学校に入ろうと思ったきっかけは何があったんですか？
D： そうですね、一応今がビジネス科なんですけど、今の時代パソコン使えたらかなり有利になるので…そこも考えつつっていうのと、あと友達からの紹介っていうのもあります。先に友達が合格していて、行くことが決まっていた、ここ雰囲気とかとてもいいなっていうので…
イ①： 勧めてくれたんだ。
D： はい。
イ①： では、お友達に進められて、言われたとおりに感じがいらない、面白そうだなっていうことで入学を決めたんですね。
D： そうですね。
イ①： 「学校説明会」についてみんなが参加して良かったっていう評価なんですけど…どういうところがいいと思えましたか？
D： そうですね、説明会は、自分の場合は…今の担任の先生と対面での話だったんです。なので個人の面談になったんですけど、色々、就職のことだったり、教えていただいた。
イ①： では、卒業したらこういう道が見えるっていうのも決め手になった感じなのでしょうか？
D： はい。
イ①： よりどりになったってことは、それまで色々悩んだということ？進路について。
D： そうですね、その前に、大学とかもいろいろあったんですけど、学力面をみて、大学断念したっていうのもあるんですけど…
イ①： そうですか。進学コースに通ってた、って言うてましたよね、色々悩んだ上で専門学校を選んだんですね。実際入ってみてどうでしたか？
D： そうですね。みんなが全日制出身だから、学力的な問題とかで不安があったんですけど…でも、ついていけるので、そこところは全然大丈夫ですね。

イ①： 学力に不安があったんですね？
D： そうですね、個人で勉強っていうので、先生方から教えてもらっているのがなかなかないので、自分で自由に受ける教材を決めていたの。
イ①： ああ、なるほど。では、受けたい教材は自分で決めて受けてから、どうしても自分の好みに偏るといいますか？
D： ですね。高校3年とかだったら数面とかやるじゃないですか。でも自分の場合数冊までしかやらずに。そういうので学力面では不安あったんですけど、パソコン系なので国英英、あまり使わなくて。
イ①： では入ってすぐその学力に対する不安は解消された感じですか？
D： はい、解消されました。ただ最初は90分授業とかいうのは慣れなかったですね。
イ①： 座って先生の話を聞くとか？
D： そうですね。通信制は時間が決まってるんですよ。受けた分だけ、30分だったら30分がつくみたいな感じ。
イ①： 時間数をプラスしていく感じなんですね。今日30分、明日20分でプラス50分みたいな。
イ①： それは最初、90分座るのが大変でしたね。
D： 最初はそうですね。
イ①： 生活スタイルが、ガラッと変わった感じですね。
D： そうですね。
イ①： 実際、毎日同じクラスの人たちと会う事で人間関係はどうでした？
D： そうですね、今までと違って、毎日話せるので、休みの日遊びに誘って遊んだりとかけることもできるので。
イ①： ああ、そうですね。やはり関係性を作りやすいですか？
D： 作りやすいですね。毎日一緒にいるとしゃべるので、2年間一緒なんで。
イ①： じゃあDさんは結構自分から話しかけるタイプ？
D： そうですね、自分から話しかけることが多いと思います。最初入学して1回目の勉強かな？その時にもう自分からLINE交換して。
イ①： そういうのには、ためらいがなく、人見知りして話しかけられないっていうことは一切なく？
D： 一切ないですね。人見知りも全然なくて。
イ①： ではコミュニケーション取ったり、意思の疎通を図ったりするのが得意なんですね。
D： 比較的、得意な方だとは思いますが。

25

26

イ② : 仕事にも活かれますね、きっと。
 D : そうですね。だから営業を選んだっていうのもあるんですけど、人としてやべっておきたいっていうのがあるの。
 イ① : しやべっておきたいんですね。
 D : そうですね。自分の得意なこと生かしたいっていうの。
 イ① : すごい！ちゃんとその自分の強みを分かっているんですね。
 D : 昔から人見知りする方じゃなかったの。自分 の好きな「車」っていうのと得意な「車」。を話かせるっていうのを臨を選んだっていうのはありますね。
 イ① : ひさんはすごく自己肯定感が高いというか、今まで自信がないって感じたことや、人より劣っていることがないっていう回答だったんですね。そういうのも、全くない？
 D : 全くないですね。何でも自信ある、みたいな。どちらかといえば、自信過剰って言われるレベルなんです。だから何でもやれば、うまくいくみたいな、失敗しても気にしないし。
 イ② : 失敗って何かありますか？
 D : 飲食店のアルバイトしてた時に、初日に水こぼしたりとかですけど、その時は少し気にしましたが、すぐに立ち直ったんで。
 イ② : どうやって立ち直るんですか？
 D : いや、もう初めてのことだから、失敗してもしょうがないっていう。次、失敗しなかったらいいゆえって。
 イ① : ああ、すごい。そうやって思えるのはどうしてですか？
 D : どうして？ やっぱり完璧を目指さないっていうのはありますね。
 イ① : なるほど、いいですね。
 D : 完璧な人はいないの。
 イ① : そういう感覚というか、考え方は何歳くらいから意識したの？
 D : そうですね。高校1年くらいからですかね。挫折してきたので、サッカーとかの面で。
 イ① : ちなみに、聞いてもいいならどんな挫折があったか教えてもらえますか？
 D : そうですね。大きな大会、県大会とかあるじゃないですか。その前に怪我して出れなくなったとか。で、復帰したけど、みんなは練習してるからうまくなくて、自分だけできなくて、スタメンに反れないとかいう、そういう挫折とかはありましたね。中学3年の最後の大会とか出ていないで。
 イ① : ああ、それは悔しいですね。今までずっと積み上げてきたからこそ、出たかったですね。

27

D : 出たかったですね。
 イ① : そういうのって臨機応変さだったりするじゃないですか？私もしその立場だったら、ずっと引きずってる気がするんですよ。それはどういうことで切り替えたり、乗り換えたりですか？
 D : そうですね。サッカーで言うとやはりその後引きずるんですけど、戻っていか、もっとう上に行くっていうので練習する。常に練習しておくっていうのがそうです。
 イ① : ああ時の気持ちほひとまず置いて、前向いてやっていくっていうことなんですね。
 D : そうですね。ずっと引きずってもうまくいかない。
 イ① : なるほど。では、サッカーをメインにしたいくて、通信を選んだがサッカーを廃棄してきたけど、今後プロ選手になろう、とかいうのはもう自分の中で整理がついたってことなんですか？
 D : 自分と 一緒にずっとやってきた人がいるんですけど、その人が大学まで、今プロ 1年以内定が出までで、そういうのを見ると、まだまだ自分じゃダメだっているのがあって、ずっと追い付いててもダメだっているの。
 イ① : じゃあ、まだ自分はあのレベルには達していないって思ったってこと？
 D : そうですね。
 イ① : だからサッカーの道でずっと食べていくっていうよりは、また別の方向でやっていくっていう風に切り替えたんですね？
 D : 切り替えたはね、そこは。
 D : それは自分の中で考えて？誰かに相談して？
 D : いや、個人です。
 イ① : 異りと比べて見て、冷静に自分の立ち位置を見る、俯瞰する日があるってことだね。自分、ちょっとそこはよくわかんないんですけど。
 イ① : なかなか自分のレベルっていうか、自分が今の立ち位置にいるのって見極めるのが難しい気がするんですけど、もっとできるんじゃないかとか、まだまだ若いからもっと頑張れるとか 思わなかった？
 D : その時は思わなかったですね。もう色々怪我もして、なかなかパフォーマンスも上がらないので、そういうのも考えて、あと、プロと普通のアマチュアだと体格差。自分は身長もある方じゃないんで、そういう面でもダメだっているのがありますね。今は楽しくやれたらいいっていう、ま、趣味程度ですけど。
 イ① : なるほど、それで今のひさんがいるということですね。
 イ② : 今の目標は何ですか？

28

D : 今は営業で、来年からで十十と社会人で営業でトップ取りたいっていう。山口県のとこベクト全体でその中でトップ取れるよう頑張りたいっていうのはありますね。
 イ① : すごい！とれると思います！
 D : そのためにコミュカとかも、もっとあげていたらなっていうのはありますね。
 イ① : なるほど。あと、入学後受けて良かったのは「就職サポートやキャリア相談」っていうお答えも頂いてるんですけども、それは何か具体的に覚えてることがありますか？
 D : そうですね。キャリアサポートでは履歴書の作成などを手伝ってもらって、そこはすごく力になってもらったので。
 イ① : じゃあ、必要な書類の書き方などのサポートをしてもらえてよかったっていうことなんですね。
 D : はい。
 イ① : なるほど。そして「専門学校の生活の中で充実して良かったこと」が「卒業後の フォロー っていうことですけども、今後卒業した後はどんなフォローをして欲しいですか？
 D : そうですね。自分の場合はトヨベクト一択でいいと思っているんですけど、中には配属とかする人もいないじゃないですか。なので、その配属のサポートが積極的にあったらいいなっていうのはあります。
 イ② : それならキャリアサポート室でやっています。卒業生のフォローも。本人が言ってきたくないとなかなか難しいんですけど、ひさんみたいに、ハツと決められる人と、なかなか悩みなながら決めて、やはりダメだった、という方は、そこから連絡があると、来てもらって、お話を聞いて、どこか違う企業さんと…、というそういうサポートもしてるので…
 イ① : 何年経っても、相談できる場所があるってきくと、気持ちが楽になる感じ？
 D : 安心感のようなものがありますね。転職っていうのは、多分今の時代あると思うので。自分の年代の人って、ひとつの場所ですと働くって多分ないと思うんですよ。
 イ② : 社会的に、転職するのが普通みたいな感じになってきているから…
 イ① : 自分のことだけ考えて、ではないんですね。友達の中ではリーダーシップを取るタイプですか？
 D : そうですね。リーダーシップ取るのは好きですね。みんなで今度遊びに行こうとかよく誘ったりがします。
 イ① : そうなんですね。今バイトはしているんですか？

29

D : 今、バイトしてますね。体力的なものを揃いたいっていうので…。今は消病室を。
 イ① : 体力的なことを揃えたいからって理由で、バイトを探したんですね？
 D : 前は「すき家」で1年間働いていて、その時は、その接客力を高めたいっていうので選びました。
 イ① : そこも計画的に、目的や意図があつてのバイト探したんですね？
 D : はい。ある程度、接客業って忍耐力も必要じゃないですか。それに忙しい時 200 人来るのに、2人で回すとか。
 イ① : 接客は慣れたから、次は体力ってことですね。なるほど。そこも計画的なんですね。
 D : 話は変わりますが、入学後すぐに通信生の人たちと、座談会的なことがあったのもいいなと思いますか？別にそこは必要ない？
 D : なんか、通信制に通っていたことを隠していたっていう人もいないじゃないですか。だから逆にそういうのはなくていいのかもしれない。自分は隠さないんですけど、でも自分も言われてきたんですけど、やっぱり全日制の人からすると、通信って、なんか甘えとかあるじゃないですか。毎日行かないといけないものなのに、毎日行かないっていうので、自分も結構たくさん旧制の人たちから、言われたりしてきたんで、気にはななかったけど、自分の道を選んだだけだからっていうので…ま、言われても、そうだなっていうくらいです。
 イ② : そこで気にしないところも、素晴らしいですね。
 D : でも、気にする人も中にはいるんで、自由な時間あっていいよな、といううなことは言われたし。ねたみて言うんですか？なんかそういうのは結構言われてきました。
 イ② : 直接そんなことを言われるの？
 D : 直接言われたり、LINEで言われたりとか。お前だげずいな、みたいな。
 イ① : ずるいね、っていう感じなんですね。好きなことできていいな、って。
 D : でも自分からしたら、全日制選んだのも自分で選んだんだから、って。ま、言われる筋じゃないとは思ってますけど、気にせず。自分も最初は全日制なんで。
 イ① : ああ、そっか。途中から通信制で。
 D : 最初、全日制で。その頃挫折も色々あって。
 イ① : じゃあ両方の生活を知ってるわけですね。

30

D : 全日制のキツさも分かるし、通信制は通信制でまた学業が大変なんで、
自分で何もかもしないといけないから。自分でやらなかったら、進まない
し。全日制はとりあえず、学校に行っとけば授業があるから、参加さえし
ときゃいいっていうのがあるんですけど。

イ① : なるほど、それぞれの大変さがあるんですね。
では、あと数ヶ月の学校生活をどんな風に過ごしていきますか？

D : そうですね。学べることは学んで、友達と遊べる時は遊んで、学生生活謳
歌したいなって思います。

イ① : そうですね、ぜひ謳歌してください！

5-3 地元中小企業調査 資料3



目次

1. 事業の趣旨	1
2. アンケート調査の目的	1
3. 地元中小企業ニーズ等のアンケート調査	1
3-1. 調査方法	1
3-2. 調査項目	2
3-3. 調査結果	3
4. 講評	69

1. 事業の趣旨

20 歳人口の減少や地域格差の進行により、地方の若年層が希望する進学先を地域内に見出せず、県外進学や就職によって地域を離れる傾向が強まっている。その結果、地域産業における人材の空洞化や生活サービスの維持困難といった課題が顕在化しており、地域に根差した教育機関がその受け皿として果たすべき役割はかつてなく大きくなっている。特に、通信制高校など多様な背景を持つ若者に対して、接続性の高い進学ルートと職業的自立につながる実践的な学びの場を提供することが急務である。

本事業は、通信制高校との連携を基盤に、入学前からのキャリア教育、在学中の柔軟なプログラム設計(オンライン学習・コース選択制・企業連携型の導入)、AI や ICT を活用したデジタルリテラシー育成、地域企業(拠点施設)との協働を通じた連携授業などを展開し、「県内初の AI×データサイエンスを導入したクロスオーバー型新コース」を目指すとともに、「地域に選ばれる専修学校」づくりを推進するものである。また、卒業後のキャリア定着や地域貢献までを見据えた「育成・伴走・定着」の一体型支援体制を構築し、若年層の社会的移動の促進と地域産業の人材確保・活性化に資する教育モデルの構築を目指す。

2. アンケート調査の目的

本業務は、地域中小企業における人材受入に関するニーズ、DX 活用状況、若者の定着支援体制等について、アンケートを通じて把握し、教育プログラムやキャリア支援設計に活かすことを目的とする。

3. 地元中小企業ニーズ等のアンケート調査

3-1. 調査方法

- (1) 調査手法
郵送(208 件)にて依頼後、Google フォームにてアンケート調査を実施した。
- (2) 調査対象
山口県内の中小企業を対象とした。

- (3) アンケート実施(内訳)
対象…………… 山口県内の中小企業
合計…………… 208 企業が母数
回答数 …… 61件
- (4) 調査日程
令和 7 年 11 月 11 日～令和 7 年 11 月 25 日
- (5) 回収結果
有効回答数61件(有効回収率29.32%)

3-2. 調査項目

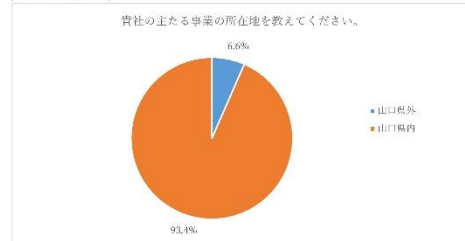
1 基礎情報(企業情報)
・業種、従業員数、地域 等
2 若者就職(採用)への期待、企業が採用時に求める人材像
・新卒採用の現状 ・採用選考時に重視する点(資格・スキル・人物像)、求める人材ニーズ ・専門学校校出身者の採用に関する認識調査 ・通信制高校出身者の採用に関する認識調査 ・企業が求めるマインドの把握 ・企業実習やPBL受入れへの考え(協力、理解)
3 定着支援の状況
・採用後から3～5年間の定着状況の把握 ・定着の成功要因の把握
4 人材育成の状況
・企業内外研修(ON-OFF)の実施状況の把握 ・入社後に必要と感じているスキル、技術、資格の確認
5 DX活用の実態状況
・DX活用の実態状況 (AI・RPA・データ活用) ・DX推進体制と人材の充足度、教育、経営層の関与について調査 ・DX推進における課題と障壁

2

3-3. 調査結果

【問1】基礎情報(企業所在地)

山口県外	4
山口県内	57



本調査の回答で多いものから順に、山口県内 57 件(93.4%)、山口県外 4 件(6.6%)であった。回答者の大半が山口県内の企業である。

【問2】山口県内の事業所(複数回答可)

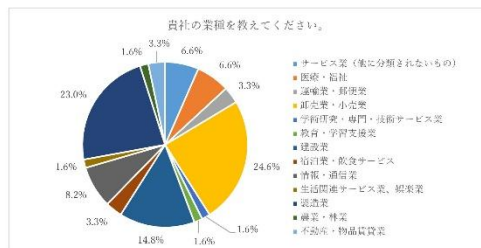


本調査の回答で多いものから順に、山口市 28 件、宇部市 23 件、南門市 21 件であった。人口が多い市町村が上位に位置している。

3

【問3】業種

サービス業(他に分類されないもの)	4
医療・福祉	4
運輸業・郵便業	2
卸売業・小売業	15
学術研究・専門・技術サービス業	1
教育・学習支援業	1
建設業	9
宿泊業・飲食サービス	2
情報・通信業	5
生活関連サービス業、娯楽業	1
製造業	14
農業・林業	1
不動産・物品賃貸業	2

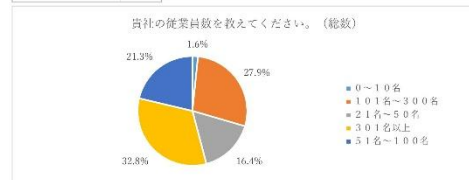


本調査の回答で多いものから順に、卸売業・小売業 15 件(24.6%)、製造業 9 件(23.0%)、建設業 9 件(14.8%)であった。卸売業・小売業、製造業で全体の約半数を占めている。

4

【問4】従業員数(総数)

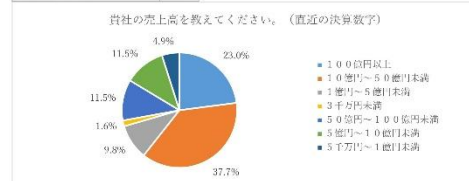
0～10名	1
101名～300名	17
21名～50名	10
301名以上	20
51名～100名	13



本調査の回答で多いものから順に、301 名以上 20 件(32.8%)、101 名～300 名 17 件(27.9%)、51 名～100 名 13 件(21.3%)であった。大人数の企業が大半を占めている。

【問5】売上高(直近の決算数字)

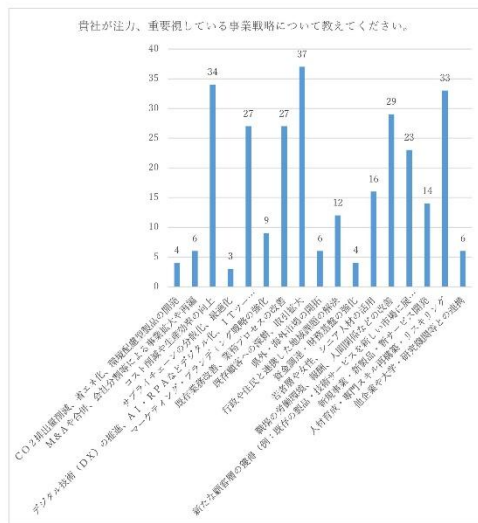
100億円以上	14
10億円～50億円未満	23
1億円～5億円未満	6
3千万円未満	1
50億円～100億円未満	7
5億円～10億円未満	7
5千万円～1億円未満	3



本調査の回答で多いものから順に、10 億円～50 億円未満 23 件(37.7%)、100 億円以上 14 件(23.0%)、50 億円～100 億円未満・5 億円～10 億円未満 7 件(11.5%)であった。

5

【問6】注力、重要視している事業戦略(複数回答可)



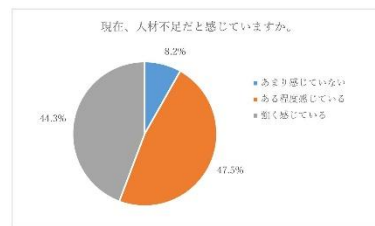
本調査の回答で多いものから順に、既存顧客への深耕、取引拡大 37 件、コスト削減や生産効率の向上 34 件、人材育成・専門スキル再構築・リスキリング 33 件であった。既存の顧客や職場環境の改善、従業員育成に重点を置く傾向が見える。

【問7】事業戦略で注力していること(自由記述)

- ・ウエルビーイング経営の導入(1)
- ・安全・安定操業に向けての基盤強化(1)
- ・若手育成／人材育成(2)
- ・人材雇用(1)
- ・WEB事業への本格的な進出(1)
- ・従来の事業プラスコンサル事業(1)
- ・お客様にとっての価値を創造していくこと(1)
- ・建設業界のデジタル化を見据え、DX 推進や建設 ICT の活用を通じて、現場の生産性向上や業務の効率化に注力(1)
- ・職場の労働環境、報酬、人間関係などの改善(1)

【問8】現在、人材不足と感じていますか。

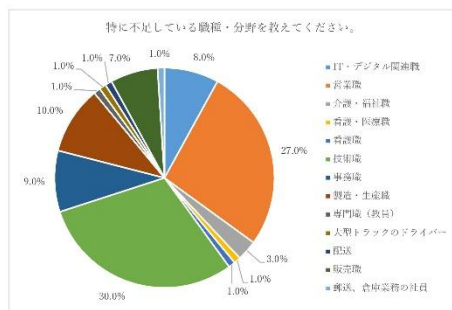
あまり感じていない	5
ある程度感じている	29
強く感じている	27



本調査の回答で多いものから順に、ある程度感じている 29 件(47.5%)、強く感じている 27 件(44.3%)、あまり感じていない 5 件(8.2%)であった。9 割以上の企業が人材不足を感じている。

【問9】特に不足している職種・分野を教えてください。(複数選択可)

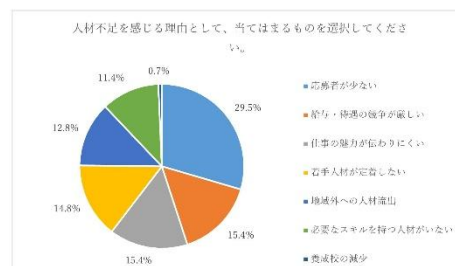
IT・デジタル関連職	8
営業職	27
介護・福祉職	3
看護・医療職	1
看護職	1
技術職	30
事務職	9
製造・生産職	10
専門職(教員)	1
大型トラックのドライバー	1
配送	1
販売職	7
郵送、倉庫業務の社員	1



本調査の回答で多いものから順に、技術職 30 件(30.0%)、営業職 27 件(27.0%)、製造・生産職 10 件(10.0%)であった。技術職、営業職で全体の半数以上を占めている。

【問10】人材不足を感じる理由として、当てはまるものを選択してください。(複数選択可)

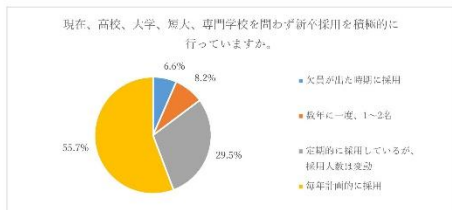
応募者が少ない	44
給与・待遇の競争が厳しい	23
仕事の魅力が伝わりにくい	23
若手人材が定着しない	22
地域外への人材流出	19
必要なスキルを持つ人材がいない	17
養成校の減少	1



本調査の回答で多いものから順に、応募者が少ない 44 件(29.5%)、給与・待遇の競争が厳しい・仕事の魅力が伝わりにくい 23 件(15.4%)であった。応募者現象は多くの企業で感じているが、それ以外の項目についてもまんべんなく票が集まった。

【問11】現在、高校、大学、短大、専門学校を問わず新卒採用を積極的に行っていますか。

欠員が出た時期に採用	4
数年に一度、1～2名	5
定期的に採用しているが、採用人数は変動	18
毎年計画的に採用	34

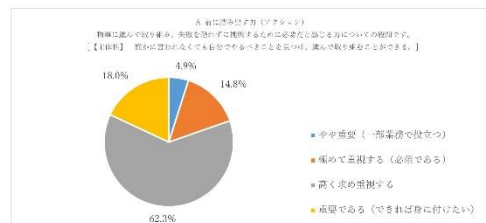


本調査の回答で多いものから順に、毎年計画的に採用 34 件(55.7%)、定期的に採用しているが、採用人数は変動 18 件(29.5%)、数年に一度、1～2 名 5 件(8.2%)であった。人材不足を感じている企業が多いことに比例した結果となった。

10

【問12】貴社が採用する上で社会や職場で仕事をしていくために必要だと思う重視する能力(スキル)は何ですか。

●主体性



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 38 件(62.3%)、重要である(できれば身に付けたい)11 件(18.0%)、極めて重視する(必須である)9 件(14.8%)であった。「重要である」以上の回答をした企業が 8 割を超える結果となった。

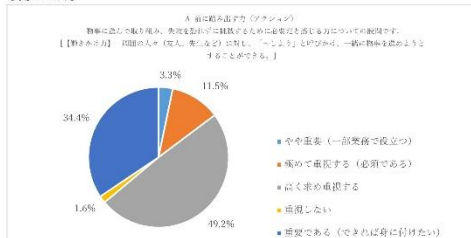
●実行力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 32 件(52.5%)、重要である(できれば身に付けたい)15 件(24.9%)、極めて重視する(必須である)11 件(18.0%)であった。7 割の企業が「高く求め重視する」以上を回答する結果となった。

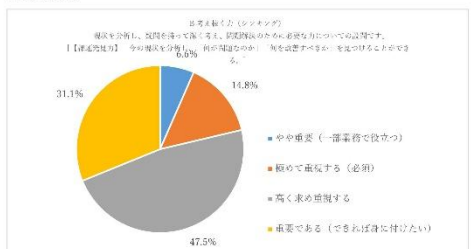
11

●聞きかけ力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 30 件(49.2%)、重要である(できれば身に付けたい)21 件(34.4%)、極めて重視する(必須である)7 件(11.5%)であった。「重要である」以上の回答で 9 割を超える結果となった。

●課題発見力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 29 件(47.5%)、重要である(できれば身に付けたい)19 件(31.1%)、極めて重視する(必須である)9 件(14.8%)であった。「重要である」以上の回答で 9 割を超える結果となった。

12

●計画力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 30 件(49.2%)、重要である(できれば身に付けたい)21 件(34.4%)、極めて重視する(必須である)8 件(13.1%)であった。ほぼすべての企業が「重要である」以上の回答をする結果となった。

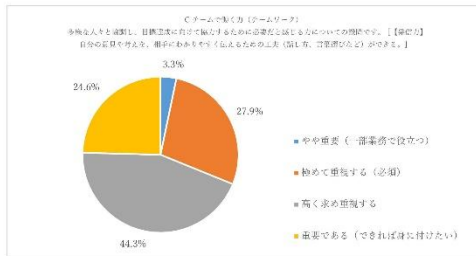
●想像力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 28 件(45.9%)、重要である(できれば身に付けたい)20 件(32.8%)、極めて重視する(必須である)・やや重要(一部業務で役立つ)6 件(9.8%)であった。「重要である」以上を回答した企業が多い中で、「やや重要」以下を回答した企業も 1 割を超えた。

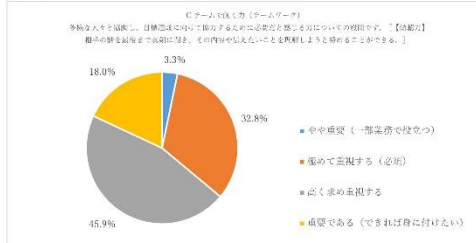
13

●発信力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 27 件(44.3%)、極めて重視する(必須)17 件(27.9%)、重要である(できれば身に付けたい)15 件(24.6%)であった。「高く求め重視する」「極めて重視する」の回答が最も多い結果となった。

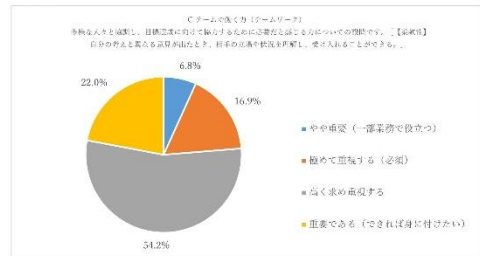
●傾聴力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 28 件(45.9%)、極めて重視する(必須)20 件(32.8%)、重要である(できれば身に付けたい)11 件(18.0%)であった。他部門と比べても「極めて重視する」の回答が多く、企業では重視する傾向が強いことが分かる。

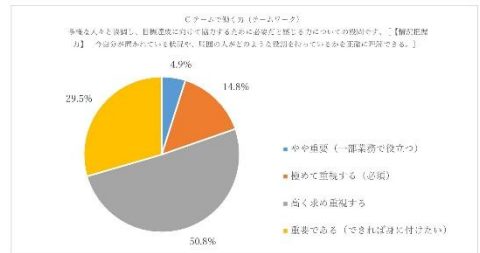
14

●柔軟性



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 32 件(54.2%)、重要である(できれば身に付けたい)13 件(22.0%)、極めて重視する(必須)10 件(16.9%)であった。全体の半数が「高く求め重視する」と回答されたが、「重要である」以下の回答も全体の約 3 割となった。

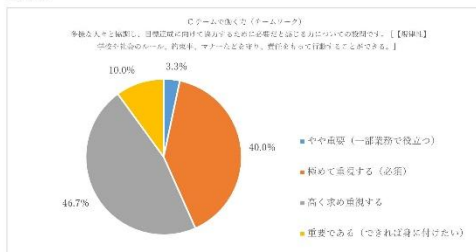
●情報把握力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 31 件(50.8%)、重要である(できれば身に付けたい)18 件(29.5%)、極めて重視する(必須)9 件(14.8%)であった。前設問同様の傾向が見られる。

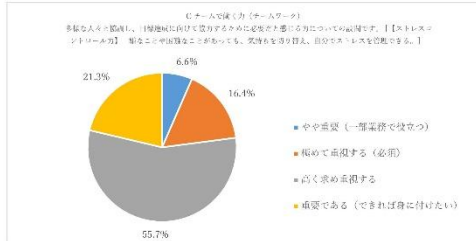
15

●規律性



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 28 件(46.7%)、極めて重視する(必須)24 件(40.0%)、重要である(できれば身に付けたい)6 件(10.0%)であった。「極めて重視する」が 4 割を占め、「高く求め重視する」と合計して全体の約 9 割を占めていることから、多くの企業で特に重要な点としていることがわかる。

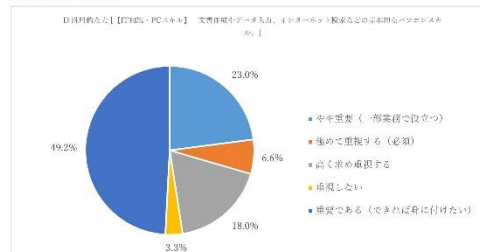
●ストレスコントロール



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 34 件(55.7%)、重要である(できれば身に付けたい)13 件(21.3%)、極めて重視する(必須)10 件(16.4%)であった。こちらも約 3 割が「重要である」以下の回答となった。

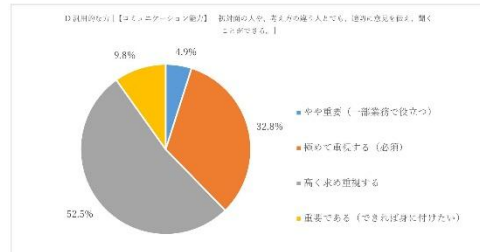
16

●IT 知識・PC スキル



本調査の回答で多いものから順に、重要である(できれば身に付けたい)30 件(49.2%)、やや重要(一部業務で役立つ)14 件(23.0%)、高く求め重視する 11 件(18.0%)であった。パソコンスキルを必須としている企業は少ない。

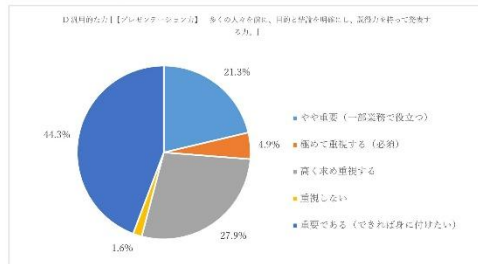
●コミュニケーション能力



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 32 件(52.5%)、極めて重視する(必須)20 件(32.8%)、重要である(できれば身に付けたい)6 件(9.8%)であった。対人スキルに重点を置く企業が多い。

17

●プレゼンテーション力



本調査の回答で多いものから順に、重要である（できれば身に付けたい）27 件（44.3%）、高く求め重視する 17 件（27.9%）、やや重要（一部業務で役立つ）13 件（21.3%）であった。採用時点においては、他項目と比べると重要視する企業が少い様子が見える。

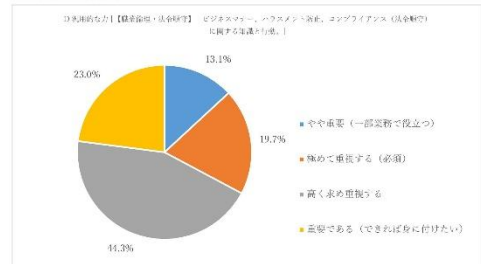
●専門的知識・スキル



本調査の回答で多いものから順に、重要である（できれば身に付けたい）29 件（47.5%）、高く求め重視する 14 件（23.0%）、やや重要（一部業務で役立つ）11 件（18.0%）であった。採用時点においては、他項目と比べると重要視する企業が少い様子が見える。

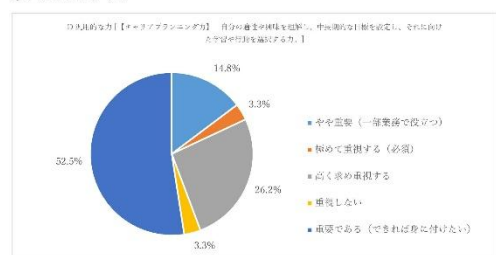
18

●所業倫理・法令順守



本調査の回答で多いものから順に、高く求め重視する 27 件（44.3%）、重要である（できれば身に付けたい）14 件（23.0%）、極めて重視する（必須）12 件（19.7%）であった。社会や会社のルールを重要視する企業が多いことに比例した結果となった。

●キャリアプランニング



本調査の回答で多いものから順に、重要である（できれば身に付けたい）32 件（52.5%）、高く求め重視する 16 件（26.2%）、やや重要（一部業務で役立つ）9 件（14.8%）であった。「極めて重視する」と回答した企業も少なく、他設問と比べると企業の重要度はそれほど高くない。

19

【問13】貴社で採用したいと考える人材の能力で上記以外に特に必要だと思うものを教えてください。（自由記述）

- ・専門学校、大学の学科が情報系にシフトする動きから、ものづくりの担い手減少が顕著である（1）
- ・情報系資格の取得（1）
- ・WEB関係に強い人材（1）
- ・ものづくりへの興味（1）
- ・人の役に立ちたいという思い（1）
- ・継続力／継続できる気持ちのある人材（2）
- ・信用、コミュニケーション能力（1）
- ・自分の強みや興味を理解し、弱味について周りの方に助けてくださいと言えること
言えるともわりと助けやすいし、自分も気持ちがラクになると思います。お互い様の謙虚な気持ちで取り組み、どんなときも道が開くと思います。（1）
- ・柔軟性・状況把握力を持ち、自身の知識や知っていることだけで状況を押し進めず（断定せず）、相手の立場を思考できる視野の広さ（1）

【問14】貴社の採用活動において感じている課題があれば教えてください。（自由記述）

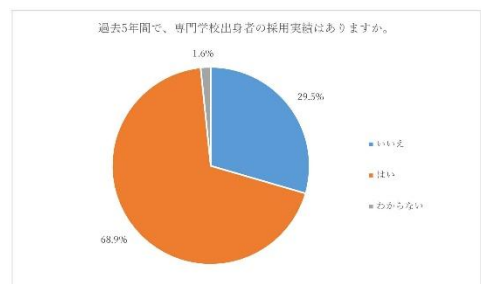
- ・職種が多様であるため、多くの学科が応募対象であることが伝えられていない（1）
- ・どんな仕事をする職種かを対象者に理解してもらう事が課題（1）
- ・業界、職務内容の理解（説明）不足／仕事内容の伝えづらさ（2）
- ・自社の魅力をいかにして伝えるか／自社 PR が十分でないこと（2）
- ・不動産業界の良さが伝わらない（1）
- ・営業職というだけで敬遠されてしまう（1）
- ・女性の職務偏在（女生徒の職域が広がらない）（1）
- ・人材確保が難しい（1）
- ・十分な応募者を確保できない（1）
- ・応募がない（1）
- ・応募者の減少（1）
- ・母体（エントリー者、応募者）が年々減少している（1）
- ・母集団形成（2）
- ・学生への認知（1）
- ・学生さんとの接触機会が少ない（1）
- ・若年層に、地元で働く魅力やどうアピールするか（1）

20

- ・新卒（大学・高卒）からの応募が少ない（1）
- ・広島が近いため、学生が広島に流れてしまう（1）
- ・売り手市場が顕著で、採用につながらない（1）
- ・初任給の上昇など年々厳しくなる（1）
- ・他社さんの給料や賞与の掛け率には驚きます（1）
- ・処遇、待遇、環境面の改善（1）
- ・他社と比較して当社を選んでもらうための決め手（1）
- ・自分の能力を活かしたいという人とうまくマッチングできないか考えております（1）
- ・インターンシップなどが一時的になりつつあり、採用活動の長期化していること（1）
- ・採用活動に専念できる人材不足／採用のお金とマンパワーも不足（2）
- ・特になし（1）

【問15】過去 5 年間で、専門学校出身者の採用実績がありますか。

いいえ	18
はい	42
わからない	1

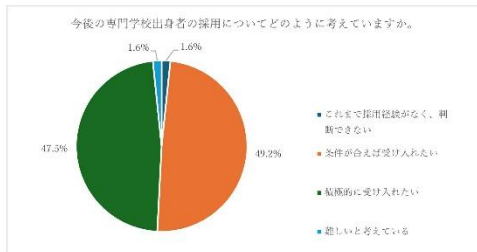


本調査の回答で多いものから順に、はい 42 件（68.9%）、いいえ 18 件（29.5%）、であった。7 割近くの企業が専門学校卒業生の採用実績がある。

21

【問16】今後の専門学校出身者の採用についてどのように考えていますか。

これまで採用経験がなく、判断できない	1
条件が合えば受け入れたい	30
積極的に受け入れたい	29
難しいと考えている	1



本調査の回答で多いものから順に、条件が合えば受け入れたい 30 件(49.2%)、積極的に受け入れたい 29 件(47.5%)であった。多くの企業が専門学校出身者の採用について前向きに捉えている。

【問17】貴社で専門学校出身者を採用する場合に重要な要素、期待することがあれば教えてください。(自由記入)

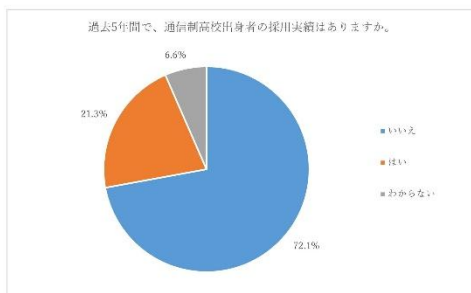
- ・自動車整備の知識を持っている学生に、整備士用マニュアル作成の仕事に興味を持ってほしい(1)
- ・公務員(消防士、警察官)を目指す学生がキャリアチェンジを考えた時の選択肢として、弊社の自動車関連企業構内の消防・警備職があることを周知したい(1)
- ・情報系資格の取得状況(1)
- ・資格取得に対する意識の高さ(1)
- ・専門技術・知識(2)
- ・ある程度の専門性を持っている事(1)
- ・上記の回答及び多少の専門性(1)
- ・社会人基礎力
- ・主体性(3)
- ・自分で考える力(1)
- ・WEBに関する技術と営業に必要なコミュニケーション力(1)
- ・継続力(1)
- ・自分の学んだことを活かしたいと思う人(1)
- ・コミュニケーション能力(4)
- ・コミュニケーションが問題なく取れて、自身の意見がある程度自由に述べられること(1)
- ・周りや協働する力(1)
- ・人前や前向きに取り組む姿勢(1)
- ・【ものづくり】に興味のある方、男女も問いませんし、文系理系も問いません。(1)

22

23

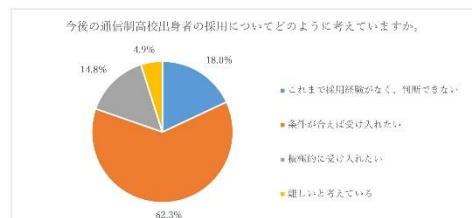
【問18】過去5年間で、通信制高校出身者の採用実績はありますか。

いいえ	44
はい	13
わからない	4



本調査の回答で多いものから順に、いいえ 44 件(72.1%)、はい 13 件(21.3%)であった。専門学校出身者の受け入れと比べると、通信制高校出身者の受け入れ実績は少ない。

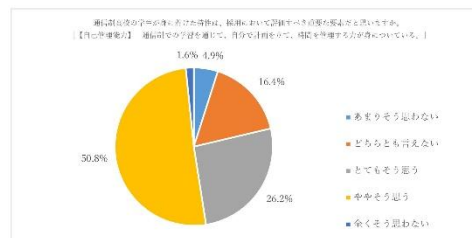
【問19】今後の通信制高校出身者の採用についてどのように考えていますか。



本調査の回答で多いものから順に、条件が合えば受け入れたい 38 件(62.3%)、これまで採用経験がなく、判断できない 11 件(18.0%)、積極的に受け入れたい 9 件(14.8%)であった。専門学校出身者受け入れと比べると、「これまで採用経験がなく、判断できない」に多くの回答があり、実績がないことへの不安が読み取れる。

【問20】通信制高校の学生が身に着けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。

●自己管理能力

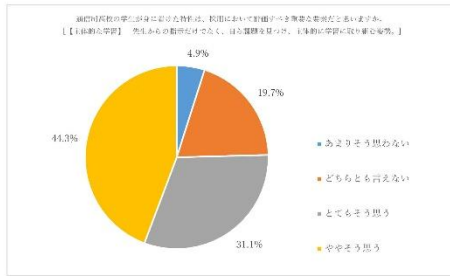


本調査の回答で多いものから順に、ややそう思う 31 件(50.8%)、とてもそう思う 16 件(26.2%)、どちらとも言えない 10 件(16.4%)であった。多くの企業では重視する傾向が強いことが分かる。

24

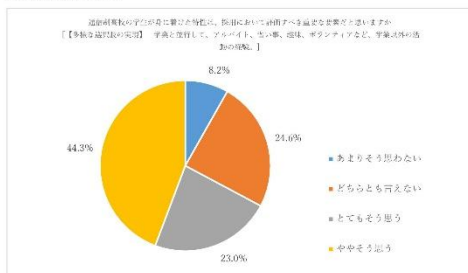
25

●主体的な学習



本調査の回答で多いものから順に、ややそう思う 27 件(44.3%)、とてもそう思う 19 件(31.1%)、どちらとも言えない 12 件(19.7%)であった。7 割以上の企業が重要な要素として捉えている。

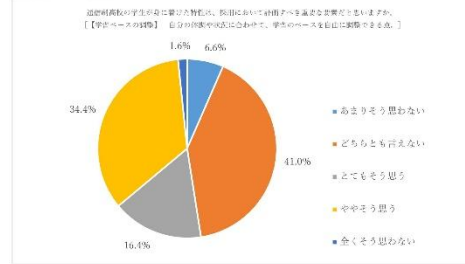
●多様な選択肢の実現



本調査の回答で多いものから順に、ややそう思う 27 件(44.3%)、どちらとも言えない 15 件(24.6%)、とてもそう思う 14 件(23.0%)であった。全体の 1/4 が「どちらとも言えない」に回答しており、他機関と比べると回答に迷う企業が多いことが分かる。

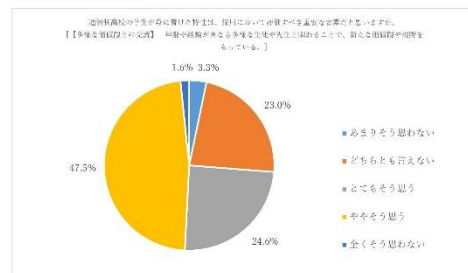
26

●学習ベースの調整



本調査の回答で多いものから順に、どちらとも言えない 25 件(41.0%)、ややそう思う 21 件(34.4%)、とてもそう思う 10 件(16.4%)であった。企業として採用経験が少ないこともあつて、回答に迷う企業が多い。

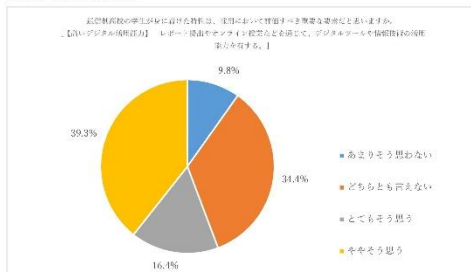
●多様な価値観との交流



本調査の回答で多いものから順に、ややそう思う 29 件(47.5%)、とてもそう思う 15 件(24.6%)、どちらとも言えない 14 件(23.0%)であった。対人コミュニケーションを重視する企業が多いことが本調査の結果にも影響している様子がうかがえる。

27

●高いデジタル活用能力



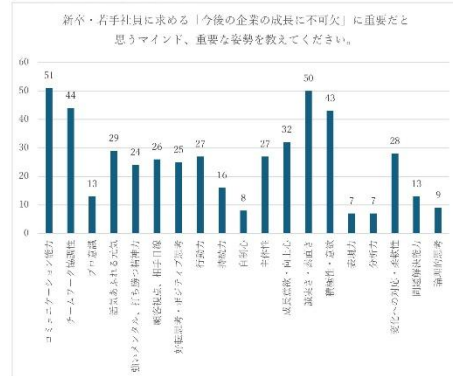
本調査の回答で多いものから順に、ややそう思う 24 件(39.3%)、どちらとも言えない 21 件(34.4%)、とてもそう思う 10 件(16.4%)であった。パソコンスキル関連は必須としない企業が多い。

【問 21】貴社で通信制高校出身者を採用したいと考える人材の能力で上記以外に特に必要だとと思われるものを教えてください。(自由記入)

- ・通信制であろうが全日制であろうが、通学形態や学習方法には拘らない。同等の試験を経て採用を決定するので、人材として重視する点に変わりはない(1)
- ・通信制の方は自ら進んでやろうという力が身につくと思いますので、是非、採用を考えていきたいと思っています(1)
- ・情報系資格の取得状況(1)
- ・継続力(1)
- ・協調性や分からないことを周りに聞く積極性(1)
- ・特になし(1)

28

【問 22】新卒・若手社員に求める「今後の企業の成長に不可欠」に重要だと思うマインド、重要な姿勢を教えてください。(複数回答可)



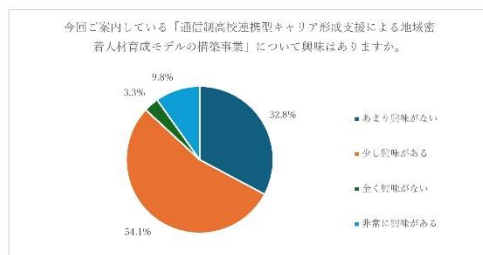
本調査の回答で多いものから順に、コミュニケーション能力 51 件、誠実さ・素直さ 50 件、チームワーク協調性 44 件であった。また「積極性・意欲」も次に高いため、仕事の基本を中心に真面目に働くという姿勢を多くの企業は求めていることがわかる。

【問 23】上記以外で、貴社が新卒・若手社員に求めるマインド、重要な姿勢があれば具体的に教えてください。(自由記入)

- ・何事も楽しむ心、ライフワークバランスが保てる(1)
- ・継続力(1)
- ・やる気が大事だと思います(1)
- ・向上心があり、好奇心がある方(1)
- ・メンタルの強い方が理想です(1)
- ・なし(1)

29

【問 24】今回ご案内している「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業」について興味はありますか。



本調査の回答で多いものから順に、少し興味がある 33 件(54.1%)、あまり興味がない 20 件(32.8%)、非常に興味がある 6 件(9.8%)であった。非常に興味があると少し興味があるの2つを合わせると約 7 割近くの企業が本事業について興味をもっている。

【問 25】専門学校生と貴社の抱える具体的な課題解決に取り組む PBL(課題解決型学習)機会を提供することに、どの程度協力・理解できますか。



本調査の回答で多いものから順に、条件付きで検討可能 36 件(59.0%)、いいえ、難しいです 17 件(27.9%)、はい、協力できます 8 件(13.1%)であった。条件付きで検討可能としている企業もあるが授業等の連携については約 7 割の企業が協力・理解を示している。

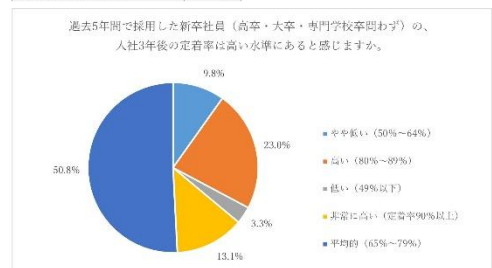
30

【問 26】上記でいいと回答した方はお答えください。受け入れる際、貴社にとって最も大きな課題となることは何ですか。(自由記入)

- ・社員の工数確保(1)
- ・担当者の負担(1)
- ・社内に対応できる人材の不足(3)
- ・安全面での受け入れ環境の制約及び業務形態(請負)による体制上の制約(1)
- ・情報セキュリティの規則上(1)
- ・受入体制の整備(1)
- ・リソース不足、社内調整(1)
- ・上司への確認が必要となるため、検討可能とさせていただきます(1)

【問 27】過去 5 年間で採用した新卒社員(高卒・大卒・専門学校卒問わず)の、入社 3 年後の定着率は高い水準にあると感じますか。

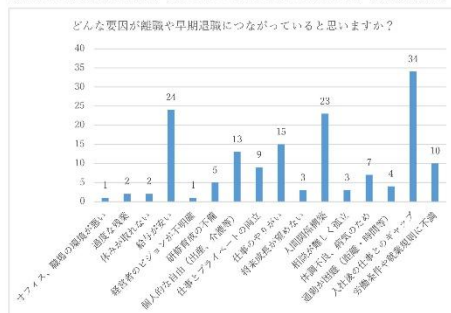
やや低い(50%～64%)	6
高い(80%～89%)	14
低い(49%以下)	2
非常に高い(定着率 90%以上)	8
平均的(65%～79%)	31



本調査の回答で多いものから順に、平均的(65%～79%)31 件(50.8%)、高い(80%～89%)14 件(23.0%)、非常に高い(定着率 90%以上)8 件(13.1%)であった。9 割近くの企業が平均以上を感じている。

31

【問 28】どんな要因が離職や早期退職につながっていると思いますか？(複数回答可)



本調査の回答で多いものから順に、入社後の仕事とギャップ 34 件、給与が安い 24 件、人間関係構築 23 件であった。他選択肢と比べても上位三つは特に多く回答される結果となった。

【問 29】上記以外で貴社での早期退職につながると思われることがあれば教えてください。(自由記入)

- ・自分でキャリアプランを設計するスキル不足(1)
- ・新しくやりたい事を見つけた(1)
- ・賃金(他社との比較)／給料・賞与についての話をよく聞きます(2)
- ・コミュニケーション不足(1)
- ・平日が定休日のため、土日に休みが取りにくい(1)
- ・なし(1)

【問 30】貴社で実施している効果的な定着支援策があれば教えてください。(自由記入)

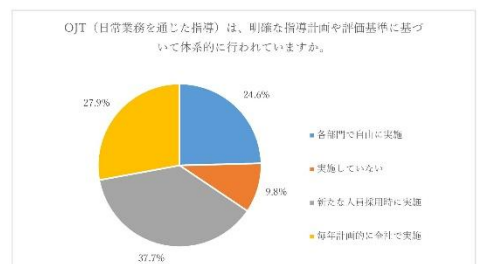
- ・充実した福利厚生(定期的なペースアップ、柔軟な働き方、有給休暇・育児休暇の取得奨励)(1)
- ・会社による Netflix の加入、奨学金返済支援(1)
- ・有給休暇の消化率 100%の取り組み(1)
- ・キャリアコンサルティング(1)
- ・定期面談・個別人事面談(3)
- ・メンター制度(3)
- ・積極的なコミュニケーション(1)

32

- ・ノー残業 DAY や社内コミュニケーションの場をしっかりともうけている(1)
- ・自己申告制度(1)
- ・本社スタッフとのヒアリング(1)
- ・研修(1)
- ・研修期間を延ばすことや、現場実践のペースを従来よりゆっくりすること(1)
- ・社内・事務所間異動(1)
- ・給料を上げるとは思いますが、なかなか難しいと考えます(1)

【問 31】OJT(日常業務を通じた指導)は、明確な指導計画や評価基準に基づいて体系的に行われていますか。

各部門で自由に実施	15
実施していない	6
新たな人員採用時に実施	23
毎年計画的に全社で実施	17

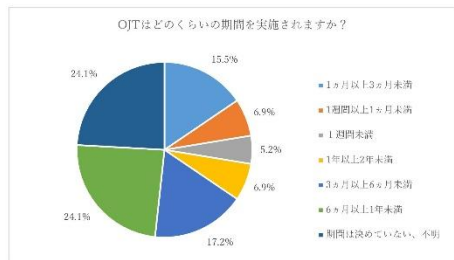


本調査の回答で多いものから順に、新たな人員採用時に実施 23 件(37.7%)、毎年計画的に全社で実施 17 件(27.9%)、各部門で自由に実施 15 件(24.6%)であった。年間通して計画的に行っている企業は少ない。

33

【問 32】OJT はどのくらいの期間を実施されますか？（問.31 で「実施していない」以外の方は
お答えください。）

1ヵ月以上3ヵ月未満	9
1週間以上1ヵ月未満	4
1週間未満	3
1年以上2年未満	4
3ヵ月以上6ヵ月未満	10
6ヵ月以上1年未満	14
期間は決めている、不明	14

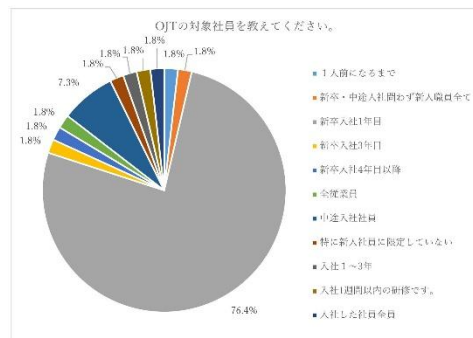


本調査の回答で多いものから順に、6ヵ月以上1年未満・期間は決めている、不明14件(24.1%)、
3ヵ月以上6ヵ月未満10件(17.2%)であった。3ヶ月～1年の企業が約4割になるのと同じく、
三ヵ月未満の企業も約3割を占める。

34

【問 33】OJTの対象社員を教えてください。（問.31 で「実施していない」以外の方はお答えく
ださい。）

1人前になるまで	1
新卒・中途入社問わず新入職員全て	1
新卒入社1年目	42
新卒入社3年目	1
新卒入社4年目以降	1
全従業員	1
中途入社社員	4
特に新入社員に限定していない	1
入社1～3年	1
入社1週間以内の研修です。	1
入社した社員全員	1



本調査の回答で多いものから順に、新卒入社1年目42件(76.4%)、中途入社社員4件(7.3%)
であった。新卒入社1年目を対象にしたOJTを実施している企業が圧倒的に多い。

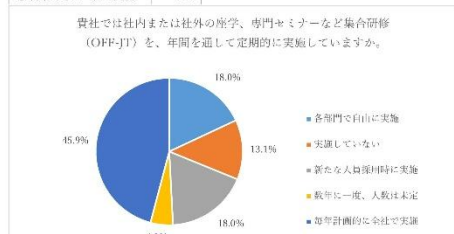
35

【問 34】OJTを行う上での課題を教えてください。（問.31 で「実施していない」以外の方はお
答えください）（自由記入）

- ・OJTを実施する先輩社員の指導力スキルが低い／OJTに関する教育がない(2)
- ・指導者の工数確保が困難(1)
- ・人材不足(部署によっては適任者が少ない)(1)
- ・業務毎に習得計画が異なる／同じ業務でも個人の習得状況により習得期間にばらつきがある(2)
- ・個人の資質、特徴に合わせた育成(1)
- ・教育者や環境によって教育内容の差が生まれること(1)
- ・職場間の取り組みの温度差(1)
- ・日々の確認、ミーティング(1)
- ・計画と記録・・・本人や第三者にもわかる体制づくり(1)
- ・もっと深く研修するべきと考えます(1)
- ・法人での統一化(1)
- ・特になし(1)

【問 35】貴社では社内または社外の座学、専門セミナーなど集合研修(OFF-JT)を、年間を通
して定期的に実施していますか。

各部門で自由に実施	11
実施していない	8
新たな人員採用時に実施	11
数年一度、人数は未定	3
毎年計画的に全社で実施	28



本調査の回答で多いものから順に、毎年計画的に全社で実施28件(45.9%)、新たな人員採用時
に実施・各部門で自由に実施11件(18.0%)であった。OJTと比べて毎年計画的に実施している企
業が多い。

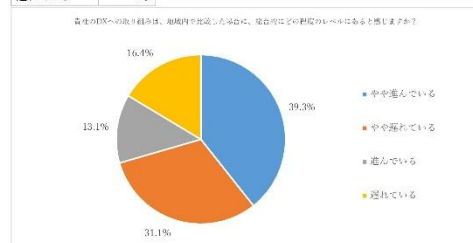
36

【問 36】OFF-JT や自己研修、リスニング等で貴社が従業員に求める能力・スキルについて入
社後に取得させている資格等を教えてください。（自由記入）

- ・職種によって異なる。電気工事士、FP、簿記、整備士など(1)
- ・クラウド系の資格(1)
- ・危険物乙種4類(必須資格／全員取得させている)、その他は就いた業務及びその役割に必要な資格を取得したり、スキルを磨くよう研修などを受講させている(1)
- ・基本情報処理、AWS 認定試験(1)
- ・IT パスポート、基本情報、応用情報、DX 認定など(1)
- ・フォークリフト、運転免許、検査員(1)
- ・危険物等、会社の規定に対象リストがある(1)
- ・部署により異なりますが、【ものづくり】の関係では、技能講習関係は取得してもらいます(1)
- ・ビジネスキャリア検定(1)
- ・DX、ESG認定(1)
- ・マネジメント能力(1)
- ・特に決まった資格はありません(1)

【問 37】貴社の DX への取り組みは、地域内で比較した場合に、総合的にどの程度のレベルに
あると感じますか。

やや進んでいる	24
やや遅れている	19
進んでいる	8
遅れている	10

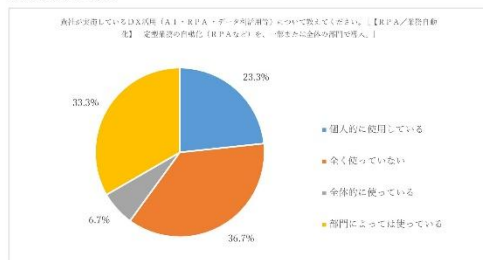


本調査の回答で多いものから順に、やや進んでいる24件(39.3%)、やや遅れている19件
(31.1%)、遅れている10件(16.4%)であった。「進んでいる」や「やや進んでいる」と回答した企業は
全体の半数を超えている。

37

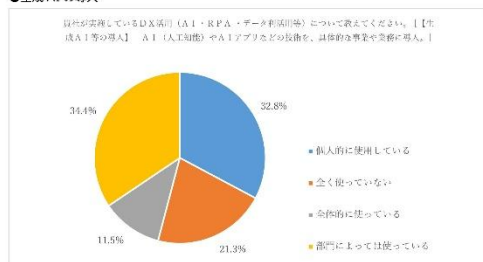
【問 38】貴社が実施しているDX活用（AI・RPA・データ活用等）について教えてください。【RPA／業務自動化】定型業務の自動化（RPAなど）を、一部または全体の部門で導入。】

●RPA／業務自動化



本調査の回答で多いものから順に、全く使っていない 22 件(36.7%)、部門によっては使っている 20 件(33.3%)、個人的に使用している 14 件(23.3%)であった。全体的な使用頻度は高くないことがわかる。

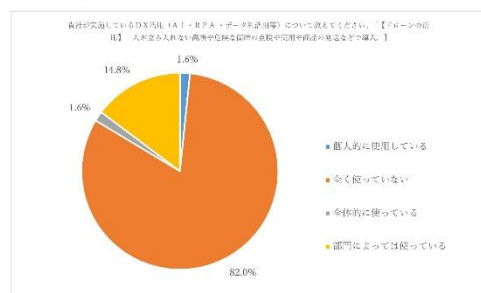
●生成 AI の導入



本調査の回答で多いものから順に、部門によっては使っている 21 件(34.4%)、個人的に使用している 20 件(32.8%)、全く使っていない 13 件(21.3%)であった。社会的な普及もあり、「個人的に使用している」と回答する企業も多くなっている。

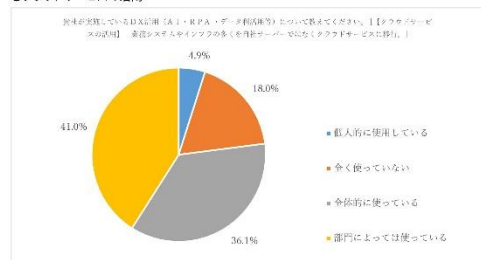
38

●ドローンの活用



本調査の回答で多いものから順に、全く使っていない 50 件(82.0%)、部門によっては使っている 9 件(14.8%)であった。8 割の企業で使われていない。

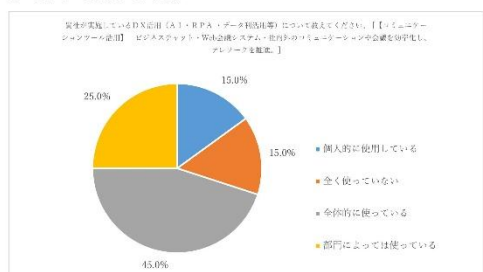
●クラウドサービスの活用



本調査の回答で多いものから順に、部門によっては使っている 25 件(41.0%)、全体的に使っている 22 件(36.1%)、全く使っていない 11 件(18.0%)であった。クラウドサービスの普及により使用している企業は多い。

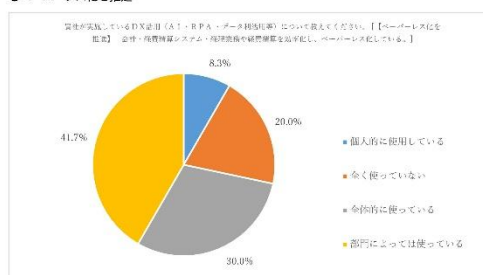
39

●コミュニケーションツールの活用



本調査の回答で多いものから順に、全体的に使っている 27 件(45.0%)、部門によっては使っている 15 件(25.0%)、個人的に使用している・全く使っていない 9 件(15.0%)であった。コロナ情勢をきっかけに導入している企業が多いことが分かる。

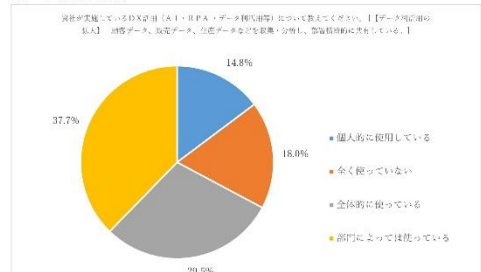
●ペーパーレス化を推進



本調査の回答で多いものから順に、部門によっては使っている 25 件(41.7%)、全体的に使っている 18 件(30.0%)、全く使っていない 12 件(20.0%)であった。電子化の動きが広がつつも、3 割の企業では会社としての取り組みを行っていない。

40

●データ利用の拡大



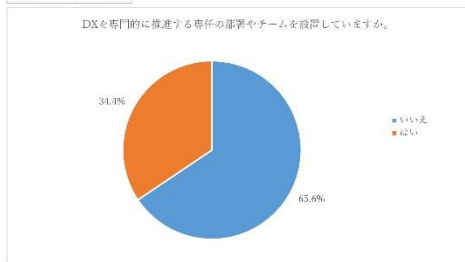
本調査の回答で多いものから順に、部門によっては使っている 23 件(37.7%)、全体的に使っている 18 件(29.5%)、全く使っていない 11 件(18.0%)であった。部門ごとでの使用が高く、社内全体への広がりは高くない。

【問 39】貴社が DX 活用を実践していることがあれば教えてください。(自由記入)

- ・ペーパーレス(電子化)(1)
- ・手書きの日報などを無くし、電子化(タブレット入力)している(1)
- ・自動発注(1)
- ・建設業の CHATAI アプリやドローンにより、現場の 3D 化、機械の ICT 化を行っている(1)
- ・ノーコードツールの活用、クラウドサービスの利用(1)
- ・時代的に必要とは考えていますが、弊社は遅れていると思います(1)

41

いいえ	40
はい	21



本調査の回答で多いものから順に、いいえ 40 件(65.6%)、はい 21 件(34.4%)であった。積極的な取り組みを見せる企業は未だ多くない。

【問 41】 DX 推進に必要な専門知識を持つ人材 (AI 活用、データサイエンティスト、エンジニアなど) は充足していますか。

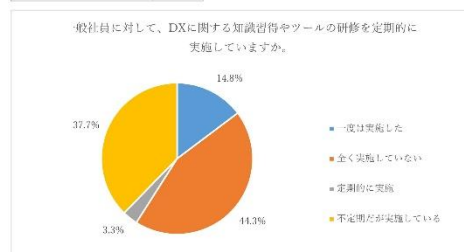


本調査の回答で多いものから順に、まだまだ充足していない 33 件(54.1%)、全く充足していない 20 件(32.8%)、十分に充足している 8 件(13.1%)であった。9 割近い企業が不足を感じており、担い手不足が読み取れる。

42

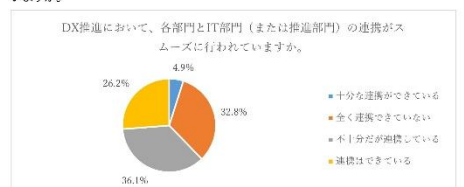
【問 42】一般社員に対して、DX に関する知識習得やツールの研修を定期的実施していますか。

一度は実施した	9
全く実施していない	27
定期的を実施	2
不定期だが実施している	23



本調査の回答で多いものから順に、全く実施していない 27 件(44.3%)、不定期だが実施している 23 件(37.7%)、一度は実施した 9 件(14.8)であった。定期的に実施している企業は一割にも満たず、担い手不足の解消に至らない要因の一つとなっている。

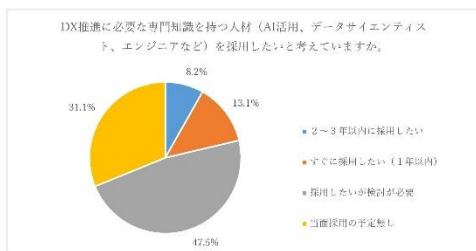
【問 43】DX 推進において、各部門と IT 部門(または推進部門)の連携がスムーズに行われていますか。



本調査の回答で多いものから順に、不十分だが連携している 22 件(36.1%)、全く連携できていない 20 件(32.8%)、連携はできている 16 件(26.2%)となっている。多くの企業では連携の難しさを感じている。

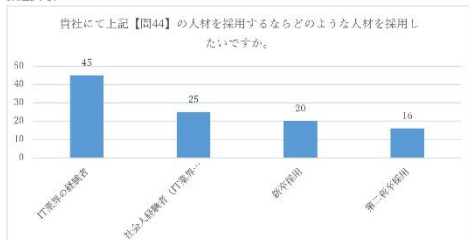
43

【問 44】DX 推進に必要な専門知識を持つ人材(AI 活用、データサイエンティスト、エンジニアなど)を採用したいと考えていますか。



本調査の回答で多いものから順に、採用したいが検討が必要 29 件(47.5%)、当面採用の予定無し 19 件(31.1%)、すぐに採用したい(1年以内) 8 件(13.1%)であった。企業側の受け入れ態勢の準備が効果的に行えていない様子がうかがえる。

【問 45】貴社にて上記問.44 の人材を採用するならどのような人材を採用したいですか。(複数選択可)



本調査の回答で多いものから順に、IT 業界の経験者 45 件、社会人経験者（IT 業界以外）25 件、新卒採用 20 件であった。より専門的な知識を持つ人材を採用したいという意向が読み取れる。

44

【問 46】貴社が DX 活用人材の採用で重要視することがあれば教えてください。(自由記入)

- ・本社にてDX推進に関する専門部署があるので、そのサポートが得られるため、重要視する事項はない(1)
- ・スキル(1)
- ・専門知識、即戦力(1)
- ・コミュニケーション能力、協働する力(1)
- ・時代に乗り遅れないようにしたいと思います(1)

【問 47】 貴社の DX 推進上の課題と障壁を教えてください。(複数回答可)

DXに有効なツールが無い	DX推進に必要なデジタルツールが見つからない。	7
【サイバーセキュリティ対策】DX推進による増大したセキュリティリスクへの対策が大きな課題。	22	22
【レガシーシステム】既存の古いシステムが、新しいデジタル技術の導入を妨げる大きな要因。	23	23
【経営者の理解不足】DX推進に経営者の理解が得られず、現場のデジタルツール等の活用が進まない。	6	6
【社内・組織文化】失敗を恐れる文化や変化を嫌う組織が、新しいデジタル技術の導入や活用を妨げている。	24	24
【日常業務が多忙・人手不足】通常の日常業務が多忙でDX推進が進まない。推進できる人がいない。	32	32
【法制度・規則・慣習】業界特有の法規制や制度が、DX推進を妨げる要因となっている。	5	5
【目的・ゴールの明確性】DX推進によって何を達成したいか（目的）が明確になってない。全社員に浸透しない。	24	24
【予算（費用）の確保】DX推進に必要なシステム投資や人件費などの予算確保が大きな課題。	36	36

図1のDX推進上の課題と障壁を教えてください。(複数回答)

本調査の回答で多いものから順に、【予算(費用)の確保】DX 推進に必要なシナリオ投資や人件費などの予算確保は大きな課題 36 件【営業業務が人手不足】従来の営業業務や少人数で DX 推進が進まない、推進できる企業は少ない 32 件【組織・文化】失敗を恐れる企業や変化を嫌う風が、新しいデジタル技術の導入や活用を妨げている【目的・ゴールの明確性】DX 推進によって何を達成したいのか(目的)の明確になっていない、社員に浸透しない 24 件であった。全傾向と時間の経緯から順に表れたが、導入自体に反する企業の層は少くない。

45

【問 48】貴社で課題と感じていること、障壁となっていることがあれば教えてください。(自由記入)

- ・自社で DX を専門的に推進する専任の部署やチームはないが、本社にそのチームがあり、必要な時には相談できる体制である(1)
- ・セキュリティ上、規制が厳しく、便利と思っても IT 専門部署の許可が得られなければ使用できないこと(1)
- ・会社規模的に判断が難しい。現状で問題ないところだが…(1)
- ・マンパワー不足(1)
- ・人材、能力不足(1)
- ・問 47 の全チェックは、弊社は DX について全く遅れていることからそうさせていただきます(1)
- ・なし／特にありません(2)

【クロス集計】若手に求める人物像(社会人基礎力)を分析するクロス集計

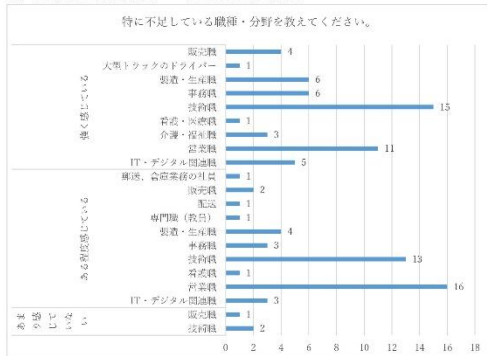
●1-1 業種(問 3) × 不足している職種(問 9)

業種	IT・デジタル関連職	営業職	技術・開発職	企画職	企画・マーケティング職	専門職(法律、会計)	総務職
IT・IT関連(主にIT企業ではないもの)	0	1	0	0	0	0	0
情報・通信業	0	0	0	1	0	0	0
金融・保険業	0	0	0	0	0	0	0
小売業・小売業	1	2	0	10	0	0	0
製造業(主に製造業)	0	1	0	0	0	0	0
建設業(主に建設業)	0	0	0	1	0	0	0
運輸業	0	0	0	0	0	0	0
宿泊・観光業	0	0	0	0	0	0	0
飲食・サービス業	0	0	0	0	0	0	0
教育・サービス業	0	0	0	0	0	0	0
医療・福祉業	0	0	0	0	0	0	0
農業・畜産業	0	0	0	0	0	0	0
漁業・水産業	0	0	0	0	0	0	0

業種	営業・企画職	技術職	企画・マーケティング職	専門職	総務・事務職	その他
IT・IT関連(主にIT企業ではないもの)	0	0	0	0	0	0
情報・通信業	0	0	0	0	0	0
金融・保険業	0	0	0	0	0	0
小売業・小売業	1	1	0	0	0	0
製造業(主に製造業)	0	0	1	0	0	0
建設業(主に建設業)	0	0	0	0	0	0
運輸業	0	0	0	0	0	0
宿泊・観光業	0	0	0	0	0	0
飲食・サービス業	0	0	0	0	0	0
教育・サービス業	0	0	0	0	0	0
医療・福祉業	0	0	0	0	0	0
農業・畜産業	0	0	0	0	0	0
漁業・水産業	0	0	0	0	0	0

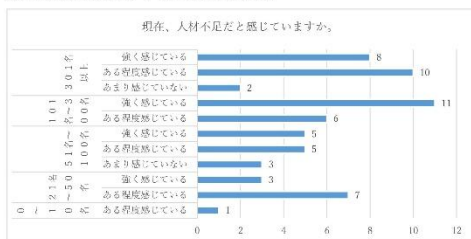
業種と不足している職種・分野のクロス集計を行った。回答数が多かった「卸売業・小売業」「建設業」「情報・通信業」「製造業」のいずれも一定以上の営業職の不足を感じている。それ以外では、卸売業・小売業には販売職、製造業には技術職・生産職、情報・通信業には IT・デジタル関連職といったように、各業種に必要な知識・スキルを持った職種に不足を感じている。

●1-2 人材不足の程度(問 8) × 不足している職種(問 9)



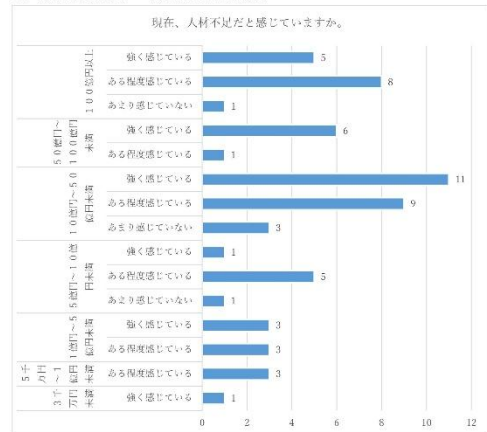
人材不足の程度と不足している職種・分野のクロス集計を行った。人材不足を感じている企業はいずれも営業職・技術職を特に必要としており、その他業種もまんべんなく回答がされている。一方で人材不足をあまり感じていない企業は、不足している職種もほとんど回答がなかった。

●1-3 従業員規模(問 4) × 人材不足の程度(問 8)



従業員規模と人材不足の程度のクロス集計を行った。従業員規模が大きいほど人材不足を感じている企業が多い。

●1-4 売上規模(問 5) × 人材不足の程度(問 8)



売上規模と人材不足の程度のクロス集計を行った。1億円～5億円未満・10億円～100億円未満の企業では「ある程度感じている」と「強く感じている」の回答数に大きな差はみられない。それ以外の企業ではある程度の差がみられる。

●1-5 業種(問3) × 重視する基礎力(問12) = コミュニケーション能力

業種	D 汎用的な力【コミュニケーション能力】 他社の人や、業種の人とも、適切な人とも、適切な言葉で伝え、深くことが理解できる人、考え方の違う人とも、適切な言葉で伝え、深くことが理解できる人			
	重視しない (必要最低限)	やや重視 (必要最低限)	重視する (必要最低限)	極めて重視する(必須)
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	1	2
不動産・物品賃貸業	0	0	0	2
医療・福祉	0	0	1	2
卸売業・小売業	0	1	1	2
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	0
情報通信・メディア	0	0	0	2
建設業	0	1	0	0
製造業	0	0	1	2
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	0	0
製造業	0	1	1	2
農業・林業	0	0	0	0
運輸業・郵便業	0	0	0	0
建設業・建設業	0	0	0	0

業種を問わず、コミュニケーション能力は汎用的かつ極めて重要な基礎力として認識されている。特に「卸売業・小売業」「製造業」「建設業」では「極めて重視する(必須)」とする回答が多数を占めており、実務における必須スキルとして位置づけられていることがうかがえる。

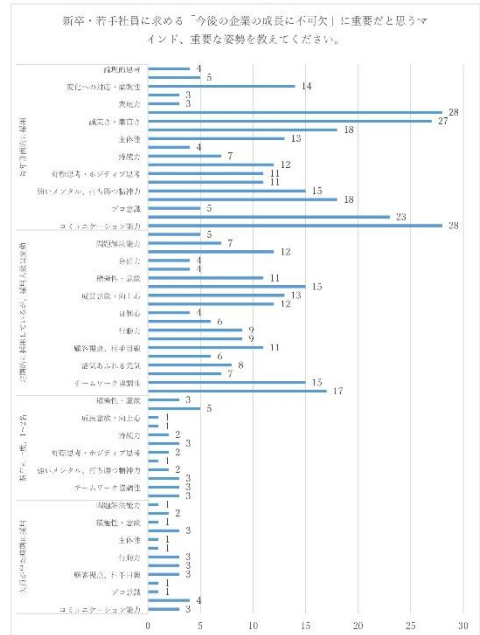
●1-5 業種(問3) × 重視する基礎力(問12) = 専門知識・スキル

業種	D 汎用的な力【専門知識・スキル】 他社の人や、業種の人とも、適切な人とも、適切な言葉で伝え、深くことが理解できる人、考え方の違う人とも、適切な言葉で伝え、深くことが理解できる人			
	重視しない (必要最低限)	やや重視 (必要最低限)	重視する (必要最低限)	極めて重視する(必須)
サービス業(他に分類されないもの)	0	1	3	0
不動産・物品賃貸業	0	0	0	1
医療・福祉	0	1	1	2
卸売業・小売業	0	3	8	4
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	1
情報通信・メディア	0	1	0	0
建設業	1	2	3	0
製造業	0	0	2	1
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0
製造業	1	2	3	0
農業・林業	0	1	0	0
運輸業・郵便業	0	0	2	0
建設業・建設業	0	0	2	0

業種と専門知識・スキルの重視度についてクロス集計を行った結果、業種によってその重要性の認識には差があることが明らかとなった。特に「情報通信業」「医療・福祉」「不動産・物品賃貸業」では「極めて重視する(必須)」との回答が見られ、資格や専門的なスキルが直接業務に関わる職種においては、専門性が強く求められている傾向がうかがえる。

50

●1-6 新卒採用意欲(問11) × 求めるマインド(問22)



新卒採用意欲と求めるマインドのクロス集計を行った。いずれの企業も積極性、誠実さ、チームワーク、コミュニケーション能力に重点を置いており、特に毎年採用する企業は誠実さ、積極性、コミュニケーション能力に関心が高いため、周囲と安定して仕事ができる人材に重点を置いている様子が見える。

51

●1-7 専門学校採用意欲(問16-17) × 業種(問3)

業種	今後の専門学校出身者の採用についてどのように考えていますか。			
	新しいと考えている	これまで採用経験がなく、判断できない	条件が合えば受け入れたい	積極的に受け入れたい
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	1	3
不動産・物品賃貸業	0	0	1	1
医療・福祉	0	0	3	1
卸売業・小売業	0	0	6	9
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	1
情報通信・メディア	0	0	2	0
建設業	0	0	4	5
製造業	0	0	1	4
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0
製造業	0	0	1	0
農業・林業	1	0	0	0
運輸業・郵便業	0	1	1	0

専門学校採用意欲と業種のクロス集計を行った。情報・通信業、建設業、卸売業、サービス業は広く受け入れの姿勢を示している。その他企業も条件次第で受け入れを検討しており、全体的に受け入れの体制を検討している。

52

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問20-21) = 自己管理能力 × 業種(問3)

業種	通信制高校の学生が身に付けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。【自己管理能力】 通信制での学習を通して、自分で計画を立て、時間を管理する力が身に付いている。			
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	0	4
不動産・物品賃貸業	0	0	0	2
医療・福祉	0	0	0	3
卸売業・小売業	0	1	3	8
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	1
情報通信・メディア	0	0	1	1
建設業	0	0	0	6
製造業	0	0	0	2
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0
製造業	0	0	1	0
農業・林業	1	2	4	6
運輸業・郵便業	0	0	0	1
建設業・建設業	0	0	0	1

通信制高校出身者採用意欲【自己管理能力】と業種のクロス集計を行った。不動産、農業、情報では「とてもそう思う」の回答が多いが、その他企業では全体的に「ややそう思う」の回答が多い。採用時の条件として重要度はそれほど高くない。

53

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問 20-21)＝主体的な学習× 業種(問 3)

業種	通信制高校の学生が身に着けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。 【主体的な学習】先生からの指示だけでなく、自ら課題を見つけ、主体的に学習に取り組みます。				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う	とてもそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	1	3	0
不動産・物品賃貸業	0	0	0	0	2
医療・福祉	0	0	0	3	1
飲食業・小売業	0	0	4	6	5
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	0	1
宿泊業・飲食サービス	0	0	1	1	0
建設業	0	0	0	5	4
情報・通信業	0	0	0	2	3
教育・学習支援業	0	0	1	0	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0	0
製造業	0	3	4	6	1
農業・林業	0	0	0	0	1
運輸業・郵便業	0	0	0	1	1

通信制高校出身者採用意欲【主体的な学習】と業種のクロス集計を行った。前設問同様、不動産、農業、情報では「とてもそう思う」の回答が多いが、その他企業では全体的に「ややそう思う」の回答が多い。採用時の条件として重要度はそれほど高くない。

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問 20-21)＝多様な選択肢の実現 × 業種(問 3)

業種	通信制高校の学生が身に着けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。 【多様な選択肢の実現】学習と並行して、アルバイト、習い事、趣味、ボランティアなど、学習以外の活動の経験。				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う	とてもそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	1	0	3	0
不動産・物品賃貸業	0	0	0	1	1
医療・福祉	0	2	1	1	1
飲食業・小売業	0	1	3	7	4
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	0	2	0	0
建設業	0	1	0	4	4
情報・通信業	0	0	2	1	2
教育・学習支援業	0	1	0	0	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	0	1	0
製造業	0	1	6	7	0
農業・林業	0	0	0	0	1
運輸業・郵便業	0	0	0	1	1

通信制高校出身者採用意欲【多様な選択肢の実現】と業種のクロス集計を行った。不動産、農業、建設業、運輸業では重要な要素と感じる企業が多い。その他業種ではあまり重要な要素と感じない企業も一定数いるよう。

54

55

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問 20-21)＝学習ペースの調整 × 業種(問 3)

業種	通信制高校の学生が身に着けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。 【学習ペースの調整】自分の体調や状況に合わせて、学習のペースを自由に調整できる点。				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う	とてもそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	2	2	0
不動産・物品賃貸業	0	0	0	2	0
医療・福祉	0	0	2	1	1
飲食業・小売業	0	0	7	7	1
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	0	1
宿泊業・飲食サービス	0	0	2	0	0
建設業	0	0	1	6	2
情報・通信業	0	0	2	0	3
教育・学習支援業	0	1	0	0	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0	0
製造業	1	3	7	3	0
農業・林業	0	0	0	0	1
運輸業・郵便業	0	0	1	0	1

通信制高校出身者採用意欲【学習ペースの調整】と業種のクロス集計を行った。多くの業種で重要な要素と感じる企業とそうでない企業が二極化となっている。企業によって考え方の違いがうかがえる。

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問 20-21)＝多様な価値観 × 業種(問 3)

業種	通信制高校の学生が身に着けた特性は、採用において評価すべき重要な要素だと思いますか。 【多様な価値観との交流】年齢や経験が異なる多様な生徒や先生と関わることで、新たな価値観や視野をもっている。				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う	とてもそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	1	1	2	0
不動産・物品賃貸業	0	0	0	1	1
医療・福祉	0	0	1	1	2
飲食業・小売業	0	0	2	9	4
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	0	1	1	0
建設業	0	0	2	5	2
情報・通信業	0	0	2	1	2
教育・学習支援業	0	0	0	0	1
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0	0
製造業	1	1	4	7	1
農業・林業	0	0	0	0	1
運輸業・郵便業	0	0	0	1	1

通信制高校出身者採用意欲【多様な価値観】と業種のクロス集計を行った。いくつかの業種で「どちらとも思えない」に回答する企業が目立つが、全体的には「ややそう思う」と回答する企業が多く、特に製造業、建設業、卸売業が多い。

56

57

●1-8 通信制高校出身者採用意欲(問 20-21)＝高いデジタル活用能力 × 業種(問 3)

業種	通信制高校の学生が身に付けた特長は、採用において評価すべき貴重な事業だと感じますか。 [[高いデジタル活用能力] レポート提出やオンライン授業などを通じて、デジタルツールや情報技術の活用能力を有する。]				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらとも思えない	ややそう思う	とてもそう思う
サービス業(他に分類されないもの)	0	1	1	1	1
不動産・物品賃貸業	0	0	1	1	0
医療・福祉	0	0	0	4	0
宿泊業・小売業	0	1	5	8	1
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	0	0	1
宿泊業・飲食サービス	0	0	2	0	0
建設業	0	0	4	4	1
情報・通信業	0	0	0	2	3
教育・学習支援業	0	0	0	0	1
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0	0
製造業	0	3	6	4	1
農業・林業	0	1	0	0	0
運輸業・郵便業	0	0	1	0	1

通信制高校出身者採用意欲(高いデジタル活用能力)と業種のクロス集計を行った。情報、教育、学術研究では特に重要性を感じているが、その他業種では「どちらともいえない」の回答も一定数あり、仕事で活用する環境にあるかどうかによって大きく左右されることが要因であるといえる。

●1-9 事業への興味(問 24) × 業種(問 3)

業種	今回ご案内している「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業」について興味はありますか。			
	非常に興味がある	少し興味がある	あまり興味がない	全く興味がない
サービス業(他に分類されないもの)	0	4	0	0
不動産・物品賃貸業	0	2	0	0
医療・福祉	0	1	1	2
卸売業・小売業	3	8	4	0
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	2	0	0
建設業	2	3	4	0
情報・通信業	0	2	3	0
教育・学習支援業	1	0	0	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	1	0	0
製造業	0	8	6	0
農業・林業	0	1	0	0
運輸業・郵便業	0	1	1	0

事業への興味と業種のクロス集計を行った。製造業、卸売業、サービス業で「少し興味がある」と回答した企業が多いが、情報、建設業、医療では興味を持たれる企業は少ない。

58

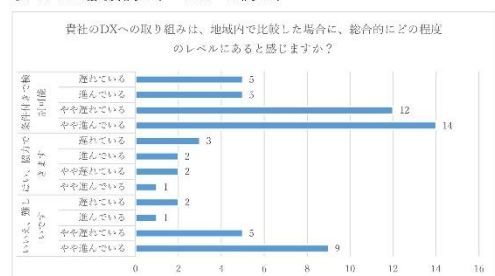
59

●1-10 PBL 協力度(問 25) × 業種(問 3)

業種	専門学校生と貴社の抱える具体的な課題解決に取り組むPBL(課題解決型学習)機会を提供することに、どの程度協力・理解できますか。		
	はい、協力できます	条件付きで検討可能	いいえ、難しいです
サービス業(他に分類されないもの)	0	3	1
不動産・物品賃貸業	0	2	0
医療・福祉	1	1	2
卸売業・小売業	5	6	4
学術研究・専門・技術サービス業	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	2	0
建設業	2	5	2
情報・通信業	0	2	3
教育・学習支援業	0	1	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	1	0
製造業	0	10	4
農業・林業	0	1	0
運輸業・郵便業	0	1	1

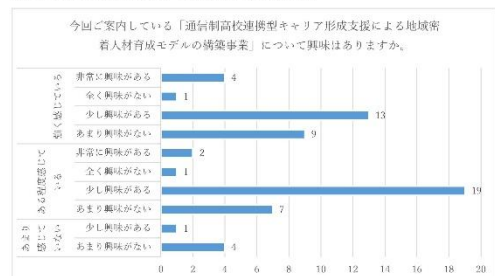
PBL 協力度と業種のクロス集計を行った。多くの業種で「条件付きで検討可能」と回答した企業が多かった。協力できると答えた企業は 3 業種にとどまった。

●1-11 PBL 協力度(問 25) × DXレベル(問 37)



PBL 協力度と DX レベルのクロス集計を行った。協力できると答えた企業でも DX レベルが上回っていると回答した企業が多い。その他企業でも DX レベルの差は大きくは見られない。

●1-12 企業の人材不足(問 8) × 本事業への興味(問 24)



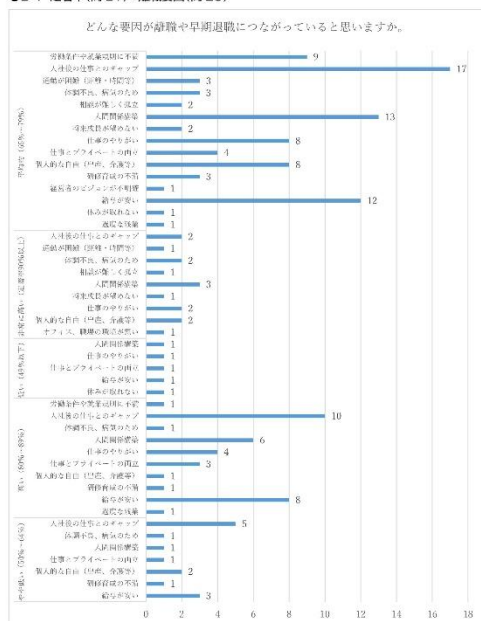
企業の人材不足と本事業への興味のクロス集計を行った。人材不足を感じている企業は、事業に興味を示す傾向が見られる。人材不足をあまり感じていない企業は、事業に対してもあまり興味を示していない。

60

61

【クロス集計2】若年者の採用・定着状況を分析する

●2-1 定着率(問 27)×離職要因(問 28)



定着率と離職要因のクロス集計を行った。定着率が低い企業では、特に人間関係、仕事のギャップ、給与面を理由とした離職が多い。

●2-2 新卒採用の積極度(問 11) × 定着率(問 27)



新卒採用の積極度と定着率のクロス集計を行った。毎年度計画的に採用している企業は、平均以上の定着率を感じている企業が多い。

【クロス集計3】人材育成・教育(OJT・OFF-JT)の取組状況

●3-1 従業員数(問 4) × OJT 期間(問 32)



従業員数と OJT 期間のクロス集計を行った。従業員数が多い企業は1年未満の長い期間で取り組む傾向が強く、従業員数が少ない企業ほど OJT 期間が短くなる傾向がある。

●3-2 OJT の体系性(問 31) × DX 活用度(問 37-38)=総合



OJT の体系性と DX 活用度のクロス集計を行った。OJT を実施していない企業はレベルの遅れを感じている。各部門で自由に実施している企業はレベルが進んでいると感じている。それ以外の企業では特に大きな差は見られない。

●3-3 OJT 期間(問 32) × 定着率(問 27)



OJT 期間と定着率のクロス集計を行った。1年以上 OJT 期間がある企業は、定着率が高いとする回答が得られた。OJT 期間が1年未満の企業は、定着率が平均的とする回答が多く見られた。

●3-4 OFF-JT 実施状況(問 35) × 定着率(問 27)

採用実施状況	過去5年間で採用した新卒社員(高卒・大卒・専門学校卒問わず)の、入社3年後の定着率は高い水準にあると感じますか。				
	低い (49%以下)	やや低い (50%～64%)	平均的 (65%～79%)	高い (80%～89%)	非常に高い (定着率90%以上)
各部門で自由に変更	0	1	7	3	0
変更していない	1	3	3	1	0
部内の人選権限に実施	0	1	4	4	2
数社に一度、人数は未定	0	0	3	0	0
毎年計画的に全社で実施	1	1	14	6	6
					50

OFF-JT 実施状況と定着率のクロス集計を行った。どの企業も定着率は平均的という回答が最も多いが、OJT を毎年計画的に実施している企業では、定着率が高いとの回答も一定数あった。

【クロス集計4】DX 推進への取組状況

●4-1 DX レベル(問 37) × 業種(問 3)

業種	貴社のDXへの取り組みは、地域内で比較した場合に、総合的にどの程度のレベルにあると感じますか。			
	進んでいる	やや進んでいる	やや遅れている	遅れている
サービス業(他に分類されないもの)	1	1	1	1
不動産・物品賃貸業	0	1	0	1
医療・福祉	0	1	3	0
卸売業・小売業	3	3	6	3
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	1	0	1
建設業	2	2	3	2
情報・通信業	1	4	0	0
教育・学習支援業	0	1	0	0
生活関連サービス業、娯楽業	0	1	0	0
製造業	1	7	4	2
農業・林業	0	1	0	0
運輸業・郵便業	0	1	1	0
				53

DX レベルと業種のクロス集計を行った。製造業、建設業、卸売業では同一業種内でも進んでいる企業と遅れている企業に分かれており、医療・福祉では遅れを感じている企業が多い。

66

67

●4-2 DX 人材需要(問 44) × 業種(問 3)

業種	DX推進に必要な専門知識を持つ人材(AI活用、データサイエンティスト、エンジニアなど)を採用したいと考えていますか。			
	すぐに採用したい (1年以内)	2～3年以内に採用したい	採用したいが検討が必要	当面採用の予定無し
サービス業(他に分類されないもの)	0	0	2	2
不動産・物品賃貸業	0	0	1	1
医療・福祉	1	0	2	1
卸売業・小売業	2	2	7	4
学術研究・専門・技術サービス業	0	0	1	0
宿泊業・飲食サービス	0	1	1	0
建設業	1	0	4	4
情報・通信業	2	0	2	1
教育・学習支援業	0	0	0	1
生活関連サービス業、娯楽業	0	0	1	0
製造業	2	2	7	3
農業・林業	0	0	0	1
運輸業・郵便業	0	0	1	1
				61

DX 人材需要と業種のクロス集計を行った。積極的な採用を検討しているのは卸売業・小売業、情報・通信業、製造業で目立つが、それ以外の業種では検討が必要と回答した企業が多い。

68

4. 講評

はじめに

本報告書は、令和 7 年度 文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」の一環として実施した、山口県内中小企業を対象とするアンケート調査の集計結果に基づき、地域企業における人材育成および人材確保の実態を整理・分析し、その結果を報告するものである。

本調査では、特に通信制高校との連携を含むキャリア形成支援の可能性、デジタルトランスフォーメーション(DX)の活用状況、ならびに若年層の定着支援体制の現状に着目し、企業側の認識や課題意識を把握することを目的とした。

調査対象は、当初、山口県内の中小企業約 30 社程度を想定していたが、最終的には 61 件の有効回答を得ることができた。ここでは、企業属性、経営戦略、人材確保・育成、定着支援、DX 活用の実態を整理し、講評する。

第 1 節 回答企業の属性と経営戦略

1-1. 回答企業の属性

● 回答企業の地理的分布

回答企業の所在地は、山口県内が 57 件(93.4%)、山口県外が 4 件(6.6%)であった。回答者の大半が山口県内企業で占められており、本調査の目的である「地域中小企業」の実態把握に資する結果となっている。

市町別に見ると、回答数が多い順に山口市(28 件)、宇部市(23 件)、周南市(21 件)であった。これらの市は、県内において人口規模や経済活動が比較的集中している地域であり、企業の集積度が高いことが回答数にも反映されたものと考えられる。一方で、本調査結果は主要都市圏の企業意見が中心となっている点に留意し、今後の分析においては地域特性を踏まえた解釈が必要である。

● 業種別分布

業種別では、卸売業・小売業が 15 件(24.6%)と最も多く、次いで製造業 14 件(23.0%)、建設業 9 件(14.8%)となった。卸売業・小売業と製造業の二業種で全体の約半数(47.6%)を占めており、これら地域産業の中核を担う業種における人材確保や人材育成、DX への取り組みに関する課題が、本調査結果の特徴を形成していると考えられる。

● 従業員規模別分布

従業員規模別では、301 名以上が 20 件(32.8%)と最も多く、次いで 101 名～300 名が 17 件(27.9%)、51 名～100 名が 13 件(21.3%)であった。従業員数 101 名以上の企業が全体の 60.7%を占めており、「中小企業」という枠組みの中でも、比較規模の大きい企業からの回答が多い傾向が見られる。このことから、一定の組織規模を有する企業ほど、人材育成や DX 推進に対する関心を持ち、調査への協力が得られやすかった可能性が示唆される。

● 売上高別分布

売上高別では、10 億円～50 億円未満が 23 件(37.7%)と最も多く、次いで 100 億円以上が 14 件(23.0%)であった。従業員規模が比較的大きい企業の回答が多かったことに対応し、売上高においても一定規模以上の企業が多く含まれる結果となっている。企業規模の違いが、経営戦略や

69

人材育成、DX への取り組み姿勢に影響を与えている可能性がうかがえる。

1-2. 今後の事業展開における重点施策

今後の事業展開において「重要性が高い」とされた施策は、多い順に、既存顧客への深耕・取引拡大(37 件)、コスト削減や生産効率の向上(34 件)、人材育成・専門スキル再構築・リスキリング(33 件)であった。これらの結果から、回答企業の多くが、新規事業の拡大よりも、既存事業基盤の強化と内部経営資源の最適化を重視している状況が読み取れる。特に「人材育成・専門スキル再構築・リスキリング」が上位に位置している点は、人材不足を背景に、人材の確保に加えて既存人材の育成、再教育を経営課題として捉えている企業が多いことを示している。

また、職場の労働環境、報酬、人間関係などの改善(29 件)や、デジタル技術(DX)の推進、AI・RPA などのデジタル化、IT ツール活用(27 件)も比較的多く選択されており、人手不足への対応と生産性向上の両面から、職場環境の整備とデジタル活用を進めようとする意向が一定程度うかがえる。

第 2 節 人材確保・採用に関する実態

2-1. 人材不足の認識と求める職種

- 人材不足の認識

人材不足については、「ある程度感じている」が 29 件(47.5%)、「強く感じている」が 27 件(44.3%)となり、両者を合わせると全体の 91.8%に達した。多くの企業が人材不足を認識しており、地域中小企業において人材確保が重要な経営課題となっている状況がうかがえる。

- 不足している職種

不足している職種としては、技術職が30件(30.0%)と最も多く、次いで営業職27件(27.0%)、製造・生産職 10 件(10.0%)であった。技術職と営業職で全体の半数以上を占めており、専門性を要する現場人材や、収益に直結する営業人材の不足が顕著であることが読み取れる。

特に技術職の不足は、事業の継続や高度化に直結する課題であり、後述する DX 推進への関心の高さと関連して、デジタル化や生産性向上を担う人材の確保が企業にとって重要なテーマとなっていることが示唆される。

- 人材が採用できない要因

人材が採用できない要因として最も多かったのは「応募者が少ない」で 44 件(29.5%)であった。次いで「給与・待遇の競争が激しい」および「仕事の魅力が伝わりにくい」がともに 23 件(15.4%)で続いている。これらの結果から、採用における課題は、単に企業側の情報発信の不足にとどまらず、労働市場全体における地域企業の競争環境、特に給与・待遇面における制約が影響している可能性がうかがえる。新卒学生の採用募集に関しては、応募者の母集団形成に苦慮している企業が多く、今後の採用においては、仕事の内容や魅力を適切に伝える工夫とともに、地域内外の人材動向を踏まえた対策が求められる。

- 採用計画の有無

採用計画については、「毎年計画的に採用している」が 34 件(55.7%)と最も多く、次いで「定期的に採用しているが、採用人数は変動する」が 18 件(29.5%)であった。全体として、約 9 割の企業が何らかの形で継続的な採用活動を行っており、人材不足を背景に、計画的な採用を重視している

実態が確認された。

2-2. 採用において重視する人物像・スキル

本調査では、採用時に重視する能力・スキルについて複数の項目を設定し、その重要度を把握した。以下では、「高く求め重視する」および「極めて重視する(必須)」と回答された割合が高い項目を中心に整理する。

【態度・意欲・対人スキル】

態度や意欲、対人スキルに関する項目は、全体として極めて高い重要度が示された。協調性・チームワークや社会・会社のルール(ビジネスマナーなど)については、9 割以上の企業が「重要である」以上と回答しており、主体性、積極性・意欲、顧客視点・相手目線についても同様の傾向が見られた。また、目標達成への意欲・粘り強さについては、「極めて重視する(必須)」が 24 件(40.0%)と比較的高く、誠実さ・素直さについても、ほぼすべての企業が「重要である」以上と評価している。対人コミュニケーション能力については、「高く求め重視する」と「極めて重視する(必須)」を合わせて 85.3%となり、多くの企業が重視していることが確認された。

これらの結果から、地域中小企業では、専門的な知識や技術以上に、社会人としての基本的な姿勢や倫理観、チームで円滑に業務を進めるための対人能力、仕事に対する前向きな姿勢を重視する傾向が強いことが明らかとなった。

【専門性・思考力・その他】

ITリテラシーやデジタル活用能力については、「高く求め重視する」および「極めて重視する(必須)」を合わせて 78.0%となっており、一定の重要性が認識されている。これは、前節で示した事業戦略における DX 推進への関心と整合する結果である。

特定の専門知識・技術については、「極めて重視する(必須)」が 17 件(27.9%)と比較的高く、特に技術職を中心に、専門性を有する人材へのニーズが存在していることがうかがえる。一方、PC スキル(Word、Excel など)については、「重要である(できれば身に付けたい)」が最も多く、必須条件というよりも、業務上望ましい基礎スキルとして位置付けられていると考えられる。

第 3 節 特定の人材の受入意向とキャリア形成支援

3-1. 専門学校・通信制高校出身者の受入意向

- 専門学校卒業生の採用実績

専門学校卒業生の採用実績については、「はい」が 42 件(68.9%)となり、約 7 割の企業がこれまで専門学校卒業生を採用した経験を有していることが分かった。

- 専門学校卒業生の今後の受入意向

今後の受入意向については、「条件が合えば受け入れたい」が 30 件(49.2%)、「積極的に受け入れたい」が 29 件(47.5%)となり、両者を合わせると 96.7%の企業が専門学校出身者の採用に前向きな姿勢を示している。この結果から、専門学校が育成する実践的な専門知識や技術について、多くの企業が一定の評価を行っていることがうかがえる。特に、技術職不足を感じている企業にとっては、専門学校出身者が人材確保の有力な選択肢の一つとして認識されている可能性が示唆される。

- 通信制高校出身者の採用実績

通信制高校出身者の採用実績については、「いいえ」が 44 件(72.1%)と最も多く、専門学校卒業生と比較すると、採用実績は限定的であることが明らかとなった。

- 通信制高校出身者の今後の受入意向

今後の受入意向については、「条件が合えば受け入れたい」が 38 件(62.3%)と最も多かった。一方で、「これまで採用経験がなく、判断できない」が 11 件(18.0%)と、「積極的に受け入れたい」9 件(14.8%)を上回っており、採用実績の少なさが、評価基準や育成方法に対する不安や判断の難しさにつながっている様子がうかがえる。ただし、通信制高校出身者の受入に対して否定的な回答は少なく、「通信制高校でどのような教育を受けて、何を学べるのか」という情報開示、企業側の条件整備や通信高校への情報提供、キャリア形成支援の特組みが明確になれば、受入が進む余地があることが示唆される。

3-2. 若者就職における評価要素

若者の就職に際して企業が重視する評価要素について整理した結果、対人能力や社会性に関わる項目が特に重視されていることが明らかとなった。

コミュニケーション能力については、「ややそう思う」が 31 件(50.8%)、「とてもそう思う」が 16 件(26.2%)となり、両者を合わせて 77.0%の企業が重要な評価要素であると回答している。この傾向は、第 2 節における採用時に重視する能力・スキルの結果とも一致しており、若手人材に求める基礎的要素として、コミュニケーション能力が重視されていることが確認された。

社会経験・アルバイト経験については、「ややそう思う」が 27 件(44.3%)、「とてもそう思う」が 19 件(31.1%)であり、75.4%の企業が重要視している。これは、就職前の社会経験を通じて、基礎的なビジネスマナーや社会性が一定程度身に付いていることへの期待を反映した結果と考えられる。

部活動・クラブ活動経験については、「ややそう思う」が 27 件(44.3%)と最も多く、「どちらとも言えない」が 15 件(24.6%)であった。活動内容そのものよりも、チームワークや継続的に取り組む姿勢といった汎用的な能力の獲得という観点から評価する企業がある一方で、評価の位置付けが必ずしも定まっていない企業も一定数存在している。

高校時代に専門教育を履修した経験については、「どちらとも言えない」が 25 件(41.0%)と最も多かった。通信制高校出身者の採用経験が少ないことに加え、履修内容と自社業務との関連性を判断しにくい企業が多いことが、評価の難しさにつながっていると考えられる。

以上を踏まえた総合的な人物像として、企業が重視する項目は、コミュニケーション能力(51 件)、誠実さ・素直さ(50 件)、チームワーク・協調性(44 件)が上位を占めた。多くの企業が、業務遂行における基本的な姿勢や対人関係能力を重視しており、若手社員が組織の一員として定着し、継続的に成長していくことへの期待が強いことがうかがえる。

3-3. キャリア形成支援への関心

専修学校との連携・協業によるキャリア支援への関心については、「少し興味がある」が 33 件(54.1%)と過半数を占めた一方で、「あまり興味がない」も 20 件(32.8%)存在している。「非常に興味がある」は 6 件(9.8%)にとどまり、現時点では、専修学校との連携に対して強い関心を持つ企業は限定的であることが示された。

インターンシップ・職場体験等の受入意向については、「条件付きで検討可能」が 36 件(59.0%)

と最も多く、「はい、協力できます」が 8 件(13.1%)であった。両者を合わせると 72.1%の企業が、何らかの形で協力可能性を示している。一方で、「条件付き」が多数を占めていることから、指導体制の確保や業務負荷、受入期間などが、取組導入に際しての主な課題となることが読み取れる。今後は、専修学校側が企業の負担軽減を意識した「低負荷型の企業実習」としてスモールステップで連携できる受入設計や支援体制を提示することが重要である。

第 4 節 定着支援体制と OJT・Off-JT の実態

4-1. 従業員 1 人の定着率と離職要因

新卒・中途採用者の定着率については、「平均的(65%～79%)」が 31 件(50.8%)と最も多く、「高い(80%～89%)」が 14 件(23.0%)、「非常に高い(定着率 90%以上)」が 8 件(13.1%)であった。これらを合わせると、87.0%の企業が自社の定着率を「平均以上」と認識している。多くの企業が人材不足を課題として認識する一方で、一定の定着水準を維持していると捉える企業が多く、各社において何らかの定着に向けた取組が行われている可能性がうかがえる。

若手社員の離職要因として最も多かったのは「入社後の仕事とのギャップ」(34 件)であり、次いで「給与が安い」(24 件)、「人間関係構築」(23 件)が続いた。「入社後の仕事とのギャップ」は、採用時の情報提供や業務内容に対する期待値と実態との不一致が影響している可能性を示しており、採用段階での丁寧な説明と、入社後の継続的なフォローアップ体制の重要性を示唆している。また、「給与が安い」は、第 2 節で示した採用困難要因とも共通しており、地域中小企業が抱える賃金面での構造的課題が、採用のみならず定着にも影響を及ぼしている状況が読み取れる。

4-2. OJT および Off-JT の実施状況

- OJT(On-the-Job Training)の実施方法

OJT の実施方法については、「新たな人員採用時に実施」が 23 件(37.7%)、「毎年計画的に全社で実施」が 17 件(27.9%)であり、これらを合わせても 65.6%にとどまっている。OJT を計画的かつ継続的に実施している企業は、必ずしも多数派ではないことが分かる。

- OJT の対象者

OJT の対象者としては、「新卒入社 1 年目」が 42 件(76.4%)と圧倒的に多かった。この結果から、OJT は主に新卒者の早期戦力化を目的として実施されている一方で、中途採用者や既存社員を対象とした継続的なスキル向上の仕組みとしては、十分に活用されていない可能性が示唆される。

- Off-JT(Off-the-Job Training)の実施方法

Off-JT については、「毎年計画的に全社で実施」が 28 件(45.9%)と最も多かった。OJT と比較すると、Off-JT の方が計画的な実施体制が整っている企業が多く、外部研修や集合研修など、体系的な教育機会を重視する傾向がうかがえる。

第 5 節 DX 活用とデジタル人材確保の実態

5-1. DX 推進の進捗状況とツール活用状況

- DX 推進の進捗状況

「やや進んでいる」(24 件、39.3%)と「進んでいる」(8 件)を合わせ、52.3%の企業が前向きな回答をしている。地域中小企業においても、DX への意識は高まりつつあることが示された。

● デジタルツールの活用状況

ツール	全体的に使っている＋部門によっては使っている	全く使っていない
クラウドサービス	77.1%	18.0%
Web 会議システム	70.0%	15.0%
電子契約	71.7%	20.0%
RPA(ロボティック・プロセス・オートメーション)	36.7%	36.7%
AI 関連ツール	16.4%	82.0%

デジタルツールの活用状況を見ると、クラウドサービス、Web 会議システム、電子契約といった、業務効率化やペーパーレス化に直結するツールは 7 割前後の企業が導入が進んでいる。一方で、RPA や AI 関連ツールについては、「全く使っていない」とする回答が多く、特に AI 関連ツールでは 8 割以上の企業が未導入であった。

5-2. デジタル人材確保と育成の課題

● DX 推進を担う人材の充足度

DX 推進を担う人材の充足度については、「まだまだ充足していない」が 33 件(54.1%)、「全く充足していない」が 20 件(32.8%)であり、合わせて 86.9%の企業がデジタル人材の不足を感じている。

● デジタル人材の育成状況

デジタル人材の育成については、「全く実施していない」が 27 件(44.3%)と最も多く、「定期的」に実施している」は 2 件(3.3%)にとどまった。多くの企業がデジタル人材の必要性を認識しつつも、体系的な育成の仕組みを構築するには至っていない状況がうかがえる。

● 外部教育機関との連携

外部教育機関との連携状況については、「不十分だが連携している」が 22 件(36.1%)と最も多く、「全く連携できていない」が 20 件(32.8%)であった。大学や専修学校などの教育機関との連携が十分に進んでいないことも、デジタル人材育成を進める上での課題の一つと考えられる。

● DX 人材の採用意向

DX 人材の採用意向については、「採用したいが検討が必要」が 29 件(47.5%)と最も多かった。採用に前向きな姿勢を示す企業は一定数存在するものの、受入体制や求める人材像の具体化に課題を抱えている様子がうかがえる。

● 採用したい DX 人材の経験

採用したい DX 人材の経験としては、「IT 業界の経験者」が 45 件と最も多く、即戦力となる専門的知識・経験を有する人材への期待が高いことが読み取れる。

● DX 推進における課題

DX 推進における課題として最も多かったのは「予算(費用)の確保」(36 件)であり、次いで「日常業務が多忙、人手不足」(32 件)、「社風・組織文化」(24 件)、「目的・ゴールの明確性」(24 件)が続いた。これらの結果から、資金や人的リソースの制約に加え、組織文化や方向性の共有といった非金銭的要因も、DX 推進を進める上での重要な課題となっていることが示唆される。

第 6 節 総合考察と今後の提言

6-1. 総合考察

本調査結果から、山口県内の中小企業の多くが人材不足を重要な経営課題として認識しており、事業の継続と成長に向けて、「既存顧客への深耕」および「人材育成・リスキリング」を重視している状況が確認された。

【人材に関する課題】

採用において企業が重視する要素は、専門知識や高度な技能よりも、「誠実さ・素直さ」「チームワーク」「コミュニケーション能力」といった基礎的なポータブルスキルであることが明らかとなった。これは、若手人材に対して早期の定着と組織内での継続的な成長を期待している企業が多いことを反映した結果と考えられる。

専門学校出身者については、多くの企業が採用実績を有し、今後の受入にも前向きな姿勢を示している。一方、通信制高校出身者については、採用実績の少なさから評価や育成方法に戸惑いを感じている企業が一定数存在するものの、受入自体に否定的な企業は少ない。通信制高校出身者の基礎能力やポータブルスキルを整理・可視化し、企業と連携したキャリア形成支援の仕組みを構築することで、受入が進む可能性が示唆される。

【定着に関する課題】

若手社員の離職要因として最も多かったのは「入社後の仕事とのギャップ」であり、採用時の情報提供のあり方や、入社後の育成・フォロー体制が定着に大きく影響していることが確認された。OJT は新卒入社 1 年目を中心に実施され、Off-JT は比較的計画的に行われているものの、育成の継続性や中途採用者への対応については、今後の課題として整理できる。

【DX に関する課題】

DX 推進への関心は一定程度高まっている一方で、「予算の確保」や「人手不足」といったリソース面の制約が、推進上の大きな課題となっている。デジタルツールの導入は進みつつあるものの、AI や RPA などの高度な技術活用は限定的であり、「デジタル人材の不足」や体系的な育成体制の未整備」が DX 推進の障壁となっている。また、外部教育機関との連携が十分に進んでいないことも、地域全体でのデジタル化を進める上での課題の一つである。

6-2. 教育プログラム・キャリア支援設計への提言

本調査結果を踏まえ、専修学校による地域密着型人材育成モデルの構築に向け、以下の提言を行う。

1. 企業ニーズに即したポータブルスキル(※)育成の強化

企業が採用時に重視する「誠実さ・素直さ」「コミュニケーション能力」「チームワーク・協調性」を中核とした教育プログラムを体系的に設計することが重要である。通信制高校との連携においては、社会経験やアルバイト経験等を通じて培われたこれらの能力を言語化し、企業に提示できるキャリアシート等の整備が有効である。

2. 入社後ギャップの解消と定着支援を目的とした教育連携の推進

離職要因として多く挙げられた「入社後の仕事とのギャップ」を軽減するため、インターンシップや職場体験を活用した教育連携が求められる。その際、「条件付きで検討可能」とする企業が多い実態を踏まえ、教員による指導支援や短期・モジュール型実習など、企業負担を軽減する仕組みの構築が重要である。

3. 地域 DX 推進を支えるリスキリング・Off-JT 連携の推進

デジタル人材不足への対応として、企業の業務実態に配慮したオンライン型や短期集中型の Off-JT プログラムの開発が求められる。特に、IT リテラシーやデジタル活用能力を基盤とし、企業内で DX 推進を担う人材の育成を支援する取組が重要である。

4. 通信制高校出身者のキャリア評価基準の整備

通信制高校出身者の評価に迷う企業が多い現状を踏まえ、専修学校が中心となり、履修内容や課外活動、就労経験等を通じて身に付けた汎用的能力を可視化する評価基準を整備し、企業に提示することで、採用時の不安軽減につながることが期待される。

まとめ

本調査は、山口県内の中小企業 61 社を対象に実施し、人材確保・育成、定着支援、ならびにデジタルトランスフォーメーション(DX)に関する実態を定量的に整理したものである。その結果、地域中小企業においては、人材不足と DX 推進に関する課題が重要な経営テーマとなっていることが明らかとなった。

人材確保の面では、基礎的なポータブルスキルを重視する傾向が強く、若手人材の定着と成長への期待が高いことが確認された。また、専門学校出身者の受入には高い関心が示される一方、通信制高校出身者については評価や育成方法に課題が残るものの、条件整備や支援の工夫により新たな人材供給源となる可能性が示唆される。DX 推進については、業務効率化を中心とした取組が進む一方で、デジタル人材の不足や育成体制の未整備、リソース面の制約が課題として整理された。

以上を踏まえ、専修学校には、通信制高校との連携を軸に、企業ニーズに即した人材育成とキャリア支援を担う役割が期待される。企業の負担軽減に配慮した教育連携や、地域 DX を支える人材育成の取組を通じて、若者の地域定着と地域産業の持続的発展に寄与することが求められる。

(※)ポータブルスキルとは、特定の職種・業界・会社に限定されず、どの仕事や環境でも活用できる汎用的な能力・姿勢・行動特性を指します

文部科学省委託事業

令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)
「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業」

地域中小企業向け実態調査(DX・人材受入・定着支援)

(アンケート調査)報告書

令和 8 年 2 月
学校法人 YIC 学院
〒754-0021 山口県山口市小郡黄金町 2 番 24 号

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

5-4 オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査(通信制高校) 資料4

令和 7 年度「専修学校による地域産業人材の人材育成事業」
(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域産業人材育成モデルの構築事業

オンライン学習環境／ICT リテラシー 実態調査(通信制高校) 報告書

2026 年 2 月

学校法人 YIC 学院

1

2

目次

1 調査概要.....	4
1.1 事業の背景・目的.....	4
2 オンライン学習環境／ICT リテラシー実態調査.....	5
2.1 調査概要.....	5
2.1.1 目的.....	5
2.1.2 実態調査.....	5
3 対象校の概況と取り組み.....	6
3.1 聖光高等学校.....	6
3.2 弘明高等学校.....	10
3.3 松尾高等学校.....	14
4 ICT・オンライン学習環境比較.....	18
4.1 3 校の ICT・オンライン学習環境の比較.....	18
4.2 共通する課題.....	19
5 考察.....	20
5.1 連携型産業人材育成モデルの必要性.....	20
5.2 入学前からのキャリア教育と併走型支援.....	20
5.3 段階的なデジタルリテラシー・教養と職業教育.....	20
5.4 地域産業に直結するキャリアパスの提示.....	21
5.5 管理業務の ICT 化による教職員業務の最適化.....	21
5.6 結論.....	22
【別紙】通信制高校におけるオンライン学習環境／ICT リテラシーについて.....	23

3

1 調査概要

1.1 事業の背景・目的

現在、地域産業における人材の空洞化や生活サービスの前倒し問題といった課題が顕在化しており、地域に根拠した教育機関がその受け皿として果たすべく役割は大きくなっている。特に、通信制高校など多様な背景を持つ者に対して、統制性の高い「進学ルート」職業的自立につながる実践的な学びの場を提供することが急務である。

本事業は、通信制高校との連携を契機に、入学前からのキャリア教育、在学中の柔軟なプログラム設計(オンライン学習・コース選択制・企業連携型等の導入)、AI や ICT を活用したデジタルリテラシー育成、地域企業(拠点施設等)との協働を通じた進路探索などを展開し、「県内初の AI × データサイエンスを導入したクロスオーバー型新コース」を目標とする。さらに、「地域に根拠する専修学校」づくりを推進するものである。また、本業後のキャリア定着や地域貢献までを見据えた「育成・伴走・定着」の一体型支援体制を構築し、若年層の社会的移動の促進と地域産業の人材確保・活性化に資する教育モデルの構築を目指す。

『地域産業人材育成モデルの方針』

- ・地域からの若者流出を止め、地域に“選ばれる専修学校”を創出する
- ・学びの多様化とキャリア支援の一体化
- ・地域社会に貢献する職業人材の育成
- ・2 年間の枠にとらわれず、継続的な育成モデルの構築

4

2 オンライン学習環境／ICTリテラシー実態調査

2.1 調査概要

2.1.1 目的

本業務は、通信制高校におけるオンライン学習環境の整備状況や ICTリテラシーの実態を把握することを目的とし、今後の教育支援・教材開発、外部連携の可能性を検討するための基礎資料とするものである。

2.1.2 実施概要

(1) 調査対象

県内通信制高校 3 校を対象にヒアリング調査を実施した。

- ・ 聖光高等学校(元市)
- ・ 誠英高等学校(防府市)
- ・ 山口松風館高等学校(山口市)

(2) 実施時期

2025 年 11 月 21 日～11 月 25 日

(3) 調査項目

【別紙】通信制高校におけるオンライン学習環境／ICTリテラシーについてに基づき、以下の内容をヒアリングした。

- ・ 学校・オンライン学習の取り組み方針について
- ・ 授業の実施状況について
- ・ ICT 機器やネット環境について
- ・ 学習管理システム(LMS)の利用について
- ・ ICTリテラシー(教員・生徒)について
- ・ オンライン学習の課題と今後の可能性について
- ・ その他

5

3 対象校の概要と取り組み

3.1 聖光高等学校

概要

① 学校名	学校法人 誠鑑学園 聖光高等学校
② 所在地	〒743-0011 山口県光市光井 9-1 日 23 番 1 号 TEL:0833-72-1187(代) FAX:0833-72-1308
③ 校長	廣川 晋
④ 教育方針	1. キリスト教による教育によって、宗教的情操や、特性・実践力を養う。 2. 個人の特性を大切にし、自覚と自信を深めるよう自らをきかえ、かつ奉仕と実践への活動力をめざす。 3. 人間連帯と相互信頼の念を深め、人間としての責のしあわせを学びとり、基礎的学力と生活実践力を身につける。
⑤ 校訓	常に善を追い求め、 常に善を絶えず祈れ、 すべてのこと感謝せよ
⑥ 生徒数	全校生徒数 502 名 通信制生徒数 200 名
⑦ コース・学科	全日制 ・普通科(進学コース/社会福祉コース/総合コース) ・社会福祉科 ・総合ビジネス科(情報ビジネスコース/医療ビジネスコース) ・機械科 通信制 ・普通科
⑧ URL	https://www.seiko-h.ed.jp/

ヒアリング調査日時:2025 年 11 月 21 日(金)13:30～14:30

ヒアリング回答者:坂本素次(教頭)

形態:対面

6

【外観】



【校内】



7

(1)学校・オンライン学習の取り組み方針について

聖光高等学校の通信制課程は、平成 15 年に全日制併設される形で開設した。不登校経験を持つ生徒も多いため、「まずは卒業させること」を教育の大きな目標としている。現在、オンライン学習をメインとした教育は実施しておらず、週 1 回(土曜日)のスクーリングによる対面指導を重視する方針をとっている。

(2)授業の実施状況について

スクーリングは毎週 1 曜日に、前期・後期それぞれ 16 回ずつ実施されている。平均出席率は約 80% と高く、生徒は自宅で A3 サイズの画面形式のレポートを作成し、期日までに提出する流れとなっている。スクーリングの時間はレポート内容の解説といった一斉授業に近い形態で行われる。また、生徒の興味を喚起し、卒業率を高めるために、英語、ビジネス、調理、コンピュータといった多様な選択科目が独自に設定されている。

(3)ICT 機器やネット環境について

通信制の生徒は「1 人 1 台端末」の配布対象外であったため、学校からの端末貸与は行われていない。生徒は個人のスマートフォンを連絡手段や調べ学習に利用している。校内には 40 台の PC を備えたコンピュータ室やエス・エス・エス・エスの設備がある。ネットワーク環境としてはフル Wi-Fi が構築されているが、授業への影響を考慮し、現在は生徒への全面開放は行わず、空き時間の利用などが検討されている段階である。教員側には 1 人 1 台の PC が配備されている。

(4)学習管理システム(LMS)の利用について

平成 15 年から、地元企業が開発したフルカスタマイズの校務支援システムを導入しており、出席、成績、レポートの受け渡しなどを管理している。現在は新しいアプリベースのシステムへの移行を準備中だが、通信制特有の複雑な単位管理や教科目管理を汎用システムでどう実現するかの課題となっている。プラットフォームとしては Google のツールをメインで使用しており、全体集会などで Zoom を用いたオンライン配信を行うこともある。

(5)ICTリテラシー(教員・生徒)について

教員は早期から校務支援システムを導入してきた経緯もあり、全体的なスキルは向上している。AI 活用の研修やデジタル採点の導入など、新しい技術に対しても前向きに受け入れようとする。生徒については、スマートフォンの操作には慣れているものの、授業で PC を日常的に使う機会に限られているため、「情報」の研究課題を通じて Excel や Word などのスキル習得を図っている。また、SNS 利用時のマナー・ルールについても随時指導が行われている。

(6)オンライン学習の課題と今後の可能性について

放送授業(NHK 高校講座など)による出席時間免除の仕組みはあるが、リアルタイムのリモート授

8

業をどのように出番扱いするかといった制度運用の解釈が課題となっている。また、システムの導入・維持費に加え、それらを運用する人的リソースの確保が大きな課題である。今後の可能性としては、登校困難な生徒へのストリーミング配信や、利便性向上のためのデジタル学生証の導入などが検討されている。

(7)その他
生徒数は約 200 名で、専属に近い教員 7 名に加え、全日制の教員も兼務する体制で運営されている。進路指導では、担任による面談のほか、メールを活用した志望理由書の添削といった細やかなサポートが行われている。また、社会経験を積ませるためにアルバイトの体験や、みかん収穫、ボランティア活動などの体験学習を教育活動に取り入れている。

3.2 誠英高等学校

概要	
① 学校名	学校法人 三田学園 誠英高等学校
②所在地	〒747-0813 山口県萩府市東三田 1 丁目 2-14 TEL: 0835-38-5252 (全日制) 0835-38-6161 (通信制) FAX: 0835-38-5353 (全日制) 0835-38-6364 (通信制)
③ 校長	大田 真一
④教育方針	・社会で生き抜く力の養成 ・生徒一人ひとりの個性に合った教育 ・誠の心を備えた人間力の育成
⑤校訓	至誠 一貫 高い志を持ち、誠意を持って努力し、志を貫き通すこと 規律厳守 本校の伝統を守り、よりよい校風を築くために努力すること 協同 一致 相手の立場を理解し、お互いの触れ合いを深め、協力し合うこと
⑥生徒数	全校生徒数 550 名(全日のみ) 通信制生徒数 150 名
⑦コース・学科	全日制: ・普通科 (特別進学コース/進学コース/総合コース/調理師コース) ・情報会計科 ・福祉科 通信制: ・普通科
⑧URL	https://seiei.ac.jp/

ヒアリング調査日時:2025 年 11 月 25 日(火)10:30-11:30
ヒアリング回答者:岡地弥生(教頭)、西尾元
形態:対面

【外観】



【校内】



- (1)学校・オンライン学習の取り組み方針について
誠英高等学校の通信制課程は、現在 150 名の生徒が在籍しており、教員は 16 名体制である。教育の基本方針として、生徒が学校に通ってくることをメインとしており、オンライン学習を主体とした教育は実施していない。上な目標は生徒を卒業させることであり、進路指導も対面での相談を基本スタイルとしている。
- (2)授業の実施状況について
紙媒体のレポート作成が学習の基本である。病気などでスクーリング出席が困難な生徒に対し、自宅でNHK 高校講座などの放送を視聴させ、視聴レポートを提出させることで出席時間を補完する仕組みも運用している。総合的な探究の時間には学校のタブレット端末を貸し出し、生徒が調べ学習を行ってレポートにもとめる活動を行っている。レポートの配布は登校時の手渡しの基本である。提出については郵送でも受け付けている。
- (3)ICT 機器やネット環境について
専用タブレット端末による「一人一台端末」の環境を整備しており、探究の授業では、校内に構築された Wi-Fi 環境を利用し、ICT 機器を効果的に活用した教育活動を展開している。将来的には Chromebook への移行も検討している。校内の Wi-Fi 環境は安定しており、特定の課題はない。教員には 1 人 1 台の PC が配備されている。
- (4)学習管理システム(LMS)の利用について
Google Classroom を導入しており、スクーリングの日変更といった連絡事項の伝達に活用している。校務支援システムについて、従来は Microsoft Access を用いて校内で作成したシステムで管理していたが、現在は外注による新しい校務支援システムの導入準備を進めている。システム導入により、レポート提出やスクーリング出席状況の管理を一元化し、事務作業の効率化を図ることを目指している。
- (5)ICT リテラシー(教員・生徒)について
特定の得意な教員が DX やシステム構築を牽引している。新しいシステムの導入に向けて、全教員を対象とした研修が予定されている。生徒については、スマートフォンの操作には慣れているため、ツール利用のための特別な指導は行っていない。ICT スキルそのものよりも、SNS に起因する人間関係のトラブルを防ぐための情報モラル指導に重点を置いている。
- (6)オンライン学習の課題と今後の可能性について
システム導入に伴う初期費用の大きさが課題として挙げられている。外注システムの場合、自作システムのように細かな要望を柔軟に反映させることが難しく、多額の費用がかかる点が悩ましい。今後は、事務作業を ICT 化で省力化し、その分生徒一人ひとりと向き合う時間を増やすことを目指している。

ている。また、外部から提供される動画教材(セキュリティアや SNS マナーなど)の活用にも前向きである。

(7)その他

生徒層は10代が中心だが、20代前半や既婚の生徒も在籍している。進路は就職が6〜7割、進学が約進学が3割〜4割という構成である。就職支援では全日制と共有の「企業リスト」を活用し、不適切な企業を排除する仕組みを導入している。大学進学時の入学料負担が重く、経済的理由で進学を断念するケースがあるため、学費面での支援策が求められている。

3.3 松風館高等学校

概要	
①学校名	山口県立 山口松風館高等学校
②所在地	〒734-0041 山口市小郡合和三丁目6番18号 TEL 083-974-0011(学校代表) 083-974-0014(定時制直通) 083-974-0066(通信制直通) FAX 083-974-0033
③校長	中野 聡
④教育方針	自立して社会を生き抜く、豊かな人生を送るために必要な力の育成 ○豊かな学力の育成 ○協調性・社会性の育成 ○自己有用感・自己肯定感の醸成
⑤校訓	自由・自主・自律 自分で選びとる自由の中、柔軟な発想で物事を考え、自ら進んで行動する。また、自らの行動を客観的にとらえ、自己をコントロールして、自己実現のために粘り強く行動する。 自尊・他尊・協和 自分のよさや強みを理解し、個性を大切にするとともに、他者の違いを理解し、認め合う。また、他者との和を重んじ、協力し高めあう。
⑥生徒数	通信制生徒数 1,241 名
⑦コース・学科	定時制:3部制(午前/午後/夜間) 通信制: ・普通科 ・看護コース
⑧URL	https://www.shofukan-h.syrn21.jp/

ヒアリング調査日時:2025 年11 月 25 日(火)13:30 -16:30
ヒアリング回答者:倉重秀治(教頭)、斎藤敏彦(教諭・進学)、中嶋晋香(進路指導・就職)
形態:対面

【外観】



【校内】



(1)学校・オンライン学習の取り組み方針について
松風館高等学校の通信制課程には現在 1,241 名が在籍しており、そのうち実際にレポート提出やスクーリング活動を行っている生徒は 936 名である。教職員は 23 名(および非常勤 3 名)で運営されている。教育方針として、オンライン学習を主体とした授業は行われていない。学習の基本は教科書に基づき、生徒が自宅でのレポートを作成して提出する形式をとっている。不登校経験者など多様な背景を持つ生徒が在籍しており、個々のペースに合わせた学習を前提としている。

(2)授業の実施状況について
山口県内 7 カ所の支部会場でスクーリングを実施しており、生徒は自分の住まいや都合に合わせて会場を選択できる。授業は教員がプロジェクターやモニターを使用し、スライドやデジタル教科書、NHK 高校講座の動画、YouTube などを活用してレポートのポイントを解説する一斉授業形式が主である。生徒は紙媒体のレポートを郵送または手渡しで提出し、提出後の返却に遅延で行う。7 月には進路に特化した「特別スクーリング」を実施し、外部講師による就職ガイダンスや卒業生の体験談発表などを行っている。

(3)ICT 機器やネット環境について
通信制生徒には 1 人 1 台の端末配布は行っていない。生徒は個人のスマートフォンを情報収集やアンケート回答、教員とのメール連絡に使用している。生徒が自由に使える PC やタブレット、Wi-Fi 環境は校内に整備されていない。教員には 1 人 1 台の PC (Surface Pro 7) と大型モニターが配備されており、校内およびスクーリング会場では Wi-Fi を利用して、Teams 等で教職員間の情報共有を行っている。「情報」の授業でも生徒用端末が不足するため、教員がプログラミングのデモンストレーションを見せる実践形式に留まっている。

(4)学習管理システム(LMS)の利用について
校務支援システムとして、山口県が導入している「e-Learning」を使用し、成績、レポート提出、テスト結果、出席状況などを一元管理している。このシステムは通信制特有の運用に合わせてカスタマイズされている。生徒は公的なアカウントを持っていないため、オンラインツールの日常的な利用はない。重要な学習状況の通知は、月に 1 回機関誌「灯窓」として郵送で届けられる。

(5) ICT リテラシー(教員・生徒)について
教員向けに定期的な研修は行っていないが、新システムの導入時などに教員が中心となって数回の研修を実施している。トラブル時は週 1 回来校する ICT 支援員のサポートを受ける体制である。生徒へは、入学式直後に情報モラル講習を行っている。スマートフォンの操作には慣れているが、PC スキルには個人差が非常に大きく、キーボード入力やファイル添付などの操作に不慣れな生徒も少なくない。

(6) オンライン学習の課題と今後の可能性について

オンライン学習を進める上での最大の障礙は、生徒側に学習用端末(タブレット等)がないことである。現状は、生徒の社会性や体調、気分の変動(当日にならないと出席できるかわからない等)を考慮すると、画面越しよりも対面での関わりや相談が重要視されている側面がある。予備等の課題はあるが、もし端末が配布されれば、履歴書の添削やレポートのデジタル送受信、一元的な学習管理などが可能になるとの期待はある。

(7) その他

生徒の7～8割は10代だが、20代から80代まで幅広い年齢層が存在している。進路相談については、教務の中に進路担当(7名)を置き、進学・就職の指導にあたっている。教職員は県内の事務や工場、サービス業が中心である。ホームページや「山口しごとセンター」と連携しているが、遠隔地の生徒への支援の均質化が課題となっている。また、スクールソーシャルワーカー(SSW)による家庭訪問を通じて生活支援も行っている。

4 ICT・オンライン学習環境比較

県立高等学校、誠英高等学校、山口松風館高等学校の3校におけるICT・オンライン学習環境の比較と共通課題について、ヒアリング結果に基づき整理した。

4.1 3校のICT・オンライン学習環境の比較

項目	県立高等学校	誠英高等学校	山口松風館高等学校
学習の基本方針	スクーリング(対面指導)を重視。オンライン学習はメインではない。	通学による対面指導が基本。オンライン学習はメインではない。	教科書と紙のレポート、対面指導が基本。オンライン授業は行わず。
生徒用端末	配布なし。生徒個人のスマホを利用。	配布なし。生徒個人のスマホを利用。校内に約100台のタブレットを保有。	配布なし。生徒個人のスマホを利用。校内に生徒が自由に使える端末もない。
LMS・校務システム	自元の業者によるフルカスタムシステムを導入。新アプリへの移行準備中。	以前はAccess自作。現在は「ばんぶんラボ」社のシステムへ移行準備中。	県購入のソコム社「教務くん」を使用。通信講座用にカスタマイズされている。
オンラインツール	Google ツールをメインに使用。全体集会でZoomを活用。	Google Classroom を連絡手段として導入。	生徒が公的アカウントを持たないため、日常利用はない。
校内Wi-Fi環境	フリーWi-Fiはあるが、生徒への開放は限定的。	安定しており、特設の課題はない。	教職員用は整備済みだが、生徒用は整備されていない。

4.2 共通する課題

・生徒の「1人1台端末の不在」

3校とも通信制生徒はGIGA スクール構想などの端末配布対象外であったため、学校から生徒への端末貸与が行われていない。これがオンライン学習やデジタルの活用を進める上での最大の物理的障壁となっている。

・ICTリテラシーの個人差とPCスキルの不足

生徒はスマートフォンでの操作はと慣れているが、レポートのデジタル作成、ファイルの添付、タイピングといったPC特有のスキルには大きな個人差があり、不慣れた生徒も多い。また、各校とも日常的に使用しているオンラインツールが異なる(使用していない学校もある)ため、共通言語としてのICTリテラシーが身につかない。

・通信制特有の複雑な管理業務とシステム移行の難しさ

通信制特有の単位修得管理やレポートの受け渡し管理は非常に複雑であり、既存の汎用システムでは対応しきれない部分が多い。そのため、長年使用してきた自作・カスタムシステムから新しいLMSや校務システムへ移行する際、多額のカスタマイズ費用や調整作業が発生している。

・対面指導の重要性和オンライン化のジレンマ

不登校経験者など多様な背景を持つ生徒が多く、社会性の育成や精神的なケアの観点から「対面での関わり」が極めて重視されている。利便性のためのオンライン化を認めつつも、登校の機会を失わせることへの懸念や、リアルタイム配信をどのように「出席」としてカウントするかという制度運用の課題も存在する。

・人的リソースとコストの限界

ICT環境を維持・管理するための予算(初期費用・メンテナンス費)や、システムを使いこなすための教職員側の人的リソースの確保が、さらなる活用拡大を阻む要因となっている。

5 考察

今回ヒアリングした通信制高等学校の現状と課題をふまえ、卒業生の受け皿となる専門学校が各高校と連携して構築すべき教育モデルとカリキュラムの方針について、調査結果に基づき整理した。

5.1 地域密着型人材育成モデルの必要性

現在、地域産業における人材不足が深刻化する中で、通信制高校という多様な背景を持つ若者に対し、職業的自立を促す実践的な学びの場を提供することが急務となっている。本事業が目指すのは、通信制高校との連携を基盤とした「育成・伴走・定着」の一環支援体制である。しかし、ヒアリング調査からも明らかになった「1人1台端末の不在」「リテラシー格差」「人的・コスト的限界」といった課題は、専門学校へのスムーズな移行を阻む大きな障壁となっている。これらの課題を解決し、地域に選ばれる専修学校となるためには、以下の方針に基づくカリキュラム構築が必要である。

5.2 入学前からのキャリア教育と伴走型支援

通信制高校の多くは、不登校経験者への配慮から「まずは卒業させること」を最優先の目標としている。そのため、高度な専門スキルやデジタルスキルの習得は後回しになりやすい傾向がある。専門学校は、入学後だけでなく「入学前」からのアプローチを強化すべきである。

高校在学中からの連携授業

県立高等学校のように多様な選択科目を設けている事例や、松風館高等学校の「特別スクーリング」などの機会を活用し、専門学校の教員が出張授業を行う。ここで、単なる学校紹介ではなく、AIやデータサイエンスを導入した「クロスオーバー型」の学びを体験させることで、将来のキャリア像を具体化させる。

心理的安全性に配慮した対面支援

3校とも共通して「対面指導の重要性」を強調している。専門学校においても、オンライン化を急ぐのではなく、まずは対面での信頼関係構築を重視したオリエンテーションを充実させ、不登校経験を持つ生徒の不安を払拭する方針を打ち出す必要がある。

5.3 段階的なデジタルリテラシー教育と環境整備

「1人1台端末の不在」と、スマートフォン操作に偏ったICTリテラシーの現状は、専門学校での学びにおいて致命的な格差を生む可能性がある。一方で、ICTリテラシーには個人差があり、各々

4 オンライン授業を行っている科目を選択してください。

- ☐ 国語
☐ 数学
☐ 理科
☐ 社会
☐ 英語
☐ 全教科

5 授業の配信形式について

- ☐ リアルタイム(ライブ配信)中心
☐ 録画配信中心

6 授業の計画や実施について

- ☐ 教科担当者(個人)が管理
☐ 担当部署が管理
☐ 教科主任が管理
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

7 課題提出について

- ☐ 教科担当者(個人)が管理
☐ 担当部署が管理
☐ 教科主任が管理
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

8 生徒の出席や学習状況の把握はどのようにされていますか？

ICT機器やネット環境について

1 ICT環境の整備状況について(スクーリング時)

- ☐ 生徒が自由に使えるPC・タブレットがある 【PC】 台 【タブレット】 台
☐ 生徒が自由に使えるWi-Fiがある

2 生徒が自宅でする学習や通信環境の状況は把握されていますか？

- ☐ 把握している
☐ 把握していない

※「把握している」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2-1 生徒は個人のPCやタブレット、Wi-Fi環境などの程度保有していますか？

- ☐ ほとんどの生徒がPCまたはタブレットを保有している
☐ 一部の生徒のみ保有している
☐ ほとんど保有していない
☐ 家庭のWi-Fi環境は多くの生徒が整っている
☐ 家庭のWi-Fi環境が不十分な生徒が多い

2-2 また、どの程度利用していますか？

- ☐ 授業や課題では定期的に利用している
☐ 必要などきみにのみ利用している
☐ 利用頻度が低い／ほとんど利用していない

3 学校としてICT機器や通信に際する補助を行っていますか？

- ☐ 端末の貸与
☐ 通信費の補助
☐ 特に行っていない
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 ネットワーク環境(Wi-Fiの安定性など)で困っていることはありますか？

- ☐ ある
☐ ない

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

5 教員のICT機器の整備状況について

- ☐ 一人1台PCを貸与
☐ 一人1台PCとタブレットを貸与
☐ 共用使用

6 機器のトラブル対応やサポート体制はどのようにされていますか？

- ☐ 業者委託
☐ 担当部署
☐ その他

7 ICT機器の運用上の問題・課題

- ☐ 通信環境(通信速度)
☐ PC・タブレットの不足
☐ 維持費用

学習管理システム(LMS)の利用について

1 学習管理システムは利用されていますか？

- ☐ Google Classroom
☐ Microsoft Teams
☐ Moodle
☐ Zoom
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 どのような目的でそのシステムを導入されましたか？

3 主にどのような場面で使われていますか

- ☐ 授業
☐ 課題
☐ 成績管理
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

ICTリテラシー(教員・生徒)について

1 教員のICTスキルについて、全体的な印象を教えてください。

2 教職員のICT活用スキルのように学ばれてスキルを習得されますか？

- ☐ 研修会の実施 年 回
☐ ICT担当者のサポート
☐ 外部委託
☐ 特に行っていない
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

3 ICT活用が得意な教員が、どのような領域で中心的な役割を担っていますか？

- ☐ デジタル教材の作成(スライド・動画など)
☐ LMS(Google Classroom / Teams など)の運用
☐ オンライン授業の実施(ライブ／録画)
☐ ICT機器の設定やトラブル対応
☐ 教員向けのICTサポート・研修
☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 生徒のICTスキルや機器モラルの向上に取り組んでいますか？

- ☐ はい
☐ いいえ

5 生徒がオンライン学習ツールやデジタルデバイスを使いこなすための指導は行っていますか？

- ☐ 行っている
- ☐ 特に行っていない

※「行っている」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

6 ICTに不慣れな生徒や教員への支援はどのように行っていますか？

7 保護者へのICTサポート（接続・操作説明など）はありますか？

- ☐ ある
- ☐ 特になし

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

オンライン学習の理想と今後の可能性について

1 オンライン学習を進める中で、特に課題だと感じる点がありますか？

- ☐ システム操作
- ☐ 通信環境
- ☐ 生徒の集中力
- ☐ サポート体制
- ☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 改善したいことや、サポートが必要だと思う分野はありますか？

- ☐ ある
- ☐ 特になし

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

3 外部機関（専門学校、大学、企業、教育委員会など）との連携に期待していることはありますか？

- ☐ ある
- ☐ 特になし

※「ある」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

4 今後、ICTを活かしてさらに改善したい取り組みや方向性があれば教えてください。

その他

1 ICT活用を広げる上で、最も大きな課題となっているのは何ですか？

- ☐ 初期費用
- ☐ メンテナンス
- ☐ 操作方法の習得
- ☐ 教員の業務負担（時間的余裕の不足）
- ☐ その他

※「その他」を選んだ場合は、具体的な内容を下にご記入ください。

2 学校のインターネット環境やサーバーの負荷、セキュリティ対策について、現状の課題と課題を教えてください。

3 学校でのオンライン学習やICT活用に関して、特に伝えておきたいことや工夫している点があれば教えてください。

令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」
（人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム）
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

オンライン学習環境/ICTリテラシー実態調査（通信制高校）報告書

学校法人VIC学校

〒754-0021 山口県山口市小郡黄余町2番21号

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

5-5 LMS・単位制・通信制等に関する制度的枠組みに関する文献調査 資料5

2023 LMS・単位制・通信制等に関する 制度文献調査報告書 「通信制・単位制コース」を開講するための制度的・実務的条件 令和8年1月 学校法人Y I C学院	■目次 第1章 調査概要 P2 1.1 本調査の背景と目的 1.2 本調査の目的 1.3 本調査の位置づけと背景となる学校教育法等の改正について 第2章 教育システム基盤(LMS)を活用したサポート体制の項目に関する調査 P5 2.1 通信制学校におけるサポート体制の実態調査及びLMS導入に求められる必須条件について 2.2 通信制高校からホームページから実態調査結果 (2023年11月現在) 2.3 LMS(学習管理システム)における活用方法や特長・デメリットについて 2.4 LMS(学習管理システム)での生徒の学習管理と成果確認を行うためには 2.5 専修学校における通信制コースの先行事例 2.6 専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前からLMS(学習管理システム)を導入・開放している事例について 第3章 単位制・カリキュラムに関する制度設計調査 P38 3.1 社会とあつづく単位認定の条件(通信制専門学校における単位制と単位互換の法的整理) 3.1.2 単位互換に関する法的整理 3.2 単位の定義と学習修業の対価 3.3 学習時間の内訳構成 3.4 単位互換制度の活用 第4章 結論と今後の開発ロードマップ P53 4.1 調査結果の総括と課題の特定 4.1.2 取り組み課題 4.2 開発ロードマップ(次段階へのアクションプラン) 1.3 本調査の位置づけと背景となる学校教育法等の改正について 本調査は令和6年度学校教育法等の改正を契機とし、新たに「通信制・単位制コース」の開講を目的とした調査と位置付ける。 「学校教育法等改正」とは、令和6年(2024年)6月に公布され、令和8年(2026年)4月1日に施行される、専修学校(特に専門学校)の制度を大きく見直す法律改正を指す。 この改正の主な目的は、社会の変化やニーズに対応するため、専修学校の専門課程を法制度上も高等教育機関として明確に位置づけ、その教育の質を向上させることにある。 令和8年4月1日施行予定の学校教育法等改正の内容等と、それに関連する政策のポイントが以下の通りである。 学校教育法の一部を改正する法律案の概要 趣旨 専修学校は、学校教育法において、「職業若しくは実生活に必要な能力を育成し、又は職業の向上を図ること」が目的とされ、医療福祉、工業等の分野において、実践的な職業教育機関として人材を輩出してきた。 人生100年時代やデジタル社会の進展の中で、職業に結びつく実践的な知識・技能・技術や資格の修得に向けて、リスケリング・リカレント教育を含めた職業教育の重要性が高まっていること等を踏まえ、専修学校における教育の充実を図るため、専門課程の入学資格を厳格化するとともに、専修学校における専攻科の設置に係る規定の創設、一定の要件を満たす専門課程の修了者への称号の付与、専門課程を置く専修学校への自己点検評価の義務付け等の措置を講ずる。 (1) 法改正の目的と施行時期 法改正の目的は、専門学校(専修学校専門課程)が社会基盤を支える人材を輩出する実践的な職業教育機関としての重要性にかんがみ、法制度的にも高等教育機関であることを明確にすること、および他の高等教育機関との制度的整合性を図ることである。 大学等との制度的整合性を高めるための措置 ① 専修学校の専門課程の入学資格について、大学の入学資格と同様の規定とする。【第125条関係】 ※専門課程の入学資格について、専修学校等を卒業した者に「進する学力がある」と認められた者から、高等学校等を卒業した者と「開学以上の学力がある」と認められた者」に改める。 ※専修学校専門課程の在籍者の呼称を「生徒」から「学生」に改める。【第128条関係】 ② 専修学校となるために最低限必要な学習時間に関する基準を、大学・高等専門学校と同様に「単位数」により定めることができるようにする。【第124条関係】
--	---

改正点と概要は以下の通りである。

No.	改正点	概要
1	入学資格と在籍者の呼称	入学資格を大学と同様の規定とし、在籍者の呼称を従来の「生徒」から「学生」に改める。
2	学習時間基準の単位制化	単位数によって修了要件を定めることができるようになります。今後は、専門課程は単位制に限定し、修了要件を「修業年限 × 31 単位数以上」とする予定。
3	専門士の法定化と編入学資格	一定の要件を満たす課程を**特定専門課程」とし、修了者に「専門士」の称号を法律で付与する。 この修了者には大学への編入学資格が認められる。
4	専攻科の設置と大学院入學資格	特定専門課程を置く学校に、短大や高専と同様に専攻科を置くことができるようになる。文部科学大臣が認定する基準を満たした専攻科修了者には、大学院入學資格が付与される。
5	教育の質の保証の強化	大学と同等の項目での自己点検評価が義務化されます。また、外部評価(第三者評価)が努力義務とされる。

また、この改正の背景には専門学校(専修学校専門課程)に対する以下の期待が込められている。

項目	概要
高等教育機関としての明確化	制度創設 50 周年を迎えるにあたり、実質的な職業教育を担う機関として、法制度上も高等教育機関としての位置づけを明確にすることを目指す。
地域産業・人材の育成	地域の人手不足解消のため、専修学校が高い地元就職率を掲げ、地域の人材ニーズを踏まえた教育を提供し、地方創生を支える役割を強化する。
多様な学習者の受け入れ	少子化や進学環境の変化に対応するため、高校卒業者だけでなく、留学生や社会人の受け入れ拡大が重要施策とされている。特に留学生の国内就職状況が改善している点が注目されている。

加えて、本改正は、専門学校が今後、地域の人材育成や社会人のリカレント教育など、高等教育機関としてより重要な役割を果たしていくための法的基盤を整備するものであり、専門学校(専修学校専門課程)を法制度上も高等教育機関として明確に位置づけ、他の高等教育機関との制度的整合性を図ることを目的としている。

4

第 2 章 教育システム基盤(LMS)を活用したサポート体制の項目に関する調査

本章は、教育システムを実現するための技術的な基盤(LMS)に関する調査結果をまとめる。
LMS に必要な機能リストを中心に、学習サポート体制としてどのような項目・機能が必要となるのかについて、先行している通信制高等学校の状況について各学校サイトから調査結果をまとめる。

2.1 通信制学校におけるサポート体制の実態調査及び LMS 導入に求められる必須条件について

単位制、成績管理、学習ログ管理など、LMS に求める最小限の必須機能として何が必要となるかを洗い出し、最良限、現行の通信制高校の LMS の質的レベルを超えるものである必要がある。
通信制高校 58 校について調査し、データ分析からまとめていきたい。

加えて、学習サポート体制についても ICT を活用したしくみとして通信制高校の先行事例から高等教育としても必要とされる機能をまとめる。

通信制高校の事例については、各学校のホームページから判断できるものから判断となるため ICT を活用したしくみを特色として打ち出しているかどうかによって詳細がわかるという限界と実際の生徒が活用するサイトのログイン案内の有無から判断する。よって、LST の詳細内容についてはオンライン通信ツール以上の学習評価や進捗管理を担うシステムとして機能としての活用の有無については、各校のホームページから判断するには情報は十分ではない点をご了承ください。

通信制高等学校の各学校サイトから主な学習サポートとしてどのような項目があるのか、主な分野として7つの分野サポートとその各分野のなかに具体的な機能をリストアップして、それらの有無を中心に調査項目を下記の通り設定した。

<7つの分野>

1. 学習サポート機能

- ① 個別学習計画の作成と進捗管理
- ② レポート添削・学習アドバイス
- ③ オンライン授業・動画教材の提供
- ④ 質問対応(対面・オンライン・チャットなど)
- ⑤ スターリング(面接授業)の案内・サポート

2. メンタル・生活支援機能

- ① スクールカウンセラーによる相談体制

5

- ② 生活リズム改善の支援
- ③ 不登校・発達特性に応じた配慮
- ④ 居場所づくり(投稿スペース・コミュニティスペース)

3. コミュニケーション支援機能

- ① ホームルームや交流イベント
- ② SNSトラブルや対人関係指導
- ③ 少人数グループ活動の機会提供

4. 進路・キャリア支援機能

- ① 進路相談(大学・専門学校受験対策)
- ② 就職支援(履歴書添削・面接練習・職場体験等)
- ③ 得意・興味に応じた進路提案
- ④ 高卒資格取得後の将来設計支援

5. 保護者サポート機能

- ① 定期面談や学習状況レポート
- ② 保護者向け説明会・相談窓口
- ③ 家庭との連携による見守り体制

6. ICT・設備サポート機能

- ① デバイス貸出や使い方指導
- ② 学習管理システム(LMS)のサポート
- ③ 通学可能なキャンパスワラワラジの整備

7. 安心・安全サポート機能

- ① 登校時・イベント時の見守り体制
- ② いじめ・SNSトラブルの早期発見と対応
- ③ 健康管理・危機対応(体調やメンタル不調への対応)

6

2.2 通信制高校ホームページからみる実態調査結果(2025 年 11 月現在)

調査数 58 校 (回答資料 ①)



通信制高等学校において、必要とされるサポート分野 7 分野について、各校が機能してホームページ記載の有無についての一覧である。

調査結果に基づき、その特徴を8点にまとめる。

(1) 全体を通して見えてきた点として、ホームページでわかるのは、メディアミックスを工夫して生徒の学習支援を最新の ICT を活用している学校と、旧来のテキスト学習＋リポート＋スターリングにリポート提出等でメールを活用程度の取り組みの二極化がある。このあたりは学校の規模や地域性の範囲によるところもあると推察される。テキスト・学習教材をメディアや動画を活用する場合、自校オリジナル教材の場合と、既存動画教材の活用の場合で導入に差がでている。このことによつて、先行実施している学校のシステムを採用している場合、学習教材だけの場合とリポート提

7

出や学習管理のしくみまで活用している場合があるようである。

具体的には、学習媒体には①オンライン授業（動画配信コンテンツやライブ授業）→対面授業（スクーリング）→実践学習（デキスト）②動画配信→対面授業（スクーリング）→実践学習（デキスト）③デキスト→対面授業（スクーリング）→実践学習のパターン、以上3パターンがある。

また、質問への対応やレポート提出方法についても、チャット機能を活用しているのから、メールなどを活用しているのなど、かため活用しているインフラに差があるように見える。このあたりは、LMSとしてどこまで学習支援面での活用が進んでいるかどうかについては、実際はやはり学校による差があるのではないかと推察される。

そこに、スタディサプリ、KADOKAWA とドリンゴが運営する「ネットの高校」、Zenshudy、L ネットクラスルーム、クレータの WEB キャンパスなどを活用している学校もある。

(2) 学習サポート分野の各項目の取り組み状況について



通信制高等学校の一番の特徴である学習サポートについては、学習教材や質問対応のオンライン化の導入に差があるものの、それ以外の機能については、8割は備えている。ホームページ上で詳しく記載されていないケースは数にカウントしていないが、ここについては、まず機能としては不可欠な項目といえる。

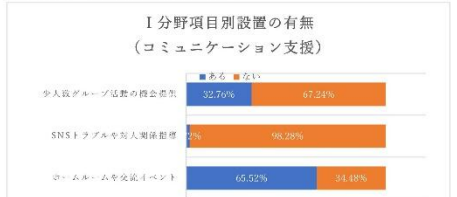
ただ、そこに LMS が仕組みとして整備されているかについては、「整備されている」と判断するには学校による差があると思われる。別項目として LMS（学習管理システム）におけるデータ活用の先進事例については、改めて取り上げる。

(3) メンタル・生活支援分野の各項目の取り組み状況について



通信制高等学校において、何らかの状況で不登校になった生徒が再チャレンジする場となっている。そのため、不登校への配慮やカウンセリング体制については、様々な工夫をしていることが窺える。発達特性に応じた配慮など、医療的な視点も含めての配慮となるホームページに明確に訴求はしていないが、大半のところで個別に相談すると対応できるようなコメントがあるので、生徒本人の状況に応じて個別対応をするというアプローチはあるのではないかと判断できる。それを積極的に専任カウンセラーの配置や専門家の設置で対応しているかとなるとバリエーションがあるように思われる。

(4) コミュニケーション支援分野の各項目について



通信制高等学校の場合、自分一人だけの孤獨な学習になりがちで、かつ不登校などの事情で通信制を選択する生徒について対人関係について配慮をする機能は必要な機能である。

何らかの形で登校できるような工夫は大半で用意されている。特に、少人数グループ活動や担任制、ホームルームや交流できるイベントの工夫などがある。ただ、SNSトラブルなど個人のネットでの

交流関係まで明確に踏み込んで支援や指導をすることを明記しているところはまだ少ない。実際のコースとして、対人関係など社会での生活を支援する内容も含めて準備している学校があるので、この視点についてサポートするという視点は学校としては認識していると思われる。

また、いじめ防止基本方針を学校として取り組み、明記している学校では、いじめの早期発見や解決に向けて積極的にかかわっていることを意識はありと思われる。

(5) 進路・キャリア支援分野の項目について



進路・キャリア支援の分野については、どこかの学校においても丁寧な指導をしている項目の1つである。特に高校卒業資格取得後の進路としての大学・専門学校への進学やそれに向けての受験対策については、まず取り組む支援であり、卒業生の進路を考えると当然といえる。別に通信制の特徴として、進学だけでなく広範囲に本人の得意・興味などに応じた

進路へのキャリア支援には進学以上に厚い支援に取り組んでいるものも特徴といえる。

通信制高等学校にはサポート校という制度で、専修学校・専門学校との協力体制をとっている学校も少なくない。その延長線上に通信制専修学校の設置となると学習サポート体制もサポート校と連携していくことも円滑な取り組みになると思われる。この点については改めて先行事例について後述する。

(6) 保護者サポート分野の項目について



保護者サポートの分野についても、通信制高等学校においては入学を検討する段階で関わりあわせの多い分野である。保護者と学校スタッフとの間で生徒の状況を共通認識できるように定期的に連絡する体制と保護者からの直接相談窓口を明確にしているケースは半分以上の学校で整備されている。この数については、ホームページの記載からの判断で、保護者の声などを見る上体制としては、明記していなくても個別に柔軟にかつ丁寧で密なコミュニケーションが取れるようになっていると推察できる。このあたりも不登校などの事情を超えながら再チャレンジで入学や転入をしてくる生徒が少なくないとなると、家庭や保護者との関係については、重要なサポート支援機能と言えるであろう。

ルーティンとしてしくみとして連携している事例としては、LINE などを活用して学校で起きた目の様子や画像付きは投稿している学校もあった。何かトラブルがあった時だけに限らず、通常の学校生活の様子や学習の進捗などについても共有する体制を確立しようとする、何らかの LMS システムを活用して保護者とも共有情報を増やしていくことは、今後重要なしくみになることが考えられる。

(7)ICT・設備サポート支援分野の項目について



ICT・設備サポート分野の項目として、必ず必要とされるのが遠学可能なキャンパスやラウンジなど場所の整備である。広域通信制の場合は、全国に学習センターやキャンパスなどを必要となる。このキャンパスやラウンジの有無が生徒数や広域からの入学につながっている。設備が本校などに周辺に揃っている場合、生徒が遠隔でスクーリングに合うための利便性となる。そういった学校は、通信制の学習媒体が従来のテキストなどになっているように判断できるケースも多い。学習方法がオンラインも導入され、ロボットや試験、進捗管理や様々な問い合わせなどサポートできる学習管理システム(LMS)の整備は、学校としての規模を拡大して丁寧な学習を両立させていくには不可欠な要素といえる。

その場合の学習ツールとして、デバイス(タブレット・PC・スマホ等)の貸出や使い方の指導についてもフォロー体制は必須となる。貸出についての言及はホームページをみる限りにおいては必ずしも高くはない。現状としては、登校するキャンパスやラウンジなどで、パソコンを使用できる環境については大半の学校で整備されている。生徒が登校しなくても自由にデバイスを使って学習できる体制については、全日制の学校でも普及していることを考えると通信制学校においては、一部の普及が必要と考える。

合わせて、学費等の金銭的な支援についても、検討が必要なものと考えられる。

12

(8)安心・安全サポート分野の項目について



この分野についても設置の有無については、ホームページをみるだけでは明確に記載をしていないと言えない。ゆえにこの機能の設置の有無などが実態を表しているかどうかは十分判断できるとは言えないと考える。

特に、体調やメンタル不調への丁寧な対応という面については、コミュニケーション支援機能やメンタル支援の機能とも重なるが、特に健康面など医療的な観点も含めて総合的な対応を想定しているかということが重要な観点と考える。生徒に対して、担任やスタッフにカウンセラー、医師や養護支援など発達の支援も含めてチーム制をとって対応するところが一層丁寧なサポート体制であった。こちらでは登校やイベント時の見守り体制について、ホームページでの明記は見られないが、こちらについては先のチーム制や担任制、保護者との連携などが充分機能しているかどうかとも問われていると考える。

メンタル・生活支援分野でも触れたが、いじめやSNSトラブルの早期発見と対応体制については、問題意識の高い学校はあらかじめ防止基本方針を学校として策定し取り組んでいるとホームページ上で明記している。ここが単なる方針の策定にとどまらず、具体的な機能になっているかが重要である。

13

2.3 LMS(学習管理システム)における活用方法や将来トレンド予測について

LMS(学習管理システム)における学習データの活用方法は多岐にわたる。

主な活用方法には、学習効果の測定、個別指導の最適化、コース内容の改善、そして将来的な学習トレンドの予測などが含まれる。

以下に具体的な活用方法を示す。

(1)学習状況と進捗の可視化

- リアルタイム追跡: 学生の学習時間、完了したモジュール、テストの点数などのデータをリアルタイムで収集し、進捗状況を把握できる。
- ダッシュボード: 教員や管理者が学習データを視覚的に確認できるよう、進捗状況を示すグラフや表形式のダッシュボードが提供される。

(2)個別学習とアダプティブラーニング

- 学習のつまずき特定: LMS のデータ分析により、特定のトピックで多くの学習者が苦戦している箇所や、テストの誤答が多い問題を特定できる。
- 個別フィードバック: 学習データに基づき、遅れている学習者への補足資料の提供や、進んでいる学習者へのより高度な課題の提案など、個別のサポートが可能になる。
- アダプティブラーニング: データ分析結果を用いて、学習者の習熟度や理解度に合わせて学習パスや教材が自動的に変化するシステムを実現できる。

(3)コースと教材の改善

- 教材の有効性評価: どの教材が学習者の理解促進に効果的かをデータから判断し、効果の低い教材の差し替えや改善に役立てる。
- コース設計の見直し: データ分析を通じて、学習フローのボトルネックとなっている部分を発見し、コース全体の構成や順序を見直すことができる。

(4)成績評価とレポート

- 効率的な成績管理: テスト結果や課題提出状況のデータを自動的に集計し、成績評価プロセスの効率化を図る。
- レポート生成: 保護者や管理者に対し、学習データに基づいた客観的な学習レポートを生成できる。

14

また、以下の情報活用により、教育の質を高め、学習者のエンゲージメント(学習意欲)向上に貢献することが期待される。

(1)ラーニングアナリティクス (Learning Analytics: LA)

ラーニングアナリティクスとは、学習者の行動履歴や成績などのデータを収集・分析し、教育プロセスを理解・最適化することを目的とした学術分野および技術である。

【応用例】

- リスク予測と早期介入: 学習ログから「特定の課題の提出遅れが多い」「コース後半のコンテンツ閲覧が極端に少ない」といった兆候を察知し、学習の遅れやドロップアウト(脱落)のリスクが高い学習者を特定する。教員は早期にアラートを受け取り、個別にサポートできる。
- エンゲージメント分析: 学習者がどのコンテンツに最も時間を費やしているか、フォーラムでの発言頻度などを分析し、学習への積極性(エンゲージメント)を評価する。

(2)学習ログ (Learning Logs / Educational Data Mining)

学習ログは、LMS 内での学習者のあらゆる操作や行動を記録した生データ(ローデータ)のことである。クリック履歴、動画の再生時間、テストの回答時間、ディスカッションへの投稿内容などが含まれる。

【応用例】

- 詳細な行動分析: どの動画のどの時点(秒単位)で再生が止まっているか、あるいは書き進められているかを分析することで、学習者がどの概念の理解に苦悶しているかを正確に把握できる。
- 学習パターンの発見: 優秀な成績を収めている学習者のログを分析し、彼らがどのような順序で、どのような教材を組み合わせて学習しているかを特定する。この成功パターンを他の学習者に推奨することで、学習効率の向上が期待できる。

(3)教育改善への応用

ラーニングアナリティクスと学習ログから得られた洞察は、具体的な教育改善アクションに直結する。

【応用例】

- カリキュラム・教材の最適化

15

- ・特定の単元のテスト正答率が極端に低い場合、その単元の教材が難しすぎる、または説明不足であると判断し、教材の修正や補足資料の追加を行う。
- ・閲覧されている教材の質が低い、または評価の低い教材を修正・更新する。
- ・指導方法の改善:
 - ・特定の時期に質問が集中する傾向があれば、その時期に合わせて教員や TA(ティーチングアシスタント) のサポート体制を強化する、あるいはライブ講義を設けるなどの対策を講じる。
- ・教育効果の定量的評価:
 - ・新しい指導方法(例:反転授業の導入)を試行した際に、導入前後で学習ログや成績データがどのように変化したかを定量的に比較し、その効果を客観的に評価できる。

これらのデータ駆動型のアプローチにより、経験や勘に頼るだけでなく、科学的な根拠に基づいた教育の質の向上が可能となるであろう。

16

2.4 LMS(学習管理システム)での生徒の学習管理と効果的に行うためには

LMS(Learning Management System)を効果的に運用して学生の学習管理を行うには、学習状況が見える仕組み(学習ダッシュボード)と、学習を促すフィードバック・サポート体制の両方を整えることが重要となる。

「学習ダッシュボード」とは、学生の学習状況や生活に関するデータを集約し、グラフや表などによって、一目でわかるように可視化するシステムである。教員はこれを活用して個々の学生の理解度や進捗を把握し、より適切な指導や支援を出発点に行うことができる。学生自身が学習の進捗を確認し、自己調整学習を促すツールとしても利用される。

■主な機能と活用方法

①学習状況の可視化: 個々の学生の成績、学習時間、課題の取り組み状況などを追跡し、学習の進捗を評価する。

②生活面の情報管理: 出欠、アセスメント情報、日々のアンケート結果などの生活面データを学習データと統合し、多角的な状況把握を可能にする。

③教員による活用:

- ・クラス全体の傾向を把握し、授業の進め方や教材を改善する。
- ・学生の興味関心や課題を早期に発見し、個別指導や支援に活かす。
- ・分散していたデータを一元管理することで、労務を効率化し、学生との個別対応時間を増やすことを目指す。

④学生による活用:

- ・自身の学習計画が順調に進んでいるかを確認し、学習パターンを改善するために利用できる。
- ・自身の学習課題をデータで確認することで、自己調整学習を促す。

⑤チームとしての活用:

- ・学校全体で情報を共有し、チームとして児童・学生を見守る体制を強化する。
- ・教員の経験とデータを組み合わせることで、より高度な支援を実現する。

17

以下に、LMSにおける学習管理のポイントを体系的にまとめる。

【学習管理のポイント】

① 目的に合わせたコース設計

- ・学習目標を明確化(知識・技能・態度など)
- ・モジュール化された教材構成: 章ごとに「動画 → 課題 → 小テスト → 振り返り」などのパターン化
- ・学習の流れを可視化: 進捗バー、学習マップを活用
→ 学生が「次に何をすればいいか」を迷わない状態を作る。

② 学習進捗の把握と分析

LMS の分析機能を活用して、以下について定期チェックを行う:

- ・ログイン頻度・受講時間
- ・課題提出率・期限遵守状況
- ・小テストの正答率・理解度
- ・教材の閲覧状況

また、データからこれらの状況が分かるようにする:

- ・学習が遅れている学生の早期発見
- ・つまづきが多い教材・問題の特定
- ・クラス全体の傾向(例えば、第3章の理解度が低いなど)

③ 早期介入(Early Intervention)

進捗が遅れた学生を放置しないことが重要です。

- ・自動リマインド: 締切前の通知、未閲覧教材のアラート
- ・個別メッセージ: 状況に応じて簡易な具体的なアドバイス
- ・面談・オンライン相談: 必要に応じてフォローアップ

→ 早い段階のフォローがドロップアウト防止に効果的。

④ 多様な評価方法を組み合わせる

LMS はペーパーテストだけでなく、多面的な評価が可能。

- ・クイズ(自動採点): 理解度チェックに最適

- ・レポート提出
- ・ディスカッション掲示板での発言を評価
- ・eポートフォリオで学習の振り返りを評価
- ・動画提出・プレゼン資料などの実践的課題

評価方法の多様化は学習者のモチベーション維持につながる。

⑤ フィードバックの質を高める

- ・即時フィードバック: 自動採点テストで誤答理由を表示
- ・教員によるコメント: 具体的改善点と長所を明記
- ・ルーブリック活用: 評価基準を透明化し、学生も自己評価できるようにする

→ 効果的なフィードバックは学習改善の最も強力な要因。

⑥ 学習の主体性を促す設計

- ・目標設定・振り返りシート等を定期的に利用する
- ・チェックリストで自己管理をおこなう
- ・進捗をグラフで表示し、自己モニタリングを促す
- ・ゲーミフィケーション(バッジ、達成率表示など)

学生自身が「自分で学びを管理できる」状態を目指す。

⑦ コミュニケーションの活性化

- ・掲示板・チャットで質問しやすい環境づくり
- ・フォーラムで学生同士のピアサポートを促す
- ・オンライン授業との組み合わせ(ハイブリッド型)
→ コミュニティ感と継続率を大きく上げる。

⑧ 運用の改善サイクル(PDCA)

- ・Plan: コース設計
- ・Do: LMS 運用
- ・Check: ログ・成績・学生アンケート
- ・Act: 教材改善、課題の見直し、連絡方法の調整

19

■まとめ

効果的なLMS運用による学習管理は、
データで把握し → 早期に介入し → フォードバックで支え → 学習者の主体性を高める
という流れを作ることが必要である。

以下に 事例として Moodle に特化した運用フロー(テンプレート)を示す。Moodle の機能(コース、モジュール、活動、レポート、完了トラッキング等)を踏まえて構築してある。

【Moodle 運用フロー(テンプレート)】

① 事前準備フェーズ(コース開始前)

1. コースの基本設定

- コースの作成(カテゴリ分類・コース概要記入)
- コースフォーマット設定
 - トピック形式 / 週形式 の選択
 - セクションの版、表示形式の決定
- 学習目標・到達目標をコース概要に記載
- 学生の登録方法を設定(手動・自己登録・外部 DB)

2. 教材・活動の準備

Moodle の「活動」や「リソース」を配置:

- ファイル(FDF/スライド) のアップロード
- URL の設置
- ページ、Book(電子テキスト) の作成
- フォーラム(標準フォーラム、Q&A 形式) の設定
- 課題(Assignment) の作成
- クイズ(Quiz) の問題バンク作成・問題登録
- SCORM/動画教材 の配置
- 出席機能(Attendance) の設定(必要に応じて)

3. 学習の流れを管理する機能の設定

- 完了トラッキング(Activity completion) を設定
- アクセス制限(Restrict access) を利用
(例: 前の課題を提出しないと次に進めない)
- トピック・活動の自動公開日を設定

20

- 成績表(Gradebook)のカテゴリ・配点を設定

4. 教員・学生への案内準備

- コースの利用ガイド作成
- Moodle の操作手順(課題提出・小テスト受験など)
- 最初の週の「案内フォーラム」投稿内容を準備

② 運用フェーズ(コース開始後)

5. オリエンテーション実施

- Moodle の基本操作説明
- コースの構造や評価方法を紹介
- 最初の簡単な活動(アンケート・興味タイプ)で Moodle に慣れってもらう
- フォーラムへの自己紹介を促す

6. 毎週のコンテンツ公開運用

- 週ごし/トピックごとに教材を公開(自動公開がおすすめ)
- フォーラムで「説明」「学習のポイント」「お知らせ」を投稿
- 次週の活動の準備(課題期限設定、問題の微調整など)

7. 学習進捗のモニタリング

Moodle の管理機能を活用:

- レポート(活動完了・学習者ログ)を確認
- 学習者の参加状況レポート(Course Participation)
- 課題の未提出者・低得点者の抽出
- 小テストの統計(最も誤答が多い問題)を確認
- 進捗が遅い学生を早期に特定可能。
- 8. 早期介入(Early Intervention)
- 提出遅れ者にフォーラムまたはメッセージでリマインド
- 「通知」機能を使い、締切前にアラート送信
- 必要に応じて個別メッセージや面談
- 出席(Attendance)で欠席が続く学生のフォロー

9. 学習サポート・コミュニケーション

- フォーラムの質問に回答
- Q&A フォーラムで学生同士の問題を促す

21

- 毎週「振り返りアンケート(Feedback)」を作成し理解度チェック
- TA・教員による週次メッセージ

10. 評価・フィードバック

- 課題(Assignment) の採点
- ルーブリック・チェックリストを活用したフィードバック
- 小テスト(Quiz) の自動採点結果を確認
- 成績表(Gradebook)の更新
- コメント・添削の返却

③ 終了フェーズ(学期末)

11. 成績確定

- Gradebook の集計確認
- 全課題・小テスト・提出物の確認
- 成績をエクスポート(CSV/Excel)
- 不備や学習者からの問い合わせ対応

12. 振り返り・アンケート

- Feedback モジュール でコース評価アンケート
- 学習者のログ分析
 - どの活動がよく使われたか
 - どこで離脱が多かったか
- 学習者の自己評価活動(Database / e ポートフォリオなど)

④ 改善フェーズ(次年度・次期)

13. コースの改善

- 難易度の見直し
- つまづきが多かった活動の改善
- フォーラム投稿の質の分析
- 追加教材の作成・差し替え

14. コースのバックアップと再利用

- コースバックアップ機能(Backup) を実行
- 次年度用として リストア(Restore)
- 各期のテンプレート化(特に問題バンク)

22

- 自動公開タイミングの調整

【参考】Moodle 運用フロー(チェックリスト版)

□ 事前準備

- コース設定
- 教材・活動登録
- 完了トラッキング設定
- 成績表の準備
- 操作ガイド作成

□ 運用開始

- オリエンテーション
- 週次の教材公開
- フォーラム運用

□ 進捗管理

- ログ・活動完了の確認
- 小テスト統計の確認
- 遅延者・非参加者への介入

□ 評価・FB

- 課題採点
- 小テスト採点
- フィードバック返却

□ 終了後

- 成績確定
- アンケート実施
- コースバックアップ
- 次年度改善

23

【参考】学習ダッシュボード設計例

以下に、LMS(特に Moodle)で利用できる「学習ダッシュボード」の設計例を示す。
実際の学校で使われている形式に近い形でまとめている。
「学生向け」「教員向け」の2種類に分けて示す。

◆ 学習ダッシュボードの設計例(学生向け)

ポイント:

学生が「自分の現在地」「何をすべきか」「どのくらい遅れているか」を一目で理解できること。

① 学習進捗サマリー(メイン表示)

- 現在の完了率(%)
- 今週のタスク数 / 完了タスク数
- 提出期限が近い課題(期限まで○日)
- 本講・本回講の活動(フォーラム、アンケート等)
- 次にやるべき1ステップ(Next Action)

② 学習活動の進捗状況(ユニット別)

ユニットごとに進捗を色分けで表示例:

- ◎ 完了済
- △ 一部完了
- × 未着手
- ▲ 遅延(期限切れ)

表示する項目例:

- 動画視聴率
- 小テストの得点(円グラフ・棒グラフ)
- 課題提出状況
- フォーラム参加数

→ 「どの単元で遅れているか」がひと目でわかる。

③ 学習ログの可視化

- 学習時間の推移(週別・月別)
- 直近7日のログイン履歴(ログインした時刻)
- 活動の時間(動画視聴 90分 / 課題作成 20分など)

→ 自己管理能力の向上につながる。

④ 成績・フィードバックエリア

- 各課題・テストの得点一覧
- 達成度(配点に対する目標達成率)
- 教員からのコメント・添削
- ヘルプ/リクエストの表示

⑤ コミュニケーション・サポート枠

- 教員からのメッセージ
- ピアサポート掲示板の書き込み
- 相談窓口(チャット・フォーラム)

⑥ モチベーション維持の仕掛け(任意)

- バッジ・アチーブメント
- 学習連続日数(○日連続学習中)
- 目標設定と達成チェックリスト
- 他の学習者の平均進捗(匿名)
-

◆ 学習ダッシュボードの設計例(教員向け)

ポイント: 「どの学生が遅れているか」「どこが難しいか」「全体の理解度」をすぐに把握すること。

① クラス全体のサマリー

- 全体の平均完了率
- 小テスト平均点
- 課題提出率
- 期限切れ提出数
- 欠席・本ログイン人数(過去7日)

② 学習者別進捗リスト(危険度順)

学生名	進捗率	最終ログイン	課題未提出数	小テスト平均	アラート
Aさん	92%	昨日	0	85点	-
Bさん	45%	5日前	3	52点	△ 介入必要

アラート条件例:

- 7日以上ログインなし
- 課題未提出が2件以上
- 小テスト平均が一定以下

③ 活動別の学習状況→ 教材の改善ポイントが見える化 される。

- 動画視聴率の分布図
- 小テストの回答率 TOP10
- 課題提出の締切遵守率
- フォーラム発言数の分布(アクティブ/消極的)

④ コース改善用データ

- つまづきの多いセクション(遅延者が多い箇所)
- 小テストのアイテム分析(区別力・難易度)
- エラーが多い操作(ログイン失敗、動画未再生 等)

⑤ 介入ツール

- 遅れている学生への一括メッセージ
- 個別コメントフォローアップ
- リマインダー(自動 / 手動)設定
- メンタリング対象者の記録(メモ機能)

【参考】Moodle 設置例

学生向けダッシュボード:

- 「マイホーム」「学習進捗」「完了トラッキング」ウィジェット
- Custom Reports(Moodle Analytics)で学習状況表示
- ブロック:「最近のアクティビティ」「コース概況」「Learning Plan」

教員向けダッシュボード:

- Course reports(参加状況 / 活動完了 / ログ)
- Gradebook と Analytics
- ブロック:「学習者レポート」「予定」「メッセージ」
- Configurable reports を使うとカスタム表を追加可能

シラバス事例

LMSシラバス事例②: 通信制・単位制向け(到達基準明確型)

科目シラバス(到達基準ベース)

科目名 キャリアデザイン I

学習の進め方

- LMS上の「①動画視聴 → ②確認テスト → ③課題提出」で1単元修了
- 全8単元を修了すると単位認定対象

単元構成

単元	学習内容	修了条件
1	自己理解	テスト80%以上
2	興味・適性	ワーク提出
3	職業調査	レポート
...	...	...
8	将来計画	最終課題

単位認定要件(LMS明示) 「何を行えば単位が出るか」をLMS上で明確化しなくてはならない。

- 全動画の視聴完了(LMSログ)
- 確認テスト合格
- 課題提出率100%

2.5 専修学校における通信制コースの先行事例

専修学校の通信制(単位制通信教育)は、学習者の多様なニーズに対応するために重要な教育形態であるが、先行事例としてインターネットで詳細なコース内容や学校名を具体的に公表しているケースは少なく、特に「専修学校」として通信制コースを開設している先行事例は、通信制高校)や「高等専修学校(通信制)」の事例に比べて情報が少なく、個別の学校の事例を見つけるのは難しい状況にあった。

そのため、「通信制」の成功の鍵となる教育手法や、関連分野の事例を紹介する。

■先行事例から学ぶ成功のポイント

専修学校が単位制通信教育を成功させるためには、以下の要素が先行事例やeラーニングの専門家によって指摘されている。

(1) eラーニング(ICT 活用)の徹底

先行事例の多くは、通信教育におけるeラーニングの活用を成功の鍵としている。改善サイクルを速く回す:eラーニングシステムは、成功するまでに3回はバージョンアップが必要であると言われている。いち早く導入し、学習者のフィードバックに基づいて改善のサイクルを速く回すことが、教育効果を高める最短コースとされている。

最新テクノロジーの活用: 成人教育学に基づき、最新のeラーニングテクノロジーを活用することで、教育効果を数倍に高めることが可能とされている。

(2) 教育内容とターゲット層の明確化

専修学校の通信制は、通学制と同じ専攻分野で、かつ通信教育でも十分な教育効果が得られる分野に限定される。

地域資源の活用: 文部科学省の資料でも、地域資源を活用した観光振興など、地域に根ざした専門知識を通信制で提供することが示唆されている(例:ミュージアム)。

スキルアップ・リカレント教育: 社会人のキャリアアップやスキルアップを目的としたコースは、時間や場所の制約を受けにくい通信制との親和性が高い。

(3) 参考となる先行事例の形態

具体的な「専修学校・通信制」の事例を見つけるのが困難なため、ここでは教育の形態が類似している先行事例として、特に成功している分野を参考として紹介する。

①通信制大学・大学院

【特徴】既に単位制・通信制のノウハウを確立しており、社会人や遠隔地の学生を対象にした教育手法、特にeラーニングや対面授業(スクーリング)の実施方法について、最も参考になる先行事例である。

【学ぶべき点】

オンライン教材の質: 印刷教材とeラーニングコンテンツの構成。

スクーリング(面授指導)の設計: 必須の対面授業(年間120 単位時間以上)を、短時間で集中的に行う方法や、遠方クライアント施設での開催方法。

②医療・福祉分野の通信制教育

【特徴】介護福祉士や社会福祉士などの国家資格を目指す課程では、通信制が古くから存在している。これは専門学校の通信制と同じく、厳格な実習・実技が必須であるという点で参考になる。

【学ぶべき点】

実習指導の仕組み: 通信での理論学習と、提携施設での実習を組み合わせる際の、学校側の指導体制や評価基準。

③通信制高等専修学校(高等教育レベル)

【特徴】専修学校の中でも、高校卒業資格を得るための通信制高等専修学校(または通信制高校との連携)、不登校経験者など多様な学習者を持つ生徒への対応ノウハウが蓄積されている。

【学ぶべき点】

個別の学習サポート: 添削指導や教育相談を円滑に行うための組織体制。

柔軟な単位認定: 学習者のペースに合わせた単位の修得方法や進級・卒業要件。

次項で通信制高校の事例を示す。

2.6 専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前からLMS(学習管理システム)を連携・開放している事例について

専門学校が通信制高校の生徒に対して、または専門学校への入学が決まった生徒に対して入学前からLMS(学習管理システム)を連携・開放している事例は以下の通りである。

特に、通信制高校と専門学校が「同じ教育グループ」に属している場合や、「技術連携」を結んでいる場合において、この仕組みは非常に効果的である。

主な3つの連携パターンと、具体的な事例を整理した。

(1) 同一教育グループ内でのLMS・コンテンツ共有

最もLMS 連携が進んでいるのがこのパターンである。同じ運営母体が「通信制高校」と「専門学校」の両方を持っている場合、高校生のうちから専門学校のLMS やオンデマンド教材(eラーニング)にアクセスできる仕組みが整っている。

教育グループ	通信制高校	連携する専門学校・LMS の活用
ヒューマンアカデミー キャンパス 高等学校	ヒューマン キャンパス 高等学校	【事例】高校在学中から、専門学校(ヒューマンアカデミー)の専門授業(声優、メイク、IT など)をLMS やオンラインで受講可能。専門校の講師による映像教材が共有されており、高校の単位としても認定される仕組みがある。
バンタン (KADOKAWA グループ)	バンタン高 (KADOKAWA グループ)	【事例】高校卒業資格を取りながら、専門スクール(バンタン)と同じ校舎・同じ講師・同じ教材(動画教材含む)を使用。実質的に高校生が専門学校のLMS 環境で学んでいるのに近い状態である。
三幸学園	飛鳥未来高 等学校	【事例】グループ内の美容・医療・スポーツ系専門学校の授業を体験・受講できるプログラムがあり、独自の学習アプリやLMSを通じて進路や課題提出を行うケースがある。

(2) 「技術連携制度」によるLMS 利用

通信制高校の生徒が、提携先の専門学校(高等課程や専門課程)の科目を履修することで、高校の卒業単位として認められる制度。

- ・ **仕組み:** 生徒は高校に在籍しながら、専門学校のLMS(Google Classroom、manaba、進

自システムなど)のアカウントを付与され、そこで課題提出や動画視聴を行っている。

- ・ **事例:** 多くの「技術連携校」指定を受けている専門学校が、提携する通信制高校(例:クワーク記念国際、星槎国際など)の生徒向けに、LMS 経由でレポート課題の配信を行っている。

(3) AO 入試・推薦合格者向けの「入学前教育」としてのLMS を開放するケース

これは「高校と専門学校の提携」というよりは、専門学校に入学が決まった高校生(入学予定者)に対して、4 月の入学までの半年間ほどLMS を開放するケースである。

近年、この形式が急増している。

- ・ **目的:** 入学までのモチベーション維持、基礎学力の底上げ、中退防止。
- ・ **使われるツール:**
 - ・ Google Classroom / Slack: 課題の配信や、先輩・教員とのコミュニケーション。
 - ・ Moodle / manaba: 大学・専門学校で一般的なLMS。ドリル形式の課題や映像授業を配信。
 - ・ Pholby (フォリー) / Classi: 入学前教育に特化したプランとして導入する学校が増えている。
- ・ **具体的な流れ:**
 1. 合格通知: AO 入試などで合格(見込)。
 2. ID 発行: 専門学校のLMS アカウントが発行される。
 3. プレ授業: 入学前に「解剖学の基礎(仮称)」や「デザインの基礎(仮称)」などをスマホで視聴・提出。
 4. 入学: スマホに専門学校へ移行。

■具体的な導入が確認されている分野・学校例

特定の学校名が公表されていないケースもあるが、以下の分野ではLMS を使った入学前教育(プレレクチャ)が一般的。

- ・ **IT・情報系専門学校(HAL、ECC コンピュータなど):** プログラミングの基礎を入学前から触らせる。
- ・ **医療・看護系:** 生物や数学の基礎復習ドリルをeラーニングで実施。
- ・ **デザイン・アニメ系:** 動画教材の視聴URLを限定公開で共有。

■まとめ

「入学前からのLMS 連携」は、特に大手教育グループ(ヒューマン、三幸、KADOKAWA など)で

システム化されている。

とくに IT 分野は、教材がデジタル(プログラミングモードやソフトウェア操作)であるため、他分野に比べて圧倒的に LMS 連携やオンライン連携が進んでいる領域である。

IT 系の専門学校と通信制高校の連携、および入学前教育における LMS 活用事例を具体的に解説する。

(1)【先進事例】KADOKAWA・ドワンゴグループ(N・高・S 高 × パンタン)

これは「LMS そのもの」を共通プラットフォームとして開発・運用している最も先進的な事例である。

- ・ 連携校: N 高等学校・S 高等学校 ⇄ パンタン(デジタルアカデミーなど)
- ・ 使用 LMS: N 予備校 (N Yob)
- ・ 連携の内容:
 - 共通プラットフォーム: 「N 予備校」というアプリ/LMS が共通基盤。
 - コンテンツ共有: 通信制高校 (N 高) の生徒も、専門スクール(パンタン)の生徒も、同じプログラミング講座(Web アプリ開発、Unity、3D コマンド動画制作など)にアクセス可能。
 - 双方向性: 動画を見るだけでなく、コードを書いて提出し、自動採点やコメントが講師からのフィードバックを受ける機能が LMS 内に統合されている。

(2)【グループ連携】ヒューマンアカデミー(IT カレッジ)

全国展開しているヒューマンアカデミーも、グループ内の高校生に対して専門教育を開放している。

- ・ 連携校: ヒューマンキャンパス高等学校 ⇄ ヒューマンアカデミー(IT カレッジ)
- ・ 連携の内容:
 - 高校の「専門コース」を選択すると、専門学校の校舎で授業を受けるスタイルが基本だが、「AI・IoT・ロボット」などの分野では、自宅学習用の e ラーニングシステムが提供されている。
 - 入学前の高校生に対し、専門学校制が採用している映像教材の一部を LMS 羅山で視聴させ、職業理解を深めさせる取り組みがある。

(3)【入学前教育】HAL・ECC・TECH.C. などの大手 IT 専門学校

これらは「高校との連携」というより、「AO 入試などで合格した高校生(入学予定者)」に対して、入

学の半年ほど前から LMS を開放するケース。IT 分野ではこれがスタンダードになりつつある。

学校例	目的・内容	使用されるツール/LMS の傾向
HAL (東京・大阪・名古屋)	「プレスクール」での基礎力向上 入学後に挫折しないよう、C 言語の基礎や IT パスポートレベルの知識を e ラーニングで学習させている。	独自のポータルサイトや、Moodle 等の LMS 上で課題配信・提出を行う。
ECC コンピュータ専門学校	「入学前特別授業」のオンライン化 遠方の高校生も多いため、LMS での動画配信や課題提出に加え、Google Meet 等でのライブ授業を進み合わせる。	Google Classroom、または学校独自の LMS を使用。
TECH.C. (東京デザインテクノロジー)	My スクール(プレ講義) 入学前から業界知識をインプットするための動画教材配信や、SNS ツールを使った先輩との交流。	独自のアプリや、LINE、Discord などを LMS 的に活用してコミュニティ形成を行う。

(4) IT 分野特有の「LMS 連携」の形態

IT 分野では、一般的な「講義動画を見る LMS (Moodle など)」に加え、エンジニアの実務に近いツールを LMS の一部として入学前から触らせる事例が増えている。

- ・ Paiza (パイザ) 等の学習プラットフォーム連携:
 - 学校独自の LMS を作るのではなく、プログラミング学習サービス (Paiza ラーニング 学校フリーパスなど) のアカウントを高校生に配布し、「入学までにランク C までクリアしておく」といった課題を出す学校が増えている。
- ・ Discord / Slack の活用:
 - IT 系では、LMS の「掲示板機能」を使わず、Discord や Slack を入学前から利用し、そこで技術的な質問対応や課題提出の連絡を行わせるケースが非常に多い。
- ・ GitHub Education:
 - 一部のハイレベルな連携コースでは、入学前から GitHub のアカウントを作成せ、コードの提出 (Push) を行わせる事例もある。

■まとめ: IT 分野の導入フロー

IT 系の専門学校では、「入学してからゼロから教える」のでは遅いという危機感があるため、以下のようなフローが定着している。

1. 高3 秋: AO 合格決定。
2. ID 配布: LMS のアカウント付与。
3. 10 月～3 月:
 - 「タイピング練習」
 - 「IT パスポート基礎用語」
 - 「HTML/CSS の基礎」
 - これらを自宅でを行い、進捗を学校側が管理する。
4. 4 月 入学: 基礎ができた状態でスタートする。

■日校で導入する場合の注意点

専門学校が通信制高校との連携や入学前教育(プレカレッジ)のために LMS を導入する場合、「機能の多さ、よりも」「簡単に使い続けさせる」工夫が最重要課題になる。

高校生(特に入学前の生徒)は、まだ正式な学生ではないため、少しでも「使いにくい」「面倒」と感じることでログインしなくなりやすい点を注意しなければならない。

■日校で導入検討する際の「システム選定」と「運用設計」の重要ポイントを以下に整理する。

(1) システム選定のポイント: 3 つの選択枝と判断基準

「予習」と「IT リテラシー(生徒・教職員)」のパラメータで決定する。

パターン	具体的なツール例	向いている学校・状況	注意点(デメリット)
A. プラットフォーム型 (手軽・安価)	Google Classroom	・コストを抑えたい ・教員が使い慣れている	・「学習進捗の細かい分析(動画をどこまで見たか等)」が弱い ・学校によっては強く、生徒のワクワク感が高い。
	Microsoft Teams	・課題提出や連絡がメイン	
B. 学習管理ツール型 (柔軟・拡張性)	Moodle (要構築)	・大学/専門学校として本格的な LMS が必要	・導入/メンテナンスが難しい ・UI が少し堅苦しく、スマホで使い

パターン	具体的なツール例	向いている学校・状況	注意点(デメリット)
標準重視	manaba Canvas	・テストの自動採点や詳細なログ分析をしたい	・にくい場合がある。
C. コミュニケーション重視型 (エンゲージメント重視)	Classi Studyplus for School EdPortal	・「学習」より「モチベーション維持」を優先したい ・高校ですでに導入されているツールに合わせる	・専門的な技術課題(コード提出や大容量ファイル)には向かない。 ・月額コストがかかる。

【最重要チェックポイント】

- ・ スマホ・アプリの UI (使い勝手): 生徒の 99% はスマホでアクセスすると考えてよいであろう。「PC 画面を無視しスマホで表示するタイプ」の LMS は、確実に使われなくなる。専用アプリがあるか、スマホブラウザでサクサク動くかを確認しなければならない。

(2) 運用設計のポイント: 挫折させない「4 つの壁」対策

システムを決めた後、どう運用するかが成功の鍵。よくある失敗パターン(壁)への対策を事前に決めておく必要がある。

①「ID・パスワード」の壁(ログインできない問題)

- ・ 課題: 郵送で ID を送っても、入力ミスや紛失でログインできず、そのまま放置される。
- ・ 対策:
 - 可能なら LINE 連携や QR コードログインができるシステムを選ぶ。
 - または、初回ログイン説明会を Zoom や対面で実施し、その場でログインさせる。

②「コンテンツ量」の壁(学習量がすぎて挫折する問題)

- ・ 課題: 90 分の授業動画をそのまま置いても、高校生は絶対に見ない。
- ・ 対策:
 - マイクロラーニング化: 動画は 1 本 15 分～10 分以内にする。
 - TikTok や YouTube Shorts 世代に合わせ、要点だけを短く伝える構成にする。

③「孤独」の壁(反応がなくて飽きる問題)

- ・ 課題: 課題を出してもフィードバックがないと、モチベーションが下がって、入学直後減退(辞

- 派)につながるリスクがある。
- 対策:**
 - 双方向性:** 自動採点だけでなく、コメント機能や「いいね」機能を使う。
 - メンター制度:** 在校生(先輩)をLMS上のサポーターとして配置し、軽い質問に答えてあげる体制を作る。
- ④「高校側のカリキュラム」との壁(忙しすぎる問題)
- 課題:** 通信制高校のレポート提出時期(特に学期末)と、専門学校の設題が重なりとパンクする。
 - 対策:**
 - 高校側の年間スケジュールを把握し、**「課題を出さない期間(ブラックアウト期間)」**を設定する。
 - 「必修(マスト)」と「任意(ベター)」の課題を明確に分ける。

(3)IT系専門学校としての構築構成案の事例

IT分野であれば、既存のLMSにこだわらず、業界標準ツールを組み合わせるのが最も効果的で、かつ生徒の満足度も高くなる。

- メイン連絡・コミュニティ:** Discord または Slack
 - 理由: IT業界の標準ツールに慣れさせる。スマホ通知も優秀で、反応率がメールの比ではない。
- 教材・課題提出:** Google Classroom または Github Classroom
 - 理由: 無料で使える。Githubを使えば、ポートフォリオとして残る。
- 学習コンテンツ:** Udemy 法人プラン や Progate 等の外部サービス契約
 - 理由: 自前で教材動画を作るコストを削減し、質の高い教材を提供できる。

■まとめ:次にすべきこと

もし、具体的な導入を検討されている段階であれば、以下のどちらのアプローチから始めるかを決めるのが良いであろう。

①「**既存ツール活用**」コース:すでに校内で使っている(Google Workspace や Microsoft 365 をどうカスタマイズすれば入学前教育に使えるか)設計する。

②「**専用ツール導入**」コース:予算を確保したうえで、ベンダーに見積もりを取り、デモ画面をスマホで触ってみる。

まずは「対象となる生徒数(入学予定者数)」と「教員が運用に割けるリソース(誰が管理するか)」を整理することが重要である。

その際、自校のリソース状況がポイントとなる。専任担当が置けるか、兼任になるか等の検討が必要である。

36

37

第3章 単位制・カリキュラムに関する制度設計調査

本章は、法令を遵守し、教育目標を達成するための単位制の設計方針をまとめる。

3.1 法令に基づく単位認定の要件(通信制専門学校における単位制と単位互換の法的整理)

通信制の専門学校(専修学校専門課程)における単位制の導入と単位互換については、主に学校教育法とその関連法令等に基づく制度化・整理されている。

3.1.1 単位制に関する法的整理

(1)法的根拠

専修学校は、学校教育法第121条に基づき設置される教育機関である。

第121条 第1条に掲げるものの以外の教育施設で、職業若しくは実務生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的として次の各号に該当する組織的な教育を行うもの(当該教育を行うにつき他の法律に特別の規定があるもの及び我が国に居住する外国人を専ら対象とするものを除く。)は、専修学校とする。

- 修業年限が1年以上であること。
- 授業時数が文部科学大臣の定める授業時数以上であること。
- 教育を受ける者が常時40人以上であること。

通信制の学科を置くこと、および単位制の導入は、文部科学省の告示や通知により制度化されている。

専修学校の専門課程では、従来の授業時間数に基づく修了要件に加え、単位制による学科を設けることが可能。特に通信制の学科においては、授業時数ではなく単位数により修了の基準(総単位数)を定めることとされている。(学校教育法施行規則と専修学校設置基準)によって定められている。

学校教育法施行規則 第186条第1項第2号:通信制の学科の修了要件として、授業時数ではなく総単位数が基準として定められている。

専修学校設置基準 第17条(改正後):昼間学科及び夜間等学科における全課程の修了要件について、従来の授業時数に加え、単位制を選択できるよう規定されている。

専修学校設置基準 第29条(改正後):通信制の学科における対面授業の授業時数について定めており、専門課程の場合は修業年限に応じた単位時間数(総授業時間数)が定められている。

通信制の学科の新設は、目的の変更に当たするため、所轄庁への認可が必要となる。(学校教育法第130条、第131条)。

第130条 国又は都道府県(都道府県が単独で又は他の地方公共団体と共同して設立する公立大学法人を含む。)が設置する専修学校を除くほか、専修学校の設置廃止(高等課程、専門課程又は一般課程の設置廃止を含む。)、設置者の変更及び目的の変更は、市町村の設置する専修学校にあつては都道府県の教育委員会、私立の専修学校にあつては都道府県知事の認可を受けなければならない。

2 都道府県の教育委員会又は都道府県知事は、専修学校の設置(高等課程、専門課程又は一般課程の設置を含む。))の認可の申請があつたときは、申請の内容が第124条、第125条及び前2条の基準に適合するかどうかを審査した上で、認可に関する処分をしなければならない。

3 前項の規定は、専修学校の設置者の変更及び目的の変更の認可の申請があつた場合について準用する。

4 都道府県の教育委員会又は都道府県知事は、第1項の認可をしない処分をするときは、理由を付した書面をもって申請者にその旨を通知しなければならない。

第131条 国又は都道府県(都道府県が単独で又は他の地方公共団体と共同して設立する公立大学法人を含む。)が設置する専修学校を除くほか、専修学校の設置者は、その設置する専修学校の名称、位置又は学則を変更しようとするときその地裁令で定める場合に該当するときは、市町村の設置する専修学校にあつては都道府県の教育委員会に、私立の専修学校にあつては都道府県知事に届け出なければならない。

(2)単位認定の柔軟性

単位制を導入することで、一定の授業時間数の履修だけでなく、専修学校教育の特性を踏まえた適切な方法で学修成果を評価し、単位を付与することが可能になる。

専修学校の生徒以外の者が、正規課程の授業科目を履修し、後に単位制の学科に入学した場合、入学前に修得した単位を当該専修学校の単位とみなし、付与することが認められている。

38

39

3.1.2 単位互換に関する法的整理

(1) 法的根拠と目的

単位互換は、主に専修学校と大学等の他の高等教育機関との間の学生の移動を円滑化し、多様な学習機会を提供することを目的としている。

単位制の導入は、大学との単位互換や、専修学校専門課程から大学へ編入学した際の学修成果の換算を容易にするための基盤となる。

(2) 単位互換の制度

専修学校と大学との間の単位互換については、大学の学則で定めることにより、大学が他の大学や専修学校専門課程における学修を、卒業要件として定める単位の一部として認めることができる。〔大学設置基準（昭和三十一年文部省令第二一八号）〕。

〔大学以外の教育施設等における学修〕
第二十九条 大学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う専修学校又は高等専門学校の特攻科における学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、当該大学における授業科目の履修とみなし、大学の定めるところにより単位を与えることができる。
② 前項により与えることができる単位数は、前条第一項及び第二項により当該大学において修得したものとなす単位数と合わせて六十単位数を超えないものと

この制度により、学生は一度修得した単位を再度取得する必要がなくなる。
ただし、単位互換の認定は受け入れる側の学校の判断に委ねられており、すべての単位が無条件に認められるわけではない。認定の可否や上限単位数は、各学校の学則や定めるところによる。

3.2 単位の定義と学習活動の内訳

専門学校（専修学校専門課程）の設置基準における「通信制課程」は、全日制とは異なる特徴的な計算方法や運用ルールが定められている。

特に重要な「単位認定の学習時間」と「スクーリング（面接授業）の要件」、および「メディア授業（eラーニング等）」による特例」は以下の通りである。

(1) 単位認定の基本概念（45 時間の原則）

まず、専門学校における「1 単位」の定義は、全日制・通信制を問わず以下の原則に基づく。
1 単位 ← 45 時間の学習通信制においては、この 45 時間を以下の 3 つの要素の組み合わせで構成する。

- ① 印刷教材等による自学自習（テキスト学習）
- ② 添削指導（レポート提出・課題）
- ③ 面接授業（スクーリング）

(2) スクーリング（面接授業）の必須要件

通信制であっても、全てを自宅学習で完結させることはできず、一定時間の「面接授業（スクーリング）」が義務付けられている。

専門学校設置基準におけるスクーリングの時間数は、授業科目（講義・演習・実習）の区分によって異なる。

授業の方法	1 単位あたりの総学習時間	うち、必要なスクーリング時間数
講義	45 時間	約 15 時間（※1）
演習	45 時間	約 30 時間
実習	45 時間	約 45 時間（※2）
実技	45 時間	約 45 時間

（※1）講義について：多くの学校では「1 単位につき〇〇コマのスクーリング」と設定されるが、基準とは学習内容の構成比率による。

（※2）実習について：医療・福祉・製菓などの実習を伴う分野は、通信制であっても 100%スクーリング（または施設実習）が必要となるケースが大半である。

(3) 【重要】メディア授業による特例（スクーリングの代替）

近年、特に注目されているのが「メディア授業（高度な ICT 教材を用いた学習）」によるスクーリング時間の免除（代替）措置である。設置基準および関連通知により、以下の条件を満たすメディア授業を行った場合、本来必要なスクーリング時間の一部をメディア授業に置き換えることができる。

① 代替可能な上限：

原則として、各科目のスクーリング必要時間数の 6 割～8 割程度まで（分野や科目により異なるが、上限が設けられている）。

ただし、「全てをメディア授業にする」とは原則認められておらず、試験や一部の指導に直面を行う必要がある。

② 要件

教員との質疑応答機能があること（双方向性）。
受講履歴（ログ）が管理できること。
学習成果が対面授業と同等であると認められること。

【実務上のポイント】

多くの通信制専門学校では、この特例を活用し、「自宅で動画講義を視聴＋小テストを行うこと」で、実際に授業へ通う日数を「年数回」や「夏期の集中講座のみ」に圧縮している。

(4) 添削指導（レポート）の要件

スクーリング以外の学習時間を担保するために、添削指導（レポート提出）が必須である。
標準的な回数：1 単位につき 3 回程度の課題提出が目安とされることが多い（科目の性質により 1 回～数回と変動可）。

方法：郵送によるレポートだけでなく、Web 上の LMS（学習管理システム）を通じた提出・添削も認められている。

■ 1 単位取得のモデルケース

構成要素	従来型 （スクーリング重視）	メディア授業活用型（特例適用）
自学自習	テキスト学習	テキスト学習
レポート	3 回提出	3 回提出（Web 可）
スクーリング	15 時間（約 2～3 日通学）	数時間（試験・補講のみ）＋ 動画授業

【注意点】専門分野による法的な縛り

3.3 学習時間の内訳構成案

1 単位(45 時間)の学習時間の内訳構成案を示す。

特に、「メディア授業(e ラーニング)」を導入して講学(スクーリング)負担を減らすモデルと、従来の標準的なモデルを比較して提示する。

(1) 1 単位(45 時間)の学習時間構成シミュレーション

ここでは、最も「機能的」講義科目(座学)上、実技を伴う「演習科目」の 2 パターンで構成案を提示する。

①パターン A:講義科目(理論・概論など)

法的要件: スクーリング(面接授業)が比較的少なくて済む区分。

1 単位の基準: 全 45 時間のうち、約 15 時間がスクーリング相当である必要がある。

構成要素	① 従来型(通学重視)	② メディア活用型(通学圧縮)
A. 面接授業 (対面スクーリング)	15 時間 (約 2~3 日通学)	3 時間 (試験・ガイダンスのみ通学)
B. メディア授業 (動画視聴・Web 小テスト)	0 時間	12 時間 (自宅 Web 受講)
C. 自学自習 (テキスト学習・レポート作成)	30 時間	30 時間
合計	45 時間	45 時間

【ポイント】「メディア活用型」では、本来必要な 15 時間のスクーリングのうち、約 8 割(12 時間分)を e ラーニングに置き換える構成案。これにより、学生は「期末試験の 1 回だけ登校すれば単位取得可能」という設計が可能になる。

44

②パターン B:演習科目(プログラミング・簿記・語学など)

法的要件: 講義よりも実践的な指導が必要ため、スクーリングの比重が高くなる。

1 単位の基準: 全 45 時間のうち、約 30 時間がスクーリング相当である必要がある。

構成要素	① 従来型(通学重視)	② メディア活用型(通学圧縮)
A. 面接授業 (対面スクーリング)	30 時間 (約 5~6 日通学)	10 時間 (重要ポイント・発表のみ対面)
B. メディア授業 (演習動画・画面操作等)	0 時間	20 時間 (動画を見ながら自宅で操作)
C. 自学自習 (課題制作・予習復習)	15 時間	15 時間
合計	45 時間	45 時間

【ポイント】演習科目でも、両面共有や双方向チャットを用いた高度なメディア授業を行うことで、対面授業の一部を代替可能。ただし、講義科目に比べると対面の必要性が高いため、一定の回数(数日程度)の登校日を設定するのが一般的。

45

(3)「自学自習(C)」の計算根拠の作り方

シラバス(授業計画書)を作成する際、C. 自学自習 の時間数をどう根拠付けるかが重要である。文部科学省や認可校者(都道府県)への申請時には、以下のようなシジックで説明する。

【計算式: レポート課題の想定所要時間 × 回数】

例えば「自学自習 30 時間」を埋めるには以下のように設定します。

課題の回数: 1 単位につき 3 回のレポート提出を設定。

1 回あたりの重み: レポート 1 本を完成させるために必要な学習時間を「10 時間」と設定。

テキスト読込: 3 時間

調査・思考: 4 時間

レポート作成: 3 時間

計 10 時間

計算: 10 時間 × 3 回 = 30 時間の自学自習

(4) 設置認可申請上の注意点

カリキュラムを編成する際は、以下の点に注意が必要である。

①メディア授業の上限: 全ての授業をメディア化することはできない。卒業に必要な総単位数のうち、メディア授業で修得できる単位数には上限(一般的に 60 単位まで等)が設けられている場合がある(※大学通信教育設置基準に準拠する場合が多いですが、専門学校の場合は都道府県の指導指針による)。

②試験の実施方法: 単位認定試験(期末テスト)は、原則として「対面(面接授業時)」で行うことが推奨されている。Web テストのみで実施される場合は、本人確認(替え玉受検防止)の厳格なシステム要件が求められる。

46

3.4 成績評価と履修管理の基本設計

通信制課程では、全日制以上に本人確認の厳格さと「学習プロセスの担保」が監査(都道府県・文科省)で重視される。そのため、LMS(学習管理システム)のログ活用が鍵となる。

(1) 成績評価基準の構成案

科目タイプ(座学系/実習・演習系)によって配分を変えるのが一般的。

【重要】評価の前提条件(受験資格)

評価(点数化)を行う前に、以下の「足切りライン(受験資格)」を設ける必要がある。これを満たさない学生は、点数に関わらず「未履修(F 評価)」となる。

・レポート提出率: 100%(全回提出必須)

・スクーリング出席率: 規定時間数の 100%(または 8 割以上)

・メディア授業(動画)視聴率: 100%(LMS ログで確認)

上記の条件をクリアした学生に対し、以下の配分で 100 点満点の評価を行う。

①パターン A: 講義科目(知識重視)

例: 概論、法理、マネジメント論など

評価項目	配分比率案	内容・備考
① 期末試験(単位認定試験)	50%	**原則対面(スクーリング時)**に実施。本人確認を徹底に行うため、最もウェイトを高くします。
② レポート(活字課題)	30%	全 3 回程度の平均点。コピーチェックツール等での機内性確認も含まれます。
③ 平常点(LMS 小テスト)	20%	動画視聴後の確認テスト(理解度チェック)のスコア。視聴完了だけでなく「理解しているか」を問います。
合計	100%	60 点以上で「可(単位認定)」

47

②パターンB:演習・実習科目(スキル重視)

例:プログラミング、デザイン制作、介護実践など

評価項目	配分比率案	内容・備考
① 成果物・実技試験	50%	制作物のクオリティや、スクーリング最終日に行う実技テストのスコア。
② スクーリング取り組み姿勢	30%	対面授業時の積極性、課題への取り組み、グループワークへの貢献度など。
③ LMS 課題・プロセス評価	20%	中間提出物の進捗状況や、LMS 上での質疑応答・指示板への書き込み頻度など。
合計	100%	60 点以上で「可(単位認定)」

(2) 卒業要件・進級要件の設計

専門学校(2 年制の場合)の法的基準をベースに、学校独自のハードルを設定する。

A. 卒業要件(法定 + α)

以下のすべてを満たすこととする。

- 1.在学期間：2 年以上
- 2.総修得単位数：62 単位以上(専門学校設置基準準拠)
- 3.総授業時数換算：1,700 時間以上
- 4.必修科目の充て：指定された必修科目をすべて修得していること。
- 5.(オプション)卒業研究・制作：卒業制作の提出および合格。

B. 進級要件(1 年→2 年)

通信制は「自分のペース」が特徴だが、学習進捗を防ぐために緩やかな進級要件を設けることを推奨する。

①案 1(単位数ベース)：1 年次に履修登録した科目のうち、30 単位以上(または 30 単位以上)を修得していること。

②案 2(必修科目ベース)：1 年次の「基幹必修科目(例:〇〇基礎理論)」を修得していること。
※これを満たした場合、仮進級とするが、前年とするかは学則で定めます。通信制では「原級留置(留年)」より

48

(3) 履修モデル(カリキュラム・フリー)案

2 年制(全 62 単位以上)の場合の標準的なモデル。

単位配分の目安

一般教育科目(教養)：10～15 単位

専門基礎科目：15～20 単位

専門科目(中核)：30～40 単位(実習・実習含む)

【モデルケース:IT・情報処理科(通信課程)】

学年	科目区分	科目名例	単位数	学習形態
1 年次	一般・基礎	情報リテラシー	8	メディアⅠ
		ビジネス英語		
	専門基礎	IT 社会論	12	メディアⅡ 高レベルスクーリング
		コンピュータ概論		
		プログラミング基礎		
		ネットワーク上級		
	専門演習	プログラミング基礎 (Python/Java) Webデザイン論Ⅰ	16	スクーリング重視
2 年次	小計	(年間約 30 単位履修)	30	
	専門応用	データベース実務 システム設計論 情報セキュリティ実務	12	メディアⅢ
		Webアプリケーション構築 ——チーム開発実習		
	専門演習	Webアプリケーション構築 ——チーム開発実習	12	スクーリング重視
	総合	卒業制作 (プロジェクト学習) 就職・キャリア設計講座	8	混合型
	合計	(2 年間で 62 単位以上)	62+	

49

(4) 運用上のアドバイス(通信制特有)

①「単位認定試験」の不正防止

LMS 上のテスト(CBT)だけで成績を決めるのはリスクがある(替え玉受験の可能性)。成績の 50% 程度を占める最終試験は、スクーリング期間中に教室内実施(ペーパーテスト等)するか、オンラインで行う場合は「AI 監視付きシステム」や「Web カメラ常時接続」を導入する必要がある。

②LMS の進捗管理

「動画を再生しっぱなしで見ていない」を防ぐため、動画の途中でクリックしないと進まない仕組みや、チャプターごとの小テストを必須化する設定(これらセキュリティ強化とレポート提出ボタンが押せない等)を LMS 側で紐づけることが重要である。

3.4 単位互換制度の活用

通信制専門学校における単位互換制度は、募集力・学習継続率・進路実績を高めるための「戦略的な制度設計」が重要となる。

(1) 単位互換制度の基本整理(前提)

通信制専門学校での単位互換は、主に以下との連携で活用されます。

①通信制高校

②大学・短大・専門学校(通学・通信)

③ 高等専修学校

④企業研修・資格講座(一部)

※ 専門学校は「単位」ではなく履修時間(〇時間＝1 単位相当)で管理されるため、教育課程表・シラバスの整合性が重要になる。

(2) 活用方法① 通信制高校との接続・連携

①目的

高校中退防止

高校→専門学校への内部進学ルート形成

②具体例

高校在学中 専門学校側

情報・IT・デザイン等の専門科目 専門学校 1 年次の一部科目として認定

探究学習・課題研究 専門演習として認め替え

50

③効果

専門学校 1 年次の履修軽減

早期専門教育 → 就職実績向上

高専一貫型)プログラミング

参考「高校 3 年→専門 1 年で卒業・就職」モデルも可能

(3) 活用方法②「ダブルスクール・併修モデル」

【対象】社会人 大学生・通信制大学在学 卒業・進学志向者

【仕組み】大学の一般教養 → 専門学校の基礎科目として認定

専門学校の実習 → 大学の自由選択科目として認定

【メリット】

学費・学習負担の軽減

資格×学位×実務の組み合わせが可能

社会人の再教育(リスキリング)に強い

(4) 活用方法③「資格・検定を単位化する」

単位認定しやすい資格例

IT パスポート / 基本情報技術者 H 商簿記 MOS 色彩検定・CAD 利用技術者

介護職員初任者研修 など

【活用ポイント】

事前取得資格 → 入学時単位認定

在学中取得 → 卒業単位に算入

■ 学生募集時に「資格を取ってほしい」学習期間短縮)と訴求できる

(5) 活用方法④「モジュール型カリキュラム設計」

設計思想

1 科目＝完結型

他校でも評価しやすい構成

例(IT 系)

プログラミング基礎(90 時間)

Web 制作実習(90 時間)

データ活用基礎(45 時間)

■他校・他課程とやり取りやすく、連携拡張が容易

51

(6) 活用方法⑤ | 途中転換・再入学対応

想定ケース

直専門学校からの転入

大学中退者の再スタート

一度退学した社会人の再入学

【ポイント】

履修証明書ベースで柔軟認定

最大認定上限(例:卒業要件の50%)を設定

■「やり直せる学校」という評価につながる

(7) 制度設計時の実務チェックリスト

- 教育課程表と時間表の整合
- シラバスの学習到達目標の明確化
- 単位認定基準(成績・評価方法)
- 学則・履修規程への明記
- 行政(都道府県)との事前協議
- ※ 特に通信制に指導時間・評価方法の説明責任が重畳される。

(8) 成功している学校の共通点

- 単位互換を「例外」ではなく標準制度として設計している。
- 高校・大学と協定書をテンプレ化している
- 募集広報で「学習期間短縮」「学習軽減」を明確に訴求している

第4章 結論と今後の開発ロードマップ

(教育システム基盤(LMS)の設計と学習サポート体制)

4.1 調査結果の総括と課題の特定

本調査は、令和6年度学校教育法等の改正(2026年4月施行)を背景に、専門学校が高等教育機関としての地位を確立し、多様な学習者に対応した「通信制・単位制コース」を開講するための制度的・実務的条件を明確にすることを目的とした。調査結果を総括すると、新コースの実現は、単なる教育手法の追加ではなく、法的な義務と教育の質の保証をLMS(学習管理システム)の機能に完全に統合する戦略的なデジタルトランスフォーメーション(DX)プロジェクトであると結論づけられた。結論として、専門学校が今後取り組むべき課題は以下の3点である。

(1) 法令遵守と制度設計の絶対的要件

2026年4月以降、専門課程は単位制に限定され、修了要件は「修業年数×31単位以上」となる見直しである。通信制コースの開講にあたっては、1単位=45時間の原則に基づき、学習時間の内訳(自学自習、レポート、スクーリング、メディア授業)を科目ごとに法定要件に適合させる必要がある。特に、学習者の通学負担を軽減するための「メディア授業によるスクーリング代替特例」の適用には、LMSによる正確な学習ログ管理、双方向性の確保、および厳格な本人確認(試験時)*が不可欠となる。この観点から、LMS導入は単にDXではなく、法令遵守のための必須インフラ投資として位置づけるべきである。

(2) LMSを中心とした教育の質保証

通信制両校の実態調査では、ICT活用が最新鋭のメディアミックス型と旧来のテキスト重視型に二極化していることが判明した。専門学校が開発を目指すコースでは、この最低限の質的レベルを超え、LMSを活用したラーニングアナリティクス(LA)に基づき、学習のつまづきを特定し、ドロップアウト(脱退)リスクの高い学生へ早期に介入する体制(Early Intervention)を構築する必要がある。「教員向けダッシュボード」を通じて、データに基づく指導(データ駆動型教育)を実現することが、高等教育機関としての質の向上に直結する。

52

53

(3) 戦略的な連携と運用の課題

先行事例からは、同一教育グループ内でのLMSコンテンツ共有や、AO入試・推薦合格者向けに入学前からLMSを開放する「プレカリッジ」の有効性が確認された¹⁾。システム選定においては、機能の多さよりも「4校のエンゲージメント(ログイン継続率)」を最優先する必要があり、特に「ID・パスワードの壁」や「難読の壁」といった、通信制特有の学習障壁につながる「4つの壁」への対策を運用設計に組み込む必要がある²⁾。そして具体的な取り組みとして以下の要件が求められている。

4.1.2 取り組み課題

LMSを「法令遵守のための必須インフラ」として確立する。単位制通信コースの導入は、単なる教育手法の追加ではなく、法的な義務を果たすためのDX(デジタルトランスフォーメーション)プロジェクトとして位置づけなければならない。

(1) 学習ログの厳格な管理と双方向性の確保

法令上の1単位=45時間という学習時間の原則を証明するため、LMS(学習管理システム)による正確な学習ログ(動画視聴時間、小テストの解答履歴など)の取得と管理が不可欠である。特に、通学負担を軽減する「メディア授業によるスクーリング代替特例」を適用するためには、LMSが教員との質的対応機能(双方向性)を備えていることが必須要件となる。

(2) 単位認定試験の不正防止

成績評価の根幹となる単位認定試験(期末試験)は、厳格な本人確認が可能な対面(スクーリング時)での実施を原則とすることが推奨される。Webテストで完結させる場合は、AI監視やWebカメラ常時接続といった厳格なシステム要件を導入する必要がある。

データに基づく学習者の継続率向上

「早期介入体制」を構築する通信制特有の課題である学習の疎離化やドロップアウト(脱退)を防ぐため、LMSを活用したラーニングアナリティクス(LA)に基づく能動的なサポート体制(早期介入)の構築が求められる。

教員向けダッシュボードの実装

LMSに教員向けのダッシュボードを組み込み、17日以上ログインなし³⁾課程未履修が2件以上⁴⁾「小テスト平均点が一定以下」といったドロップアウト予兆を検知するアラート機能を実装する。教員はこれらのデータ(学習ログ)に基づき、遅れている学生に個別メッセージや面談を迅速に行う早期介入(Early Intervention)フローを確立する必要がある。

54

(3) 「4つの壁」への対策を運用設計に組み込む

学習者のエンゲージメント維持を最優先し、「ID・パスワードの壁」「コンテンツ量の壁」「難読の壁」「高校校のカリキュラムとの壁」といった通信制特有の学習障壁への具体的な対策を運用ルールに組み込む必要がある。例えば、コンテンツは1本5分~10分以内のマイクロラーニング化を徹底し、フィードバックによる双方向性を確保する。

(4) 法令要件を満たした「詳細設計フェーズ」へ直ちに移る

フェーズ	目標と主なアクション
フェーズ1: 詳細設計	LMSベンダーの最終選定と契約を完了させる。1単位45時間ルールに基づき、講義/演習/自習/スクーリング/メディア授業の配分を明確にした全科目のシラバス詳細(評価基準・学習時間構成)を確定させる。
フェーズ2: システム構築・コンテンツ制作	ベンダーと共にLMS本書環境を構築し、コア科目(必須科目)のデジタル教材制作(マイクロラーニング化)を完了させる。同時に、教職員向けのLMS操作研修を徹底的に実施する。
フェーズ3: テスト運用と認可申請	LMSの本番稼働チェックリスト(UAT)を完了させ、**LMSを活用した学習指導方法の詳細(特例要件の根拠)**を文書化した認可申請書を作成し、所轄庁へ提出します。

特に、スクーリング(対面授業)の具体的な実施方法とLMSのシステム選定および運用体制の確立が、次段階で最も迅速に具体化すべき主要課題と特定されている。

(4) 今後のアクションロードマップ

前項において、新コース開講に必要な制度設計の論点は整理されたが、「スクーリング(対面授業)」の具体的な実施方法やLMSのシステム選定と運用体制の確立が、次段階の主要課題となる。ロードマップについては事項に示す。

55

4.2 開発ロードマップ(次段階へのアクションプラン)

(1)フェーズ1:詳細設計(LMSベンダー選定、カリキュラム詳細化)

このフェーズは、通信制課程の認可要件と教育目標に基づき、LMS の「機能」と「コンテンツ」の設計例を確定させることが目的である。

■マイルストーン

・LMS ベンダーの最終選定と契約完了

・全科目のシラバス詳細(評価基準・学習時間構成)確定

・システム選別要件(既存システム等)の確定

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
LMS 選定・設計	ベンダー選定とRFP 作成	設置基準への対応可否、拡張性、保守体制、コストを比較検討し、最終候補を決定。
	LMS の機能詳細設計	成績評価比率、ログ管理、添削フローなど、通信制特有の要件を LMS 機能に落とし込む。
	既存システム連携設計	学籍情報、履修情報、成績情報をどのように LMS と教務システム間で同期させるか設計。
カリキュラム詳細化	全科目の学習時間構成の確定	1 単位 45 時間ルールに基づき、講義/演習/自習/スクーリング/メディア授業の配分を科目ごとに決定。
	評価基準の確定	試験、レポート、LMS 利用ログの比率など、成績評価の基準を具体的に決定し、学則に反映。
コンテンツ計画	教材制作の優先順位付け	必修科目、基礎科目から順に、動画、テキスト、確認テストの制作スケジュールと担当者を決定。

(2)フェーズ2:システム構築・コンテンツ制作(LMS 導入、教材制作)

決定した設計図に基づき、LMS 環境を構築し、実際に学生が学習に使えるコンテンツを制作・登録していく段階です。

■マイルストーン

・LMS 本書構築の構築と初期設定完了

・コア科目(必修科目)のデジタル教材制作完了

・教職員向け LMS 操作マニュアルの作成完了

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
システム構築	LMS 環境構築・設定	ベンダーと共に本番サーバーのセットアップ、学生・教員アカウントの初期登録、権限設定を実施。
	ログ管理機能の実装確認	動画視聴時間、テスト受験日時、レポート提出日時など、単位認定に必要なログが正確に取得できるか検証。
	セキュリティ・認証強化	アクセス制限、本人認証(特に試験時)の仕組みを導入・設定。
コンテンツ制作	講義動画の撮影・編集	専門分野の教員と連携し、詳細設計に基づいた動画教材を制作。
	デジタル教材の作成	レポート課題、確認テスト、PDF 教材(テキスト)などを LMS に登録。
	シラバス情報登録	各科目の学習計画、評価基準、履修モデルを LMS 上に公開・登録。
教職員研修	教員向け操作研修の実施	LMS の基本操作、レポート添削方法、ログ参照方法、メディア授業実施方法などを徹底指導。

(1)フェーズ3:テスト運用と認可申請等

システムの最終チェックと、通信制課程を設置するための行政手続きを行う。

■マイルストーン

・LMS の本書稼働チェックリスト完了(Go-Live)

・通信制課程の設置認可申請書の提出

・初年度の学生募集開始

区分	主なタスク	詳細な作業内容と成果物
テスト運用(UAT)	ユーザー受入テスト(UAT)	少数精鋭の教職員・学生候補者で、履修登録から単位修得までの全プロセスをシミュレーション。
	不具合修正とパフォーマンス調整	LMS の動作速度、同時アクセス時の安定性、ログ取得の不備などを最終修正。
	教育効果の検証	テスト運用受講者に対し、メディア授業の理解度調査を実施し、コンテンツの修正を行う。
認可申請準備	認可申請書の作成	学則、設置計画、教員名簿、LMS を活用した学習指導方法の詳細(特例要件の根拠)を文書化。
	行政の現地調査対応	LMS の機能やログ管理システムを実演し、基準への適合性を説明。
募集開始	LMS の学生向け案内作成	学習方法、操作方法、通学(スクーリング)日程などを記載したガイドを作成し、広報活動を開始。

文部科学省委託事業
令和7年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業 (人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム) 「通信制高校連携型キャリア形成支援による地域南着人材育成モデル」の構築事業」 LMS・単位制・通信制等に関する 制度文獻調査報告書
学校法人YIC学院
●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

教育とゲームフィクション

ゲームフィクションについて成功させるために留意すべき4つのカテゴリー、20のポイント

1. 学習設計と目的の明確化

ゲームフィクションはあくまで「手段」であり、「目的」ではない。

- 学習目標（LO）との一致：ゲーム要素が学習内容を促進していない。
- 手段の目的化を避ける：「ポイントを獲得すること」が目的になり、肝心の学習内容が二の次にならないようにする。
- 適切なフィードバック：正解・不正解に対して、即座に、かつ具体的な解説を伴うフィードバックを与える。
- 「失敗」の許容：何度も挑戦できる環境（リトライ）を整え、失敗を「学びの過程」としてポジティブに捉えさせる。
- スモールステップの設定：達成感を頻繁に味わえるよう、課題を細分化する。

2. 動機付けと心理的配慮

学習者のやる気をどう持続させる、健全な競争環境を作ることが重要。

- 内発的動機付けの重視：報酬（外発的動機）がなくなっても、学習そのものの興味（内発的動機）が保てるように設計する。
- 「フロー状態」の維持：難易度が低すぎず高すぎず、高すぎず低すぎない絶妙なバランスを保つ。
- アンダーマイニング効果への警戒：報酬を与えることで、もともとあった「好きでやる気持ち」が削がれないように注意する。
- 競争と協力のバランス：過度なランキング争いや上下関係の意識を削ぐため、ゲームでの協力要素も取り入れる。
- ナラティブ（物語性）の導入：学習にストーリー性を持たせ、自分が主人公として参加している感覚（没入感）を作る。

3. システムとルールの設計

適切な難易度と公平性が、学習者の継続率を左右する。

- 明確なルール設定：どうすればポイントが得られるのか、何がボーンなのかを誰にでもわかるように示す。
- プログレシスの可視化：進捗バーやレベルなど、自分の成長が目に見える形にする。
- 多様な報酬体系：ポイントだけでなく、バッジ、カスタマイズ要素、特別な権限など、学習者の好みに合わせた報酬を用意する。
- オンボーディングの簡略化：最初の使い始めで迷わない、チュートリアルは短く回想的にする。
- データの活用：学習者の行動ログを分析し、どこでつまづいているかを把握して改善につなげる。

4. 運用と倫理的側面

教育現場での長期的な運用には、環境への配慮も欠かせない。

- アクセシビリティへの配慮：デバイス環境やITリテラシー、心身の特徴に問わず、誰もが参加できる

資料 10

資料 10

- ようにする。毎回操作に「迷うことのないように同じ実習率を確保する。
- プライバシーとデータ保護：学習データ（ログイン情報など）の取り扱いには細心の注意を払う。
 - 教員の役割の再定義：教員は「教える人」から、ゲームの進行を助け、学びを深める「ファシリテーター」へと役割を変える。
 - コスト対効果の検討：開発や運用にかかる時間・費用が、得られる教育効果に見合っているか。
 - 進捗への対策：定期的なアップデートや新しいイベントの導入など、長期的な「鮮度」を保つ工夫をする。

導入を成功させるために

- 「早急のイベント」から始める：週に1回、授業の最後に予告をやるだけで、学生・生徒の「次の授業への期待感」を醸成する。
- アナログな要素を組み合わせる：デジタルツールを使わなくても、「目標達成ごとにシールを貼る」「レベルアップで称号を授与する」といったアナログな指示板を併用すると、教員全体の負担感が上がります。
- 教員が解読できる：解読できないと信頼感が損なわれる。課題とするゲームは教員自身が解読、解説できるものを選択する。生徒から思案外のゲームの解読や解説を求められた場合、得意な学生をリストラップしておき指導する。解読時は当該学生を称賛する。

PCのオンラインゲーム（ブラウザゲームや教育用マルチプレイヤーゲーム）を活用して、グループごとにチャレンジさせる形態は、学生・生徒の没入感が非常に高く、リアルタイムでの意力が不可欠になるため、非常に強力な学習ツールになる。ただし、「ただ遊んで終わる」にならないための仕掛けが重要である。

1. 実施・運用のステップ

オンラインゲームを活用する場合、以下のフローで進行するのがスムーズである。

① プラットフォームの選定

グループでゲームフィクションを実施するにはPC画面が望ましい。スマホは個人練習用。

ブラウザベースの 点クリック型ゲーム」を共有画面で解く。

② グループ構成と「画面共有」の工夫

- 1人1台PCがある場合同時に開始し、それぞれが異なる視点から情報を集める。
- グループに1台の場合：「ドライバー（操作者）」と「ナビゲーター（指示・分析者）」に分け、数分おきに操作を交代する。

③ ゲームフィクションのルール設定

- タイムアタック：全グループのクリア時間をランキング化。
- 発見ボーナス：メインの報酬以外に、特定の「オブジェクト（隠し要素）」を見つけたら加算。
- ペナルティ：間違えクリック（回答）すると、一定時間操作禁止になるなどのルールを設け、「論理的思考」を促す。

2. コミュニケーションを促す「役割分担（ロールプレイ）」

PCゲームでは、一人の「得意な人」が全組進めてしまう現象（アルファグーマー問題）が起きがちです。これを防ぐために役割を回す。一例として

- 司令塔（ディレクター）：全体の進捗を確認し、誰が何を残すか指示を出す。
- 記録係（ログ）：見つけたヒントや数字を、共有ドキュメント（Google スプレッドシート等）にメモする。

資料 15

資料 15

る。

- 調査員（スカウト）：実際にPC画面を覗かし、隅々まで探検する。
- 分析官（アナリスト）：ゲーム内の情報を観察し調査員にアドバイスを送り答えを導く。

3. PC・オンラインならではの留意点（15 項目）

導入時に特に注意すべきポイントを、技術面と教育面に分けて考える。

【技術・環境面】

- ネットワーク負荷：全員が一斉にアクセスして問題が起きないか、事前テストが必須。
- ログイン・アカウント：アカウント作成が必要な場合、個人情報保護の観点から学校用アカウントでの運用を徹底。
- フィルタリング：学校のネット側でゲームサイトがブロックされていないか確認。
- デバイス格差：マウス操作、キーボード操作の慣れ不慣れによる不公平感を考慮。
- 不適切な広告：無料のブラウザゲームを使う場合、不適切な広告が表示されないかチェック。

【運用・管理面】

- 「遊び」への傾倒：目的を忘れて関係ないサイトへ移動したり、チャットで遊び始めたりしないよう、管理ソフト等で画面を監視。
- 3D 酔いへの配慮：画面を動かし続けるゲームの場合、体調を崩す学生・生徒がいるため、こまめな休憩を促す。
- チャットの倫理：ゲーム内チャットを使う場合、誹謗中傷や攻撃的な言葉を控わなければならない指導等。
- 行き詰まり対応：ゲームが進行不能になった際の手順（アナログのヒントや休憩時間）を用意。

【教育・心理面】

- 傍観者の排除：PC操作が得意なだけが高まりすぎらないよう、操作者以外が持てる「紙のヒント」を用意する。
- 振り返りの時間確保：ゲームの興奮で終わらず、なぜあの時協力が必要だったか、を言語化させる時間を必ず取る。
- 適度な難易度：難しすぎると「動向の攻略サイト」を見始め、自分で考えなくなるため、ヒントの出し方を工夫する。
- 勝利至上主義の防止：早くクリアすることだけが目的にならないよう、プロセスの楽しさや協力姿勢を評価項目に入れる。
- オンラインマナー：就職実習に前連付け、「オンライン会議やリモートワークでの協働体制」の練習であることを意識させる。
- 成果の可視化：スコアだけでなく、グループで作成した「攻略メモ（メモ）」を提出させ、思考の過程を評価する。

4. 社会で実際に必要とされる能力への結び付け例

- 間違い探し × 品質管理：PC画面上の製品画像の間違いを探すことで、集中力と正確性を養う。
- 脱出ゲーム × 報道班：「自分の画面にしか映っていないもの」を言葉だけで正確に他メンバーへ伝える練習。
- オブジェクト発見 × 調査力：膨大なデジタルデータから必要な情報を検索・抽出するスキルの習得。

学生・生徒たちが自然と話し合い、協力せざるを得ない仕組み

1. ゲームタイプの具体的な学習活動案

それぞれのゲームを、単なる「遊び」から「教育的チャレンジ」に見直しを構成案。

ゲームタイプ	協力（コミュニケーション）を促す仕掛け
脱出ゲーム	情報の断片化（ジグソーパズル）： 中級～上級では各所に仕掛けがあり意識することも多い。 各メンバーに見るべきヒントを配り、全員の情報を組み合わせないと解けないようにする。
間違い探し	役割分担： 「見る係（スクイッドを見る）」、「書く係（解答用紙）」、「確認係（照らし合わせる）」に分け、口頭での説明能力を養う。
オブジェクト発見	分類と統合： 「オブジェクト1はAさん、オブジェクト2はBさん」と対象を分類する。対象発見終了者は求めがあれば他者に協力する

2. コミュニケーション力を高める運用のコツ：3つの仕掛け

単にグループにするだけでなく、以下の「仕掛け」を導入することで、会話の質が変わる。

① 情報を「非対称」にする

全員が同じ画面、同じプリントを見るのではなく、「Aさんには見えない情報」「Bさんには見えない情報」を作る。

- 運用方法：可能なタブレットを1人1台使い、グループ内で異なる視点の画像を提示する。
- 効果：自分の持っている情報を「言葉」で説明しなくてはならなくなるため、説明力が向上する。

② 「役割」を明確に与える

ゲーム開始前、グループ内で役割を決めさせる。一例としてあらかじめ決めた役割分担の柱に下部のようなものもある。

- リーダー：全体の進捗を確認し、全員が同意しているか確認する。
- アナリスト：見つけた情報が正しいか、教科書や資料で裏取りをする。
- レコーダー：情報を整理し、最終的な回答を組み合わせる。
- タイムキーパー：残り時間を管理し、決断を促す。

③ 「ヒントカード」システムの導入

行き詰まってきたらヒントを使うのを防ぐため、あらかじめ「ヒントカード」というリソースを確保する。

- 運用方法：各グループに2〜3枚の「ヒント請求券」を渡す。
- 効果：「今、ヒントを使うべきか?」という意思形成のための議論が発生する。

3. 具体的な実施フロー（1コマ60分を想定）

- 導入・ルール説明（10分）
 - ストーリー（世界観）の提示。
 - 勝利条件（脱出、全発見など）と役割分担の決定。
- ゲーム・ミッション（30分）

- 資料 15
- 前半: 個別の情報を集める (間違い探しやオブジェクト発見)。
 - 後半: 集めた情報を統合して、最後の難問 (脱出の鍵) を解く。
 - 教職員は各グループを回り、会話が止まっているチームに「問いかけ」を行う。
3. 振り返り・リフレクション (10分)
- ここが最も重要。「なぜ解けたのか?」「どの情報共有がうまくいったか?」を言語化させる。

アナログ現実世界と具体的な科目への応用

この3つのゲームをアナログ授業として「シリーズもの」にすることも可能ではないが、例えば、「まずは間違い探しで基礎知識を確認 (初級) → オブジェクト発見で資料読解 (中級) → 最後に脱出ゲームで総合練習 (上級)」といったカリキュラム。

「総合的な学習の時間」「就職実習」「ログゲームルーム (LHR)」は、いずれも「正解が一つではない課題」や「社会に出るための基礎力」を養う場。これらの授業の特性に合わせ、3つのゲームタイプをどう具体化し、どのようにコミュニケーションを誘発するかについての案。

1. 【就職実習】マナー・書類作成の精度を高める活用案
- 就職実習では「正確さ」と「状況判断」が重要。
- ① 間違い探し: ビジネスマナー・敬語の「違和感」発見
- 内容: 「面接時の入室シーン」や「履歴書のサンプル」の画像・動画・例文を2つ提示し、不適切な箇所をチームで探す。
 - 協力の仕掛け:
 - 役割: 「身だしなみ担当」「言葉遣い担当」「所作担当」に分かれ、自分の担当範囲を重点的にチェックしてチームで統合する。
 - 振り返り: 「なぜそれが間違いなのか?」を、マナーブック (資料) を根拠に説明し合う時間を設ける。
- ② オブジェクト発見: 求人票の「条件・リスク」ハンティング
- 内容: 複数の架空の求人票から、指定された条件 (年間休日数、研修制度の有無、基本給の構成など) を早く見つけ出す。
 - 協力の仕掛け:
 - ジグソー形式: 1人1枚異なる企業の求人票を持ち、チームで「一番確率が高い転職先は?」「一番スキルが活かせるのは?」といった議論を行い、1社を選定させる。

2. 【総合的な学習の時間】探究・課題解決力を養う活用案
- 地域課題やSDGsなど、情報の整理と論理的思考が必要。
- ③ 脱出ゲーム: 地域課題解決の「ミッション・コンプリート」
- 内容: 「放置竹林から里山を救え」といったテーマを設定。各所に隠されたヒント (統計データ、住民の声、過去の解決策) を解き明かさないと、最終的な「解決策の提案書」が完成しない (＝脱出できない) 仕組みにする。

- 資料 15
- 3. 敬語: 二重敬語 (「おっしゃられる」) や、謙譲語と尊敬語の取り違え。
 - 4. 記書き: 集合場所や持ち物が本文に書かれていないと見にくい。
 - 5. 署名: 自分の連絡先 (電話番号) が抜けている。
- コミュニケーションの仕掛け: 「なぜこれが失礼にあたるのか?」をチームで議論し、「相手の立場に立った修正案」まで作成させる。

2. 【総合学習】オブジェクト発見: 地域の「宝」と「課題」ハンティング
- 膨大な資料から必要な情報を抜き出し、構造化する力を養います。
- 課題: 地域住民への集客のインタビュー記事 (3ページ分) と、統計グラフを配付。
 - 見つけるオブジェクト:
 - 「高齢者が困っていること」3つ。
 - 「若者が地味に残らない理由」として挙げられたキーワード。
 - 「グラフとインタビュー内容が矛盾している箇所」。
 - コミュニケーションの仕掛け: 情報を探す「調査員」と、それらを付箋で分類する「分析官」に分かれます。最後はゲームで「この地域を救うための一言キャッチコピー」をひねり出させる。

3. 【LHR】脱出ゲーム: イベント実行委員会の危機を救え!
- 論理的思考と合意形成を、身近なテーマで行います。
- ストーリー: 「予算と人手が足りない中、イベントの出し物を1つに絞り、校長先生の承認印をもらって救済を脱出せよ!」
 - 謎解きのステップ:
 1. 暗号解読: クラスのアンケート結果 (バババの紙) を並び替え、人気順位を特定する。
 2. リソース配分: 「予算」「準備時間」「必要人数」の3条件をすべて満たす出し物を、表を使って絞り込む。
 3. 交渉: 最後に「反対派の意見」を論議するのではなく、どう取り込むかの解決策を1つ書き上げた後クリア。
 - コミュニケーションの仕掛け: 全員が納得しないと「承認」が得られないというルールにし、「多数決ではなく対話で決める」プロセスを体験させる。

4. 実施・運用時の「成功へのチェックリスト 10」
- 講師が準備・進行する際に、これだけは確認しておきたいポイント。
- 【準備フェーズ】
- 目的の共有: 「今日はゲームを通じて『伝える力』を鍛えるよ!」と意図を伝えたいか?
 - 難易度の調整: 最初の5分で1つ目のハードルを越えられる設定か? (挫折防止)
 - 役割の明確化: 「何もしない子」が出ないよう、物理的な役割 (記録、計時等) を与えたか?
 - アナログとデジタルの併用: 画面を見るだけでなく、手元で動かせる資料 (カード等) があるか?
- 【進行フェーズ】
- タイムマネジメント: 残り時間を「あと10分!」「あと3分!」と実況して焦燥感 (ワークラフ) を出しているか?
 - 介入のバランス: 教員が答えを教えていないか?「あっちの資料をよく見た?」などのヒントに留める?
 - 称賛のタイミング: 正解した時だけでなく、良い議論をしているチームを全体の前で褒めたか?

- 資料 15
- 協力の仕掛け:
 - 情報統合: Aグループは「予算」、Bグループは「作民の要望」というように別々の情報を得られ、グループ間で交渉や情報交換を行わないと答えが出ない設定にする。

3. 【LHR】クラスの親睦と自治能力を高める活用案
- 「誰一人取り残さない」クラス作りや、行事の企画に活用する。
- ④ オブジェクト発見×脱出ゲーム: クラスの「隠れた強み」探し
- 内容: 教室内のおもちゃに隠された「クラスメイトの意外な特技や長所」が書かれたカードを探し出し、それらを組み合わせで「ゲーム内での役割の割り当て」などの課題をクリアする。
 - 協力の仕掛け:
 - 対話の強制: カードには「○○さんに『最近頑張っていること』を聞け!」といったアクション指示を混ぜ、物理的な発見だけでなく、対話による情報獲得を組み込む。

4. 運用のための「3ステップ・メソッド」
- 講師が運用する際に、以下の流れを意識しコミュニケーションが活性化させる。
- STEP 1: チームビルディング (開始前 5分)
- ゲーム開始前に、チーム名と「今日のコミュニケーション目標」を決めさせる。
- 例: 「全員が最低3回は発言する!」「反対意見も一度受け入れる」
- STEP 2: インターバル・ミーティング (中盤 5分)
- ゲームの途中で一度時計を止め、作戦会議の時間を強制的に設ける。
- 「現在、何が分かっていて、何が足りないか」をシートに記入。これにより、一部の学生・生徒だけが突っ走らせるのを防ぐ。
- STEP 3: メタ認知リフレクション (終了後 10分)
- ゲームの結果 (成功・失敗) よりも、「どう協力したか?」を言語化する。
- 「○○さんのあの発言が、解決のヒントになった。」「行き詰まった時、どうやって空気を変えたか、などを共有する。これが就職面接の「自己PR (チームで取り回したこと) の直接的な練習になる。」

5. 準備のポイント (ツール活用)
- 表計算ソフト (デジタル): 「脱出ゲーム」のパスワード入力画面として。正解すると次のヒント画像が表示されるように設定する。
 - 付箋と模造紙 (アナログ): 「オブジェクト発見」で見つけた情報を可視化する。デジタルとアナログを混ぜると、操作が得意な学生・生徒以外も活躍しやすくなる。

就職実習やLHR、総合的な学習の時間での具体例

1. 【就職実習】間違い探し: ビジネスマールの違和感を挙げ!
- 知識として知っている状態から、実務で気づける。状態へ引き上げます。
- 課題: 2通のビジネスメール (A: 完璧な見本、B: 5箇所のミスがあるメール) を提示します。
 - 間違いのネタバレ:
 1. 件名: 「お世話になります」だけで、用件 (面接日程の件) が書かれていない。
 2. 宛名: 会社名が略されている (〇株) など、または役職名が名前の後ろに来ていない。

- 資料 15
- 【振り返りフェーズ】
- スキルの言語化: 「今のゲームのどの部分が、実際の就職後に役立つそう?」と問いかけたか?
 - 相互評価: チーム内で「助かった発言や行動」を称え合う時間を設けたか?
 - 次に繋げる問い: 「次、もっと早く解くにはどういったコミュニケーションが必要だった?」と問いかけたか?

教育とゲーミフィケーションの段階について

1. オンラインゲームで楽しさを感じる
2. そのゲームをグループで行うことで仲間とのコミュニケーションを醸成
3. 役割分担してゲームを実施することで自己分析、他者受容を行う
4. このゲームを行うことがどの能力を養成していくかを実感
5. アナログ授業に実際に導入することでその結果を実感

今後について

- ・リアル脱出ゲーム実施の検討
- ・Kahoot!, ClassDojo, Minecraft Education Edition などデジタル教育ツール利用の検討など

参考: ゲーミフィケーションで使用するオンラインフリーゲームのサイト集

*倫理上問題ないと思われるもの、学生・生徒が行き詰った場合、ヒント・スキップ・解答表示の機能などがあり未達成感を抱いたまま終わらないように配慮してあるもの、講師自身が解答を把握し、解説できるもの。英語のサイトもあるが講師の補佐、日本語への翻訳機能で対応可能。

脱出ゲーム

- ・Vitamin Hana
<https://minigames.squares.net/hanawp/>



難易度は階級から中級程度、絵柄が優しい。

- ・rinの午後
<https://rinnoyogo.com/>



難易度は中級から上級程度、絵柄が上品、ヒント機能。

間違いない

・Spot The Difference Daily

<https://www.shockwave.com/gamelandings/shockwave-original-spot-the-difference-daily?date=26%2F01%2F16&play=true>



難易度は初級から上級と幅広い。英語サイトだが直感的にできる。多くの他のサイトとは異なり、時間制限による強制終了が無いので安心して取り組める。解答機能あり

オブジェクト発見

・Find Out Hidden Object

<https://myhiddengame.com/hidden-object/30628-find-out-hidden-object.html>



難易度は中級と。英語サイトだが直感的にできる。時間制限なし。補助機能が充実

混合サイト

<https://www.amajeto.com/>



オブジェクト発見、脱出ゲーム。難易度は概ね中級で適正なものが多い

総合サイト

My Hidden Game

<https://myhiddengame.com/>



各ジャンルを集めた英語のポータルサイト。超初級から上級まで幅広い。圧倒的な量を誇る。

*キーワードで検索すれば玉石混交で数多くヒットするが、教育的、倫理的な観点からみると不適切なものも多く、使用にあたっては講師が慎重に選択することが肝要である。

高校生のスマホセキュリティ

この教材の全てのイラストは生成AIを使用して作成しました
Copyright © YIC Information Business College. All Rights Reserved.

実はとても危ないインターネットの世界

自分を守るために気を付ける26のこと

カテゴリ1: OS・アプリの更新管理
デバイスの「土台」を脆弱に陥つための対策です。

1. OSの即時アップデート: 脆弱性を塞ぐ最優先事項

- OSの即時アップデート
2026年初頭に発覚した「Dolbyコンポーネントの脆弱性」のように、操作不要（ゼロクリック攻撃）で侵入されるリスクを防ぐため、通知が来たら即更新します。
✓「OS、androidの更新」を検索してみよう

2. アプリの自動更新: 常に最新のセキュリティ状態を維持。

- アプリの自動更新設定
アプリ側の脆弱性も攻撃の入り口になります。常に最新版が保たれるよう自動更新を有効にします。
✓「アプリの自動更新」を検索してみよう

3. 公式ストア利用: 審査済みの安全なアプリのみ使用。



- 公式ストアのみを利用
App StoreやGoogle Play以外の「野良アプリ」は、ウィルスの混入率が極めて高いため避けます。

4. 不要アプリ削除: 攻撃の入り口を物理的に減らす。



- 不要なアプリの削除
使っていないアプリは「攻撃の隙（アタックサーフェス）」を増やすだけです。定期的に整理しましょう。

5. 権限の最小化: アプリに過剰な情報を与えない。



- 権限 (パーミッション) の最小化
「計算機アプリが位置情報を求める」といった、機能に無関係な権限要求は拒否します。
✓ 「アプリの権限設定」を検索してみよう

6. サポート終了アプリの移行: 古いアプリを捨て、新しい代替品へ。



- 提供終了アプリのアンインストール
開発者がサポートを止めた古いアプリはセキュリティの穴になりやすいため、代替アプリへ移行します。

7. パスキー (PASSKEYS) の導入: 盗まれるパスワードをなくす最新技術。

パスキー (Passkeys) の導入 盗まれるパスワードをなくす最新技術

- ・パスキー (Passkeys) の導入
パスワードを「覚える」から
「デバイスで承認する」形式へ
移行。フィッシング詐欺に物理
的に耐性があります。
✓「パスキー」を探索してみよ
う



8. 生体認証の活用: 覗き見のリスクを排除。



- ・生体認証の活用
顔認証や指紋認証をメインにし、外
出先でのパスワード入力を覗き見られ
るリスク (ショルダーハッキング: 銀
行のATMで高齢者の方が暗証番号を入
力する時、悪い奴が横見や覗き見する
ことをイメージしてみで) を減らしま
す。

9. 多要素認証 (MFA) 必須化: IDが漏れてもログインさせない。



- ・多要素認証 (MFA) の必須化
標準ではMFAが使えないサービスで
は、必ずアプリやSMSによる二段階認
証 (パスワード入ってもSMSなどに送
られてくる番号を入力しないと先に進
めない) を設定します。
✓「MFA」を探索してみよう

10. 複雑なパスワード: 推測されやすいパターンを避ける。

悪いパスワードの例



- ・推測されにくいパスワード
「1234」や誕生日、Z字型
のパターンなどは一瞬で見破ら
れます。複雑なコードを設定し
ましょう。
✓「良いパスワード」を探索し
てみよう

1 1. パスワードマネージャー: 全サイトで異なる強固な鍵を作成。



- パスワードマネージャーの利用
何百ものパスワードを安全に生成・管理し、使い回しによる「芋づる式被害」を防ぎます。一つのパスワードを複数のサイトで使うと全滅してしまいます。
✓「パスワードマネージャー」を検索してみよう

1 2. 公共Wi-Fi（フリーWi-Fi）の回避: 偽のアクセスポイントに繋がらない。



- 公共Wi-Fiの原則利用停止
暗号化されていない、または不審なWi-Fiには繋がらないのが鉄則です。
✓「怪しいFree wi-fi」で検索してみよう

大切なこと3：通信とネットワークの安全
目に負えない「通信の通り道」を守ります。

1 3. VPNの利用: 通信内容を暗号化のトンネルで包む。



- VPNの常時・スポット利用
信頼できないネットワークを使う際は、VPNで通信内容を暗号化して盗聴を防ぎます。
✓「VPN」を検索してみよう

1 4. BLUETOOTH/NFCのオフ: 不要な通信窓口を閉じる。



- Bluetooth/NFCのオフ
使わない時はオフにし、近距離からの不正ペアリングやデータ抜き取りを防止します。
✓ Bluetooth/NFCの落とし穴」を検索してみよう

15. デザリングパスワード: 自分の電波にタダ乗り・侵入させない。



- ・デザリングのパスワード強化
スマホをルーターとして使用する際、パスワードの設定によっては、他人に悪用される恐れがあります。
✓「デザリング」「デザリングのリスク」を検索してみよう

カテゴリー4:物理的・紛失リスク対策
スマホがそのものの盗難や、物理的なハッキングに
備えます

16. 「デバイスを探す」有効化: 地図上で場所を特定。



- ・「デバイスを探す」機能の有効化
紛失時にGPSで場所を特定し、遠隔で音を鳴らすための基本設定です。
✓「デバイスを探すには」を検索してみよう。

17. リモートワイプ: 諦める時は遠隔でデータを消し去る。



- ・リモートワイプの準備
盗難時に、遠隔操作でスマホ内の個人情報全消去できる状態にしておきます。
✓「リモートワイプ」を検索してみよう

18. SIMカードのPINロック: SIMを抜かれて別の端末で使われないように



- SIMカードへのPINロック
スマホが盗まれた際、SIMカードを抜いて別の端末で使われ、SMS認証を突破されるのを防ぎます。
✓「SIMカードへのPINロック」「SMS認証」を検索してみよう

19. 覗き見防止フィルム: 背後からの盗み見を物理的に遮断。



- 覗き見防止フィルムの貼付
物理的に画面を見られないようにし、ログイン情報やメッセージ内容を保護します。

20. 公共充電ポートの回避: USBからデータを盗む「ジュースジャッキング」を防ぐ。



- 公共充電ポートの使用回避
USBポートからウイルスを送り込む「ジュースジャッキング」対策。自分の充電器とコンセントを使いましょう。
✓ 「ジュースジャッキング」を検索してみよう

21. クイッシング (QR詐欺): 偽のQRコードから偽サイトへ。



- クイッシング (QRコード詐欺) への警戒
公共の場に貼られた偽のQRコードをスキャンし、偽サイトへ誘導される被害が増えています。
✓ 「クイッシング」を検索してみよう

技術カテゴリ5：最新のAI・詐欺トレンド対策 (AI) を悪用した心理的な罠に備えます。

22. AIボイス・ディープフェイク: 家族を装う合成音声に騙されない。



- AIボイス・ディープフェイク対策
家族の声に似せたAI合成音声での金銭要求が増えて います。「合言葉」を決めるなどの自衛が必要です。

23. フィッシングの無視: メールやSMSのURLは絶対に踏まない。



- フィッシングメールの無視
銀行や運送会社を装うメールのリンクは踏まず、必ず「公式アプリ」から状況を確認します。
✓「フィッシング」「フィッシングメール」を検索してみよう

24. SNSの公開範囲制限: 写真一枚から生活圏を特定させない。



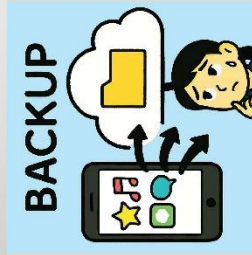
- SNSの公開範囲設定
背景の写真から自宅や勤務先が特定されるリスクを避けるため、投稿の公開範囲を絞ります。
✓「SNSの公開範囲設定」を検索してみよう

25. ICチップ読み取り: 改正法に合わせた、より安全な本人確認。



- マイナンバーカード等のIC読み取り活用
2026年4月施行の改正法により、厳格な本人確認にはICチップ読み取りが主流となります。偽造書類に騙されない安全な認証を意識しましょう
✓「マイナンバーカード等のIC読み取り活用」を検索してみよう

26. 定期的なバックアップ: 最終的にデータを守る最後の砦



- 定期的なバックアップ
ランサムウェア（身代金ウイルス）や故障でデータがロックされても、復旧できるようにしておきます。
✓「スマホのバックアップ」を検索してみよう



マルウェアについて

- スライド26の「ランサムウェア」のように現在はコンピュータウィルスを含むいわゆる「悪さ」をする「マルウェア」が存在しています。機会があればそれらを調べてみましょう。しかし専門家ではない私たちの方がその名前を知ったところで、できることはあまりありません。本教材では私たちが、被害を受けない、被害を最小限に留めるためには、どういうことに留意し、準備し、どう行動すべきかについて学びました。できることから始めていきましょう。



本教材の特徴について その1

- この教材は「著作権」を考慮してすべてのイラストと文章の一部は生成AIで作成しています。皆さんも機会があったら「著作権」について調べてみるのもいいでしょう。著作権について知ること、皆さんを守る「広い意味でのセキュリティ」といえるでしょう。
- お役立ちサイト
<https://www.cric.or.jp/education/eizoushiryou.html>
(公益社団法人著作権情報センター)



さらに詳しく 情報セキュリティの教材のURL

- 情報セキュリティ教材・ツール
https://www.ipa.go.jp/security/sec-tools/general_security_materials.html
- 映像で知る情報セキュリティ
<https://www.ipa.go.jp/security/videos/list.html>

IPA（独立行政法人情報処理推進機構）のHPより



本教材の特徴について その2

- この教材は皆さんに多くのキーワードについて、「検索」すること
を促すように作成しました。
- 教科書は過不足なく説明を記載しています。その説明が皆さんに
とって合う、合わないが起ることもあるでしょう。
- 幸いなことに昔と違って、一つのことについて多くの解説サイトや
動画があります。皆さんは検索することで自分に合った副教材を見
つけることが可能になっており、素晴らしい環境にいるのです。
- ぜひ「検索力」を磨いてください

その指先は世界を変える！
ググってググってググりまくろう！



- この教材は、自主学習で使ってもOK。思いついたら検索しよう。

参考：この教材はブラウザで見れますが、スマホでちょっとおもしろい見方もできます。その1

- まず教材をダウンロード
ダウンロードURL (仮)
<https://yc.ac.jp/lb/xxxxx.pdf>
QRコード (仮)



参考：この教材はブラウザ見れますが、ちょっとおもしろい見方もできます。その2

- こんなサイトに行きます



- さっきダウンロードしたPDFファイルを指定すると本のようになれる。ヨコがオススメ。

注意！！ただし、スマホでは大丈夫ですがパソコンではスライドが切れて見えることもあります



5-8 キャリア形成・伴走支援マニュアル 資料8

文科科学省委託事業 令和7年度「専修学校による地域産業・中核的人材育成事業」 (人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)
通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業
キャリア形成・伴走支援マニュアル ～面談と対話でつなぐ「自走型人材」育成の実践ガイドブック～
令和8年2月 学校法人 YIC 学院

目次

はじめに	3
1.事業の背景と目的	3
2. 本マニュアルの位置づけ	3
第1章 伴走支援の基本スタンスとマインドセット	4
1-1. 目指す人材像:「自走型人材」の定義	4
1-2. 対象学生(非典型進学者)の特性理解と「3つの壁」	5
1-3. キャリア形成アドバイザーの役割(ティーチングからナビゲーションへ)	7
1-4. 支援に求められる「カウンセリング・マインド」	8
第2章【入学前】信頼関係を築く「初期面談」プロトコル	10
2-1. 通信制高校へのアクトリーチ(出張相談)の会談前	10
2-2. プレプログラムとLMS 検索(空白期間の支援)	14
2-3. LMS 検索支援とオンライン面談手順	16
第3章【在学中支援①】自己管理能力と学習習慣を身につけ自律を促す「週次・月次 キャリア面談」	18
3-1. キャリア形成アドバイザーによる「伴走」の基本構造	19
3-2. 面談の運用サイクル(週次・月次)	20
3-3. 振り返りシートを活用した双方対話	21
3-4. 早期アラート対応	21
3-5. 具体的なケース(事例)への対応方法	22
3-6. SST/SGE を取り入れたグループ面談	24
3-7. AI カウンセラーとのハイブリッド・サポート	25

1

付録:実践ツールキット(運用フォーマット・スクリプト集)	28
1. [A]そのまま使える面談・管理シート	28
2. [B]SST/SGE グループワーク活動案	32
3. [C]文例・Q&A	35
第4章:【在学中支援②】社会的スキルを育む協働の場	37
4-1. SST/SGE を取り入れたグループ面談のファシリテーション	37
4-2. マイプロジェクト型学習を通じた地域企業との接点づくり	40
4-3. 【実践ツール】ビジネス SST(社会的スキル)ワーク案	43
4-4. 【付録】プロジェクト運営ワークシート案	45
第5章:【卒業後】地域定着とキャリア維持のための相談支援	50
5-1. 定着支援面談(初期継続対策)	50
5-2. 就職先企業との「連携窓口」としての機能	52
5-3. Uターン・再進路相談(転機・転業・進学)	54
5-4. オンライン・コミュニティによる相互支援	56
第6章:支援ツールと情報共有の仕組み	58
6-1. 個別キャリア形成支援シート(キャリア・カルテ)の管理	58
6-2. AI カウンセラーとの役割分担と連携フロー	60
6-3. 個人情報適切な取り扱い(情報連携のプロトコル)	62

2

はじめに

1.事業の背景と目的

人口減少と少子高齢化が加速する地域社会において、地域産業を支える中核的人材の確保は、単なる労働力不足の解消にとどまらず、地域の持続可能性を左右する喫緊の課題である。一方で、通信制高校等の在籍生徒数は年々増加傾向にあり、多様な背景を持つ若者が社会へ巣立つための新たなルートとして、その役割への期待が高まっている。しかし、こうした「非典型進学者」の学生は、進路に対する漠然とした不安や学習習慣の未定着といった個別の課題を抱えていることも少なくない。本事業「通信制高校連携型キャリア形成支援」による地域密着人材育成モデルの構築は、彼らを対象に、入学前の早期接点から在学中の自律支援、そして卒業後の地域定着までを見通した「一貫的なキャリア形成支援体制(トータルサポートシステム)」を構築することを目的とする。心理面・生活面・学習面の三位一体の支援を通じ、若者が地域社会で輝くための土台を築くものである。

2. 本マニュアルの位置づけ

本マニュアルは、本事業の成果として、支援モデルの骨格と具体的な運用手法を体系化したものである。これは単なる業務手順書ではない。教職員やキャリア形成アドバイザーが、学生一人ひとりの「個性」と「課題」に向き合い、受容・傾聴・共感をベースとした「カウンセリング・マインド」を持って関わるための指針である。本書では、彼らがデジタルスキルと社会的スキルを武器に地域社会で自律的に活躍する「自走型人材」へと成長するための、「伴走支援(ナビゲーション)」の具体的なガイドラインを提示する。入学前の心理的ハードルを下げる出張相談やプレプログラムから、在学中のLMS(学習管理システム)やAIを活用した個別最適化された学習支援、そして卒業後の職場定着支援に至るまで、各フェーズにおいてアドバイザーが「いつ」「誰に」「どのように」関わるべきかを詳述した。現場での実践を通じ、本書が常に更新され、より良い支援の形が構築されていくことを願う。

3

第1章 伴走支援の基本スタンスとマインドセット

1-1. 目指す人材像:「自走型人材」の定義

【事業の核心】本事業が目指すゴールは、単に通信制高校生を専門学校へ入学させることではない。人口減少が進む地域社会において、彼らが「地域産業の担い手」として定着し、自分らしいキャリアを歩み続けられるよう支援することである。そのために育成すべき人材像を「自走型人材」と定義する。

(1) 「自走」の真の意味

「自走」という言葉は、しばしば「誰の助けも借りずに一人でやり抜くこと(孤立した自立)」と誤解されがちである。しかし、本事業で定義する「自走」とは、「自律的依存(Autonomy via Dependence)」の状態を指す。変化の激しい現代社会において、一人ですべての課題を解決することは不可能である。真に自走できる人材とは、困難に直面した際に、適切に「助けてほしい」と声を上げ、周囲のリソース(人、ツール、制度)を巻き込みながら、目的を達成できる人物である。

(2) 「自走型人材」を構成する3つのコンピテンシー

地域社会で活躍するために必要な要素として、以下の3つを育成目標に掲げる。

① デジタル活用力(Digital Skills):武器を持つ 単なるプログラミングや操作スキルにとどまらない。LMS(学習管理システム)やAIツールを日常的に使いこなし、業務の効率化や、時間・場所にとられない働き方を実現する力である。これは、通信制高校生が持つ「デジタル親和性」という強みを最も活かせる領域である。

② 地域エンゲージメント(Local Engagement):舞台を持つ 「なんとなく地元にいる」状態から、「地域の課題を自分事として捉え、状況への変容を促す。地域企業とのプロジェクト学習などを通じ、「自分はこの地域で役に立っている」という自己効力感を醸成し、地域社会という舞台での役割を見出させる。

③ 受援力・社会的スキル(Social Support):つながりを持つ 最も重要な要素である。自身の限界を認識し、他者と協働する力である。特に「受援力(助けを求める力)」は、孤立を防ぎ、職場での早期離職を回避するための安全装置となる。

1-2. 対象学生(非典型進学層)の特性理解と「3つの壁」

支援の第一歩は「相手を知ること」である。通信制高校等からの進学者(非典型進学層)に対する支援では、彼らが直面している構造的な課題を理解する必要がある。アンケート調査や現場の声から浮き彫りになったのは、個人の能力不足ではなく、環境要因によって生じた「3つの壁」である。

(1) 自己管理能力の壁(生活・学習リズムの維持)

【現象】

- ・ 昼夜逆転し、決まった時間に登校・ログインできない。
- ・ 課題の提出が期限直前まで滞る、あるいは手つかずになる。
- ・ 「やらなければ」と分かっているが、体が動かない。

【背景要因】通信制高校は「いつでも、どこでも学べる」自由な環境である反面、学習計画の管理が個人の裁量に強く委ねられる。ペースメーカーとなる他者の存在や、強制力のある時間割が少ない環境下では、自己管理のスキルが未熟な若者がリズムを崩すのは必然とも言える。これを「怠け」や「甘え」と断罪してはならない。彼らには「管理される経験」や「自律の手法を学ぶ機会」が不足していただけである。したがって、アドバイザーは「管理・指導」するのではなく、ペースメーカーとして伴走し、スモールステップで生活リズムを整える支援を行う必要がある。

(2) 学習習慣の壁(「学び方」の未定着)

【現象】

- ・ 分からない箇所があると、そこで思考停止し、放置してしまう。
- ・ 「質問して解決する」という行動がとれない。
- ・ レポート提出(穴埋め等)に特化しており、体系的な積み上げ学習に不慣れ。

【背景要因】自学自習を基本とするレポート学習では、即時的なフィードバックが得にくく、「分からない箇所をその場で質問して解決する」というサイクルが回りにくい。その結果、学習性無力感(どうせやっても分からない)に陥りやすい。専門学校での学びにおいては、知識の詰め込みよりも、「分からない時にどう調べるか」「誰に聞くか」「AIをどう使うか」といった、「学び方を学ぶ(Learning to Learn)」支援を最優先すべきである。LMSのログデータに基づき、「ここで止まっているね、一緒に調べようか」と具体的に介入することが求められる。

(3) 社会的スキルの壁(対人関係への不安)

【現象】

- ・ 「人との会話が苦手」「集団の中に入ると極度に疲れる」という訴え。
- ・ テキストチャットでは雄弁だが、対面や電話では言葉が出ない。
- ・ 他者の視線を過剰に気にし、失敗を恐れて行動できない。

【背景要因】全日制高校と比較して登校日数や学校行事が少ないため、集団生活の中で他者と協調したり、意見の対立を調整したりする経験値(場数)が圧倒的に不足している。アンケート結果においても、多くの学生が対人関係に強い不安を抱いていることが示されている。しかし、これは「コミュニケーション能力がない」と同義ではない。彼らはSNSやオンラインゲーム等のデジタル空間では、独自のコミュニティを築き、高度な連携をとっている場合も多い。アドバイザーの役割は、彼らの「社会性」を否定することではなく、彼らが安心して失敗できる「心理的安全性の高い場(SST/SGE等)」を提供し、デジタルの世界で培ったコミュニケーション力を、リアルな社会でも発揮できるよう「翻訳・接続」することである。

【強みの再定義:リフレミング】「3つの壁」は、見方を変えれば独自の「強み」の裏返しでもある。

- ・ 集団が苦手 → 一人の世界に没頭できる集中力がある
- ・ 対面が苦手 → テキストコミュニケーションやデジタル表現に長けている
- ・ 周囲と違う → 独自の感性や世界観を持っている

我々は、欠点を矯正するのではなく、この「強み」を地域産業のニーズ(DX推進、Webマーケティング、専門職等)とマッチングさせることを目指す。

1-3. キャリア形成アドバイザーの役割(ティーチングからナビゲーションへ)

本事業における支援の中核を担うのが「キャリア形成アドバイザー」である。従来、学校の教職員に求められてきた役割は、知識を教え導く「ティーチング(Teaching)」であった。しかし、自走型人材を育成するためには、学生の横に立ち、共に歩む「ナビゲーション(Navigating / 伴走)」へと役割を転換する必要がある。

(1) 「伴走支援」の基本構造

アドバイザーは、学生を背負って進む存在ではない。学生自身がハンドルを握り、アクセルを踏むのを、助手席でサポートする「ナビゲーター」である。

項目	従来型(ティーチャー)	本モデル(アドバイザー)
立ち位置	前に立ち、引っ張る(正対)	横に立ち、同じ方向を見る(並走)
コミュニケーション	指示、命令、指導	傾聴、問いかけ、提案
問題解決	教師が正解を与える	一緒に調べ、学生に選択させる
ゴール	知識習得、出席率維持	行動変容、社会的自立

(2) アドバイザーが担う「4つの機能」

学生の状態やフェーズに合わせ、アドバイザーは以下の4つの帽子(役割)を使い分けることが求められる。

① 学習コーチ(Learning Coach) LMSのデータ(ログイン状況、課題進捗、視聴時間)をモニタリングし、客観的な事実に基づいてフィードバックを行う。「サポートしている」と叱るのではなく、「進捗が止まっている原因」を共に分析し、学習計画の修正を支援する。

② キャリア・コンサルタント(Career Consultant) 学生の「ありたい姿」を引き出し、それを実現するためのキャリアパスを共に描く。自己理解を深めるための問いかけを行い、就職や進学といった転機における意思決定を支える。

③ コミュニティ・マネージャー(Community Manager) 学生が孤立しないよう、クラス内や学年を超えた「横のつながり」を創出する。また、SST(ソーシャルスキルトレーニング)等の手法を用い、他者と関わるための練習の場をファシリテートする。

④ 事業コンサルタント(Business Consultant) 学生と地域企業をつなぐ橋渡し役である。インターンシップやプロジェクト学習において、学生の特性を企業側に伝え(トリセツの共有)、企業側の受け入れ体制整備を助言することで、マッチングの精度を高める。

1-4. 支援に求められる「カウンセリング・マインド」

アドバイザーがどのようなスキルを持っても、その根底にある「マインドセット(姿勢)」が適切でなければ、学生の心を開くことはできない。特に、過去に大人や学校に対して不信感を抱いている学生に対しては、信頼関係(ラポール)の構築が全て支援の土台となる。ここでは、カール・ロジャーズが提唱した受容者中心療法の 3 原則をベースに、現場で求められる具体的な態度を示す。

(1) 受容(Acceptance):無条件の肯定的関心

「評価せずに、まずは受け止める」学生が「学校に行きたくない」「課題が面倒くさい」といったネガティブな発言をした際、反射的に「そんなことでは社会で通用しない」と否定・説教してはならない。まずは、「そうか、今は行きたくない気持ちなんだね」「面倒だと感じているんだね」と、その感情と言葉をありのままに受け止める(オウム返し)。「どんな自分でも、否定されずに受け入れてもらえる」という安心感(心理的安全性)があって初めて、学生は本音を語り、次のステップへ進むエネルギーを溜めることができる。

(2) 共感(Empathy):共感的理解

「相手の靴を履いてみる」アドバイザー自身の価値観や常識(「学校は行くものだ」「若いうちの苦労は買ってでもせよ」等)を脳に置き、あたかも学生自身の目を通して世界を見ているかのように、相手の感情や内面的世界を想像し、理解しようと努めること。「なぜできないのか?」と外側からジャッジするのではなく、「何がその行動を妨げているのか?」と内側の視点に立って共に感じることである。

(3) 自己一致(Congruence):純粋性

「役割の仮面を外す」アドバイザー自身が、過度に「立派な先生」を演じず、一人の人間として誠実であること。分らないことは「ごめん、先生も分からないから一緒に調べよう」と正直に伝える。また、自身の失敗談や弱みを適度に自己開示することも有効である。支援者が完全無欠でない姿を見せることで、学生は「完璧でなくていいんだ」「失敗してもいいんだ」と感じ、過度な緊張から解放される。

(4) 「Doing」から「Being」への眼差し

教育現場では、どうしても「何ができたか(Doing)」=出席、課題提出、資格取得といった成果が目向きがちである。しかし、伴走支援においては、まず「どのような状態にあるか(Being)」=安心しているか、自信を失っていないか、意欲が強いいるか、に焦点を当てるべきである。Being が整って初めて、Doing(行動)がついてく

- ・ Doing への声掛け例(従来):「レポート終わった?」「次はいつ来るの?」
- ・ Being への声掛け例(伴走):「最近、顔色が良さそうだね」「少し元気がないみたいだけど、よく来てくれたね」

(5) アドバイザー自身のセルフケア

「受容」や「共感」は、アドバイザー自身に精神的な余裕がなければ実践できない。通信制高校生の抱える課題は複雑であり、時にアドバイザー自身が抱え込み、疲弊してしまいうリスクがある(共感疲労)。アドバイザーは一人で問題を抱え込まず、チーム(他の教職員、SC、外部機関)で情報を共有し、自身のケアも大切にすること。学生に「助けを求めている」と教えるアドバイザー自身が、まず率先して「チームに助けを求める」モデルとなることが重要である。

【第 1 章チェックリスト:支援者の心構え】

支援にあたる前に、自身のスタンスを確認するためのリストである。

- ・ [] 学生の「できないこと」より「できていること(強み)」に目を向けているか。
- ・ [] 「指導」ではなく「相談」のスタンスで会話ができているか。
- ・ [] 沈黙を恐れず、学生が言葉を探す時間を待っているか。
- ・ [] 自分の価値観を押し付けたり、正論で追い詰めたりしていないか。
- ・ [] 学生の決定を尊重し、失敗する権利を認めているか。

- ・ [] 学生の課題を自分一人で解決しようと思え込んでいないか。

本マニュアルは、この基本スタンスの上に、次章以降の具体的な支援技法(ノウハウ)を積み上げていくものである。理念なき技術は無力であり、技術なき理念は空虚である。マインドとスキルの両輪で、若者の未来を支えていきたい。

第 2 章【入学前】信頼関係を築く「初期面談」プロトコル

本パートでは、通信制高校生や学び直しを目指す若者が、最初のアプローチから入学式を迎えるまでの「心理的受容プロセス」を支えるための具体的な手法を解説する。この時期の最大の目的は、「入学させること(クロージング)」ではなく、「この人(アドバイザー)なら安心して話せるという信頼(ラポール)を築くこと」にある。

2-1. 通信制高校へのアウトリーチ(出張相談)の会話術

1-1. 初期接触におけるマインドセット:動話から「理解」へ

高校内ガイダンスやオープンキャンパスにおける初期接触は、学生にとって「品定めされる場」ではなく「自分の居場所を探す場」である。アンケート調査の結果からも、多くの学生は「初対面の人とうまく話せるか」「新しい環境に馴染めるか」という強い対人不安を抱えていることが明らかになっている。アドバイザーは、学校の魅力を一方的に語る「セールスマン」になってはならない。彼らの不安の裏にある願い(変わりたい、認められたい)を聞き取る「カウンセラー」として振る舞うことが求められる。

【アドバイザーが捨てるべき 3 つの「悪い込み」】

1. ×「夢や目標を持っているはずだ」→ ○「まだ漠然としているのが普通だ」(※無理に聞き出すと、「ない」と答えることに罪悪感を抱かせてしまう)
2. ×「学校の説明を聞きたいはずだ」→ ○「安心できる相手か確かめたいはずだ」(※カリキュラムの良し悪しは以前に、「この先生は怖くないか」を見ている)
3. ×「沈黙は興味がない証拠だ」→ ○「沈黙は言葉を運んでいる時間だ」(※待つことができる大人の存在が、信頼を生む)

1-2. 事前準備と環境設定

出張相談においては、学生が話しやすい環境を作ることが会話の中身以上に重要である。

- ・ 座席配置: 正対(真正面)は対立の構図となり緊張を生む。可能であれば L 字型(90 度)に座るか、資料を間に挟んで視線を分散させる。
- ・ 自己開示のツール: 名刺だけでなく、「私の推し」や「趣味」が分かる自己紹介カードを用意する。「先生」という役割の前に「一人の人間」であることを示す。

1-3. ラポール(信頼関係)形成の 3 ステップ

いきなり核心(志望動機、学科選択)に触れるのは、信頼関係ができていない段階では「尋問」と受け取られかねない。以下のステップで、徐々に心の距離を縮める。

Step 1:ペーシング(同調) 相手の話すスピード、声のトーン、姿勢に合わせる。相手がゆっくり小声で話すなら、こちらもトーンを落とす。これにより「自分と波長が合う」という無意識の安心感を与える。また、相手が使った言葉(オウム返し)を使うことで「否定されていない」感覚を醸成する。

Step 2:Yes-Set(イエス・セット) 「今日は暑いね」「ここまで来るの大変だったでしょう」「通信制のレポート、今月分はもう終わった?」など、相手が「はい(Yes)」または「うなずき」で反応できる質問を 3 回続ける。肯定的な反応を繰り返すことで、心理的な壁(警戒心)を低くする技法である。「いいえ」と言わせる質問(例:「進路決まった?」)は、この段階では避ける。

Step 3:興味関心へのブリッジ 「勉強」「就職」という重い言葉を使わず、日常生活の中にある「好きなこと」から会話を広げ、その延長線上に「学び」があることを自然に示唆する。

1-4. 会話の糸口を見つける「観察(キャリブレーション)」

学生の持ち物やスマートフォンの画面は、雄弁に彼らの興味を物語っている。

- ・ カバンのキーホルダー: アニメ、ゲーム、アイドルのグッズはないか?
- ・ スマホの待ち受け: ペット、風景、イラストなど、何が表示されているか?
- ・ 服装・髪型: こだわりがあるポイントはないか?

「そのキーホルダー、○○のキャラだね? 先生も知ってるよ」という一言が、最強のアイスブレイクとなる。

1-5. 【トークスクリプト詳細】タイプ別アプローチ

現場でも遭遇する「やりたいことが分からない」「自分に自信がない」学生に対し、どう声をかけ、どう専門学校の学びへ接続するか。

Case A:進路未定・趣味はゲーム/動画の学生

【心理背景】多くの学生は、「消費(遊ぶこと)」と「生産(仕事にすること)」がつかない。「好きなことを仕事にする」という発想がリアリティを持っていない。

【野路】「ただ遊んでいる」のではなく、「何かを生み出す種を持っている」と承認し、視点を転換させる。

AD:「進路のこと、まだはっきり決まらずにいても全然大丈夫だよ。ちなみに、学校がない日とか、家でリラックスしている時に一番長く見ているものって何? YouTube? それともゲームかな?」生徒:「……まあ、動画とか、あとマイクラ(Minecraft)はずっとやってます」AD:「マイクラか! あれは奥が深いよね。ただ冒険するのと、建築と回路組むの、どっちが好き?」生徒:「建築ですね。有名な建物を再現したり」AD:「すごいじゃないか。それはもう立派な『空間デザイン』の才能だよ。ただ遊んでいるように見えて、君は頭の中で設計図を描いているんだ」生徒:「そんな大げさなものじゃないですけど…」AD:「いや、その『好き』は才能の種だよ。うちの学校には、その建築やデザインを PC で形にする授業があるんだけど、ちょっと画面だけ見てみない? 君が普段やっていることの延長線上にあるんだ」

Case B: 自信欠如・勉強が苦手な学生

【心理背景】過去の不登校経験や成績不振から、学習性無力感(どうせやっても無駄)に陥っている。「また途中で辞めて迷惑をかけるのではないか」という予期不安が強い。

【野路】「できないこと」ではなく「できていること(事実)」に焦点を当て、リフレーミング(意味の書き換え)を行う。

生徒:「自分、中学からあまり学校行けてないし、専門学校とか入っても、どうせ続かないと思います……」AD:「そっか、今までしんどい思いをしてきたんだね。話してくれてありがとう。でも、今は通信制高校のレポートは出しているんでしょう?」生徒:「まあ、期限ギリギリですけど、なんとか」AD:「ギリギリでも出しているのが偉いよ。それは誰かに強制されたんじゃない。『自分のペースでやり切る力』がある証拠だ」生徒:「自分のペース……?」AD:「そう。全日制のように毎日朝から晩まで拘束されるのが苦手なだけかもしれない。専門学校には、オンデマンド授業も使いながら、君のペースで単位を取れる仕組みがあるんだ。最初から完璧じゃなくていい。まずは週3回、好きな授業だけ出る」ことから始めてみない?」

1-6. SNS と 2 次元コードを活用した「心理的負担の少ない誘導

対面での会話が盛り上がったとしても、その場での「願書請求」や「電話問い合わせ」は、通信制高校生にとってハードルが高いアクションである。関係性を維持する動線を、彼らの日常ツールの中に組み込む。

【ステップ1】:アナログからデジタルへ」紙のパンフレットは、帰宅後に捨てられる可能性が高い。その場でデジタルな接点を持つことを優先する。

・トーク例:「今日の話の続きで、先輩が実際に作った作品動画があるんだ。URL 送るから、公式 LINE に登録だけしておいて。あとで暇な時に見てみて」

- ・ × NG 対応(一般論での励まし):「大丈夫だよ。専門学校に入れば生活リズムも整うし、みんな就職できているから心配しなくていいよ」
- ・ ○ OK 対応(個別事情への寄り添い): AD:「そっか、毎朝決まった時間に起きるかな不安なんだね(受容)。実は、今の IT 業界って『リモートワーク』や『フレックス』といって、時間や場所を自由に選べる働き方が増えているんだ。だから、無理に朝型人間に変わろうとしないでもいい。今の君のスタイルのまま生活できる場所を、一緒に探してみない?」

Scene 3: オンライン相談でのアイスブレイク

・ × NG 対応(事務的な開始):「それは時間になりましたので面談を始めます。まず志望動機を教えてください」

・ ○ OK 対応(環境への言及): AD:「こんにちは。接続ありがとうございます。……お、背景に飾ってあるフィギュア、すごいね! それ君が集めたの?」学生:「あ、はい。これ実は……」AD:「いいねえ。先生もそういうの大好きだよ。今日はそんな感じで、リラックスして話そうか」

2-2. プレプログラムと LMS 接続(空白期間の支援)

2-1. 「空白期間(グレイゾーン)」のリスク管理

秋から冬にかけて合格が出た後、翌年 4 月の入学までの数ヶ月間(空白期間)は、支援の空白地帯となりやすい。この時期、学生は以下のような不安定な心理状態に置かれる。

- ・ 所属感の喪失: 高校の行事も減り、新しい学校にもまだ所属していないため、社会的な孤立感を深めやすい。
 - ・ マリッジ・ブルー現象(入学前ブルー):「本当にこの学校でよかったのか」「やっているのか」「友人はできるか」という不安が増大し、入学辞退や 4 月初期からの不登校につながるリスクがある。
- この期間を単なる「待ち時間」にせず、学校との緩やかなつながり(エンゲージメント)を維持するための仕掛けがプレプログラム(入学前教育)である。

2-2. プレプログラム「進学準備クラス」の設計指針

「勉強させる」ことよりも「楽しませる」「安心させる」ことを最優先にする。LMS (Google Classroom 等)に「進学準備クラス」を開設し、ゲーム感覚で取り組める「クエスト(課題)」を配信する。

【クエスト設計の 3 原則】

・ 心理効果(フット・イン・ザ・ドア):「願書を出せ」という大きな要求(ハードル高)ではなく、「スマホで登録」という小さな要求(ハードル低)から入ること、承諾率を高める。

【ステップ2: スタンプ一つでの意思表示】LINE 登録後、文章を送らせるのではなく、スタンプでの応答を促す。

・ 運用ルール: 登録御礼メッセージには、「登録ありがとうございます! 今日の担当の〇〇です。確認のために、好きなスタンプを 1 個送ってくれる?」と添える。

・ メリット: スタンプが返ってくれば、そこから個別のやり取りが可能になる。「文章を考えるのが面倒/怖い」という障壁を取り除く。

【出張相談・自己評価チェックリスト】

アドバイザーが自身の対応を振り返るためのリスト。

- ・ [] 学生の話を追いつき、最後まで聴いたか(傾聴)。
- ・ [] 学生のネガティブな発言(「無理」「だるい」)を否定せず受け止めたか(受容)。
- ・ [] 「学校の説明」よりも「学生の興味」に関する話題に多くの時間を費やしたか。
- ・ [] 学生の「強み」や「できていること」を見つけ、言葉にして伝えたか(承認)。
- ・ [] 次のアクション(SNS 登録、動画視聴など)を具体的に、かつハードルを下げて提案できたか。
- ・ [] 別れ際に「また会いたい」「応援している」というメッセージを伝えたか。

■ コラム: 専門用語を排し「ジブango 化」を促す対話スクリプト集

高校生、特に進路に迷いがある学生に対し、いきなり学校のカリキュラムや「DX 人材」「フルスタック」といった業界用語を並べ立てても、彼らの心には響きません。むしろ「自分には関係ない」「難しそう」と心のシャッターを下ろされてしまうリスクがあります。重要なのは、彼らの日常や興味関心(趣味)を入り口とし、そこから学びへと接続する「翻訳」の技術です。以下に、アドバイザーが現場で使い分けられるべき会話を示します。

Scene 1: 興味関心から「学び」への接続

・ × NG 対応(学校説明型):「本校の IT コースでは、Python と Java を学び、基本情報技術者試験の合格を目指します。就職率も高いですよ」

・ ○ OK 対応(興味関心アプローチ): AD:「普段、家では何をしている時が一番楽しい? ……お、ゲーム動画を見るのが好きなんだ。特定の配信者とかいるの?」学生:「〇〇さんの編集が面白くて……」AD:「へえ、編集に目が行くんだね! 実は君が見ているその編集技術、うちの『動画クリエイター』の授業』でやっていると全く同じなんだよ。授業というより、推しの技術を盗む感覚に近いかもね」

Scene 2: 将来への不安(働けるか自信がない)への対応

1. Low Hurdle(低ハードル): 学力不問で、スマホ一つで 5 分以内に完了できるもの。
2. Interactive(双方向性): 提出に対して必ずフィードバック(コメントやいいね)があるもの。
3. Social(社会的接触): 緩やかに他者(アドバイザーや同期)の存在を感じられるもの。

2-3. 月別・クエスト内容の実践例

入学までのモチベーション曲線に合わせ、段階的な課題を設定する。

時 期	クエスト名	内容・目的	アドバイザーの介入(フィードバック)
12 月	ログイン・ボーナス	【目的】LMS 接続確認 LMS にログインし、「自己紹介カード」を提出する。カードは選択式(好きな動画、推し等)で記述負担を下げる。	【即時承認】 ログインできたこと自体を称賛す 「カードは選択式(好きな動画、推し等)で記述負担を下 これで準備の半分は完了だね」
1 月	未来探索クエスト	【目的】動機付けの維持 業界紹介のショート動画(3 分)を見て、「面白かった点」を 1 行だけコメントする。正解はないことを強調する。	【共感・深掘り】 「そこに着目するのはセンスいいね!」とコメントを返す。未提出者には「動画見れた?」と軽く連絡。
2 月	AI チャット体験	【目的】SOS 出しの練習 導入予定の AI カウンセラーに質問(例:「入学式の服装は?」)を投げかけ、回答のスクショを提出する。	【機能周知】 「困ったときは、夜中でも AI に聞けるんだよ」と伝え、相談のハードルを下げる。
3 月	先輩トライブ(Live)	【目的】リアリティ・ショックの軽減 在校生とのオンライン座談会。顔出し無し、チャットでのみの参加 OK とする。「先輩も最初は不安だった」話を聞く。	【場づくり】 アドバイザーが MC となり、新入生の質問(チャット)を拾って先輩に振る。「今の質問、すごく大事だね」と肯定する。

【運用上の注意】

- ・ 強制しない:「やらなくても入学は取り消されない」ことを明示し、プレッシャーを与えない。
- ・ 未提出者へのケア: 未提出者は「忘れていた」のではなく「ログインできない」「やり方が分からない」等のトラブルを抱えている可能性が高い。此輩ではなく「技術的なサポート」として連絡を入れる。

2-3. LMS 接続支援とオンライン面談手順

3-1. デジタル接続という「最初のハードル」

通信制高校生は「デジタルネイティブ」と言われるが、スマホの操作には長けていても、PCでのツール操作やビジネスツールの利用に慣れていないとは限らない。「ログインできない」というつまづきが、「やっぱり自分はダメだ」という自己否定に直結するため、手厚い導入支援が必要である。

3-2. 【マニュアル】オンライン接続サポート手順書

遠隔地に住む学生や、対面での面談に抵抗がある学生に対し、Zoom や Teams を用いた接続サポートを行う際の手順である。このプロセス自体が、最初のアイスブレイクとなる。

Phase 1:環境設定と心理的安全性(開始前～開始直後)

・カメラオフの明示: 事前の案内メールで「カメラはオフで大丈夫です。パジャマでも、寝癖がついていても参加できます」と明記する。これにより、面談予約のハードルが劇的に下がる。

- ・画面共有の依頼: 開始後、「操作方法を案内したいから、もしできたら画面共有ボタンを押してくれる?」と依頼する。

・※アドバイザーは、相手のデスクトップ画面(壁紙やアイコン)を批判しないこと。
むしろ「その壁紙のアニメ、先生も知ってるよ」とアイスブレイクに活用する。

Phase 2:LMS ログインの実践(操作支援)

・ 平易な言葉で:「ブラウザを開いて」等の専門用語が通じない場合は、「インターネットを見る時のアイコンをクリックして」など、相手の画面を見ながら具体的に指示する。

- ・オーバー・1アクション：無事にクラスルームの画面が表示されたら、拍手をして大げさに喜ぶ。「おめでとう！これで4月からの授業はバッチリだね。実はこれが一番難しいハードルだったんだよ」と、「成功体験」として強烈に印象づける。この「できた！」という感覚が、入学後の学習意欲を支える。

Phase 3:通知設定の確認

- ・LMS の通知が、学生が普段使うメールアドレスやスマホアプリに届くように設定する。これにより、入学後の「連絡見落とし」を防ぐ。

3-3. トラブルシューティング(早期アラート対応)

プレプログラム期間中に、LMS 上で「動きがない」学生への対応フロー。

・アラート基準: アカウント発行後、2週間以上ログイン形跡がない場合、または課題が未提出の場合。

- ・ 対応フロー:

1. メール/LINE 連絡(心配の表明):「〇〇さん、こんにちは。最近システムのエラー報告があって心配で連絡したよ。ログインで困ったり、ID が分からなくなったりしてない？」

- ※ポイント:「なぜやらないのか」と責めるのではなく、「システムトラブルかもしれない」という体感をとることで、学生が言い訳をしやすくし、返信のハードルを下げる。
2. 電話フォロー: 反応がない場合、電話を入れる。本人が出ない場合は保護者に「PC 環境の確認」として連絡する。
3. 個別対応: IPC が稼働している「ネット環境がない」等の物理的課題が判明した場合、学校の PC 室の開放や、郵送での課題対応など、代替案を提示する。

3-4. 入学前「Readiness(準備性)」チェックリスト

入学式を迎える前に、アドバイザーが各学生の状態を確認し、チームで共有するためのリスト。このリストに埋まっていない学生は、4月以降の「要注意学生」として引き継ぐ。

【学生名： 】

- ・【 】 開係性：アドバイザーの顔と名前を認知しているか？
- ・【 】 連絡手段：困った時の連絡先(LINE、メール、電話)を知っており、実顔に使えるか？
- ・【 】 ICTスキル：LMSに自力でログインし、課題を確認できるか？
- ・【 】 反応：プレプログラム中の課題に対し、何らかのリアクション(提出・質問・スタンブ)があったか？
- ・【 】 生活リズム：課題へのアクセス時間が極端な深夜(2時～5時など)に偏っていないか？
- ・【 】 心理状態：「入学するのが楽しみ」「なんとかなりそう」というポジティブな感情(Expectation)を持っているか？

このチェックリストで「未達成(No)」の項目が多い学生は、入学直後の「五月病」や早期離脱のリスクが高い「要支援学生」としてマークし、4月のオリエンテーション時に重点的に対応を行う。

■ アドバイザー用:入学前支援 完了チェックリスト

第2章で解説した入学前支援(プレプログラム・LMS 接続)が機能しているかを確認するためのチェックリストです。入学式を迎える前に、担当アドバイザーは担当学生一人ひとりについて以下の項目を確認してください。すべての項目にチェックが入る状態が、「入学後のドロップアウト・リスクが最小化された状態」です。

16

17

1. 関係構築(ラポール)の確認

- 学生の「一番の不安(早起き、人間関係、勉強など)」を具体的に把握できているか？
- 学生の「好きなこと(趣味・推し)」を知り、それを話題に雑談ができているか？
- 学生はアドバイザーに対し、敬語を使わずとも自分の言葉で話しているか？(心理的安全性の確保)

2. ICT 環境・LMS 接続の確認

- 自宅の PC スペック・インターネット回線は、授業受講に支障がないか確認済みか？
- LMS(学習管理システム)への初回ログインテストは完了しているか？
- 連絡ツール(チャット等)で、学生からスタンプやメッセージが返ってくる状態にあるか？

3. キャリア意識・意欲の確認

- ・ プレプログラム(体験授業や事前課題)に一度でも参加・着手できたか？
- ・ 「入学後にこれをやってみたい」という、小さな目標(スモールステップ)を一つでも言語化できているか？
- ・ 保護者とも連絡が取れ、家庭内でのサポート体制(声かけ等)について合意できているか？

【アドバイザーへの申し送り事項】 もし未達の項目がある場合は、無理に全てを埋めようとせず、「何ができていないか」を第3章の「初期面談」に引き継いでください。重要なのは、学生の状態を正確に把握して入学を迎えることです。

第3章【在学中支援①】自己管理能力と学習習慣を身につけ自律を促す「週次・月次キャリア面談」

本章では、入学後の学生が専門学校での学びに適応し、最終的な就職(社会的自立)に向けて歩みを進めるための、日常的な支援プロセスを詳述する。ここのキーワードは「個別化支援」である。学生の状況は一ひとりで異なり、また時期によっても変化する。一律の指導ではなく、LMS(学習管理システム)のデータを活用して個々のコンディションを把握し、適切なタイミングで介入する「データドリブンな伴走支援」の実践方法を解説する。

3-1. キャリア形成アドバイザーによる「伴走」の基本構造

(1)4つの役割定義:多角的な視点を持つ

キャリア形成アドバイザー(以下、アドバイザー)は、単なる「話し相手」でもなければ、一方的に教える「教師」でもない。学生の自律を促すために、以下の4つの機能を状況に応じて使い分ける「マルチ・ロール(多重役割)」が求められる。

役割(Role)	機能と目的
① 事業コンサルタント (ライフマネジメント)	学生を「自分株式会社」の経営者(オーナー)と見立て、その事業継続(在学・卒業)に必要な資金基盤(資金、健康、時間管理)の整備を支援する。
② キャリアコンサルタント (ゴール・セッティング)	職業的意義の発見を促す。「なぜ学ぶのか」「将来どうなりたいか」という問いを通じて、自己理解と仕事理解を深め、学習への内発的動機づけを高める。
③ 学習コーチ(ラーニング・パートナー)	LMSのデータを活用し、学習進捗をモニタリングする。ディレーティング(教訓指導)を行わず、いつやるか?という道めるか?という計画立案と、習慣化のペースメイクを担う。
④ コミュニティマネージャー(コネクション・メイキング)	学生が孤立しないよう、クラスメートや先輩、あるいは地域企業との「接点」をつくり出す。共通の興味を持つ学生を繋ぎ合わせるなど、横のつながりを意図的に創出する。

(2)実践的カウンセリング・マインドの徹底

アドバイザーが上記の役割を果たす上で、その土台となるのが「受容・傾聴・共感」の姿勢である。特に、生活リズムが乱れがちな学生に対し、頭ごなしに指導・叱責することは、信頼関係を損なうだけで逆効果となる。現場では、以下のセルフチェックを行い、常にカウンセリング・マインドに立ち返る必要がある。

【面談前のセルフチェック・リスト】

- 受容(Acceptance):「遅刻=悪」と即座にジャッジせず、「今は起きられない事情がある」という現状を、まずはそのまま受け入れているか？

18

19

- **傾聴(Listening)**: 学生が言葉に詰まっても、先回りして答えを誘導せず、沈黙に耐えて待つ姿勢ができるか？
- **共感(Empathy)**: 「甘えだ」と突き放すのではなく、「不安で動けないその気持ち」を想像し、寄り添おうとしているか？

アドバイザーが「評価者」ではなく「絶対的な味方(安全基地)」であると学生が確信したとき、初めて本当の課題(家庭の問題、自信のなさ等)が語られ、根本的な解決への道が開かれる。

3-2. 面談の運用サイクル(週次・月次)

支援の密度と効率を両立させるため、面談を「週次面談(クイックチェック)」と「月次面談(ディープコンサル)」の2層構造で運用する。

(1)週次面談(クイックチェック):生活リズムのペースメイク

- ・ **頻度・時間**: 週 1 回、5 分～10 分程度(対面またはオンライン)
- ・ **目的**: 学習のつまづきや生活リズムの乱れを早期に発見し、翌週への短期目標を立てる。
- ・ **確認内容**:
 - 前週の生活リズム(起床時間、睡眠時間)の確認。
 - LMS のログイン状況と課題進捗の事実確認。
 - 「今週のワフ・ゴール(一つだけやること)」の設定。

【対話のコツ:スモールステップ支援】 自己管理が苦手な学生に対し、いきなり大きな目標を課してはならない。「毎日 9 時に起きる」ができなくても、「週に 1 回、午前中に PC を開く」など、必ず達成できる小さな目標(スモールステップ)を設定し、達成体験を積ませることが重要である。

(2)月次面談(ディープコンサル):キャリア自律の深化

- ・ **頻度・時間**: 月 1 回、30 分～50 分程度(原則対面)
- ・ **目的**: 日々の学習が将来の目標とどうつながっているかを確認し、意味づけを行う(モチベーションの再燃)。
- ・ **確認内容**:
 - **自己案の振り返り**: 1ヶ月前と比べて「できるようになったこと」の棚卸し。

- **スキルの習得確認**: 将来の地域定着に向けて必要な「基本的な対人力(挨拶、報告等)」と「デジタルスキル」の習得状況を確認する。
- **中長期目標の修正**: 入学時の目標に変更がないか、新たな興味があるか、進んでいるかの確認。

3-3. 振り返りシートを活用した双方向対話

(1)「交換日記」的アプローチによる定点観測

面談以外の時間も学生とのつながりを維持するために、LMS 上に実装された「振り返りシート(リフレクション・ログ)」を活用する。学生は毎日の授業終了後、または週の終わりに、その日の学習内容や感情、気づきを入力する。これは学習記録であると同時に、アドバイザーへの「SOS 発信ツール」としての機能を持ち、「交換日記」のような気軽さで運用する。

(2)フィードバックによる「承認」

学生が記入したシートに対し、アドバイザーは必ずフィードバック(コメント返し)を行う。「よく頑張ったね」「その視点は面白いね」といった承認の言葉を返すことで、学生の中に「自分は見守られている」という安心感を醸成する。この積み重ねが、面談時の深い自己開示につながる。

3-4. 早期アラート対応

(1)データ起点の介入基準

「なんとなく元気がない」といった主観だけでなく、LMS に蓄積される客観的な学習行動データ(ログ)に基づいて、事例が見られる学生を特定する。

【アラート発動の基準例】

- ・ LMS へのログインが「3 日間(72 時間)」以上ない。
- ・ 課題の未提出率が基準を超えた。
- ・ 動画教材の視聴完了率が著しく低い。

20

21

(2)段階的介入フロー

アラートを検知した際は、以下のステップで個別面談へと誘導する。

1. **システム通知・チャット**: まず、「ログインがないんだけど、PC の不具合かな？」と、システムトラブルや環境要因を心配するメッセージを送る。学生に「サポートしていると責められた」と感じさせない配慮が必要である。
2. **電話連絡・個別面談の実施**: 反応がない場合、電話で状況を確認し、必要に応じて臨時面談を設定する。面談では「なぜやらないのか」を問いただすのではなく、学習を阻害している要因(体調、バイト、悩み等)と一緒に整理し、リストアップの方法を検討する。

3-5. 具体的なケース(事例)への対応方法

データ活用や面談の枠組みが整っていても、実際に学生と対面した際、どのような言葉かけられるかが支援の成否を分ける。ここでは、現場で頻発する困難なケースについて、アドバイザーが陥りやすい「NG 対応」と、カウンセリング・マインド(受容・傾聴・共感)に基づいた「OK 対応(スクリプト)」を提示する。

Case 1:LMS の学習データが停滞しているが、言い訳をする学生

【状況】 LMS のアラートに基づき面談を設定したが、学生は「バイトが忙しかった」「PC の調子が悪かった」など、外部要因への言い訳(防衛機制)を繰り返している。

- ・ × **NG 対応(正論での論破)**: 「でも、データを見ると深夜に動画サイトにはアクセスしているよね？ バイトのせいにするのは良くないよ。時間は作るものだ」

解説: 図星を突かれると、学生はさらに心を閉ざし、嘘を重ねるようになる。言い訳は「怒られたくない」という SOS の裏返しである。

- ・ ○ **OK 対応(受容とリセット)**: AD: 「そうか、バイトが忙しくて PC も調子が悪かったんだね。それは大変だったね(言い分を一旦受容)。……実は先生も、忙しいとつい後回しにしようことあるから気持ちは分かるよ(自己開示)。ただ、このままだと単位認定が厳しくなっちゃうから、今の状況を「リセット」する方法と一緒に考えよう。全部やるのは無理だから、今日この場で「動画を 1

本だけ見る」か、『来週のスケジュールを立てる』か、どちらならできそうかな？(二者択一での提案)」

解説: 過去の未実施を責めるのではなく、「今ここからどうするか」という未来志向に切り替える。選択肢を与えることで、学生に自己決定権を持たせる。

Case 2:面談に来てでも「特にないです」と口数が少ない学生

【状況】 呼び出しには応じるものの、質問に対して「まい」「別に」「普通」などの単語しか返ってこず、対話が深まらない。

- ・ × **NG 対応(尋問・誘導)**: 「何かあるでしょ？ 困っていることは？ 将来どうしたいの？ ……黙ってちゃ分からないよ」

解説: 矢継ぎ早の質問は「尋問」と感じられ、圧迫感を与える。沈黙を恐れて喋りすぎるのはアドバイザーの不安の表れである。

- ・ ○ **OK 対応(並行作業と沈黙の共有)**: AD: 「そっか、急に聞かれてもバツとは出てこないよね(代弁)。(資料に目を落とし、少し沈黙する)。……じゃあ今日は無理に話さなくていいから、一緒に LMS の画面だけ確認しようか。あ、この前出したレポートのここ、面白い視点だね(第三の対象への言及)。先生は君が元気な顔を見せてくれただけで十分だよ」

解説: 正対して目を見るのではなく、PC 画面や資料など「第三の対象」を並んで見る(L 字の立ち位置)ことで緊張を和らげる。「話さなくてもここにいていい」という許可を与えることが、次の来談につながる。

Case 3:「自分には無理だ」と自信を喪失している学生

【状況】 学習の遅れや就職活動への不安から、「どうせ自分なんて就職できない」「辞めたい」といったネガティブな発言が増えている。

- ・ × **NG 対応(安易な励まし)**: 「そんなことはないよ！ 君ならできるよ！ ここで諦めたらもったいない、頑張ろう！」

解説: 根拠のない「頑張れ」は、すでに頑張りがれている学生にとって追い打ちにしかない。

22

23

- ・ O OK 対応(リフレーミングと事実の承認): AD:「そうか、今は諦めたいくらい辛い気持ちなんだね(感情の反射)」。でも、自分ではできないって悩むのは、それだけ真剣に将来を考えている証拠だよ。どうでもいいと思っている人は、そもそも悩まないからね(リフレーミング)。それに、自信がないと言いなから、今日こうして相談に来てくれたじゃないか。それは『助けを求める力(受援力)』があるってことだ。社会に出たら一番大事なスキルだよ(行動の承認)」

解説: ネガティブな感情を「真剣さの表れ」として肯定的な意味に変換(リフレーミング)する。また、相談に来たという事実自体をスキルとして評価し、自己効力感を底上げする。

3-6. SST/SGE を取り入れたグループ面談

1 対 1 の面談で信頼関係ができれば、次は「学生同士の横のつながり」を作るフェーズへ移行する。ここでは、社会的スキルを育むための SST(Social Skills Training:社会生活技能訓練)と、他者との交流を通じて自己理解を深める SGE(Structured Group Encounter:構成的グループエンカウンター)の要素を取り入れたファシリテーション技術を解説する。

(1)個別から集団へ:ブリッジング(橋渡し)の技術

対人不安のある学生をいきなりグループに入れるのはリスクがある。アドバイザーは「触媒」として機能する必要がある。

- ・ 事前打診(根回し):「今度、〇〇さんと同じゲームが好きな学生と少し話す時間を作るんだけど、どうかな? 先生も一緒にいるから安心して」と事前に承諾を得る。
- ・ 共通項の提示: グループの冒頭で、「A 君も B 君も、実は高校時代は通信制だったんだよ」「二人ともイラストを描くのが趣味なんだ」と、アドバイザーが共通点を紹介し、仲間意識の芽を作る。

(2)安心して話し合える「場のルール」作り(SGE の視点)

グループワーク(SGE)において最も重要なのは、「何を言っても否定されない」という心理的安全性の確保である。開始前に必ず以下の「グラドルール」を共有し、合意形成を図る。

【グループ面談のグラドルール例】

1. 否定しない(受容): 他人の意見に「それは違う」と言わず、「そういう考えもあるね」と受け止める。
2. パスの権利(自由): 言いたくないことは「パス」と言ってよい。無理に話さなくていい。
3. 秘密厳守(守秘): ここで聞いた個人的な話は、外では話さない。

(3)社会的スキルを育む実践トレーニング(SST の視点)

単なるおしゃべりで終わらず、社会に出た時に役立つスキルを、ロールプレイングを通じて練習(リハーサル)する場にする。

- ・ テーマ例:「上手な断り方」
 - 場面設定: 友達から気の進まない遊びに誘われた時、どう断る?
 - ロールプレイング: 学生同士でペアになり、実際に声に出してみる。
 - フィードバック: アドバイザーが「今の『誘ってくれてありがとう、でも今日は用事があるから』という言い方は、相手を尊重していてすごく良かったよ」と具体的に褒める。これにより、「人との距離感の取り方」を知識としてだけでなく、体感として習得させる。

3-7. AI カウンセラーとのハイブリッド・サポート

本事業では、人間による伴走支援を補完するツールとして「AI カウンセラー(チャットボット)」を導入する。重要なのは、「AI は教職員による対面支援を代替するものではない」という基本認識である。AI はあくまで、学生が抱える「相談したいが、誰に、いつ相談すればよいかわからない」という初期段階の不安やためらいを受け止めるための「入口(ゲートウェイ)」であり、最終的には人間による支援につなげるための補助的ツールとして位置づけられる。

本節では、1 年目における AI の導入目的、役割分担、リスク管理、および将来的な実装ロードマップについて規定する。

(1)導入の目的:伴走支援への「入口」としての機能

多くの学生は、悩みが深刻化する前段階において、以下のような心理的障壁(メンタルブロック)を抱えている。

- ・ 「こんな些細なことを先生に聞いてもいいのだろうか」
- ・ 「夜中に急に不安になったが、迷惑になるので誰にも連絡できない」
- ・ 「自分が何に悩んでいるのか、うまく言葉にできない」

AI カウンセラー導入の最大の目的は、これらの障壁を取り払い、「24 時間いつでも、誰にも気を使わずに吐き出せる場(壁打ち相手)」を提供することにある。無機質な AI だからこそ話せる本音を受け止め、孤立を防ぐセーフティネットの第一層として機能させる。

(2)人と AI の役割分担(機能の整理)

AI と人間(アドバイザー)が得意とする領域は明確に異なる。現場では以下の表に基づき、学生に対しても「使い分け」を指導すること。

区分	AI カウンセラーの担当領域(入口・初対応)	アドバイザー(人)の担当領域(解決・環境調整)
強み	即時性・匿名性・非評価性(待たせない、怒らない、噂にならない)	共感性・文脈理解・交渉力(表情を読む、複雑な事情を汲む、介入する)
時間帯	深夜、早朝、休日(24 時間 365 日)	平日日中(原則として予約制)
相談内容	・ガス抜き(愚痴の吐き出し) ・制度照会(奨学金や履修の FAQ) ・思考の整理(エントリースートの下書き等)	・意思決定支援(進路の最終判断) ・環境調整(学校・企業・家庭への働きかけ) ・情緒的安定(深い共感によるラポール形成)
連携	会話ログを要約し、支援者に引き継ぐ	AI からの情報を基に、面談で深掘りする

(3)運用のリスク管理と倫理規定(利用の限界)

AI は発展途上の技術であり、万能ではない。運用にあたっては、以下のリスクと倫理規定を学生および教職員間で共有し、安全性を担保しなければならない。

① ハルシネーション(もっともらしい嘘)への注意 生成 AI は、事実と異なる情報を回答する可能性がある。特に「履修条件」や「法的判断」に関わる回答については、必ず

「詳細は事務局やアドバイザーに確認する」よう、システム側で注釈を表示させる運用とする。

② 緊急時の介入フロー(生命の安全保障) AI との対話は原則としてプライバシーが守られるが、「自傷・他害の予兆」が見られた場合に限り、守秘義務の例外として緊急介入を行う。

- ・ アラート検知ワード: 「死にたい」「消えたい」「殺す」等の文言を検知した場合。
- ・ 対応フロー: システムが即座に管理者にアラートメールを送信(レベル 3 対応)し、アドバイザーが本人へ安否確認の連絡を入れる。

③ 個人情報の保護(本事業のガイドライン) YIC 学院の定める情報セキュリティ基準における個人情報の取扱いに基づき、AI に入力された相談データ(氏名や悩み)が、外部の AI モデルの学習データとして再利用されない設定(オプトアウト)を施したシステムを採用する。

(4)段階的な実装ロードマップ(1 年目～3 年目)

本事業における AI 活用は、単年度で完成するものではなく、データの蓄積とともに段階的に高度化を目指す。

【1 年目:導入・蓄積期】(現在)

- ・ 目標: 学生に「困ったら AI を聞く」という習慣を定着させる。
- ・ 機能: 基本的なチャットボット機能、FAQ 応答、緊急アラートの実装。
- ・ 運用: 利用率の向上と、安全な運用ルール(リスク管理)の徹底に主眼を置く。

【2 年目:個別化・精度向上期】(予定)

- ・ 目標: 学生ごとの特性に合わせた応答を実現する。
- ・ 機能: LMS(学習管理システム)のデータと一部連携し、学生の属性(学科・学年)に応じた回答精度を向上させる。
 - 例: 課題未提出の学生に対し、AI 側から「最近忙しい? 何か手伝おうか?」と話しかけるプッシュ型支援のテスト運用。

【3 年目:自律支援・予兆検知期】(予定)

- ・ 目標: AI がアドバイザーの「助手」として高度に機能する。

- 機能: 過去の膨大な相談ログから、退学や不調の予測パターンを AI が解析。「この学生に声をかけた方がよい」とアドバイザーにリCOMMENDする機能を実装し、チーム全体での予防的支援体制を確立する。

付録:実践ツールキット(運用フォーマット・スクリプト集)

本セクションは、第 3 章で解説した「自律支援」「学習習慣形成」の理論を、現場のアドバイザーが明日から迷わず実践するための「すぐに使える帳票・台本・Q&A」である。各ツールは本文の該当セクションと連動しているため、目的や背景を再確認する際は参照元を確認すること。

1. 【A】そのまま使える面談・管理シート

【シート 1】週次面談シート(Quick Check Sheet)

(参照:3-2. 面談の運用サイクル「週次面談」)

- 目的: 学習のつまずきや生活リズムの乱れを早期発見し、「スモールステップ」な目標を設定して自己効力を高める。
- 運用: 毎週 10 分～15 分程度。原則として学生本人が記入し、アドバイザーが承認する。

■ 週次面談シート(Week: 月_日 ~ 月_日)

学生氏名: _____ 担当 AD: _____

1. 今週のコンディションチェック(該当するものにチェック)

- 体調: ☐ 絶好調 ☐ 普通 ☐ 眠い/だるい ☐ 悪い(具体的に: _____)
- 気分: ☐ やる気あり ☐ 普通 ☐ 不安がある ☐ 落ち込み気味
- 睡眠: ☐ よく眠れた ☐ 不規則だった(昼夜逆転気味)

28

2. 今週の振り返り(Good & More)

項目	内容(些細なことでも OK)
Good(できたこと、頑張ったこと)	(例:LMS にログインした、動画を 1 本見た、朝起きた)
More(うまくいかなかったこと)	(例:課題が終わらなかった、バイトで疲れて寝てしまった)

3. 来週のスモールステップ(目標設定) ※「絶対に達成できる小さな約束」を書くこと。

- 学習面: _____ (例:動画編集の Chapter3 まで終わらせる)
- 生活面: _____ (例:午前 10 時までに起きる)

4. アドバイザーからのコメント (ここに対話で出た承認の言葉や、次週へのエールを記入する) _____

【シート 2】月次振り返りシート(Deep Reflection Sheet)

(参照:3-2. 面談の運用サイクル「月次面談」)

- 目的: 日々のタスクから離れ、中長期的な「キャリア」や「成長」について深く対話する(キャリアコンサルティング機能)。
- 運用: 月末に 30 分～45 分程度。グラフを描くことで感情の揺れを客観視させる。

■ 月次振り返りシート(対象月: 月)

1. モチベーショングラフ 今月の気分の波を線で描いてみよう。(縦軸:やる気/元気、横軸:1 日～月末)

高 | _____
普 | _____

29

低 | _____
1 週目 2 週目 3 週目 4 週目

- 一番調子が良かった時は何があった? _____
- 一番辛かった時はどうやって乗り越えた? _____

2. スキル習得チェック(自己評価 ★5 段階)

- デジタルスキル(LMS・PC 操作): ★ (理由: _____)
- 対人スキル(挨拶・敬語): ★ (理由: _____)

3. 来月のキャリアテーマ(重点目標)「来月これを頑張る!」というテーマを一言で: [_____]

【シート 3】授業振り返りシート(Daily Log)

(参照:3-3. 振り返りシートを活用した双方向対話)

- 目的: 毎回の授業後の気づきを可視化し、アドバイザーがフィードバックを行う「交換日記」的支援。対面では言いにくい悩みを拾い上げる。
- 運用: 授業終了時に記入・提出。

■ 授業振り返りログ 記入日: 月 日 科目名: _____

項目	記入欄
理解度(5 段階)	5(完璧)・4(大体 OK)・3(普通)・2(微妙)・1(無理)
学んだこと(キーワード)	
疑問点・モヤモヤ(授業内容以外でも可)	(例:「この操作が分からなかった」(例:最近、隣の席の人と話づらい...))

30

AD からのフィードバック	To: OOさん(例:理解度 5 はすごいね! 質問にあった操作方は、次回の冒頭で補足するから安心してね。人間関係の件も、今度少し話そうか。)AD サイン: [印]
---------------	--

【シート 4】初回インテーク面談シート(入学直後用)

(参照:3-1. 伴走の基本構造 / 2-3. LMS を活用した接続支援)

- 目的: 第 2 章「入学前支援」からの引き継ぎ情報を確認し、初期のラポール(信頼関係)を形成する。
- 運用: 入学オリエンテーション期間に実施。

■ 初回インテーク面談シート 実施日: 月/日/年

1. 基本情報・バックグラウンド

- 出身校形式: ☐ 全日制 ☐ 通信制 ☐ 定時制 ☐ その他
- PC の使用歴: ☐ ほぼ毎日(ゲーム・動画編集等) ☐ 学校の授業のみ ☐ 苦手
- 趣味・特技: _____ (※話題作りの種)

2. 支援ニーズの把握

- 得意な学び方: ☐ 動画を見る ☐ 文章を読む ☐ 人に聞く ☐ 自分で調べる
- 希望するコミュニケーション: ☐ どんどん話しかけてほしい ☐ 必要な時だけ対応してほしい ☐ チャットの方が話しやすい
- 配慮してほしいこと(体調・環境): (例:人混みが苦手、午前中は体調が悪いことが多い、など) _____

3. 将来のビジョン(仮で OK)

- 現時点での希望進路: ☐ 地域企業への就職 ☐ フリーランス ☐ まだ分からない
- 卒業までに身につけたい力: _____

31

【シート 5】アラート管理・対応履歴シート

(参照:3-4. 早期アラート対応)

- 目的: LMS の未アクセスや課題未提出(学習データ停滞)に対する介入履歴を記録する。
- 運用: アラート検知ごとに管理者が記入。「誰が・いつ・どう対応したか」を可視化する。

■ アラート対応管理表

【アラート基準】

- レベル 1(注意): 3 日間 LMS ログインなし / 課題未提出 1 回
- レベル 2(警告): 1 週間連絡なし / 課題未提出連続 / 深夜ログイン常態化
- レベル 3(緊急): 2 週間所在不明 / 退学・休学の申し出 / メンタル不調の訴え

【対応履歴ログ】

日時	対象学生	アラート内容	対応手段	学生の反応・結果	対応者
4/1510:00	山田太郎	レベル 13 日未ログイン	チャット送信(体調伺い)	即返信あり。「風邪でした。明日からやります」	佐藤
4/2014:00	鈴木花子	レベル 2 課題連続未提出	電話連絡(本人)	繋がらず。留守電に伝言残す。	田中
4/2109:00	鈴木花子	レベル 2 (継続)	電話連絡(保護者)	母親と通話。「本人が自信を失っている」とのこと。→明日、三者面談を設定。	田中

2. 【B】SST/SGE グループワーク活動集

【ワーク 1】SGE:アイスブレイク「偏愛マップ」

(参照:3-6. グループ面談 / 4-1. 協働の場づくり)

- 目的: SST/SGE の視点を取り入れ、初対面の緊張を解き、お互いの「共通点」や「人となり」を安全に知る。
- 対象: 入学直後のオリエンテーション、または新しいクラス編成時。

1. 準備するもの A4 用紙、カラーペン。

2. 手順(所要時間:30 分)

- 描く(10 分): 用紙の中央に自分の名前を書く。その周りに「好きなもの(推し、ゲーム、食べ物、場所など)」をマインドマップ形式で自由に書き出す。
- 見る(5 分): グループ(3~4 人)で見せ合い、無言で眺める。「へえ〜」「あ、これ知ってる」という反応は OK。
- 話す(15 分): 気になったキーワードについて、周りの人が質問する。

3. ファシリテーター(AD)の進行スクリプト

(導入)「いきなり『自己紹介して』と言われると緊張しますよね。なので、今日は喋る前に『書く』作業をします。この紙に、皆さんの『好きなもの』を書き殴ってください。マニアックなことでも、食べ物でも何でも OK です。文章になくてもいいです。単語だけで埋めてください。よい、スタート！」

(共有時)「では、グループで見せ合しましょう。ポイントは『否定しないこと』です。『え、それ何?』と馬鹿にするのは NG。『それ何?』と興味を持って聞くのは OK です。」

【ワーク 2】SST:ソーシャルスキル基礎「助けの求め方」

(参照:3-6. グループ面談 / 1-2. 社会的スキル)

- 目的: 学校生活や職場で孤立しないための最重要スキル「相談行動」を練習する。
- 対象: 在学中、課題に行き詰まっている学生や、就職活動前の学生。

1. 基本の型(3 ステップ)

- クッション言葉: 「今、お時間よろしいですか?」
- 事実+感情: 「この操作が分からなくて(事実)、困っています(感情)。」
- 依頼: 「教えていただけますか?」

2. ロールプレイング手順(所要時間:20 分)

- 指示: なぜこのスキルが必要かを説明する。
- モデリング: アドバイザーが良い例(OK)と悪い例(NG:無言で固まる)を演じて見る。
- リハーサル: 学生同士(または AD と学生)でロールプレイングを行う。

3. 練習用スクリプト(学生への声かけ)

「授業中に PC が止まってしまった場面を想像してね。ずっと黙っていると、先生は君が困っていることに気づけません。まずは僕を先生だと思って、『すみません』と声をかけるところからやってみよう。失敗しても全然大丈夫だよ。」

【ワーク 3】グループ運営ファシリテーション・ガイド

(参照:3-6. グループ面談 / 4-1. ファシリテーション)

- 目的: グループワーク中に発生しがちな「困った状況」に対し、アドバイザーが適切に介入し、心理的安全性を守る。

ケース A:沈黙が続いて気まずい時

- マインド: 通信制高校出身者等は対面会話に慎重。「沈黙=悪」ではなく「思考の時間」と捉える。
- 介入テクニック:
 - 筆談へ切替: 「話すのが難しかったら、チャット(または付箋)に書いてみようか」
 - パス許可: 「思いつかない人は『パス』カードを出していよいよ」

ケース B:特定の学生ばかりが話している時

- マインド: 話を進めるのではなく、感謝した上でバトンを渡す。

- 介入テクニック:
 - 「〇〇君、面白い話がありがとう。今の話について、他の人の意見も聞いてみたいな。△△さん、どう思った?」

ケース C:否定的な発言(「無理」「意味ない」)が出た時

- マインド: 否定発言を「個人の意見」として受容し、「解決すべき課題」へリフレーミング(言い換え)する。
- 介入テクニック:
 - 「なるほど、『無理だ』と感じるくらいハードルが高く見えるんだね(受容)。じゃあ、どうすればそのハードルを下げられるか、みんなでアイデアを出してみようか(転換)」

3. 【C】文例・Q&A

【ツール】状況別チャット・メッセージテンプレート集

(参照:3-4. 早期アラート対応 / 3-5. ケース対応)

- 原則: デジタル文字は冷たく伝わりやすいため、「感情(絵文字)」と「承認(名前)」を盛り込む。

1. アラート対応:ログインが途絶えた時(優先)

件名: 最近どうしてるかな?(〇〇先生より) 本文: [学生名]さん、こんにちは! 今週、LMS のログインが少し空いているみたいだけど、体調とか崩していないかな? 心配になって連絡しました 🍡 もし「やる気が出ない」とかあれば、スタンプ 1 個でもいいから返信もらえると安心します。無理に進めなくてもいいから、まずは安否確認だけさせてね!

2. 承認・称賛:課題提出があった時(即レス用)

本文: [学生名]さん、課題の提出確認しました! 🍡 期限内にしっかり出せたこと、さすがプロ意識だね。内容も確認して、後でフィードバック送るね。まずは提出お疲れ様でした! ゆっくり休んでね 🍡

3. AI 連携:AI カウンセラー利用の推奨 (参照:3-7. AI カウンセラーとのハイブリッド・サポート)

本文: 最近、夜更かし気味かな? もし夜中に「誰かと話したい」「モヤモヤする」と思ったら、LMS にある『AI カウンセラー』も使ってみてね。先生と違って 24 時間いつでも即レスしてくれるし、秘密は守られるから愚痴を吐き出すのにおすすめだよ

【Q&A】トラブルシューティング(対学生・保護者)

(参照:3-5. ケース対応 / 1-3. カウンセリング・マインド)

Q1. 学生が「課題をやった」と嘘をつきます。(LMS ログには履歴がない) A. 「嘘」ではなく「自己防衛」と捉え、逃げ道を塞がないようにしましょう。「嘘をつくな」と責めると信頼関係が崩壊します。

- 推奨対応: 「そっか、やったつもりだったんだね。でもシステム上のエラーかもしれないけど、記録が残ってなくて。心配だから、今ここでもう一度一緒に聞いてみてもいい？」と、確認作業へ誘導してください。

Q2. 保護者から「もっと厳しく指導してほしい」と要望がありました。A. 保護者の不安を受け止めて、本事業の「自律支援」の趣旨を説明しましょう。

- 推奨対応: 「お母様の『就職してほしい』というご心配、痛いほど分かります。ただ、今ここで強制的にやらせてしまうと、就職後に指示がないと動けない大人になってしまいます。遠回りに見えますが、今は本人が『自分で決めて動く』練習期間ですので、もう少しだけ見守っていただけませんか？」

【Q&A】トラブルシューティング(組織・メンタル)

(参照:3-7. AI 連携 / 6-2. 役割分担)

Q3. 学生のネガティブな感情(「死にたい」「消えたい」)に引きずられそうで辛いです。A. 『バウンダリー(境界線)』を意識し、一人で抱え込まないでください。あなたは「支援者」であり、彼らの人生を背負う「家族」でも「救世主」でもありません。

- 対処法: 「死にたい」等のワードが出たら、必ず管理職や専門職(カウンセラー)に即時報告してください(アラートレベル 3)。一人で秘密を守るとは、学生にとっても危険です。

Q4. AI カウンセラーと人間のアドバイザー、どう使い分けるべきですか? A. 「即時性・匿名性」は AI、「深い共感・個別調整」は人間が担います。

- AI: 深夜の愚痴聞き、学習の基礎的な Q&A、就職エントリーシートの添削。
- 人間: 進路決定の相談、生活トラブルの解決、モチベーション管理。学生にもこの役割分担を伝え、「AI を使いこなすのもスキルの一つ」と指導してください。

Q5. 教務(授業担当教員)との連携がうまくいきません。A. 学生の「通訳者」としてのポジションを確立してください。

- アクション: 教員に対し、「○○さんは、サボリではなく、家庭の事情でメンタルが落ちています」と、学生の背景事情(コンテキスト)を教員に翻訳して伝えることが、アドバイザーの重要な機能です。

第 4 章:【在学中支援②】社会的スキルを育む協働の場

4-1. SST/SGE を取り入れたグループ面談のファシリテーション

通信制高校出身者や不登校経験を持つ学生の中には、1 対 1 の面談(第 3 章)では信頼関係を築けても、集団の中に入ると萎縮し、能力を発揮できないケースが少なくありません。本節では、SST(社会的スキル・トレーニング)と SGE(構成的グループ・エンカウンター)の視点を取り入れ、学生が「安心できる小集団」での成功体験を通じて、社会生活に必要な対人スキルと自己肯定感を育むための手法を解説します。

1. グループ面談の目的と「場の安全性」の確保

アドバイザーは、この場において「指導者(Teacher)」ではなく「ファシリテーター(促進者)」に徹します。最も重要な任務は、心理的安全性(Psychological Safety)の確保です。

■ グランドルールの宣言

グループ活動を始める前に、以下のルールを必ず明示し、アドバイザー自身が率先して守ります。

- 否定しない(No Denial): どんな意見も「それも一つの考え」として受け止める。
- 沈黙権の保証(Pass is OK): 言いたくない時は「パス」と言ってよい。沈黙を責めない。
- 秘密厳守(Confidentiality): ここで聞いた個人的な話を、外で勝手に広めない。

■ 導入期のアプローチ(SGE 的視点)

会話への不安が強い初期段階では、非言語コミュニケーションから入る「構成的アプローチ」が有効です。

- 「書く」から始める: いきなり口頭で意見を求めず、まず付箋やホワイトボードに書かせる時間を設けます(第 3 章付録「偏愛マップ」等の活用)。
- 構造化された対話: 「サイコロの目が 1 なら趣味の話」のように、話す内容や順番をルール化し、「何を話せばいいかわからない」という不安を取り除きます。

2. グループの発達段階に応じた介入(タックマンモデルの応用)

グループは生き物であり、時期によって状態が変化します。アドバイザーはグループの発達段階を見極め、適切な介入を行う必要があります。

段階	状態	アドバイザーの役割と介入方針
第 1 段階形成期(Forming)	【緊張・様子見】お互いに遠慮があり、本音が出ない。沈黙が多い。	案内人(Ice Breaker)自由な議論を避け、枠組み(ルール)を提供する。共通点探しを誘導し、「ここは敵のいない場所だ」と認識させる。

第 2 段階混乱期(Storming)	【対立・葛藤】慣れが生じ、「意見が合わない」「作業が進まない」といった不満が出る。	調停者(Mediator)対立を「悪」として抑え込むのではなく、「SST の実践機会」と捉え、感情的な言葉を建設的なリクエストに翻訳する手助けをする。
第 3 段階統一期(Norming)	【受容・協調】役割分担が決まり、自分たちでルールを作り始める。	黒子(Observer)介入を減らし、学生同士のやり取りを見守る。「自分たちで解決できた」という事実を言語化してフィードバックする。

3. アドバイザーのためのファシリテーション・スクリプト

現場でよくある状況に対し、SST(社会的スキル)を育むための具体的な声かけ(介入台本)です。

① トラフィック・コントロール(発言の交通整理)

特定の発言力の強い学生(A さん)ばかりが話し、大人しい学生(B さん)が埋没している場面。

NG 対応: 「A さん、喋りすぎ、少し黙って」と逆る。OK 対応: 「A さん、熱意のある提案をありがとう(承認)。すごくよく分かったよ。ここで、まだ声を聞けていない B さんの視点も入れてみたいんだ。B さん、今の A さんの案について、技術的な面でどう感じた? (指名してバトンを渡す)」

② リフレーミング(否定発言の言い換え)

「こんなの無理だよ」「意味ない」といったネガティブな発言で場が凍りついた場面。

NG 対応: 「やる前から無理って言わない! 」と叱責する。OK 対応: 「なるほど、無理だ」と感じるくらい、今の目標はハードルが高くて見えているんだね(受容)。じゃあ、どうすればそのハードルを下げられるか、みんなでアイデアを出してみようか(転換)。批判的な意見が出るのは、リスクが見えている証拠だからね」

③ セーフティ・ネット(沈黙の保護)

問いかけに対して誰も答えず、気まずい沈黙が続いた場面。

NG 対応：焦ってアドバイザーが答えを言ってしまう。OK 対応：（5 秒～10 秒笑顔で待ってから）「……うん、難しい質問だったね。沈黙してるってことは、みんな真剣に考えてくれる証拠だね（肯定）。じゃあ、やり方を変えよう。チャットに『一言だけ書き込むのどう？ 絵文字1個でもいいよ』」

4. まとめ：ファシリテーターの心得

グループ面談におけるアドバイザーのゴールは、立派な結論を出すことではありません。学生たちが「他人と意見が違っても、関係は壊れない」「自分の発言が誰かの役に立った」という感覚（自己有用感）を持ち帰ることです。そのために、アドバイザーは常に「安心感」の土台を支え続けてください。

4-2. マイプロジェクト型学習を通じた地域企業との接点づくり

学校内の守られた環境（SST/SGE）で基礎的な対人スキルを学んだ後は、実際の社会（地域企業）との接点を持つ「マイプロジェクト型学習（PBL）」へ移行します。ここでは正解のない課題に対し、チームで挑むプロセスを通じて、「プロとして他者と協働する力」を養います。

1. プロジェクト学習におけるアドバイザーの立ち位置

技術的な指導（ドローンの操縦法や動画編集ソフトの使い方）は専門教員が行いますが、キャリア形成アドバイザーは「チームビルディング」と「対外コミュニケーション」の支援を担います。

■ 役割①：リエゾン（企業連携窓口）

学生がいきなり企業の担当者と交渉するのはハードルが高すぎます。初期段階ではアドバイザーが窓口となり、学生の「社会への出口」を整備します。

- ・ **タスク：** 協力企業の開拓、アポイントメントの調整、学生が送るメールの添削、トラブル時の謝罪同行。

■ 役割②：トランスレーター（翻訳者）

企業の要望（ビジネス視点）と学生の制作物（スキル視点）のズレを調整します。特に企業からの厳しいフィードバックがあった際、学生が潰れてしまわないよう、その言葉の真意を「教育的な意味」に翻訳して伝えることが最重要任務です。

2. 具体的な実践モデルの例：「ドローン×農業」プロジェクト

地域産業の中核的人材育成を掲げる本事業における、典型的なプロジェクト進行フローです。ここではマイプロジェクト型学習の具体例として、「ドローン×農業」プロジェクトというケースを例に解説します。

【プロジェクト概要】

- ・ **クライアント：** 地域の農事組合法人（高齢化により、農業散布や鳥獣被害対策に困っている）
- ・ **学生チームのミッション：** ドローンを活用し、農家の負担を軽減するソリューションを提案・実証する。

Phase 1: チーム結成と役割分担 (Doing)

アドバイザーは、学生の特性を見極めてチームを編成します。

- ・ **介入ポイント：** 「仲良しグループ」ではなく「役割分担」で組ませます。
 - 操縦が得意な学生（技術担当）
 - 動画編集が得意な学生（クリエイティブ担当）
 - 人前では話せないが、記録や連絡がマメな学生（プロジェクトマネージャー・連絡担当）
- ・ **アドバイス：** 「全員が前に出る必要はない。裏方（管理役）も立派なプロの仕事だ」と伝え、自己有用感を高めます。

Phase 2: 課題発見ヒアリング (Hearing)

農家の現場へ行き、困りごとを聞き出します。

- ・ **事前の SST 指導：** 「専門用語を使わないこと」「相手の話を遮らないこと」をリハーサルします。

- ・ **現場でのサポート：** 会話が詰まった際、アドバイザーが「今の話は、つまりカラスの被害が一番深刻ということでしょうか？」と助け舟（サマライズ）を出します。

Phase 3: 実証実験とフィードバック (Testing)

実際に畑でドローンを飛ばし、農家の方から評価を受けます。

- ・ **成功体験の創出：** 「おお、これは楽になるなあ」という農家の生の声を聞くことで、学生は「自分のスキルが社会の役に立った」という強烈な自己効力感を得ます。これは教室のテストで 100 点を取る以上の自信になります。

3. 「失敗」と「厳しい評価」への対応（トランスレーター機能）

プロジェクトは順調に進むとは限りません。「納期遅れ」や「クオリティ不足」で企業から厳しい言葉をもらうことこそが、最大の学びの機会です。

ケーススタディ：企業から「イメージと違う」と却下された時

学生は「頑張ったのに否定された」「自分はダメだ」と落ち込みます。ここでアドバイザーがどう声をかけるかで、成長か挫折かが決まります。

- ・ × **悪い対応（同調）：** 「厳しい担当者だね。君たちは十分頑張ったよ、気にしないでいいよ」→ 慰めにはなるが、ビジネススキルは育たない。
- ・ ○ **良い対応（翻訳）：** 「優しいね。でも、担当者さんは『若たちの人間性』を否定したわけじゃないんだ。『商品のブランドイメージと、動画の色使いが合っていない』という業務上のズレを指摘してくれたんだよ。これはプロとして扱われている証拠だ。感情と事実を分けよう。具体的にどこを直せば OK が出るか、一緒に聞きに行こう」

4. まとめ：社会接線のゴール

このプロジェクトを通じて、学生が以下の状態になることを目指します。

1. 「**報道相**」の意味理解： 怒られないためではなく、信頼を守るために必要だと体感する。
2. **他者への想像力：** 「相手（クライアント）は何を求めているか」を考える癖がつく。

3. **失敗からのリカバリー：** ミスをして、謝罪して修正すれば挽回できることを知る。

アドバイザーは、彼らが転んだ時に「起き上がり方」を教えるセコンドとして伴走してください。

4-3. 【実践ツール】ビジネス SST(社会的スキル)ワーク集

学生がいきなり企業の担当者と対峙するのは、心理的負担が大きすぎます。本節では、プロジェクト開始前に教室内で行うロールプレイング・ワークの具体的な進行台本を提供します。これらは、学生が「知らないから怖い」状態を脱し、「型を知っているから動ける」状態になることを目的としています。

ワーク 1: ビジネスチャット・メールの「型」習得

【目的】 SNS (LINE 等) の短文コミュニケーションに慣れた学生に対し、ビジネスにおける「宛名」「件名」「署名」の重要性を理解させ、送信への恐怖心をなくす。

【STEP 1: NG 例の添削】 以下の「悪いメール」を提示し、どこが失礼かをグループで議論させます。

件名：なし 本文： ファイル送ります。確認してください。 山田

【アドバイザーの解説ポイント】

- ・ 「友達同士ならこれで OK。でもビジネスでは、相手は 1 日に 100 通以上のメールを受け取る。『誰から』『何の用件か』分からないメールは、後回しにされるか、最悪の場合ゴミ箱行きになるリスクがある」と相手視点を教えます。

【STEP 2: テンプレートの入力練習】 以下の型（テンプレート）を配布し、自分の名前を入れて作成させます。

件名：【課題提出】PR 動画の初稿について (YIC 学院・山田太郎) 本文： 株式会社〇〇 佐藤様

いつもお世話になっております。YIC 学院の山田です。先日ご依頼いただいた動画の初稿が完成しましたので、お送りします。

■確認してほしい点 ・ロゴの表示時間はこれで問題ないか ・BGM の音量は適切か
お忙しいところ恐縮ですが、〇月〇日までにご確認いただけますと幸いです。よろしくお願いたします。

学校法人 YIC 学院 高度情報技術学科
山田 太郎
Email: taro.yamada@example.com

ワーク 2:電話対応・アポイントメントのリハーサル

【目的】「電話恐怖症」の学生に対し、台本を読むだけの練習を通じて、第一声を発するハードルを下げる。

【場面設定】ヒアリングのアポイントメント(日程)を変更してもらうために、企業の担当者へ電話をかける。

【ロールプレイング台本】

- 学生(架電者):「あ、もしもし、山田ですけど。佐藤さんいますか？」
- AD(相手役):「(少し冷たく)失礼ですが、どちらの山田様ですか？」
- AD(解説・ストップ):「ここでストップ。電話は顔が見えないから、第一声で『所属』を名乗らないと不審がられるよ。この魔法の言葉から始めよう」

【修正版スクリプト】

- 名乗り:「お世話になっております。YIC 学院の山田と申します。」
- 取次ぎ:「動画プロジェクトの件でご連絡いたしました。ご担当の佐藤様はいらっしゃいますでしょうか？」
- 要件(不在時):「承知いたしました。では改めてこちらからお電話させていただきます。失礼いたします。」

※この台本をプリントして手元に置き、「これを読むだけでいい」と安心させてから練習を行います。

ワーク 3:報告・連絡・相談(ホウレンソウ)の「悪い報告」編

【目的】順調な時ではなく、ミスをした時や遅れそうな時こそ、早く報告するスキルを身につける。

【思考の枠組み:PREP 法+謝罪】言い訳(Because)から始めず、結論(Point)から話す訓練です。

【練習課題】「動画の書き出し(レンダリング)に想定以上の時間がかかり、今日の 17 時の締切に間に合わない」ことを報告する。

【模範解答モデル】

- クッション(謝罪):「〇〇さん、申し訳ありません。ご相談があります。」
- 結論(Point):「本日 17 時提出予定の動画ですが、提出が明日の午前中になりそうです。」
- 理由(Reason):「現在書き出しを行っていますが、エラーが発生し、想定より時間がかかっているためです。」
- 対策(Action):「今夜中に再書き出しを行いますので、明日の朝 10 時には確実に提出できます。遅れてしまい申し訳ありません。」

ワーク 4:フィードバックの受け止め方(レジリエンス訓練)

【目的】制作物への否定意見を、人格否定と捉えずに「修正指示」として受け止めるマインドセットを作る。

【ケーススタディ】企業から「このデザイン、ちょっと古臭いね。直して」と言われたらどう感じる？

- 感情の共有:「ムカつく」「悲しい」「やる気なくす」といった感情をホワイトボードに書き出し、否定せずに受け止めます。
- 認知の転換(リフレーミング):アドバイザー:「『古臭い』という言葉はキツイね。でも、これは逆に言う『もっと今風の新しいデザインにしてほしい』という期待の裏返しでもあるんだ。プロとして、『具体的にどの部分が古いと感じましたか？ 色使いですか？ フォントですか？』と聞き返すことができれば、君はもう学生ではなくクリエイターだ」

4-4.【付録】プロジェクト運営用ワークシート集

本セクションのシートは、正解のないプロジェクト活動において、学生が「何をすればいいかわからない」と立ち尽くすのを防ぐための道標(ガイド)である。アドバイザーは、プロジェクトのフェーズごとに適切なシートを配布し、記入をサポートすること。

【シート 1】チーム・グラドルルール策定シート

(フェーズ:キックオフ時)

- 目的:トラブルを未然に防ぐため、チーム内の「約束事」を明文化する。特に「コミュニケーションのルール」を決めることで、対人不安を軽減する。
- 運用:チーム結成日に全員で話し合って記入し、いつでも見える場所に掲示(または画像保存)する。

■我がチームの「憲法」(グラドルルール) チーム名: 作成日: / /

1. 連絡・返信のルール(レスポンス)

- チャット(LINE/Discord 等)を見たら: ☐ スタンプだけでも返す ☐ 24 時間以内に返す ☐ 夜 22 時以降は送らない
- 休む時・遅れる時は: (例:当日の朝 9 時までには連絡する) _____

2. 会議・話し合いのルール(ミーティング)

- 意見が対立した時は: ☐ 多数決で決める ☐ じゃんけん ☐ 先生(AD)に相談する
- 発言する時は: ☐ 否定から入らない(「いいね、でも～」を使う) ☐ 全員が必ず一回は発言する

3. ピンチの時の合言葉(マインドセット) 誰かがミスをした時、責める代わりに掛ける言葉を決めておこう。

- 合言葉:【例:ドンマイ! 次行こう! / 死ぬわけじゃない! 】

【シート 2】クライアント・ヒアリングシート

(フェーズ:課題発見時)

- 目的: 企業や農家へのヒアリング時に、緊張して頭が真っ白になるのを防ぐための「質問台本」。
- 運用: 事前に質問事項を記入し、アドバイザーの添削を受けてから現地へ向かう。

■ヒアリング・メモ(質問リスト) 訪問先: 対応者様: _____

1. 相手の「困りごと」を探る質問(課題)

- Q:現在、一番手間がかかっている作業は何ですか? (メモ: _____)
- Q:もし魔法が使えて、一つだけ解決できるとしたら何を变えたいですか? (メモ: _____)

2. 相手の「要望」を探る質問(ニーズ)

- Q:今回のプロジェクト(動画/ドローン等)で、一番伝えたい相手は誰ですか? (ターゲット) (メモ: _____)
- Q:絶対にやってはいけないこと(NG 事項)はありますか? (メモ: _____)

3. 持ち帰って検討する宿題

- 次回提案日: 月 日
- 確認が必要なこと: _____

【シート 3】週次進捗レポート(簡易 WBS)

(フェーズ:実行期)

- ・ 目的: 「やったつもり」を防ぎ、作業の遅れを可視化する。ハウレンソウ(報告)の練習ツール。
- ・ 運用: 毎週の定例ミーティングでアドバイザーに提出。

■ 今週の進捗レポート 期間: / / ~ / / 記入者: _____

1. 今週のゴール(目標) 【 例: 動画の絵コンテを完成させて、先生の OK をもらう 】

2. タスク管理(誰がいつまでに何を)

タスク名	担当	期間	状態
素材集め	山田	水曜	☐ 完了
BGM 選定	佐藤	木曜	☐ 遅れ
編集作業	鈴木	金曜	☐ 未着手

3. SOS(困っていること・相談) ※早めに書くことが「プロ」の仕事です。

- ・ (例: フリー素材のサイトが見つかりません)
- ・ (例: 佐藤さんと連絡が取れません)

【シート 4】 KPT 振り返りシート

(フェーズ: 中間/完了報告時)

- ・ 目的: 感情的な反省会(「ダメだった」)ではなく、行動ベースの改善(「次はこうする」)へ思考を誘導する。
- ・ 運用: ホワイトボードまたは付箋を用いてチーム全員で実施。

■ KPT 振り返り(Keep / Problem / Try)

【K: Keep】良かったこと・続けたいこと

- ・ (例: アポの時間に遅刻しなかった)

- ・ (例: 山田くんのアイデアが面白かった)
- ・ (例: 挨拶の声が大きかった)

【P: Problem】困ったこと・問題点(※人を責めない!)

- ・ (例: 会議がだらだら長引いてしまった)
- ・ (例: データの保存場所が分からなくなった)
- ・ (例: 企業の方へのメール返信に迷って時間がかかった)

【T: Try】次に挑戦すること・解決策

- ・ (例: 会議はタイマーを使って 30 分で終わらせる)
- ・ (例: 共有フォルダに「最新」という箱を作る)
- ・ (例: メールの下書きを作ったら、すぐ AD に見てもらう)

【シート 5】 相互評価シート(ピア・レビュー)

(フェーズ: プロジェクト終了後)

- ・ 目的: メンバー同士で「貢献」を認め合い、他者から見た自分の強み(自己効力感)を知る。
- ・ 運用: 記名式で行う。ネガティブな指摘は「アドバイス」として記述させる。

■ メンバーへのサンクス・レター To: [メンバー名] さんへ

- ・ Thanks(感謝していること): (例: 私が休んだ時に、作業をカバーしてくれてありがとう。すごく助かりました。)
- ・ Respect(すごいと思ったスキル): (例: プレゼンの時、原稿を見ずに話していて格好良かったです。)
- ・ Wish(もっとこうなると素敵): (例: ギリギリまで一人で頑張らずぎちゃうから、次はもう少し早く SOS を出してね。チームなんだから!)

48

49

第 5 章:【卒業後】地域定着とキャリア維持のための相談支援

本事業のゴールは、学生を就職させることではない。地域社会の中で長く活躍し、生活の基盤を築く「定着(Retention)」こそが真の目的である。しかし、通信制高校出身者や不登校経験を持つ学生にとって、学校という「守られた環境」から、成果を求められる「企業組織」への移行は、劇的な環境変化(トランジション)を伴う危機的状況でもある。本章では、卒業後に訪れる「リアリティ・ショック」を緩和し、早期離職を防ぐための伴走支援手法と、アドバイザーが持つべき「セーフティネット」としての機能について詳述する。

5-1. 定着支援面談(初期離職対策)

新卒入社後、3 ヶ月以内に離職する「早期離職」のリスクが最も高い。これは能力不足ではなく、環境不適合によるメンタルダウンが主な原因である。アドバイザーは定期的なコンディション確認を通じて、小さな予兆(SOS)を拾い上げる必要がある。

1. 【理論】初期キャリアにおける「3 つの危機」

卒業生が直面するメンタルヘルスの危機は、以下のサイクルで訪れる傾向がある。アドバイザーはこのメカニズムを事前に本人へ伝え、「誰にでも起きること」と予防線を張っておくことが重要である。

- ・ 第 1 段階: 過剰適応期(4 月)
 - 状態: 「頑張らなければ」という緊張感から、無理をして元気に振る舞う。
 - リスク: ハイテンションに見えても、実はエネルギーを前借している状態。「大丈夫です!」という言葉を綺麗みにしてはいけない。
- ・ 第 2 段階: 幻滅・混乱期(5 月~6 月 / 五月病)
 - 状態: 連休明けに糸が切れ、「思っていた仕事と違う」「先輩が怖い」という現実の壁(リアリティ・ショック)に直面する。
 - リスク: 相談相手がいらない場合、突発的な退職(パツクレ)が発生しやすい重要警戒期。
- ・ 第 3 段階: 自律への葛藤期(半年~1 年)
 - 状態: 新人扱いが終わり、成果を求められ始める。「自分には能力がない」というラインポスター症候群(詐欺師症候群)に陥りやすい。

2. 【実践ツール】卒業生用コンディション・チェックシート

卒業生との面談(対面・オンライン)や、LMS を通じた月次アンケートにおいて、以下の指標を数値化させて定点観測を行う。感覚的な「元気?」という問いかけではなく、行動ベースで確認する。

■ 卒業生コンディション・チェックシート(自己点検用)

A. 生活リズム(Self-Management)

- ・ 睡眠: 直近 1 週間、よく眠れていますか? (☐ ぐっすり ☐ 途中覚醒がある ☐ 寝つきが悪い/眠れない)
- ・ 食事: 朝食を食べていますか? (☐ 毎日食べる ☐ 時々食べる ☐ 食べない)
- ・ 出勤: 遅刻や欠勤の頻度は? (☐ なし ☐ 月 1 回程度 ☐ 週 1 回以上)
。 解説: 第 3 章で培った「自己管理能力」の維持確認。遅刻の増加はメンタル不調の初期サインである。

B. 職場の人間関係(Social Skills)

- ・ 挨拶: 職場の人に自分から挨拶できていますか? (☐ はい ☐ 苦手な人がいる ☐ 避けている)
- ・ 相談相手: 困った時に質問できる先輩・上司はいますか? (☐ 特定の人ならいる ☐ 誰もいない)
- ・ 居場所: 休憩時間はどう過ごしていますか? (☐ 同僚と話す ☐ 一人で休む ☐ 居たたまれない/辛い)

C. 業務への適応(Competence)

- ・ 理解度: 指示された業務内容が分かりますか? (☐ はい ☐ 半分以上 ☐ 分からないまま進めている)
- ・ 疲労度: 休日に疲れは取れていますか? (☐ リフレッシュできている ☐ 寝て終わる ☐ 会社に行くのが怖い)

3. 【対話スクリプト】「辞めたい」という SOS への緊急対応

卒業生から「もう無理です、辞めたいです」と連絡が入った際、アドバイザーは動揺してはいけません。これは「決定事項の報告」ではなく「助けを求めの叫び」である。

50

51

Step 1:感情の全受容(ガス抜き)

NG 対応(説得):「せっかく入ったのにもったいない! もう少し頑張ってみようよ」
OK 対応(受容):「そっか、辞めたいと思うくらい、毎日辛かったんだね。一人で抱え込まずに連絡してくれてありがとう。まずは何があったか、話せる範囲で教えてくれるかな?」

- ポイント: 否定も肯定もせず、まずは全て吐き出させる(カタシス効果)。

Step 2:課題の切り分け(事実確認) 感情(辛い)と事実(何が起きたか)を切り分ける質問を行う。

アドバイザー:「先輩が怖いというのは、怒鳴られるということ? それとも無視される感じ?」卒業生:「質問しに行くため息をつかれて『マニュアル見た?』って冷たく言われて…」アドバイザー:「なるほど。それは人格否定されたわけではなく、先輩も忙しくて余裕がなかったのかもしれないね。他の先輩はどう?」

Step 3:アクションプランの策定(第3の選択肢)

アドバイザー:「今のまま続けるのは辛いね。でも、明日いきなり辞表を出す前に、一つだけ実験(SST)をしてみない?あの先輩以外の、比較的優しいそうなお〇〇さんに一度相談してみるのはどうだろう? そのための台本を一緒に考えよう」

- ポイント:「辞めるか・耐えるか」の二択から、「環境調整を試みる」という第3の選択肢を提示し、具体的な行動へ誘導する。

5-2. 就職先企業との「連携窓口」としての機能

本事業において、アドバイザーは学生の支援者であると同時に、地域企業のパートナーでもある。卒業生と企業の間立ち、双方の言語を翻訳して伝える「トライアングル・コミュニケーション」にこそ、定着支援の要となる。

1. 企業訪問(定着支援巡回)の運用ルール

原則として入社後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月のタイミングで企業を訪問(またはオンライン面談)し、状況をヒアリングする。

52

企業から厳しい評価(例:「彼、全然報告してこないんですよ」)を受けた場合、それをそのまま本人に伝えると自信喪失につながる。アドバイザーはこれを「期待」や「具体的なタスク」へ翻訳して伝える。

Step 1:企業側の不満の背景を読み解く 企業が「報告がない」と言う場合、それは「進捗が見えなくて不安だ」「ミスをしているのではないか」という管理者の不安の裏返しである。

Step 2:卒業生への「翻訳」フィードバック

NG 伝達:「会社から『報告しない』って怒られてるぞ。社会人なんだから、ちゃんと報連相しろ」OK 伝達(翻訳):「上司の方は、君の作業が丁寧で早いことは認めていたよ(承認)。ただ、君が黙々と頑張るすぎるから、『今どこまで進んでいるか分からなくて心配だ』とも言っていた(翻訳)。信頼されているからこそ、進捗を知りたいんだと思う。1日1回、帰り際に『今日はここまで終わりました』とメール一本送るだけで、評価が劇的に変わるよ。どうかな、できそう?」

4. 個人情報の取り扱いと合理的配慮

企業連携においては、個人情報の取り扱いに関する覚書等(Source)に基づき、個人情報の漏洩に細心の注意を払う。

- 機微情報の非開示: 在学中の障害特性、通院歴、家庭環境などのセンシティブな情報は、本人の明確な同意がない限り、企業側には絶対に開示しない。「良かれと思って」伝えることは契約違反および人権侵害となる。
- 合理的配慮の依頼方法: 本人が開示を望み、配慮を求める場合(例:聴覚過敏、マルチタスク困難)、アドバイザーは「わがまま」ではなく「生産性を高めるための工夫」として企業に提案する。
- 提案例:「彼は集中力が高い反面、電話対応と作業の同時並行が苦手です。最初の3ヶ月は電話対応を免除し、データ入力に専念させていただくと、高い成果を出せます。そのような業務分担は可能でしょうか?」

5-3. Uターン・再進路相談(転職・起業・進学)

キャリアは直線的なものではない。特に現代においては、一度就職した後の「転職」や「学び直し(リスキリング)」は当然のプロセスである。アドバイザーは、離職を「失敗」と捉えさせず、次のステップへの前向きな転換点(トランジション)として支援する。

54

- 注意点: 必ず事前に卒業生本人の同意を得ること。「先生が会社に来るなんて恥ずかしい」と感じる場合もあるため、あくまで「学校のカリキュラム改善のための卒業生調査」という名目で訪問する等の配慮が必要である。

2. 【実践ツール】企業担当者向けヒアリング・チェックリスト

企業側は「学校の先生」に対して遠慮し、本音(不満)を隠す傾向がある。以下のリストを用い、具体的な行動ベースで課題を抽出する。

■ 定着支援ヒアリングシート(対 企業担当者様)

① 勤怠・基本行動

- ☐ 遅刻・欠勤はなく、規則正しく出勤しているか。
- ☐ 挨拶や返事は適切に行えているか。
- ☐ 服装や身だしなみは TPO に合っているか。

② 業務遂行能力(テクニカルスキル)

- ☐ PC 操作や専門知識は、求めているレベルに達しているか。
- ☐ ミスをした際の報告、リカバリーはできているか。
- ☐ 指示待ちにならず、メモを取るなどの姿勢が見られるか。

③ コミュニケーション・適応(ソーシャルスキル)

- ☐ 分からないことを「分からない」と質問できているか。(※ここが最大の離職要因になりやすいため重点確認)
- ☐ 職場の休憩時間や雑談など、業務外の場になじめているか。
- ☐ 孤立している様子はないか。

④ 企業様からのご要望(本音)

- 「もう少しここを直してほしい」「ここが惜しい」という点があれば、忌憚なくお聞かせください。学校から本人へ、補習やアドバイスという形でフィードバックいたします。

3. 【対話スクリプト】ネガティブ評価の「翻訳」とフィードバック

53

1. 【理論】キャリア・アンカーの再確認

就職して初めて、「自分は何を大切にしたいか(キャリア・アンカー)」が見えてくる。

- 安定志向:「やっぱり地元で、親の近くで働きたい」(U ターン希望)
- 自律志向:「組織のルールに縛られず、自分のペースで働きたい」(フリーランス希望)
- 専門志向:「もっと深く技術を学びたい」(大学編入・専門学校再入学希望) 相談の際は、第2章の入学前相談に立ち返り、これらを再定義することから始める。

2. 【実践ツール】スキル棚卸しワークシート

早期離職した卒業生は、「自分には何もない」「時間の無駄だった」と自己否定しがちである。在職期間(たとえ数ヶ月でも)に得たものを可視化させる。

■ スキル棚卸しシート(ポータブルスキル版) 専門スキル(Tech)だけでなく、どこでも通用するポータブルスキル(Human/Self)に光を当てる。

項目	具体的な経験・できるようになったこと	他の職場でも使えるか?
専門スキル(テクニカル)	・Illustrator でのバナー作成・社内管理システムの操作	△(ソフトは使えるが、独自システムは他社では使えない)
対人スキル(ヒューマン)	・電話対応(1日20件受電)・クレーム対応の初期受付	◎(どこの会社でも必須の能力!)
自己管理(セルフ)	・毎朝7時に起きて出社した・納期を一度も破らなかった	◎(信頼される社会人の基礎)

アドバイスのポイント:「〇〇君は『何もしなかった』と言うけれど、嫌な電話を取り続け、毎朝遅刻せずに出社した。この『基礎的な耐久力』こそが、地域企業が最も欲しがる能力だよ」と意味づけ(リフレーミング)を行う。

3. ケーススタディ別対応ガイド

ケース A:都会で疲弊し、地元に戻りたい(U ターン希望)

55

- ・ **心理状態**: 「逃げて帰ってきた」という敗北感を持っている。
- ・ **対応方針**: 「外の世界を見てきた経験」をポジティブに評価する。
- ・ **アクション**: 地域のハローワークや商工会議所と連携し、地元企業の求人(特に若手不足の企業)をリファラル(紹介)する。「都会のスピード感を経験した人材」として売り込む。

ケース B:フリーランス・起業を希望する

- ・ **心理状態**: 組織の人間関係に疲れ、「一人でやりたい」と安易に考えている場合がある。
- ・ **対応方針**: クールダウン(現実検討)を行う。第 3 章で解説した「自己管理能力」が、会社員以上に求められることを説く。
- ・ **指導内容**: 税金、国民健康保険への切り替え、営業活動の必要性。いきなり独立せず、まずはアルバイトをしながら「副業」としてスモールスタートすることを勧める。

ケース C:学び直し(大学編入・専門学校再入学)

- ・ **対応方針**: 進路としての進学でなく確認しつつ、リカレント教育の機関を紹介する。本事業の連携校や、職業訓練校の情報を提示し、キャリアの中断ではなく「ブラッシュアップ期間」として計画させる。

5-4. オンライン・コミュニティによる相互支援

アドバイザー個人が、年々増え続ける卒業生全員を永遠に支援し続けることは物理的に不可能である。持続可能な支援体制のためには、卒業生同士が支え合う「ピア・サポート(仲間同士の支援)」の場を構築する必要がある。

1. 卒業生コミュニティの設計と運営

在学中に使用していた LMS(学習管理システム)のアカウントを卒業後も保持させるか、専用の SNS グループ(Slack、Discord 等)に招待し、緩やかな繋がりを維持する。

■ コミュニティ・ガイドライン(ルール)の策定

無法地帯化(悪癖の掃き溜め化)を防ぐため、以下のガイドラインを設ける。

1. **守秘義務**: 勤務先の機密情報や、相談室で聞いた他者の悩みを外部に漏らさない。
2. **誹謗中傷の禁止**: 特定の個人や企業を攻撃する書き込みは即時削除する。
3. **勧誘の禁止**: 宗教、マルチ商法等の勧誘行為は一発退場(BAN)とする。
4. **心理的安全性**: 「辛い」という書き込みに対し、否定や説教をせず、スタンプ等で寄り添う。「解決しなくてもいい、聞いただけでいい」という文化を作る。

2. 「先輩メンター制度」の導入(SGE の応用)

就職して 2～3 年が経過し、余裕が出てきた卒業生を「メンター」として任命する。

- ・ **役割**: 新卒者の相談に乗る。年 1 回の「卒業生交流会」で体験談を話す。
- ・ **効果**:
 - **後輩への効果**: 「自分と同じような境遇の先輩が活躍している」というロールモデルを得られる。
 - **先輩への効果**: 「頼りにされる」ことで自己有用感(SGE)が高まり、自身のキャリア定着にも寄与する(ヘルパー・セラービー原則:人を助けることで自分が助けられる)。

3. AI カウンセラーによる 24 時間セーフティネット

第 3 章で導入した「AI カウンセラー」は、卒業後こそ真価を発揮する(Source)。

- ・ **ニーズ**: 卒業生が悩むのは、仕事が終わった深夜や休日であり、アドバイザーが対応できない時間帯が多い。
- ・ **AI の役割**:
 - **愚問聞き**: 「上司が理不尽だ」といった感情の吐き出し相手。24 時間即レスで対応する。
 - **情報提供**: 「失業保険 手続き」「退職願 書き方」などの制度検索サポート。
 - **アラート検知(重要)**: 「死にたい」「消えたい」等の危険ワードを検知した場合、即座にアドバイザー(事務局)へ緊急通知メールを送信する仕組みを構築しておく。これにより、最悪の事態を防ぐセーフティネットを張る。

4. まとめ:卒業後支援のゴール

- ログイン頻度、課題提出率、動画視聴完了率。
- **活用法**: 「最近ログインが減っている(行動変容)」といった客観的事実に基づき、早期アラートを検知する。
- ・ **第 3 層:伴走支援記録(Qualitative Data)**
 - 定期面談での対話記録、SST/SGE グループワークでの観察記録。
 - 学生の「感情の変化」や「発言内容」などの定性情報。

2. 【実践ツール】キャリア・カルテ マスターフォーマット

以下は、標準的なカルテの記録項目である。アドバイザーは面談終了後、原則 24 時間以内にこのフォーマットへ入力完了させること。記憶が鮮明なうちに事実を残すことが、支援の質を担保する。

■ 個別キャリア形成支援シート(入力フォーマット例)

項目	記入内容・ポイント
日時・形式	202X 年〇月〇日(14:00-14:30)／ オンライン(Zoom)
コンディション	【学生自己評価】睡眠:○ 食事:△ 意欲:◎【AD 観察】画面越しだが顔色は良く、声のトーンも明るい。部屋の背景も整理されている。
今回のテーマ	マイプロジェクトの進捗報告と、チームメンバーとの連絡不通について
事実(Fact)	・動画編集作業は 8 割完了。・メンバーの B 君から 3 日間返信がなく、作業が止まっている。・自分から電話するのは「怖い」と発言した。
解釈・所感(Insight)	・「怖い」という感情は、過去の対人トラブルに起因する可能性あり。・B 君への怒りよりも、プロジェクト失敗への不安が強い様子。・SST 的介入が必要なフェーズである。
合意した Action	① まずアドバイザーが B 君の状況を確認する(安全確保)。② その後、チャットでの催促文面を一緒に考える(スモールステップ)。
次回までの課題	チャットの下書きを作成してくこと。

3. 記入における「記述ガイドライン」

記録は、担当者が変わっても正確に状況が伝わるよう、「主観」と「事実」を明確に区別して記述しなければならない。不適切な記述は、学生への予断(バイアス)を生む原因となる。

本章における支援の最終ゴールは、卒業生がアドバイザーを必要としなくなること、すなわち「真の自律(自走)」である。「困った時はいつでも戻ってきていい(安全基地)」という安心感を与えつつ、徐々に介入頻度を減らし、地域の仲間やコミュニティの中で自力で課題を解決できる人材へと送り出すこと。それが本マニュアルの完結点である。

第 6 章:支援ツールと情報共有の仕組み

キャリア形成アドバイザー個人の対人スキルがいかに高くても、その支援内容がブックボックス化しては、組織としての一貫したサポートは不可能である。入学前から卒業後まで、学生一人ひとりの成長と課題を「データ」として蓄積し、チーム全体で共有するための「仕組み」こそが、本モデルの中核となる。本章では、アドバイザーが日常的に使用する記録ツール(キャリア・カルテ)、AI との連携フロー、および個人情報情報の取り扱いに関する覚書等に基づいた厳格な情報管理プロトコルを規定する。

6-1. 個別キャリア形成支援シート(キャリア・カルテ)の管理

本事業における支援の最大の特徴は、「点」ではなく「線」での関わりである。高校時代の相談内容、在学中の LMS(学習管理システム)のログ、面談での発言、そして就職後の状況。これらを一元管理する統合データベースが「個別キャリア形成支援シート(通称:キャリア・カルテ)」である。

1. キャリア・カルテの 3 層構造

本カルテは、性質の異なる 3 つの情報を統合して管理する。アドバイザーは面談前に必ずこれを確認し、文脈を把握した上で対話に臨む必要がある。

- ・ **第 1 層:基本属性・特性情報(Static Data)**
 - 出身高校、志望動機、保有資格などの基本情報。
 - 入学前相談(第 2 章)で把握した「特性(得意・不得意)」や「合理的配慮の有無」。
- ・ **第 2 層:LMS 学習・行動ログ(Quantitative Data)**
 - LMS から自動連携される定量データ。

【Rule 1】レッテル貼りの禁止(事実を書く)

NG 記述: 「コミュニケーション能力が低い。」

- ・ 解説: 「低い」というのは記入者の主観であり、読み手によって解釈が異なる。
OK 記述: 「初対面の相手に対し、目を見て挨拶することができず、声が聞き取れない大きさだった。」
- ・ 解説: 観察可能な「行動事実」のみを記述する。これなら誰が読んでも状況が再現でき、具体的な指導策(挨拶の練習)が立案できる。

【Rule 2】ポジティブ・リフレーミング(強みを見つける) 課題だけでなく、「できたこと」「強み」を必ずセットで記録する。自己肯定感が低い学生が多いからこそ、支援者は意識的に「小さな成功」を拾う必要がある。

記述例: 「B 君への連絡はできなかったが(課題)、『困っている』とアドバイザーに相談することはできた(成果)。SOS を出せた点を承認した。」

【Rule 3】センシティブ情報の分離 家庭の事情、病歴、服薬情報など、高度なプライバシー情報は、通常の教職員がアクセスできる欄には記載しない。アクセス権限を限定した「機密備考欄」にのみ記載し、情報の拡散を防ぐ。

6-2. AI カウンセラーとの役割分担と連携フロー

本事業では、24 時間 365 日対応可能な「AI カウンセラー」を導入し、アドバイザーの業務負担軽減と、学生への即時レスポンスを両立させる。重要なのは、AI に「任せきり」にするのではなく、AI を「一次受付窓口」とし、そこから人間による「二次支援」へシームレスにつなぐ運用設計である。

1. AI とヒト(アドバイザー)の役割分担定義

AI は「壁打ち相手」、ヒトは「環境調整役」として機能分担を行う。

区分	AI カウンセラーの担当領域	ヒト(アドバイザー)の担当領域
時間帯	深夜・早朝・休日(24 時間即レス)	平日日中(予約制面談)

60

相談内容	・愚痴の吐き出し(ガス抜き)・制度照会(奨学金、履修登録等)・就活の一般論(履歴書の書き方等)	・複雑な利害調整(人間関係のトラブル)・深い自己探索(キャリア・アンカー)・緊急介入を要するメンタル危機
強み	「相手が機械だからこそ本音を言える」「何度同じ質問をしても怒られない」	「表情や声色から非言語情報を読む」「学校や企業に連絡し、環境を変えられる」

2. リスク管理:緊急介入フロー(エスカレーション)

AI との対話ログは、原則として学生のプライバシーであるが、「生命や安全に関わる予兆」を検知した場合に限り、システムが強制的にアドバイザーへアラートを通知する仕様とする(セーフティネット機能)。

■ AI 検知ワード・リスト(アラート基準)

以下のキーワードが含まれる会話が発生した場合、即座に「要確認フラグ」が立ち、担当アドバイザーへメール通知が飛び設定とする。

1. 自傷・他害リスク: 「死にたい」「消えたい」「殺したい」「リスカ」「オーバードーズ」
2. 退学・離職リスク: 「辞めたい」「学校行きたくない」「もう無理」「バックれる」
3. 生活崩壊リスク: 「眠れない」「借金」「親に殴られた」「家出」

■ 介入時のアプローチ手順

通知を受けたアドバイザーは、以下の手順で慎重に介入を行う。AI 監視への不信任を抱かせないよう注意が必要である。

- ・ Step 1:ログの確認 前後の文脈を確認する。「死にたいくらい恥ずかしかった(比喩)」なのか、切迫した希死念慮なのかを判断する。
- ・ Step 2:自然なアプローチ(カモフラージュ) いきなり「AI に変なこと書いたのだろ!」と問い詰めてはいけない。信頼関係が崩壊する。
 - ・ トーク例: 「久しぶり! 最近、顔を見てないから気になって連絡してみたんだ。最近どう? ちゃんと眠れてる? 」と、あくまで偶然を装ってコンタクトを取る。
- ・ Step 3:本音の引き出し 対話の中で、AI に書き込んでいた内容(例:眠れない)について水を向け、本人から話し出すのを待つ。

61

3. 【対話スクリプト】学生への AI 導入インストラクション

オリエンテーション時、学生に対し AI カウンセラーの使用を促す際は、「監視ツール」と誤解されないよう、利用目的と守秘義務の範囲を丁寧に伝える必要がある。

アドバイザー(説明用台本): 「これから使う『AI 相談アプリ』について説明するね。夜中に悩みがあったり、ちょっと愚痴りたくなったりした時、僕たち人間に連絡するのは気が引けることもあるでしょ? そんな時、この AI を使ってほしいんだ。」

これは君の『24 時間対応の壁打ち相手』だと思ってい。AI は絶対に〇〇君を否定しないし、秘密も守る。

ただ一つだけ約束がある。もし君が『命に関わるくらい辛い』と書き込んだ時だけは、僕たちに通知が来るようになっている。それは君を守るためだから、そこだけは了承してほしい。それ以外の雑談や愚痴を、僕らが覗き見ることはないから安心してね。」

6-3. 個人情報の適切な取り扱い(情報連携のプロトコル)

本事業は、通信制高校、専門学校(YIC 学院)、就職先企業という複数の組織が連携するため、個人情報の取り扱いには細心の注意が必要である。以下の規定は、個人情報の取り扱いに関する覚書等による厳格なルールに基づき作成されたものであり、全アドバイザーが遵守すべき法的義務である。

1. 第三者提供の制限と承認プロセス

YIC 学院から提供された、または業務上で収集した個人情報を、第三者(出身高校や就職先企業を含む)へ提供することは原則禁止されている。情報連携が必要な場合は、以下の 2 段階のプロセスを経る必要がある。

1. 学生本人の同意取得: 書面により、提供先と項目についての明確な同意を得る。
2. 発注者(YIC 学院)の事前承認: 学生の同意があっても、アドバイザーの独断で提供してはならない。必ず「〇〇高校への情報提供何い書」等の所定様式を用い、YIC 学院責任者の承認を得てから実施すること。

62

2. 【実践ツール】情報連携に関する同意書(チェックリスト)

入学時および就職活動開始時に、以下の同意書に署名をもらう。包括的な同意(全部 OK)ではなく、「誰に」「何を」渡すかを選択式にすることで、学生の自己決定権を尊重する。

■ 個人情報の第三者提供に関する同意書(抜粋) 私は、効果的なキャリア形成支援を受けるために、以下の情報を連携機関と共有することに同意します。

【共有先 A:出身高校】(卒業後の定着支援のため)

- ・ ☐ 専門学校での出席状況・単位取得状況
- ・ ☐ キャリア面談での相談概要(高校時代の課題との継続性確認のため)
 - ・ (注) 「同意しない」場合、高校への報告は行わない。

【共有先 B:インターンシップ先・就職先企業】(合理的配慮のため)

- ・ ☐ 氏名、連絡先、履歴書情報
- ・ ☐ 配慮事項(健康状態、苦手な作業環境など) ※必要場合のみチェック
 - ・ (注) 診断名や家庭環境などの機微情報は、原則として共有しない。

3. 安全管理措置とデータの返還・廃棄

データのライフサイクル管理として、以下のルールを遵守すること。

① データの持ち出し・複製禁止

- ・ 個人情報を含むデータ(Excel、PDF 等)を、許可なく USB メモリに保存して持ち出さない。
- ・ 個人のスマートフォンで学生の連絡先を登録したり、LINE で業務連絡を行ったりしない。

② 業務完了後のデータ返還

- ・ 年度末または担当業務が終了した時点で、アドバイザーが管理していた端末・メモ・データ的一切を「完全に消去」または「YIC 学院へ返還」しなければならない。
- ・ 退職したアドバイザーの私物 PC に、学生のデータが残存していることは重大な契約違反となるため、必ず「データ消去証明書」を提出すること。

63

4. 事故発生時・予兆段階での報告義務

万が一、個人情報の漏えい、紛失等が発生した場合だけでなく、「発生のおそれを認識した場合」(ヒヤリハット)であっても、直ちに報告する義務がある。

【報告すべき事例(例)】

- ・「個人情報の入った鞆を電車に置き忘れたが、すぐに戻って無事に回収した。」
 - ⇒ 実害がなくても、紛失の事実は報告対象である。
- ・「同僚が、パスワードを書いた付箋を PC に貼っているのを見た。」
 - ⇒ 漏洩の「おそれ」があるため、報告・是正対象である。

【緊急報告フロー】

1. 第一報(認識から 30 分以内): 直属の上司および YIC 学院事務局へ電話連絡。「いつ」「どこで」「何が」起きたかの事実のみを伝える。
2. 応急処置: ネットワーク遮断、誤送信メールの取り消し等、被害拡大防止措置を行う。
3. 詳細報告(24 時間以内): 原因と対策をまとめた書面を提出し、YIC 学院の指示に従う。

5. まとめ:ガバナンスとしての守秘義務

個人情報の適切な管理は、アドバイザー個人のモラルではなく、YIC 学院との契約に基づく法的義務である。情報共有はチーム支援のために不可欠だが、常に「所定の手続きを踏んでいるか?」「YIC 学院への報告は済んでいるか?」を確認し、組織としてのコンプライアンスを遵守すること。これが、持続可能な支援体制を守る最後の砦となる。

文部科学省委託事業
令和 7 年度「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」
(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)

通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

キャリア形成・伴走支援マニュアル

～面談と対話でつなぐ「自走型人材」育成の実践ガイドブック～

令和 8 年 2 月
学校法人 YIC 学院
〒754-0021 山口県山口市小郷黄金町 2 番 24 号

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

5-9 周知チラシ 資料9

令和7年度「専修学校による地域産業中級人材養成事業」
 通商部副校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

通信制高校 × 専門学校 × 地域企業

みらいLINK プログラム

君の“好き”が、
 地域の未来をつくる力になる。

始動。

AI・デジタル・地域実践を組み合わせた、
 新しい学びのプロジェクトがスタートします。

学校法人YIC学院

この取り組みが必要な背景

地域の課題

我が国では約2万人以上の減少や老廃増の進行により、地方の過半数が縮小する数値発表地域に及びます。地域衰退の勢いが留まっています。そのため、事業所に対する人材が乏しい状態となり、教育・訓練・就業支援など後進者に期待する産業での人材確保が困難となり、地域で暮らさない、他地域から発生しています。

非典型進学層の課題

進学希望者として約2万人（2023年）と推計、これは10年前の1.5倍にあたります。従来の進路以外の選択肢から「海外への進学は難しい」「専門学校卒業後は就職しにくい」という現実を学ぶ機会が少ないため、進路選択において悩む学生が増えています。また、高卒生として約2万人（2023年）と推計、これは10年前の1.5倍にあたります。従来の進路以外の選択肢から「海外への進学は難しい」「専門学校卒業後は就職しにくい」という現実を学ぶ機会が少ないため、進路選択において悩む学生が増えています。また、高卒生として約2万人（2023年）と推計、これは10年前の1.5倍にあたります。従来の進路以外の選択肢から「海外への進学は難しい」「専門学校卒業後は就職しにくい」という現実を学ぶ機会が少ないため、進路選択において悩む学生が増えています。

具体的な道を選択していない

まだ専門スキルが習得できていない

地域への理解が少ない

**「地域には人材が必要で、
まだ進路を決めていない人材が地域にいる」
両者をつなぐ仕組みづくりが必要**

YIC学院の提案（ソリューション）

みらいLINKプログラム （仮称）

地域に根拠した教育機関として将来を担う地域人材の育成を目的とする

 専門教育と 地域課題を結びつける 地域定着型連携 プログラム	 デジタル、 AI時代の 高度職能と 資格体系	 入学前から 卒業後の一貫した キャリア育成 支援モデル
---	---	--

上記を推進し、若者が「地域で学び、教習で働き、教習で働かず」「実業を志望するための教育セゾンの実装が加速」します。
 通商貿易局が持つワンストップと、生涯の学習につながる体系的な体制がこれから始まります。

このプログラムを今後2年間の実験を繰り返しながら作っていきます。

プロジェクトの特長

地域志向

×

デジタル
教育

×

伴走支援

オンライン活用+地元接続型のハイブリッド教育

- 授業の3/4をオンラインで提供し、併んでいる場所にとろえられない高学モデルを実現
(嵐地、県立、学校統合による適学困難者にも対応)

先進性

- 若者の関心が高くてマーケット適性性の高いジャンル
(eスポーツ、AI、動画制作、SNSマーケティングなど)
- 入学後のコース選択制、モジュール形式により関心変化や発達段階に応じた学び直しが可能

地域密着のコース設定

- 地域内フィールド実習…企業、福祉施設、観光地など地域資源と直結した実習

入学前から卒業後まで続く伴走支援

- 「キャリア形成アドバイザー」による個別相談体制
- 卒業後もつながる「ライフキャリア支援」

TOPIC

実態調査に基づいたプログラム開発

当プログラムは数年前にたり、有期7年ごき津波被災者の支援を目的とした人材ニーズを研究した
 ために下記の実態調査を実施し進んだ。

- 地域企業の人材ニーズ
- 調査結果から見える山口県の適制高校生へのペルソナ
- 教員の就職支援の実態
- 若者支援、教育支援の現状
- 学習環境についての現状と課題

本プロジェクトでは、これらの実態調査のリアルな結果を学びの現場に反映していきまふ、まよにまづく
 “被災者教育モデル”だからこそ、学生にのみならず保護者・学校に対してもまよにまづく支援できるプログラ
 クトなのです。

3

通信高校連携型 みらいLINKプログラム (仮称)



学習の形式

オンライン学習のハイブリッド型
短時間型のモジュール型



評価方法

デジタル/ハイブリッドポートフォリオ
記録記録

AI×データサイエンスを導入した
クロスオーバー型
新コース開設(改修)を目指して

地域に根拠した
職業人育成のための
実地・実務・多様性を
兼ね備えたプログラム

学びの入口を広く、
解法力(実力)と
出口(資格・技能)に
つなげる構想

高度技術人材需要や
多様な価値を
抱える新教育
「新教育」をよしと捉え



学習の柔軟性

コース選択制(マイポートフォリオ方式)
ユニット受講制(入学後に学習方針を定める)



接続性

高校・高校・企業などとの連携
(キャリア教育、企業連携、生涯学習)

▶▶▶ 現在想定している科目案

科目名	目的・概要	学習成果
デジタル基礎①(IT/ITサポート対策)	ITやITセキュリティの基礎知識を学ぶ	IT/ITサポート検定
デジタル基礎②(データ活用入門)	資料集、グラフ、データ整理などの 基本スキルを学ぶ	データ操作と検索など分析力向上につく
AIリテラシー(生成AI、AI倫理対策)	生成AIの活用とAI倫理教育を学ぶ	C級取得/利用活用方法の習得
地元企業連携授業①(IT、情報、観光)	地元の伝統技術をテーマに課題やエッセイを学ぶ	地域産業と生活への理解を深める
地元企業連携授業②(スポーツ、編組制作)	eスポーツや動画制作、商品開発を通じて	自分のスキルを地域で発揮する体験
オンライン学習スキル入門	自律的な学び方やLMS活用方法を学ぶ	自分で学習の習慣とスキルを身に付ける
地域実習(インターンシップ)	実際の企業・施設での現場体験	地元産業への理解・意識の向上
キャリア形成講座(多様性)	友人・家族・同僚、グループワークによる 自己理解、他理解の促進 社会で求められるさまざまな価値観の理解	対人力・集団協働力・自己認識の深化 社会人基礎力の醸成

みらいLINKの『みらい』とは？

入学前からの学習環境提供

- LMS (学習管理システム) 提供
- 体験 (通信制高校への出前) 授業
- キャリア面談

SST (ソーシャルスキルトレーニング)、SGE (構成的グループエンカウンター) などの社会的適応支援の提供

eスポーツ、AIなど若者の興味関心に即したデジタル科目群の開発とモジュール提供

フルスペックのキャリア支援

- 就職・リターン支援、起業支援
- 卒業生ネットワークの活用

学習者主導の自己決定を促す学習設計

- AIカウンセラーの活用
- マイプロジェクト形式

地域通信制高校との制度的接続モデル試行

伴走支援

みらいLINKプログラムの最大の特長は、“ずっと寄り添う”支援です。『キャリア形成アドバイザー』が主体となってその役割を担います。「入学前」→「在学中」→「卒業後」まで切れ目なく続き、通信制高校生が抱えやすい「進路の不安」「学びの継続」「人とのつながり」といった課題に寄り添いながら、安心して未来を掲げる環境を整えます。

1 入学前

進路の不安を見える化し、安心してスタートできる準備期間

出張キャリア相談 (対面・オンライン)	● 進路の悩みや不安を丁寧にヒアリング ● 「何が好き?」「どんな働き方がしたい?」を一緒に整理 ● 保護者同意も可能
体験授業、ミニワークショップ	● AI、動画編集、eスポーツなどを気軽に体験 ● 「自分にもできるかも」という成功体験を提供
通信制高校とのLMS連携	● 高校在学中からオンライン教材に触れられる ● 学習習慣の形成をサポート

2 在学中

学び、生活、キャリアを総合的に支える“伴走型サポート”

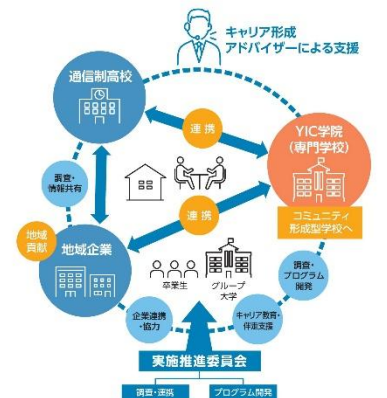
個別面談 (週次、月次)	● 学習状況、生活リズム、メンタル面を総合的に確認 ● 必要に応じて支援員、専門家と連携
AIカウンセラーチャット相談	● 24時間いつでも相談できる非対面型サポート ● 「人には言いにくい」悩みも気軽に相談可能
マイプロジェクト形式の学び	● 自分の興味テーマに深掘り ● 教員、AIカウンセラーが指導をサポート ● 小さな成功体験を積み重ねる
LMSによる学習データの分析	● 学習進捗、理解度、つまづきポイントを可視化 ● 生徒ごとに最適な学び方を提案
企業、地域との接続サポート	● 実習先のマッチング ● 地域プロジェクトへの参加支援 ● 企業からのフィードバックを学びに反映

3 卒業後

地域で働き続けるための長期的なキャリア支援

卒業生ネットワーク	● 同じ地域で働く先輩との交流 ● キャリア相談、情報交換の場を提供
卒業後調査 (定数、活用度)	● 就職後の状況を把握し、支援の質を継続的に改善 ● 地域企業の評価も収集し教育内容に反映

体制



〈構成機関〉

教育機関	YICグループ 学校法人YIC学院 YIC情報ビジネス専門学校 学校法人YIC学院 (京都) 山口大学大学院技術経営研究科 福岡大学人文学部 大分大学応用センター 広島女子学院大学 山口県立山口松風高等学校 (通信制)
企業・団体	山口県商工連合会 山口商工会連合会 株式会社 道徳アド 株式会社 フォリウム 一般社団法人 日本産業カウンセラー協会中国支部 山口県教育委員会企業振興課 山口県産業労働部企業立地推進課
行政機関・その他	

学校法人 YIC学院 T754-0021 山口県山口市小野木町2番24号
TEL: 083-978-4156 URL: <https://yic-hac.com>



第6章 次年度以降に向けて

6-1 次年度以降の取組

令和8年度の事業実施内容・結果を踏まえ下記について、更に進展させていく。

(1) 令和8年度・令和9年度の事業予定

① 令和8年度事業概要

◇事業実施体制の構築(6月以降予定)

各5回委員会実施(ハイブリット形式)

◎実施推進委員会

◎プログラム開発委員会

◎調査・連携委員会

* 事務局にて調整して運営

◇「調査研究・連携体制」

・実証対象学生(通信制高校生・在学生)に対する学習状況・心理状態・進路意識等の効果測定調査

・地域企業に対する実習・連携授業の評価調査

・通信制高校との接続支援モデルの運用検証

・キャリア形成支援(伴走支援・AI相談)の仮運用調査

・通信制高校および地域企業との連携体制の運用・改善

・教職員研修の実施

◇「プログラム開発・作成」

・「みらい LINK プログラム(仮)」一部シラバス・教材開発

・「みらい LINK プログラム(仮)」一部実証

・地域企業連携型授業・実習の実施

・試行的実証実施(プレ授業・体験版)＋通信制高校との接続実験

・デジタル資格(ITパスポート、G検定等)の取得支援制度の仮運用

・キャリア形成・伴走支援マニュアル(AI相談含む)作成・一部運用

・教育プログラムおよび支援体制の改善

○調査報告書の作成

○成果・実績報告書の作成

○ホームページの作成

②令和9年度事業概要

◇事業実施体制の構築(6月以降予定)

各5回委員会実施(ハイブリット形式)

◎実施推進委員会

◎プログラム開発委員会

◎調査・連携委員会

*事務局にて調整して運営

◇「調査研究・連携体制」

・長期的成果の追跡調査(卒業後の地域定着・就職率)

・全国への展開可能性に関するケース分析

・グループ校(YIC 京都など)へのプログラム展開

・自治体や商工団体と連携した「若者定着教育モデル」の制度化提案

・ガイドラインの整備(学生への関わり方含む)

◇「プログラム開発・作成」

・「みらい LINK プログラム(仮)」本格実証スタート

・柔軟な選択制モデルの構築

・実証実施(出前授業・体験版)＋通信制高校との接続実験

・地域定着型連携プログラムの完成

・成果発表会開催

・外部公開講座(地域イベント／フォーラム等)

○キャリア支援・伴走支援マニュアル(AI相談含む)作成

○シラバス・教材の完成

○成果・実績報告書の作成

○ホームページの修正・作成

6-2 次年度に向けて

本事業の初年度である令和7年度は、通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築に向け、調査研究、連携体制構築、プログラム設計の基盤整備を中心に取り組んだ。

まず、通信制高校生・教職員、通信制出身専門学校生、地域企業等を対象とした調査を実施し、進学に対する心理的・学習的・経済的な障壁や、ICT 環境・学習スタイルの特徴、地域企業が求める人材像など、多面的な実態を把握することができた。特に、通信制高校生においては専門学校等への進学意欲を持つ一方で、学習への不安や対人関係への懸念が強いこと、またデジタル分野への高い関心を有しながらも PC 活用等の実践的スキルに自信が持てない状況が明らかとなり、本事業が目指す入学前からの伴走型キャリア支援および段階的デジタル教育の必要性を裏付ける結果となった。

加えて、地域企業調査からは、専門スキルに加えてコミュニケーション能力や協働性といった基礎的ポータブルスキルを重視する傾向や、実習・連携授業への協力意向の高さが確認され、専修学校がハブとなった地域連携型教育モデルの実装可能性が示唆された。

これらの調査結果を踏まえ、通信制高校、大学、企業、行政等から構成される委員会を設置し、継続的な意見交換と検証を行ったことで、単独の教育機関では困難な多角的視点からのプログラム設計が可能となり、事業の方向性や実装上の留意点について共通理解を形成することができた。

プログラム開発面では、「みらい LINK プログラム(仮)」の基本構成および科目案を整理するとともに、AI 基礎、e スポーツ、地域連携実習等の教材試作や授業設計を実施し、通信制高校との接続を意識した教育内容の具体化を進めた。また、キャリア形成・伴走支援マニュアルの案を作成し、入学前から卒業後までを見据えた一貫支援モデルの枠組みを提示できた点は、本年度の重要な成果である。

一方で、今後に向けた課題として、通信制高校との LMS 連携の具体化、心理的支援や対人関係形成を目的とした教育手法の体系化、企業連携授業の運用設計、ならびに試行実施を通じた効果検証手法の精緻化が挙げられる。特に、本事業の対象となる非典型進学層に対しては、教育内容の提供のみならず、安心して学びに参加できる関係性形成や伴走支援体制の質が成果に大きく影響することが想定されるため、教育・支援の両面からの検証を進める必要がある。

以上を踏まえ、次年度は本年度に構築した基盤をもとに、通信制高校との接続支援に加え、専門学校在学中の柔軟なプログラム設計(オンライン学習・コース選択制の導入)、デジタルリテラシー教育、地域企業連携型授業を一体的に実証する。特に、キャリア形成アドバイザーによる個別支援や AI カウンセラーの活用により、不安軽減と学習継続を支える仕組みを構築し、その有効性を検証する。これにより、通信制高校から専門学校、地域

企業へとつながる新たな『地域密着型人材育成モデル』の確立を目指す。学生・教職員・企業等の評価を反映した改善を行い、地域における持続可能な人材育成モデルとしての確立を目指す。

以上

2026年3月

令和7年度文科省事業「専修学校による地域産業中核的人材育成事業」

(人口減少地域の職業人材を確保するための専修学校振興プログラム)

通信制高校連携型キャリア形成支援による地域密着人材育成モデルの構築事業

成果報告書

学校法人 YIC 学院

〒754-0021 山口県山口市小郡黄金町2番24号

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。